3．古墳時代

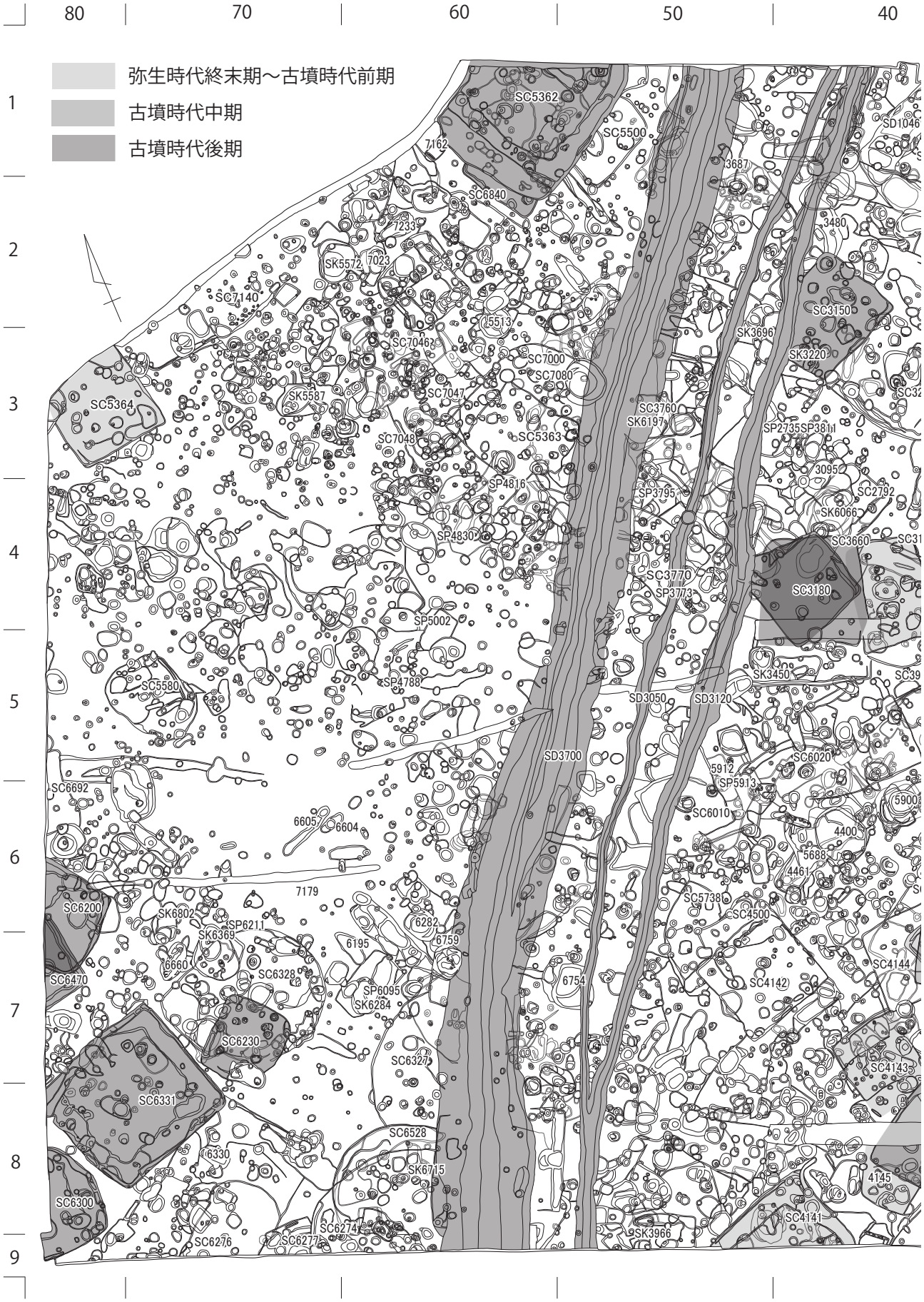
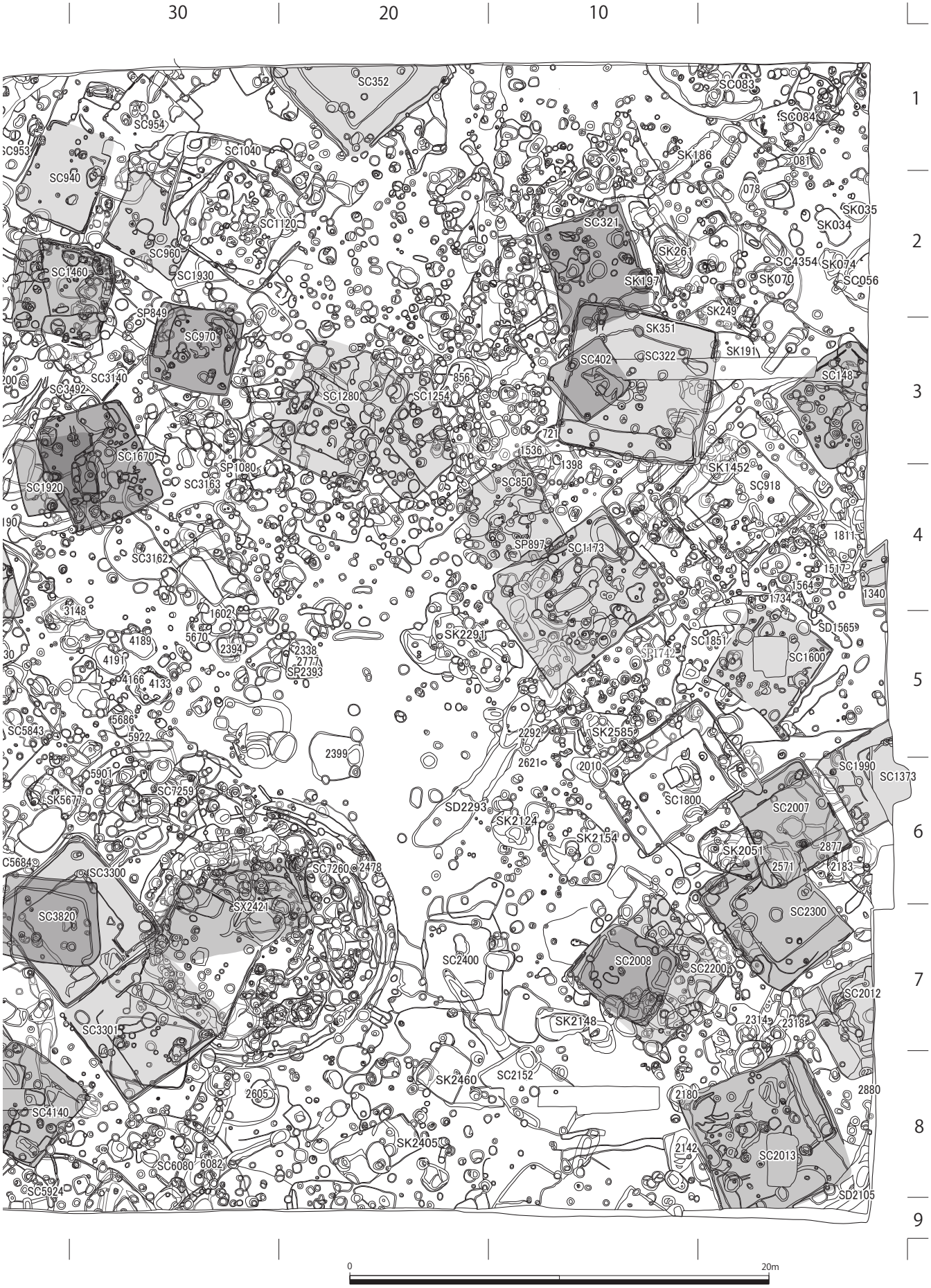


図 163　古墳時代遺構


30
20
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
SC352
SC083
SC084
SC954
SC953
SC1040
SK186
081
SC940
078
SK035
SK034
SC1120
SC321
SC960
SK261
SC4354
SK074
SC1460
SC1930
SK197
SK070
SC056
SP849
SK249
SC970
SK351
SC402
SC322
SK191
SC148
SC3140
SC3492
856
SC1280
SC1254
721
SC1670
1536
1398
SP1080
SK1452
SC1920
SC3163
SC850
SC918
1811
SP897
SC1173
SC3162
1517
1564
1340
1734
3148
1602
SD1565
5670
SK2291
SC1851
4189
2394
2338
SB1742
SC1600
4191
2777
SP2393
4166
4133
5686
SC5843
5922
2292
SK2585
2399
2621
2010
SC1990
SC1373
5901
SC7259
SK567
SD2293
SC1800
SC2007
SK2124
SK2154
SK2051
2877
C5684
SC3300
SC7260
2478
2571
2183
SX2421
SC3820
SC2300
SC2400
SC2008
SC2200
SC2012
SC3301
SK2148
2314
2318
SK2460
SC2152
2605
2180
2880
SC4140
SK2405
2142
SC2013
SC6080
6082
SC5924
SD2105
0
20m

配置図（S=1/250）

（1）竪穴建物

1）弥生時代終末期～古墳時代前期

SC322（図 164・165）No.13　一辺 7 mほどの平面方形の竪穴建物で深さ 45cmを確認した。試掘トレンチ、SC402 に切られ、SC321 と切り合う。包含層 254 を掘削する過程で検出した。包含層は大型の土師器片を含み、遺構の可能性がある。およそ土層図 2 層までを包含層 254 として遺物を取り上げた。遺構の埋土は主に暗褐色粘質土である。北・南側にベッド状遺構を持ち、東側は南、北から屈曲するが、北側はトレンチに切られプランを確認できない。西側も SK402 に切られ北側ベッドのプランは不明。ベッドと内側の比高差は 7 ～ 13cmほど。四方の壁に沿って壁溝が巡る。ベッドのコーナー部分に主柱穴があり 4 本である。中央には 100 × 80cmほどの浅いくぼみに焼土が広がり炉と考える。南側の壁際には 10cm弱大の礫が 2 ヵ所に集まる。その間には焼土混じりの粘土の小さな広がりがみられる。

遺物は 25 箱が出土したが埋土の遺物はほとんどが弥生中期で前期も含む。その中に床面や下層に土師器の遺物が目立つ。1 から 3 は壺で磨研調整を施す。4 は広がる脚部に焼成前穿孔を施す。5 は丸底に穿孔がみられる。6 から 12 は高坏、13 は坏で底に木葉痕が残る。14 は鉢状。15 から 17 は甕。19、20 は小型の坏、21 から 24 は手捏の小型品。25 は壺、26、27 はレンズ底から丸底。28 は取手。29 は羽口で外面にガラス質が付着する。胎土は細かく砂粒を含まず、器面は赤茶色を呈す。上部の出土で遺構に伴うか不明。31 は土製紡錘車。30 は碧玉製の玉で中央からずれた位置に穿孔がある。南側ベッド貼り床出土。南側床面では鉄器片が出土した。他に玉（図 261-24）、小型の粘土塊が 13 個ほど、イノシシの焼骨、滑石製臼玉（図 261-6）、クロム白雲母製玉（図 261-24）が出土した。南側の上部包含層では土師器や須恵器辺が見られた。古墳時代前期。

SC352（図 166）No.21　一辺 6.6 mを測る方形竪穴建物である。各壁に壁溝を配し、地山成形のベッド状遺構を伴う。遺構検出面がほぼ床面に相当するため、明確な壁の立ち上がりは確認できていない。主柱穴は床面四隅にある。西側床面の一部に炭・焼土が広がる。1・2 は土師器甕、3 は手捏ね土器鉢、4 は丸底壺である。弥生終末Ⅳ B 期～古墳前期。

SC850（図 167-169）No.14　SC322 の南西で確認した方形の竪穴建物で、埋土は黒褐色粘質土で炭化物を多く含む。北東側は黄褐色土の面で検出し明瞭だが、南側は SC1174 の覆土と分離が困難であった。南東隅付近はより暗い SC850 のプランを確認できたが、南辺では不明確である。西側は立ち上がりを確認できていない。北西端と考えられるカーブから推定したプランを図示した。北辺ではベッド状遺構を確認したが東半は掘り過ぎている。土器群付近までは延びる可能性がある。推定される平面規模は南北 5 m、東西 4 m、深さ 26cmほどである。ピットは多いが主柱穴は不明確で断面で示した 4 本か。東半には床に近い位置に土器が多く出土し、そのうちつぶれた状態のもの、大型の破片を図示している。東壁に横に立てかけるように大型の砥石が出土した。南東部には炭化材が床から若干浮いた状態で出土した。ベッド状部と床との比高差は 7cmほどである。ベッドは黄褐色シルトと灰褐色粘質土が互層状に混ざる。北東隅では 58 × 50 × 12cmほどのくぼみ状の壁、床が赤変する。炉か。覆土は締まりのない暗褐色粘質土で炭が混ざる。また甕 12、13 がつぶれた状態で出土した。遺物は弥生中期の土器が多いが床面出土したものを中心に示した。大型品を含む壺、甕、鉢、器台、支脚で、底部は立ち上がりの強いレンズ底と丸底がみられる。石包丁図 268-78、103 などが出土しているが埋土の混じりと考えられる。ベッド際から不明鉄片が出土した。弥生終末から古墳時代前期。

SC940（図 170）No.31　調査区北壁際中央で検出した方形竪穴建物である。長軸長 4.6 m、短軸長 3.8 m、検出面から床面までの深さは 10 ～ 15cm程度を測る。壁際には、部分的に幅 10cm、深さ 10 cm程度の溝を配する。主柱穴は不確かだが、柱穴の検出状況を踏まえれば、断面で示した 2 本主柱穴

となるか。建物中央には焼土があり、炉に相当すると考える。遺物は薄パンケース 1/2 箱出土した。

SC960（図 171）No.32　一辺 4 m前後の方形竪穴建物である。SC1120 に切られる。検出面から床面までの深さは 5cm前後と浅い。建物中央からややずれるが、西側に焼土・炭の範囲があり、炉跡と考える。主柱穴は不確かだが柱穴の配置をふまえれば、断面で示した 2 本が主柱穴になりうるか。建物南西隅に一部壁溝を巡らせる。SC970 に切られる SK1930 は方形プランで、竪穴建物の可能性が

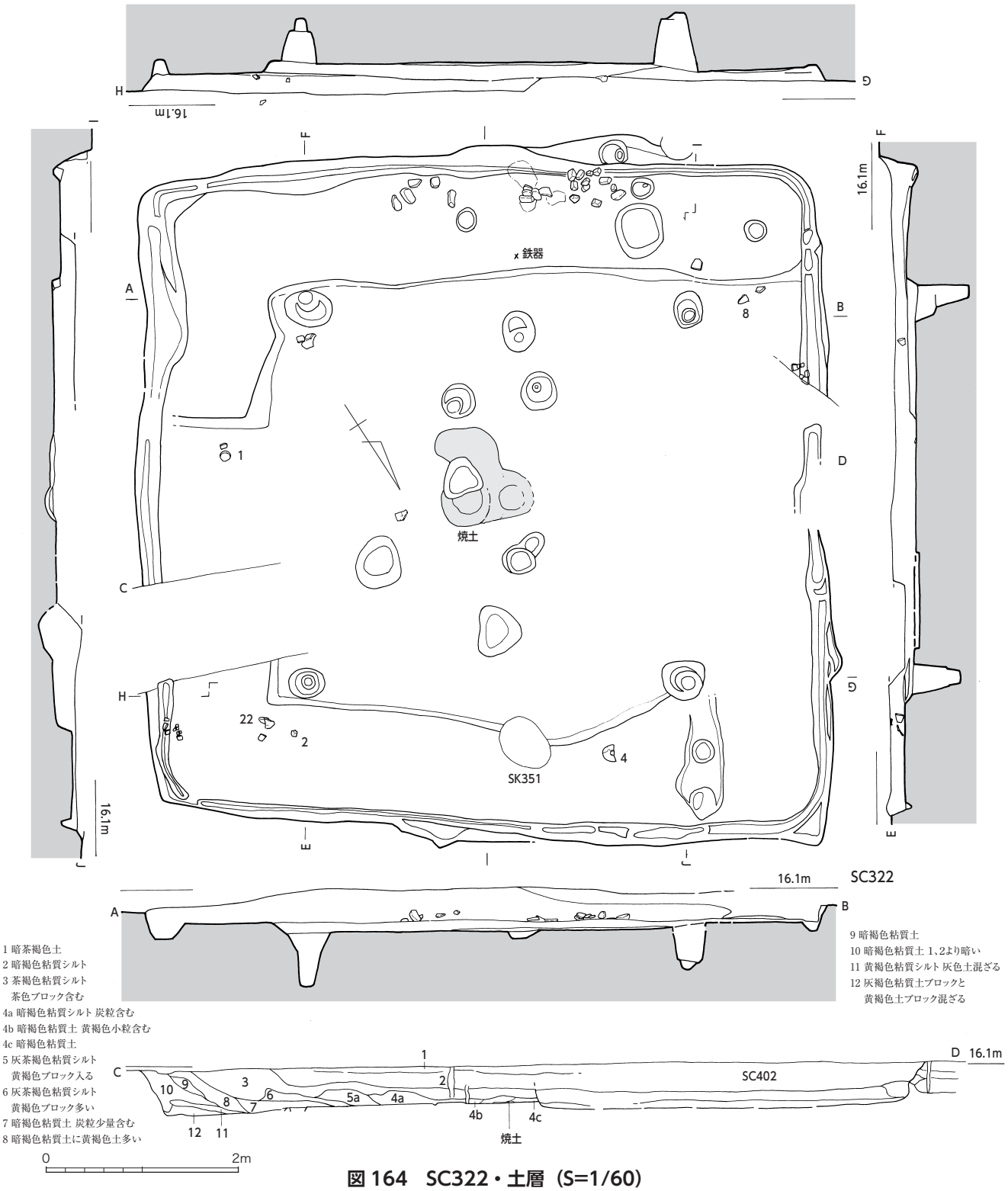


図 164　SC322・土層（S=1/60）

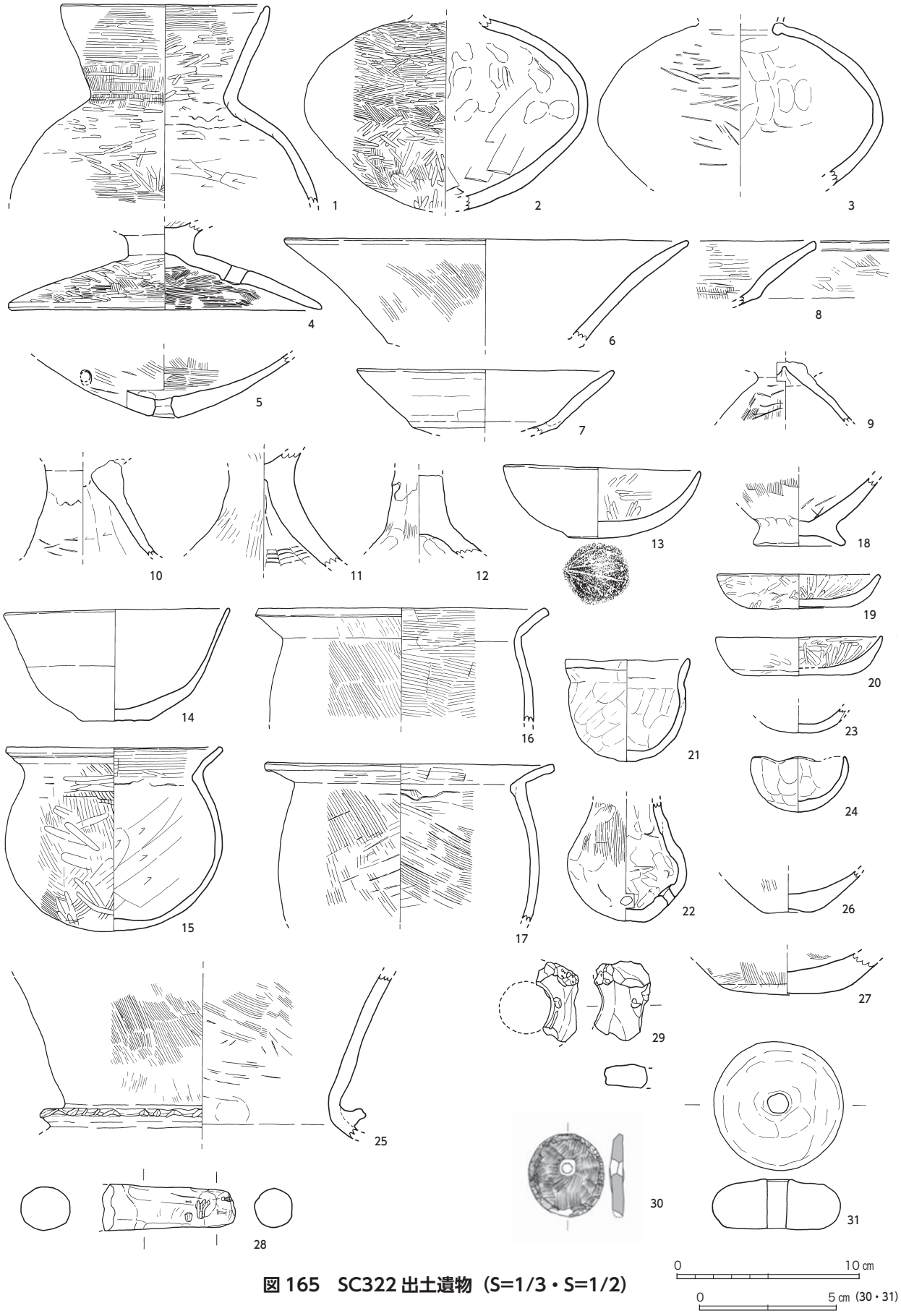


図 165　SC322 出土遺物（S=1/3・S=1/2）

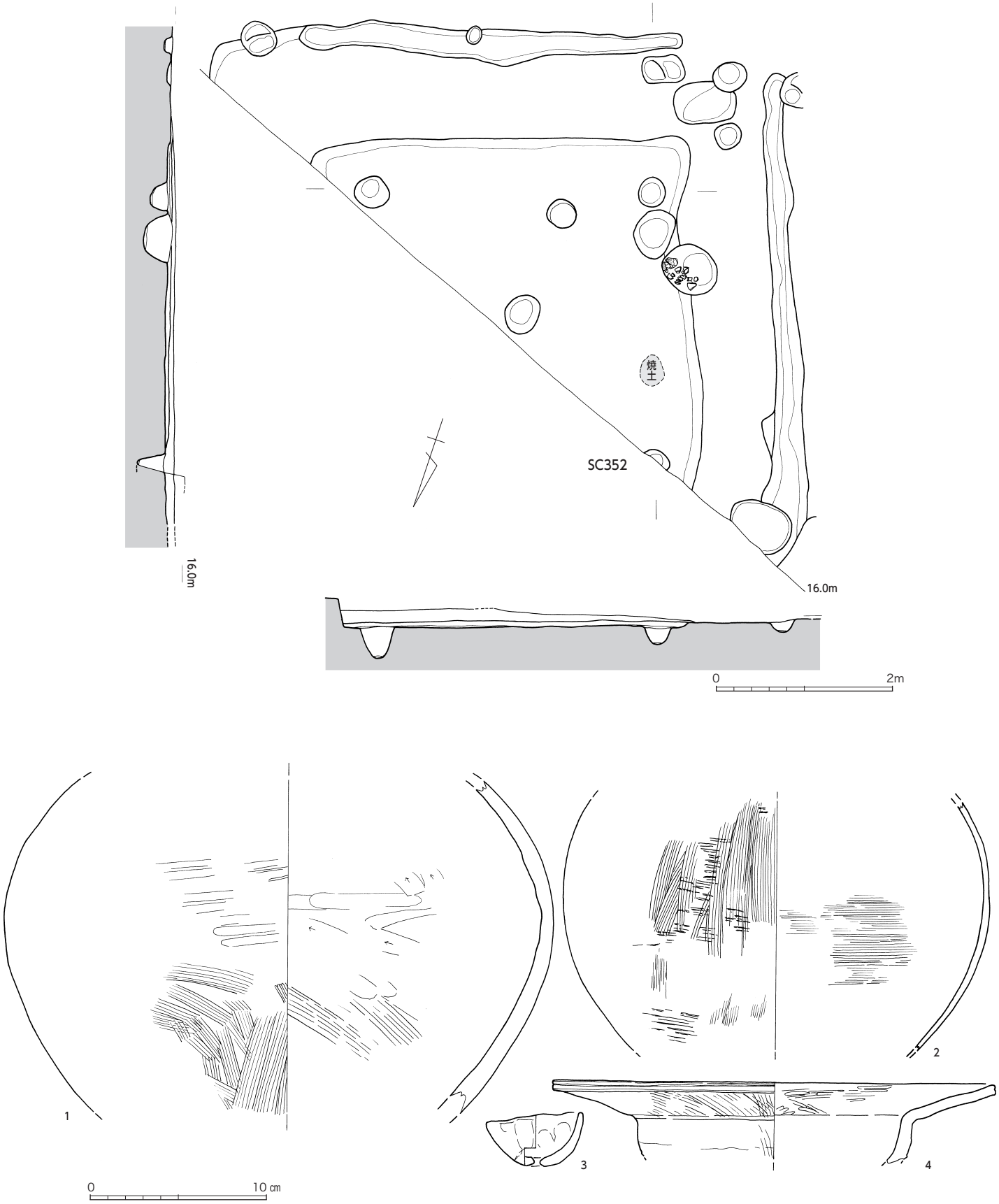


図 166　SC352（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

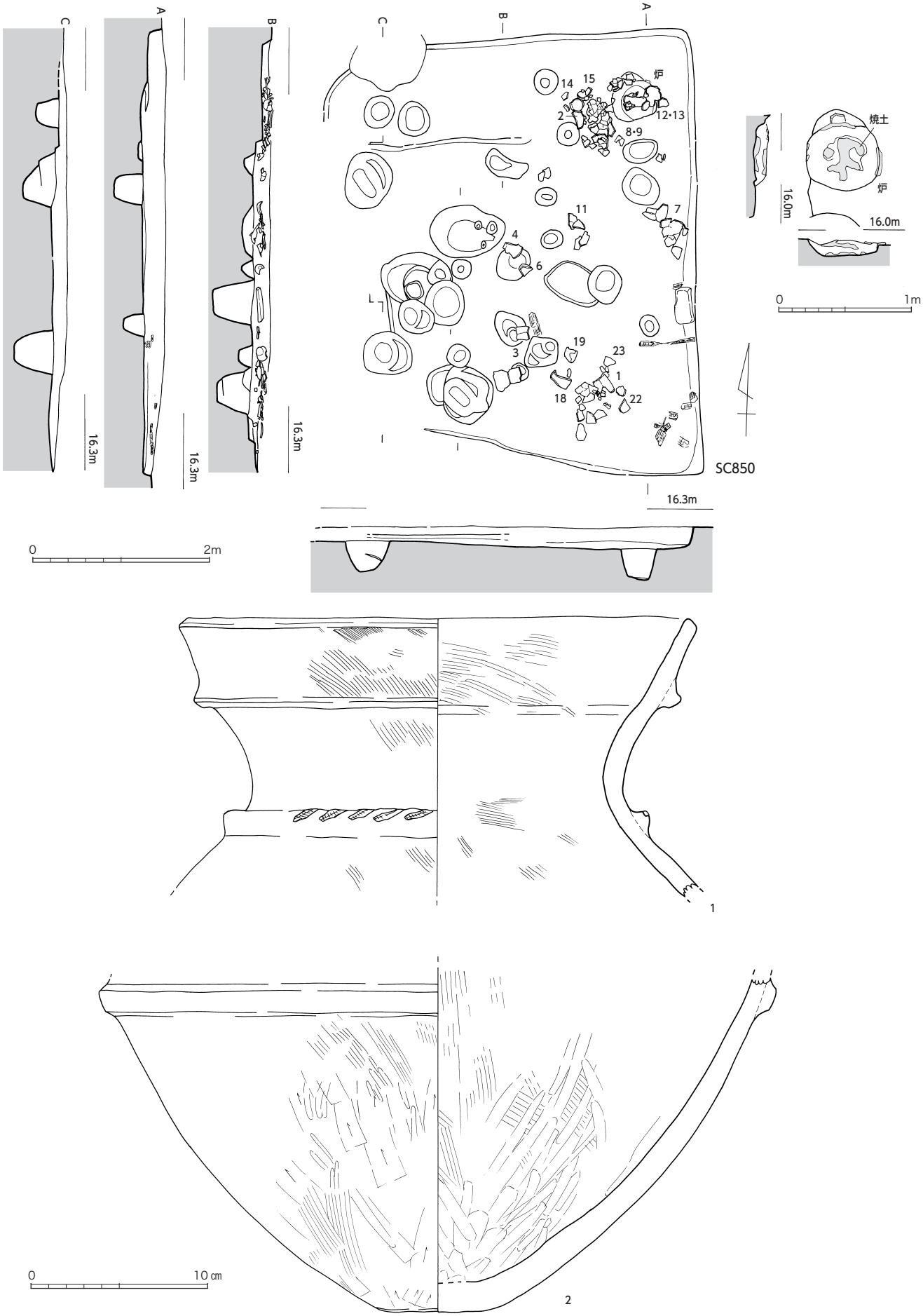


図 167　SC850（S=1/60・S=1/40）・出土遺物（1）（S=1/3）

図 168　SC850 出土遺物（2）（S=1/3）

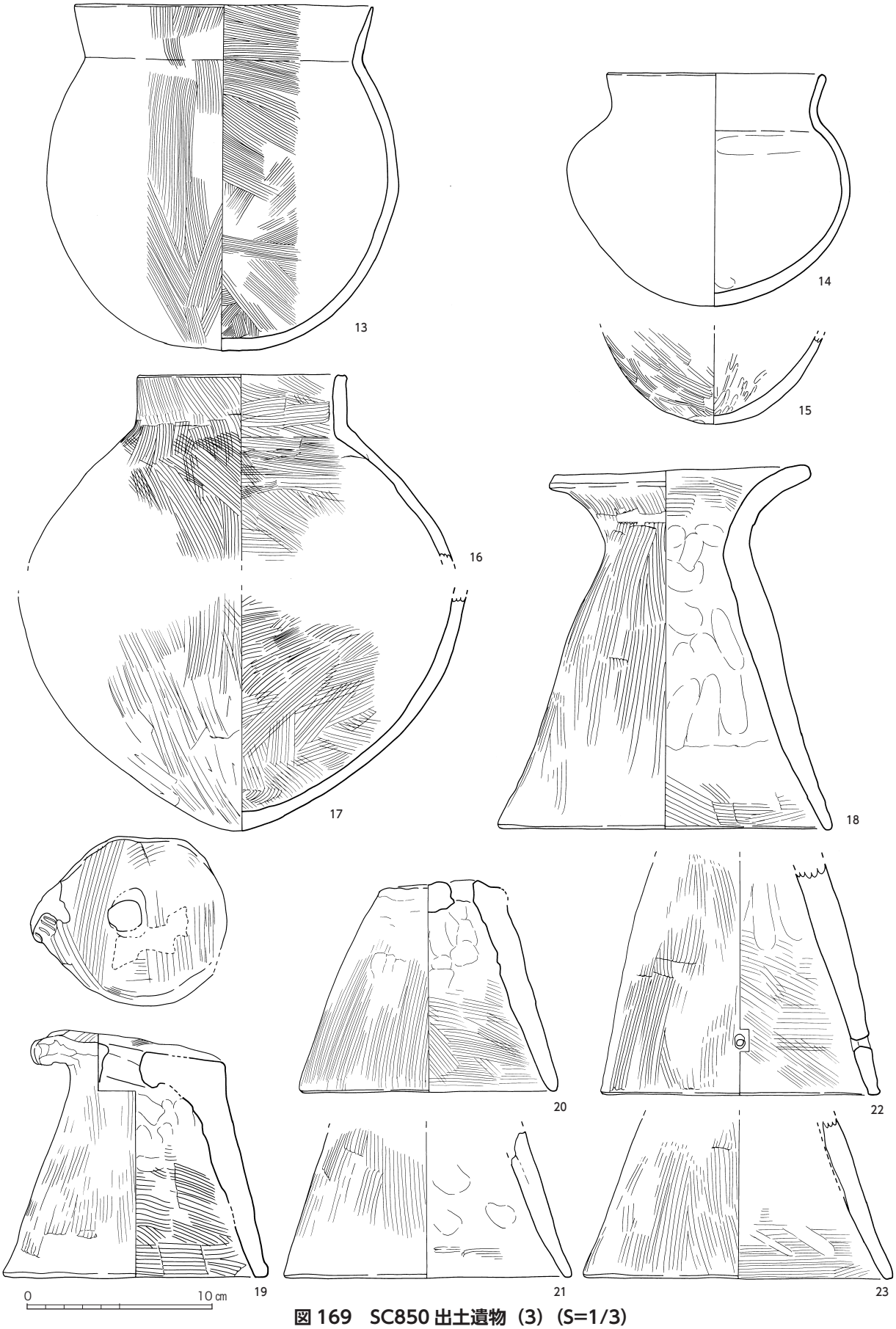


図 169　SC850 出土遺物（3）（S=1/3）

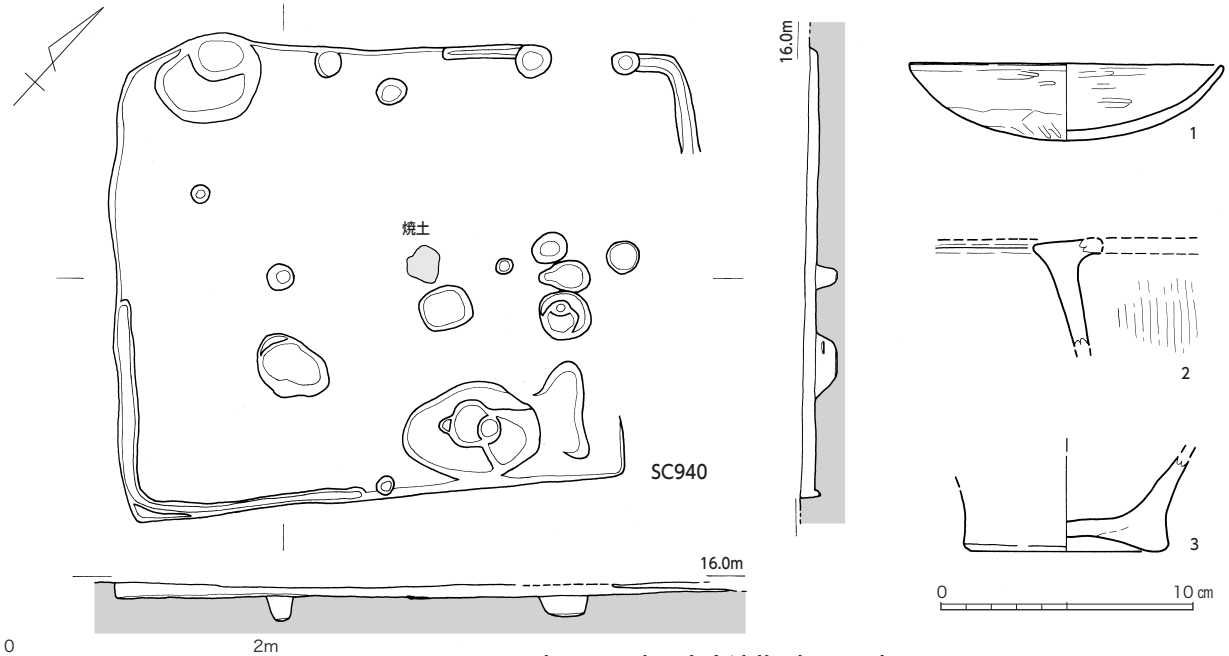


図 170　SC940・(S=1/60)・出土遺物（S=1/3）

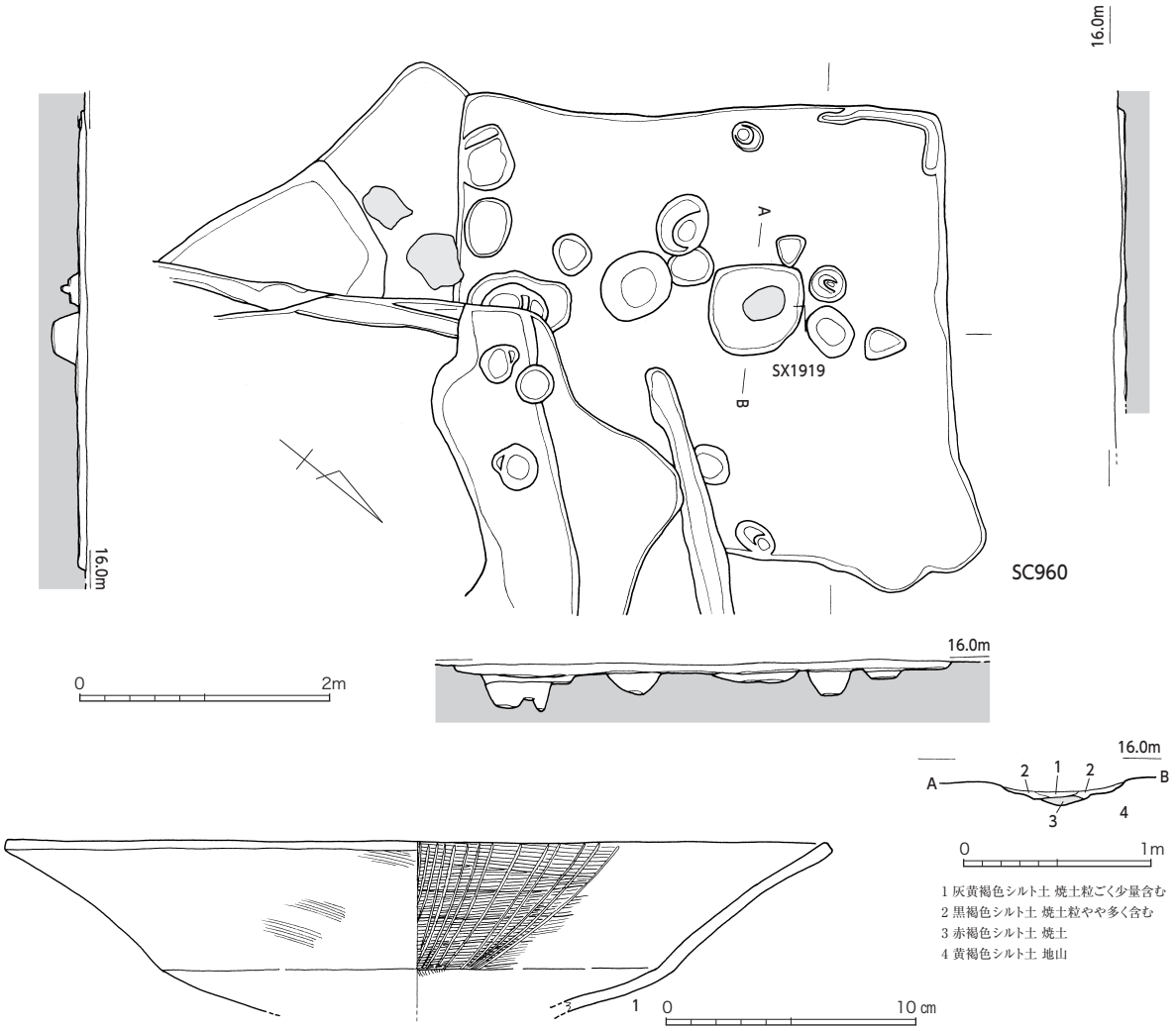


図 170　SC960（S=1/60）・炉（S=1/40）・出土遺物（S=1/3）

ある。1は土師器高坏。

SC1173（図172・173）No.14　方形の竪穴建物で東西に長い。平面7.1 × 5.7 mほどの規模で、最大で深さ35cmが残る。北辺中央をSC850に切られる。北西側には幅3 mほどの突出があり、他遺構との切り合いと考えられるが、その関係を確認できず、SC1174として遺物を取り上げた。北、東辺には壁溝がみられる。南辺には遺構の調査後、周辺を下げた際に南壁とした外側に沿って溝を確認した。南にプランが広がり壁溝となる可能性が高い。また南側を除く三方には幅110cmほどのベッド状遺構がめぐり、東辺は北半のみである。ベッド状とその内側との比高差は10cmである。ベッド状の北側を中心に炭化物が所々に見られる。ベッド状の落ち際北西隅付近にはその上端に沿って炭化材が見られ、枠をなしていたと考えられる。ベッド状の北東側には床状に砂が薄く広がり、その上に薄く粉状の炭化物が広がり、焼土が重なる。炭化材や炭の広がりが建物の焼失に伴うものであれば土屋根の可能性もあろう。床面では深めのピットを多く確認したがすべてが伴うものではないだろう。主柱穴は他の竪穴建物から類推して東西断面に示した2穴と考えられる。南壁中央前には径60cmの浅いピットSP1860があり、周辺の竪穴建物と共通する。床面中央西よりには70 × 60cmほどに焼土が広がるが、床面が焼けている訳ではない。その1 m西には径20cmほど床面が焼けて赤変する。遺物は北側ベッド上で壺2は床上に倒置して出土した。ベッド内の鉢3は正置であったが床より5cmほど浮く。南側では床より10cmほど浮いて袋状口縁壺6の1/4片が横倒しで出土した。覆土出土または上からの切る遺構に属する。玉5は凝灰岩製。東壁際ではベッド床に広がる炭化物除去後に土坑

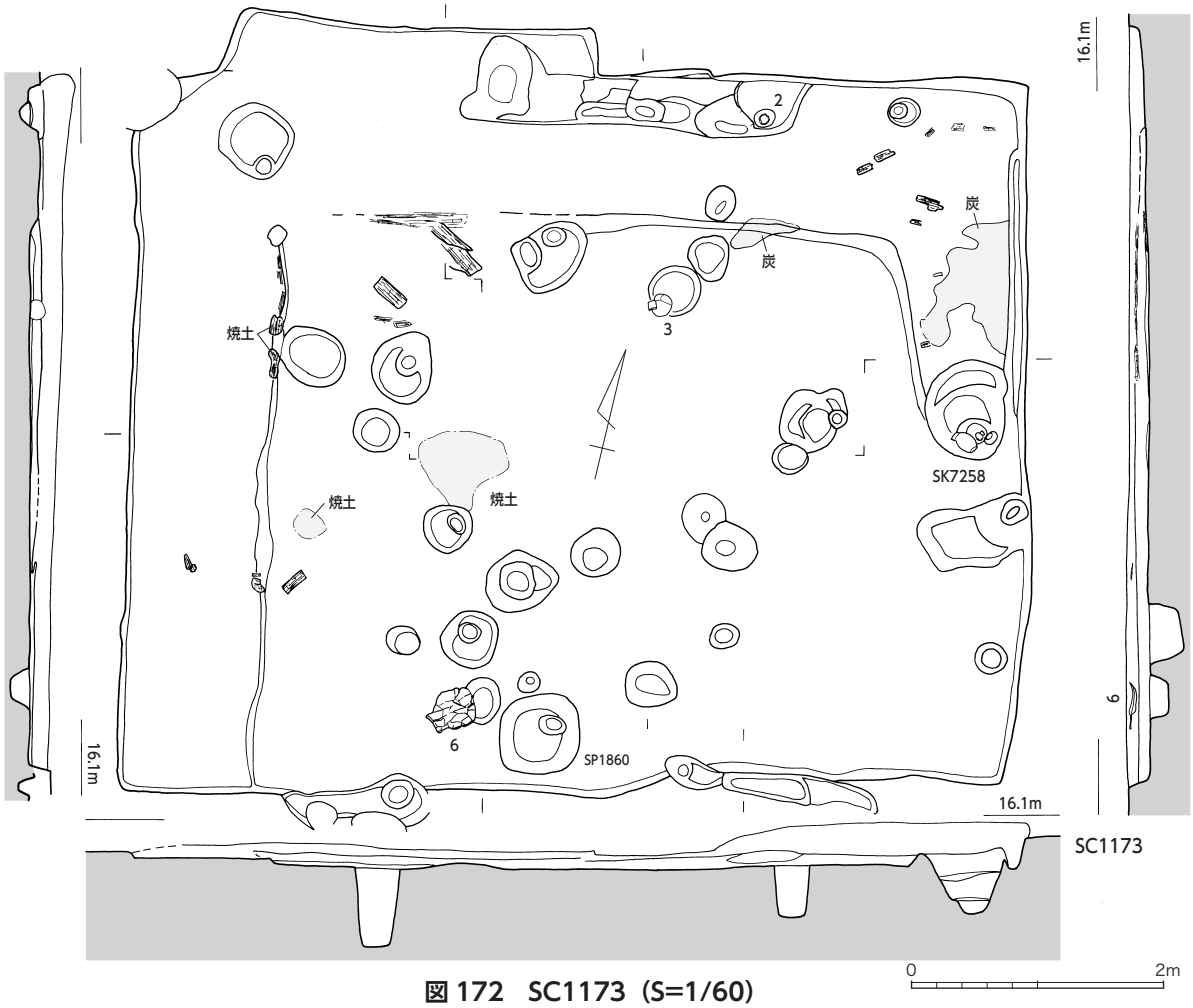


図172　SC1173（S=1/60）

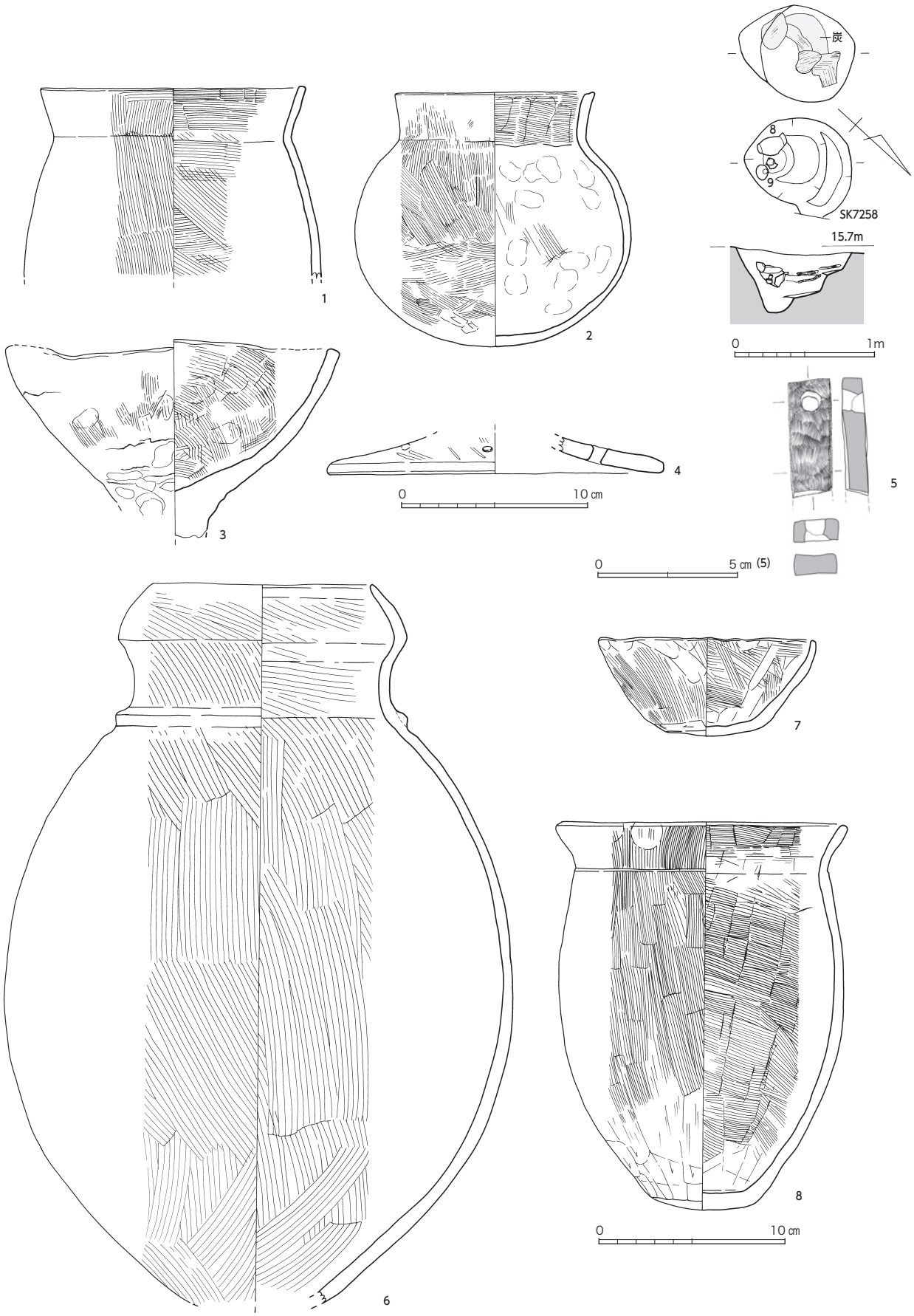


図 173　SC1173（S=1/60）・出土遺物（S=1/3・S=1/2）・SK7258（S=1/40）・出土遺物（S=1/3）

7258 を検出し、甕 8 が横倒し、小型鉢壺 7 が倒置で出土した。土器の上には炭化物が 2、3 重に重なっており、敷物を被せておいたかの様で、その上には客土様の黄褐色土が被る。SC1173 は出土遺物から後期後葉から終末と考えられるが、SK7258 は後期中頃のもので、SC1173 以前の遺構である。

SC1280・1254・1282・1467（図 174-176）No.23　4 基の竪穴建物が切り合う。切り合いが激しく、十分な掘り分けができていない。1280 に 1254、1282、1467 が切られる。

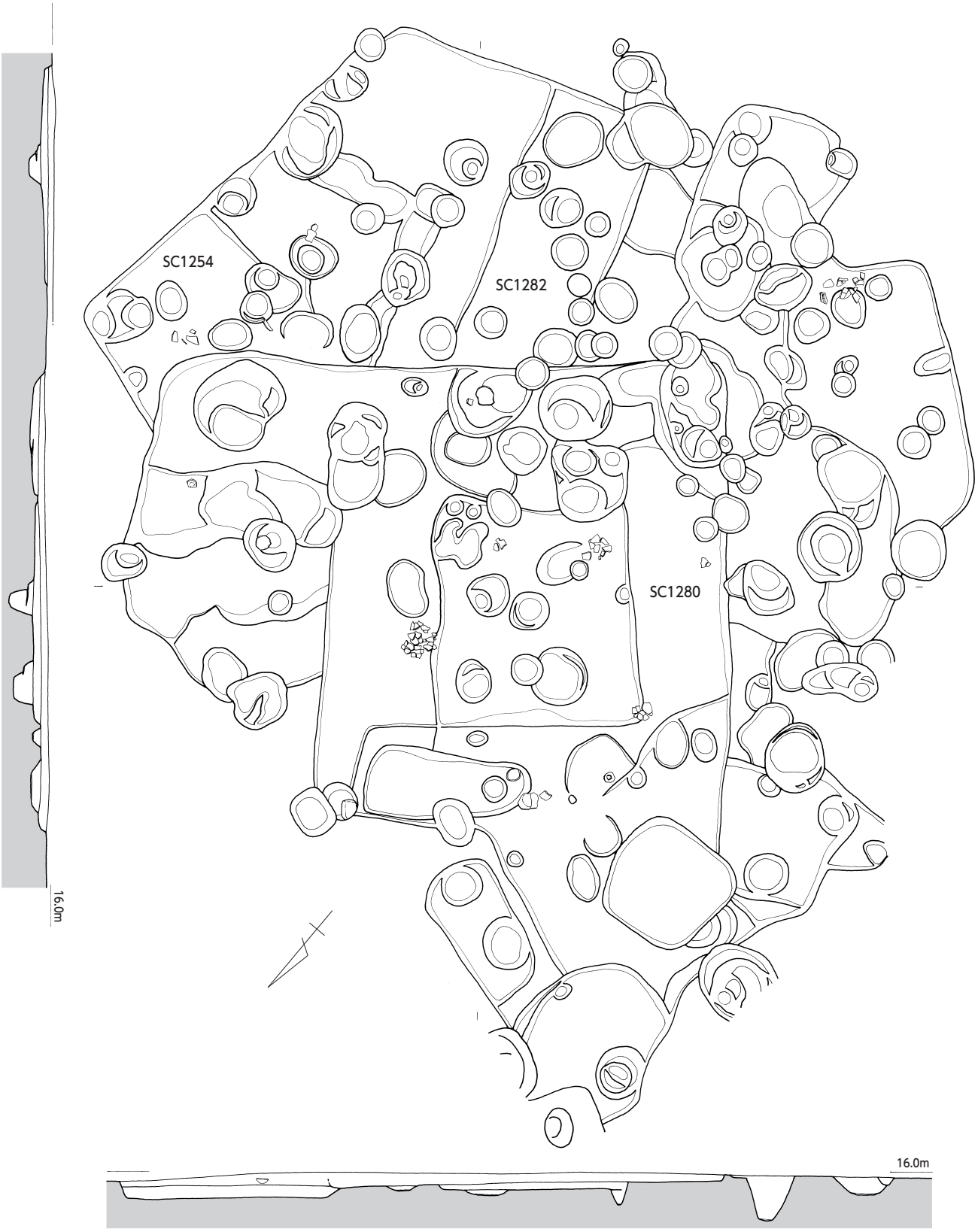


図 174　SC1254・1280・1282・1467（S=1/60）

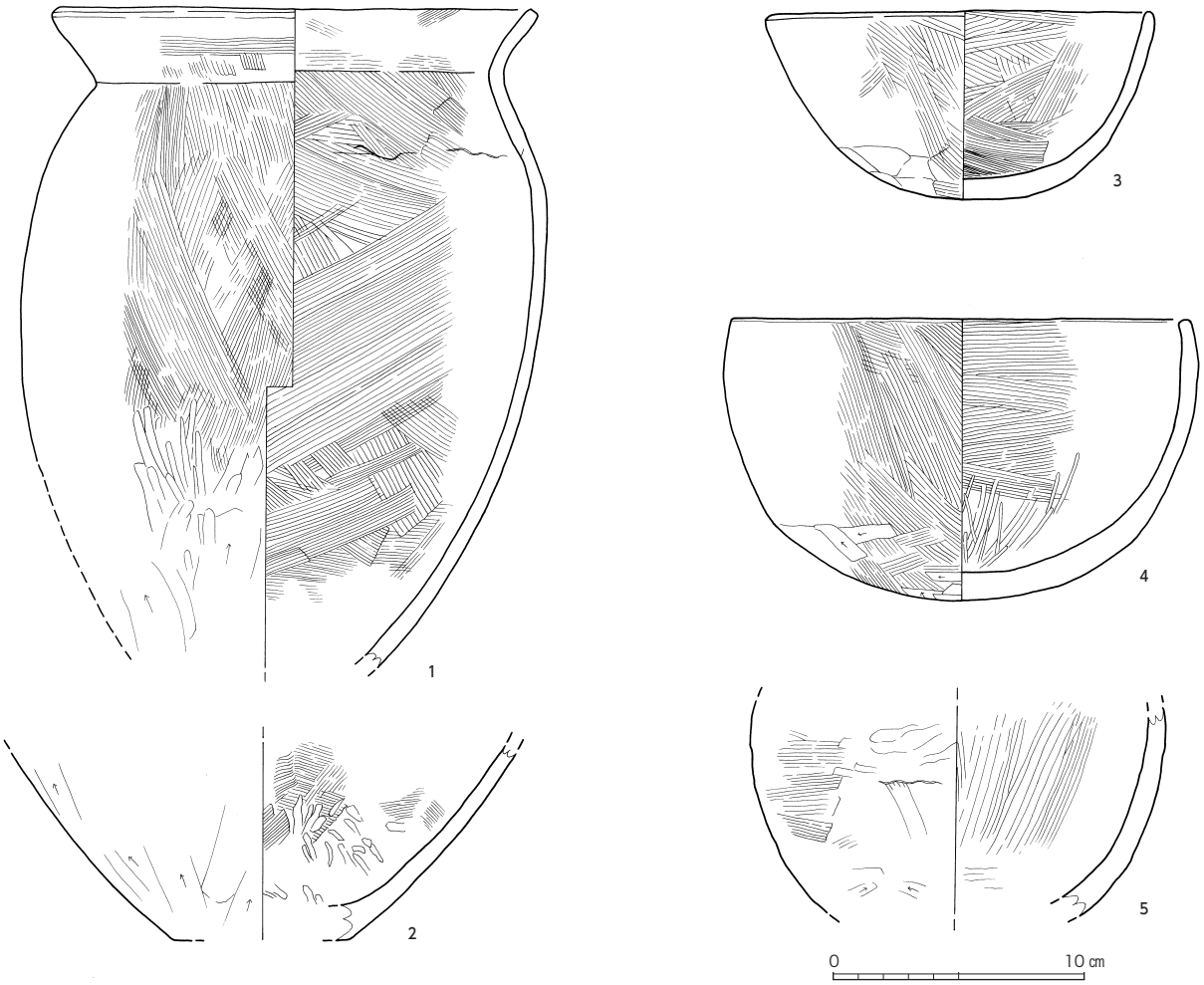


図 175　SC1280 出土遺物（S=1/3）

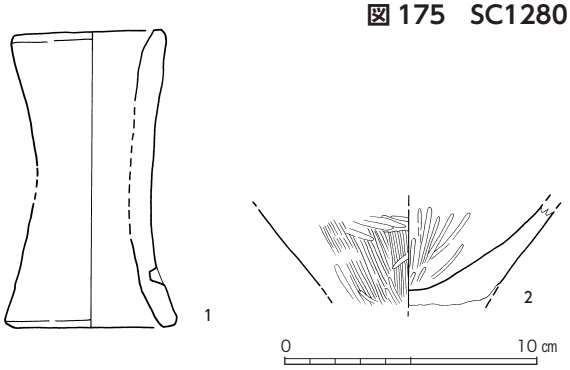


図 176　SC1254 出土遺物（S=1/3）

SC1340（図 177）No. 4　調査区東壁際に一辺 2.3 m の竪穴を検出し、東へ 0.8 m ほど拡張したところ、遺構の南壁は方形プランに沿って、北壁は北へ開いた方向へのプランを確認した。中央には東西方向の浅い土坑がある。甕 1 が横たわって出土した。確認できたプランは不整形だが、竪穴建物の一部と考える。弥生時代終末から古墳時代前期。

SC1373・SC1990（図 178-180）No.6　SC1373 は東壁際で検出した竪穴で SC1990 を切る。当初北西隅を確認していたが、後に東へ 1 m 弱ほど拡張して、一辺 3.8 m 以上の方形プランを確認した。竪穴建物と考える。掘削できたのは北西隅部分と、拡張時に遺物を確認した部分のみである。深さは 25㎝ほどが残る。埋土は焼土・炭を多く含む茶褐色土で壁に沿って炭化材がみられる。拡張部では SC1990 の床を追う過程で掘り過ぎ、北壁のプランを確認できていない。建物内の遺構であろうか西側の床より深い掘り込みで壺、甕がやや倒れてはいるが正置された状態で出土した。1、2 は丸みを帯びて外反する甕、3 は壺、4 は鉢で刷毛目調整が顕著である。他に袋状口縁壺、跳ね上げ口縁、須玖Ⅱ式甕などの破片がある。後期後葉から終末。

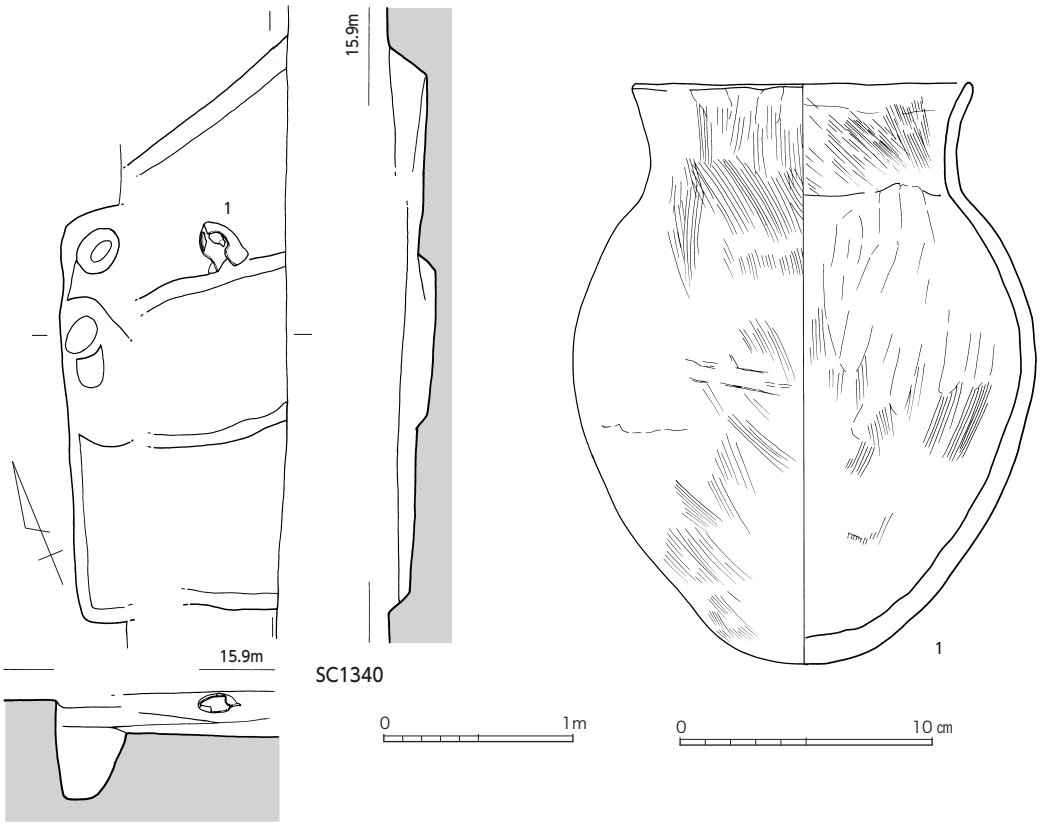


図 177　SC1340（S=1/40）・出土遺物（S=1/3）

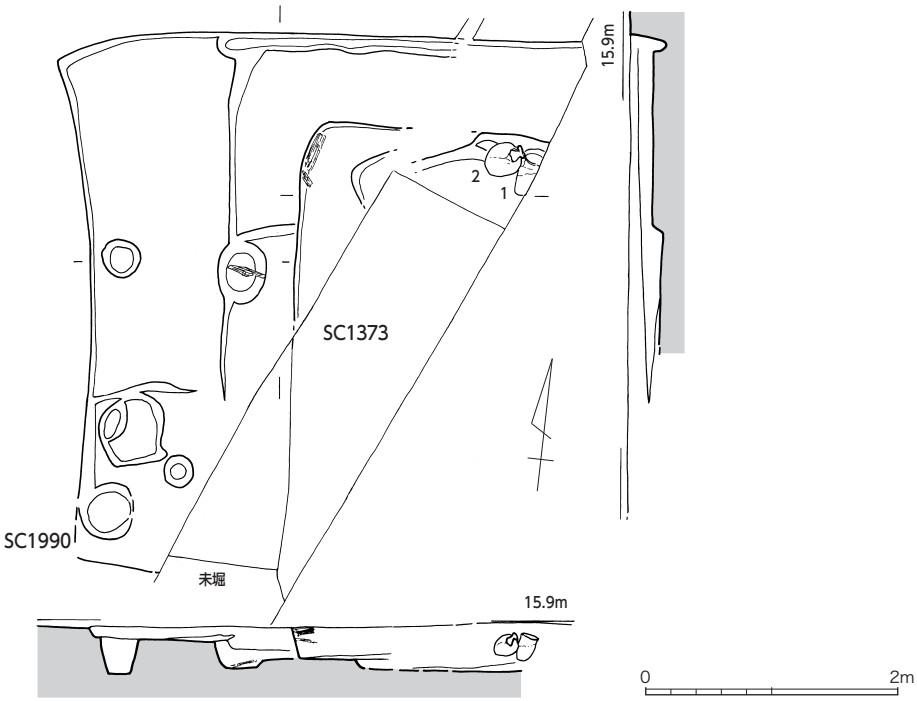


図 178　SC1373・1990（S=1/60）

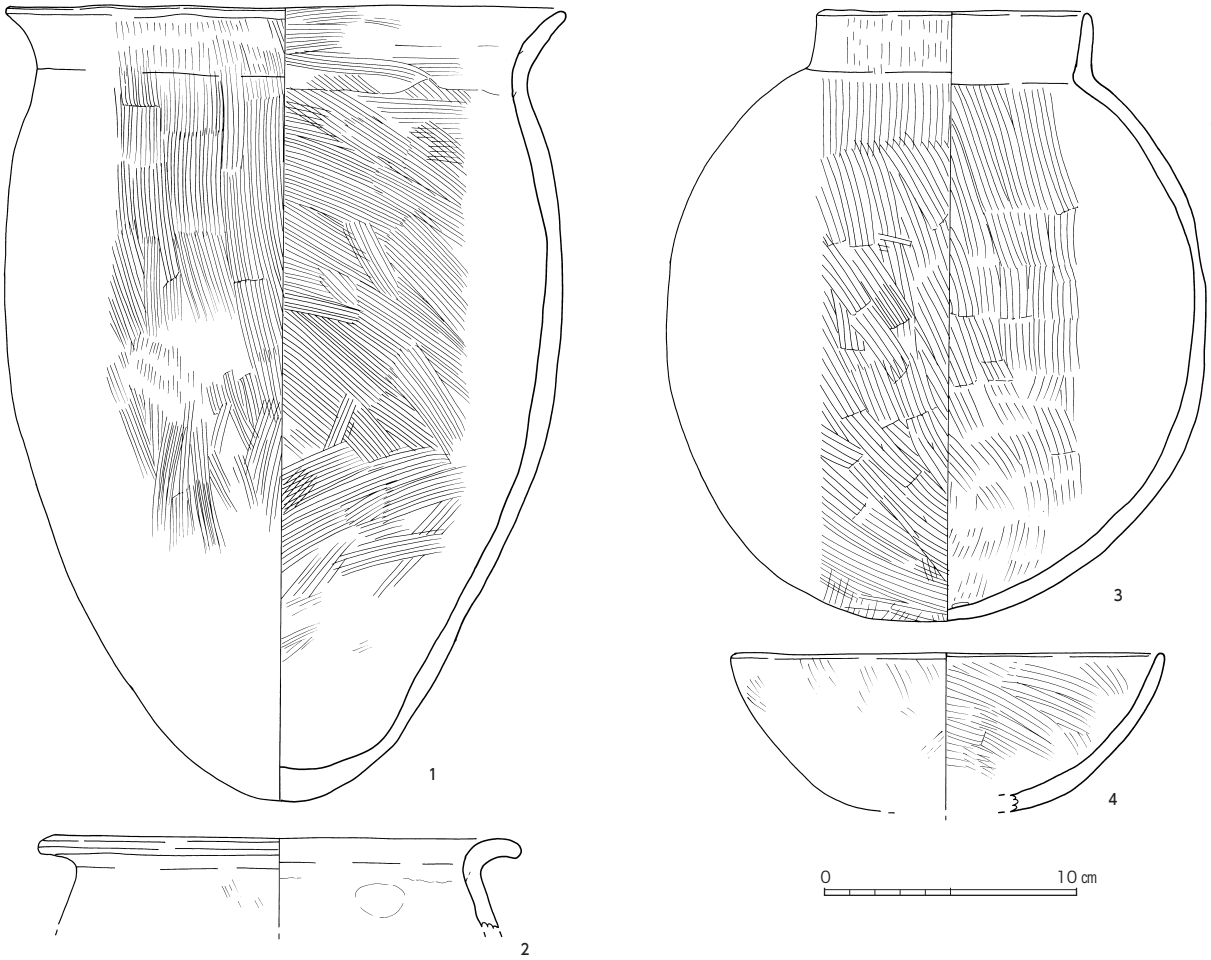


図 179　SC1373 出土遺物（S=1/3）

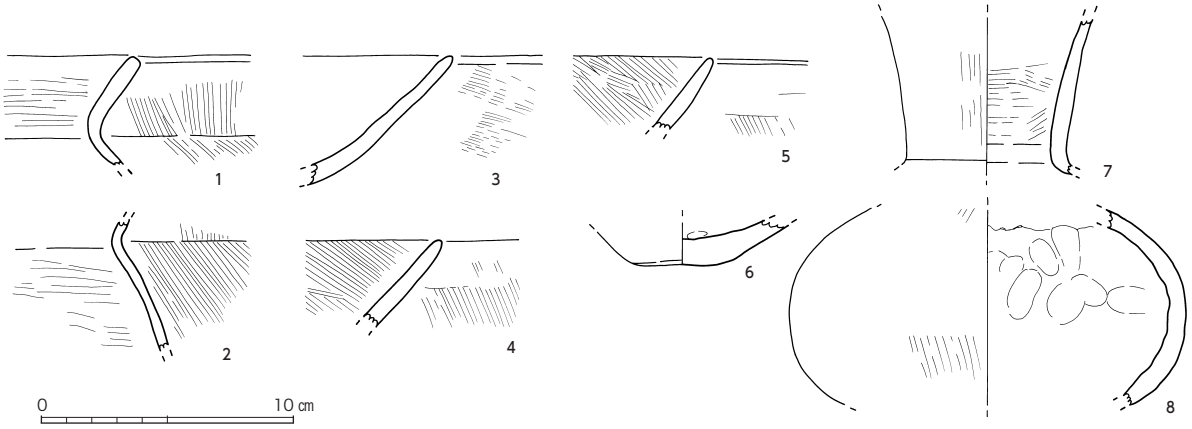


図 180　SC1990 出土遺物（S=1/3）

SC1990 は東壁沿いの方形プランの一画を確認した。SC1373 に切られる。南西辺で 4.2 m、北西辺 4.1 m以上の規模で深さ 20cmほどが残る。南西側に幅 100cmほどのベッド状を持ち、床との比高差は 8cmほど。北西壁沿いには壁溝がみられる。遺物は埋土からの出土で 1、2 はくの字口縁の甕、3 から 5 は浅い鉢か。6 はレンズ底、7、8 は長頸壺、埋土中には須玖Ⅰ式期の遺物が多い。他に菫青石ホルンフェルスの剥片があり石包丁の可能性がある。弥生後期中頃から後半。

SC1600・1851（図 181・182）No.5　方形の竪穴建物で残りが悪く北西隅はプランを確認できなかった。平面4.6 × 4.3 mほどの規模で、深さは残りの良い東壁で8cmほどである。周囲にベッドがあっ

た可能性もある。中央に攪乱がある。東壁、北壁東端に壁溝がみられる。円形竪穴 SC1851 との重なりがあり、床面の遺構は帰属が不明確。東側の溝 SD1565 が東壁に平行するが、SC1851 の延長にもあたり帰属不明確である。北西側、南西側に赤変部があり、炉が想定される。ピットは深さ 20 ～ 30 ㎝で主柱穴を特定できなかった。遺物は弥生中期の小片が多いが､床面近くに後期の遺物がみられた。1 は鉢で底部が厚く脚が付く可能性がある。2、3 は鉢状。4 は直口の壺、5 は丸底に近い底部。ほかに不明棒状鉄器が出土した。後期後葉～終末。

SC1851　SC1600 の西から北側に弧状のプランを確認した。円形の竪穴建物の可能性があり、想定される規模は径 7 mほどである。SD1565 が関連するのであれば規模は大きくなる。壁は立たずに比高差 5 ～ 8㎝である。南側はプランを確認できなかったが、北側の上端とレベル差はない。床面の深めの部分が残ったものか。円形プランに沿って 50㎝から 70㎝大のピット状がみられるがいずれも深さ 10㎝前後で主柱穴とするには不確かである。遺物は、土器は弥生土器の小片少量のみで時期をはっきり示すものはない。SC1600 出土の弥生中期の土器が近い時期か。石包丁 6 が床面で出土している。

SC2007（図 183-187）No.6　平面長方形の竪穴建物で、5.0 m × 4.2m を測る。SC2300 を切る。北壁・南壁に幅 1m 程度のベッドがあり、北壁際に幅 30㎝程度の明瞭な壁溝をもつ。ほか三方の壁にも壁溝はあるが、幅 5 ～ 10㎝程度かつ部分的で不明瞭である。ベッドまでは検出面から深さ 20㎝程度、床面までは深さ 35㎝を測る。南北断面に示した 2 つの柱穴が主柱穴と考える。東西各壁の中

図 181　SC1600・SC1851（S=1/60）

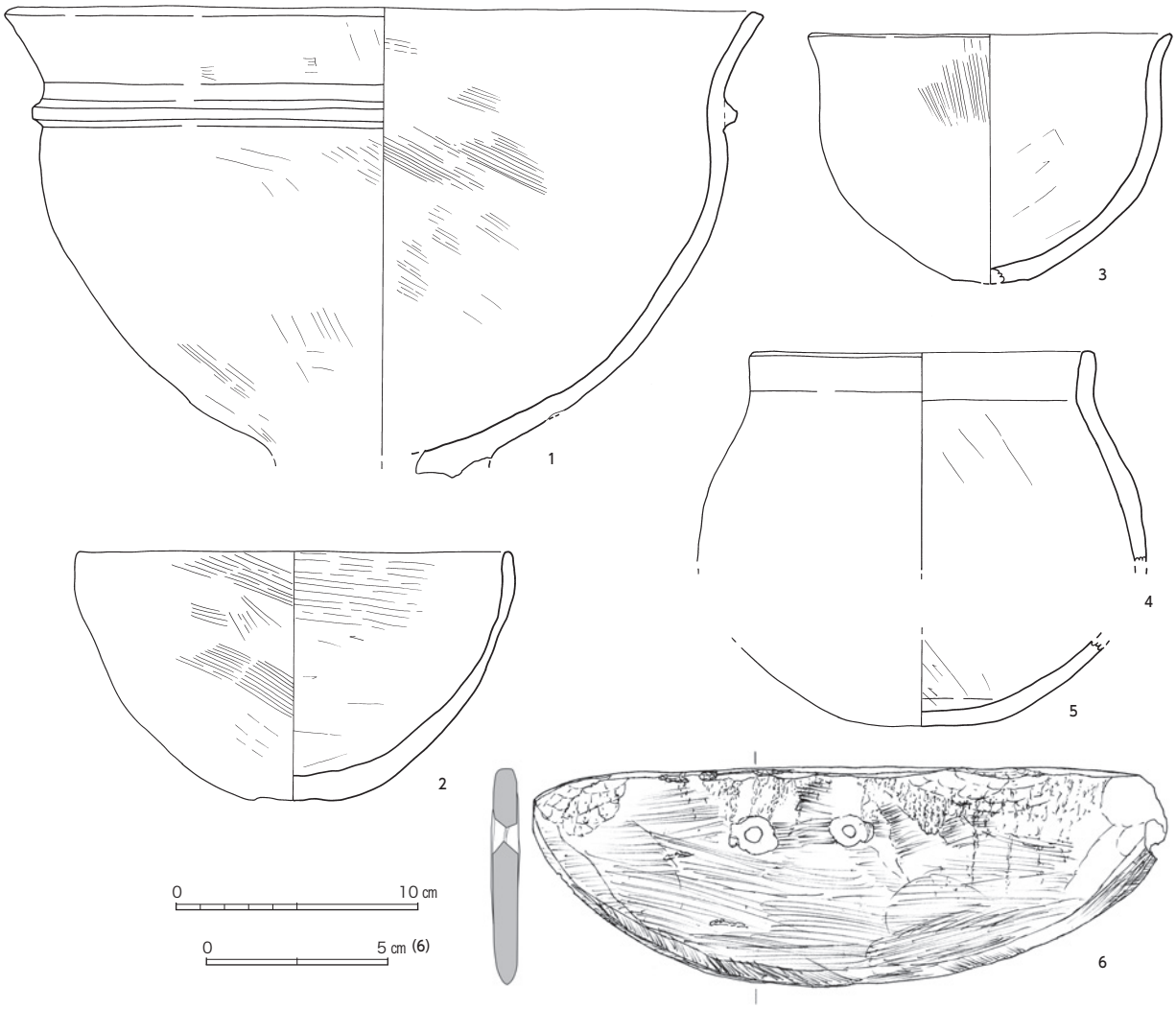


図 182　SC1600・SC1851 出土遺物（S=1/3・S=1/2）

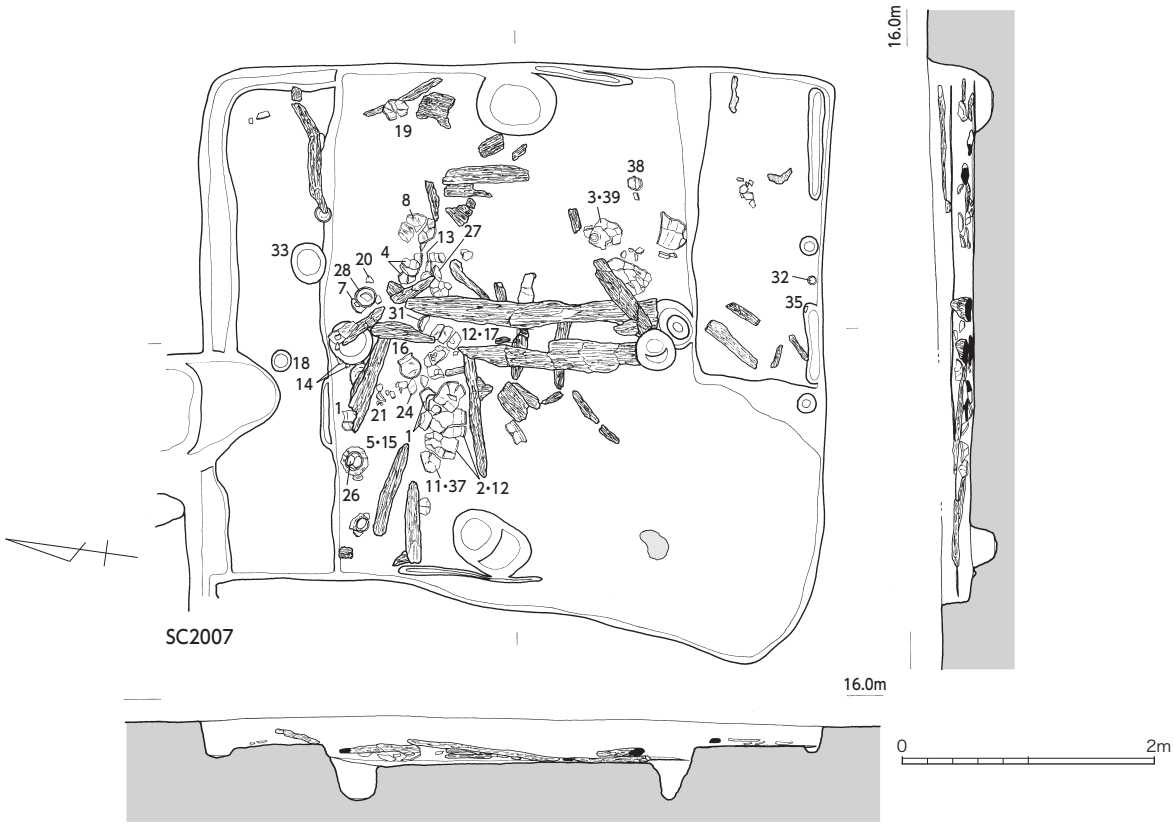


図 183　SC2007（S=1/60）

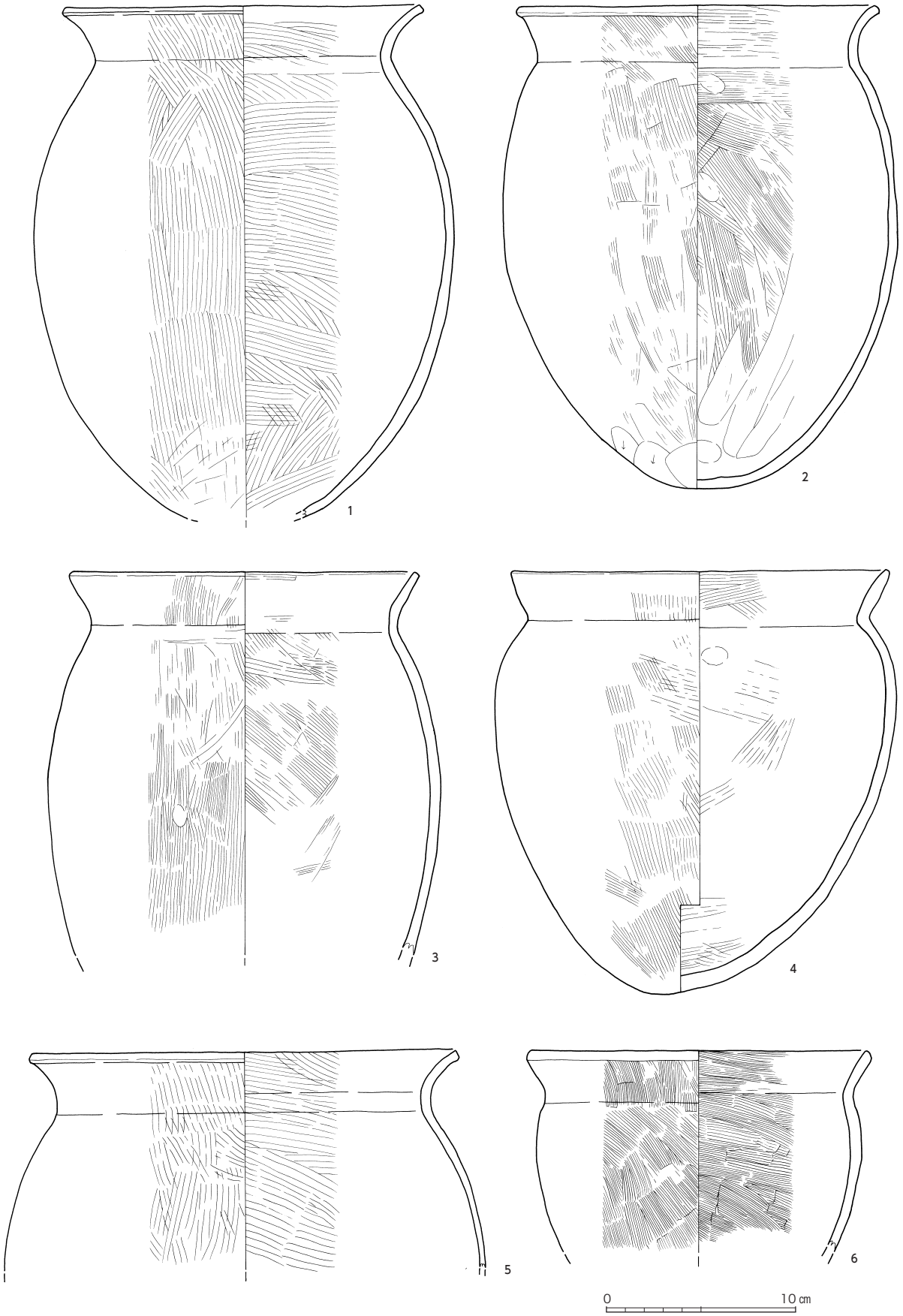


図 184　SC2007 出土遺物（1）（S=1/3）

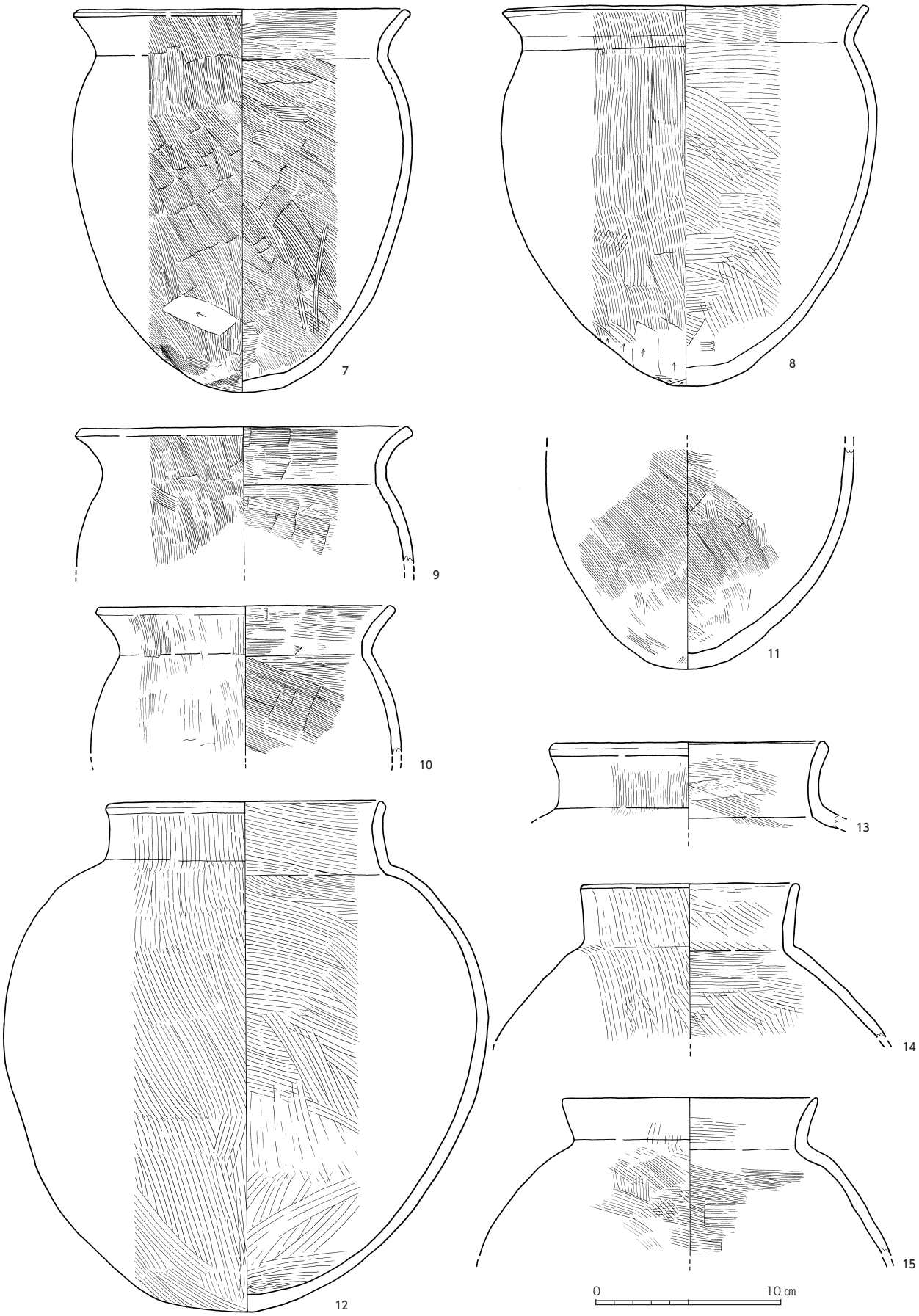


図 185　SC2007 出土遺物（2）（S=1/3）

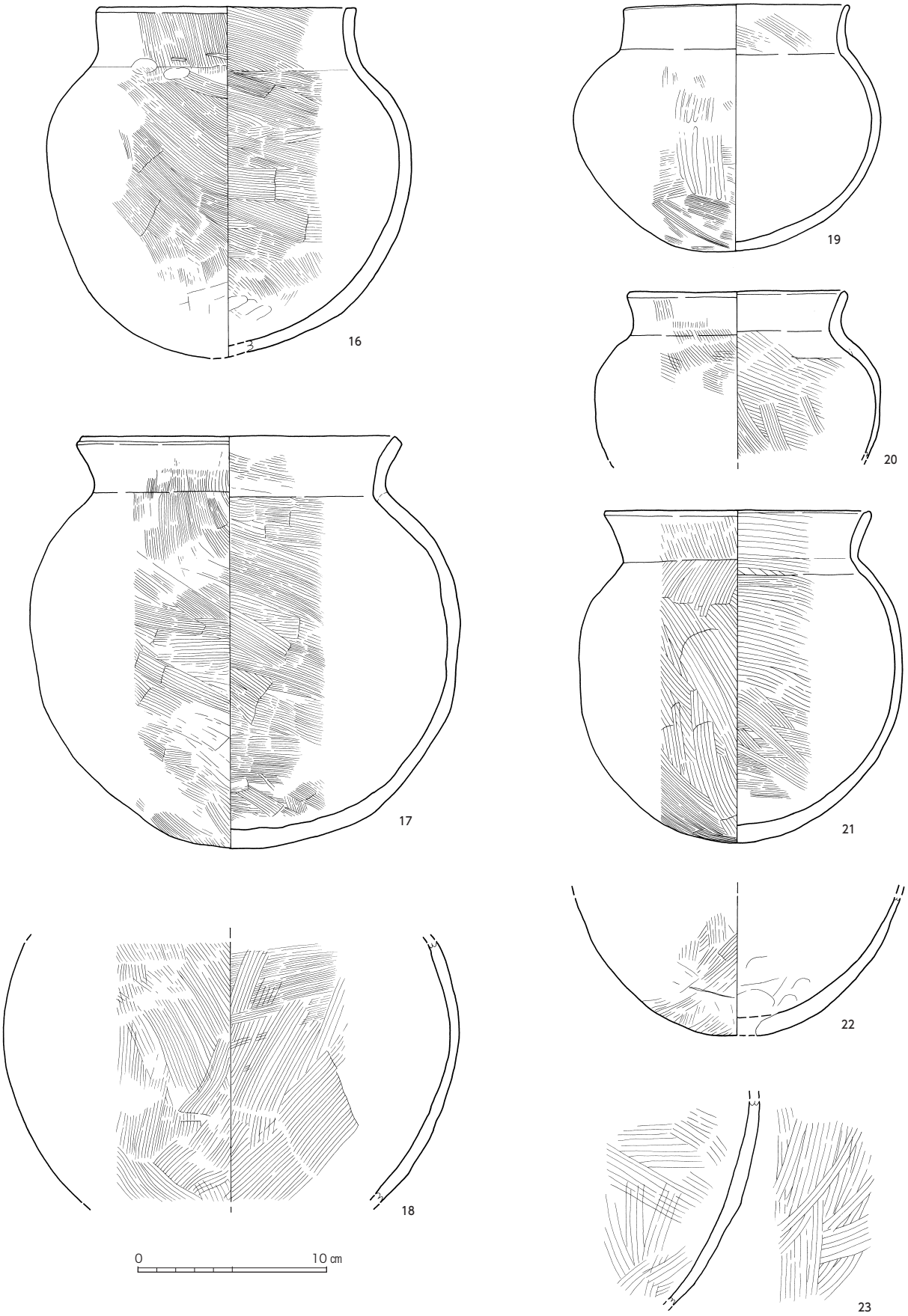


図 186　SC2007 出土遺物（3）（S=1/3）

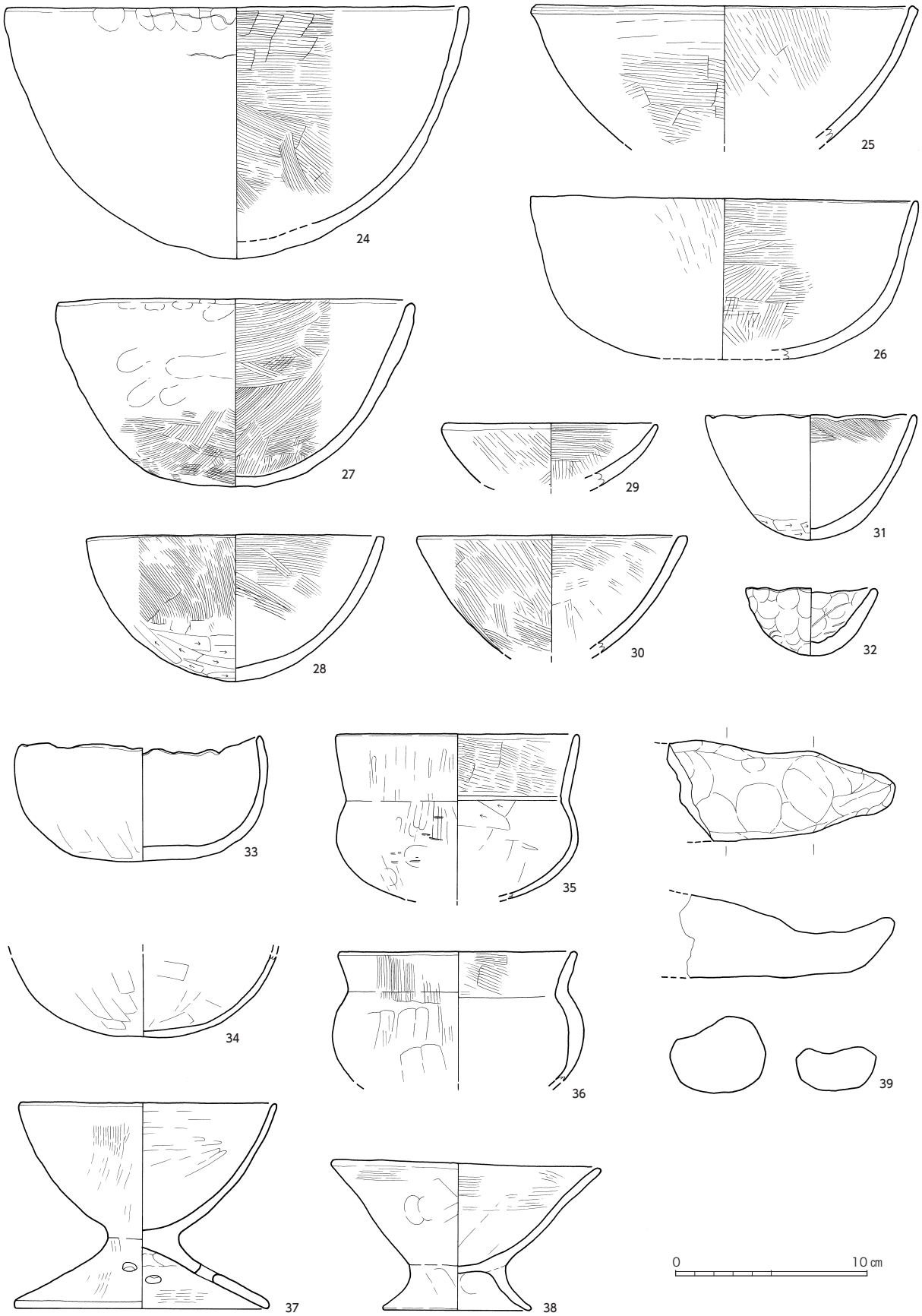


図 187　SC2007 出土遺物（4）（S=1/3）

央にあるやや大きめの柱穴は梯子穴か。床北側を中心に土師器が床面から出土した。床面から10㎝程度浮いたレベルで炭化材を検出した。樹種同定によれば、広葉樹のサクラ属、ウツギ属、カキノキ属である（第６章）。南西部床面には焼土がみられる。建物西壁のプランを把握できず、やや掘りすぎた。埋土から板状鉄斧（図264-5･6）が出土した。

SC2012（図188）No.7　東壁際で検出した方形の竪穴建物で平面南北５ｍ、東西4.2ｍ以上で深さ50㎝が残る。西側にベッド状遺構を持ち深さ30㎝、床との比高差は20㎝ほどである。壁際中央に炉があり径40㎝ほどの浅いくぼみに炭がたまり底は赤変する。これが東西の中央であれば竪穴の東西長５ｍとなる。ピットは限られベッド状の際のSP2905が主柱穴とすれば２穴となる。北側の土坑SK2828を切る。遺物は埋土に弥生中期の甕が多いが後期の土器が少量みられる。1から3は壺、4は甕、5は鉢でいずれも刷毛目調整を施す。6は高坏の坏部で7は同一個体の脚部。8は石包丁片で厚さ1㎝と厚手である。弥生後期後半。

SC2300（図189）No.7　平面長方形の竪穴建物で東隅をSC2007に切られる。南北6.3ｍ、東西4.9ｍほどの規模である。東辺を除く三方に幅90㎝ほどのベッド状をもち、ベッドまでの深さ35㎝が残り、中央の床面との比高差は10㎝ほどである。西壁沿いには壁溝が見られる。床中央には炉があり径70㎝ほどがくぼみ、中央40㎝ほどが赤変する。床のベッド際両サイドのピット２穴が主柱穴と考えられる。東壁沿い中央には土坑があり入口の施設に関連するものか。三方にベッドを持つSC322、918、1800と規模、構造が近いが、SC2300は90°方向を違える。遺物は、埋土中は弥生中期の甕が多い。1は甕、2から4は複合口縁の壺、5は内面に研磨、外面は刷毛目。6は指抑えが顕著。7は外面磨研の脚部。8、9は椀形で、8外面は削り、9内面は粗い磨研。11は南西隅出土の鉢。この他に石包丁２個、床上で投弾２個が出土している。埋土から方形板状鉄片（図264-9）が出土。弥生時代終末期。

SC3190（図190）No.44　方形プランで、南北軸長4.9ｍ、深さ10～25㎝を測る。西側はSC3660に切られて不明瞭である。埋土は黒褐色土。主柱穴は不確かで、東壁の一部に壁溝を巡らせる。SC3660に切られた中央付近に焼土があり、炉跡に相当するか。遺物は薄パンケース３箱分出土した。1・2は甕、3は高坏、4は鉢である。終末から古墳前期。

SC3300（図191-194）No.36　方形の竪穴建物。6.1×6.1mの規模で深さ20㎝が残る。壁際には壁溝がめぐる。壁から１ｍほどの幅でベッド状遺構を設け、南側の中央1.8ｍほどは途切れる。ベッド内は一辺3.7ｍほどの方形で深さ10㎝前後である。その四隅に深めのピットがあり支柱穴となる。落ち際には一部壁に沿った溝状を部分的に確認した。床面中央には焼土面が見られ、径20㎝が強く赤変する。南側中央でベッドが切れる箇所は１×0.9ｍほどの方形の土坑SK3313があり、床から浮いた状態で土器が集まる。その東側にはベッド状に沿って浅い直線的な溝が見られ、西側のベッド裾には焼土塊が溜まる。床面近くでは比較的多くの形を保った遺物が出土した。ただし南側の土器は床から浮いている。またベッド内では台石状の薄い礫２個があり、一つは床面に接する。

1から9はベッド内床近くでの出土。1、2は布留式系の甕で内面削り。3は外面叩き、内面削りの甕。4は壺、5、6は小型の壺、7は鉢、8、9は鉢等の脚部。10から20はベッド上での出土である。甕10が西側、他は東側からの出土。15は皮袋型の土師器で指なで、指抑え調整痕が残る。二重口縁の壺20は倒置されていた。16は床面から20㎝以上浮く。21から28は南側のSK3313内の出土で26が床から10㎝、他は20から30㎝浮いていた。遺構図の29から33は竪穴の南側でやはり浮いて出土した。埋土出土であるが、ある程度埋まった段階で形のある土器の廃棄があったものか。他に弥生前・中期の土器片、軽石、粘土塊がある。南側埋土から鉄鎌片（図264-12･13）が出土している。出土遺物から古墳時代前期。

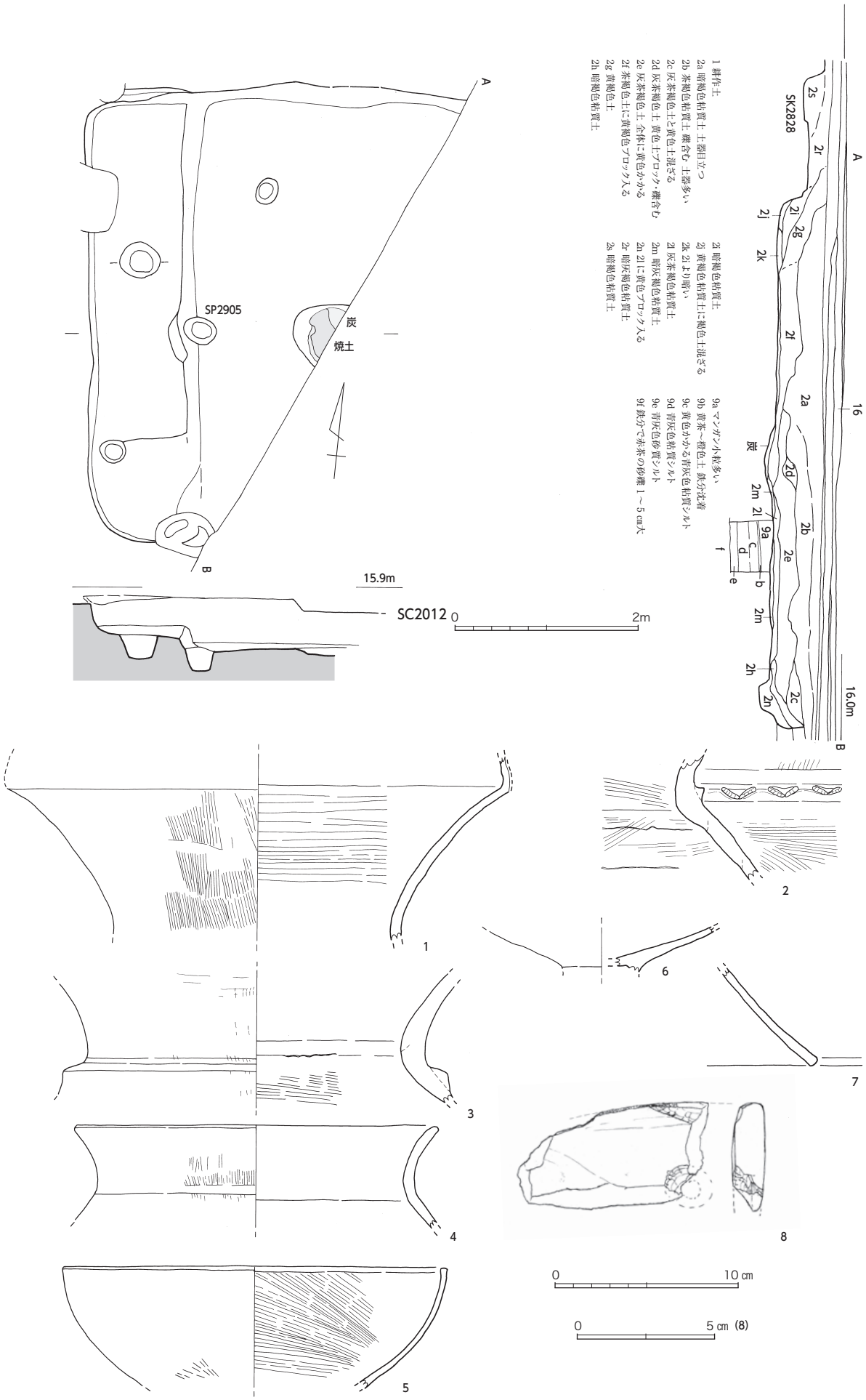


図 188　SC2012（S=1/60）・出土遺物（S=1/3・S=1/2）

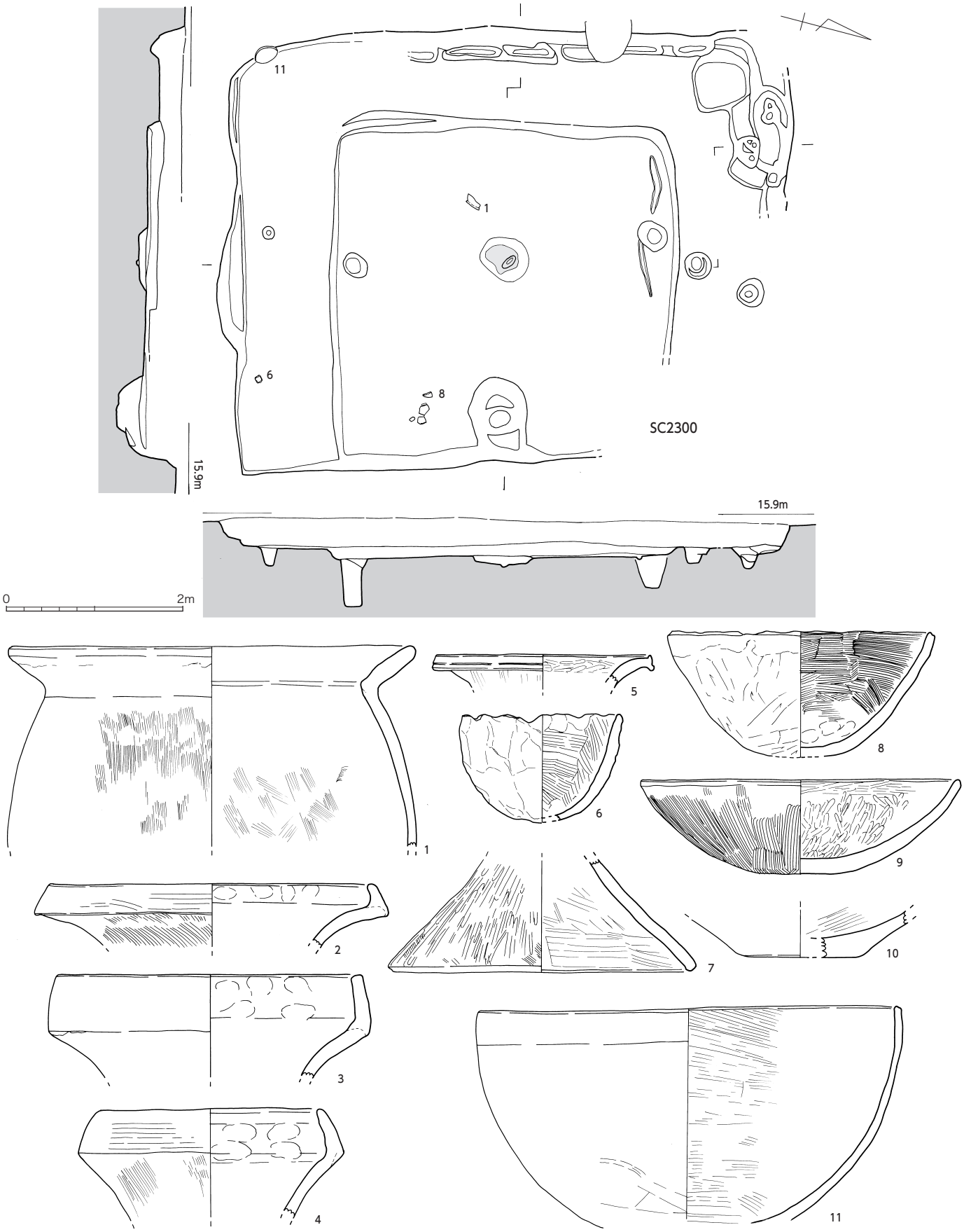


図 189　SC2300（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

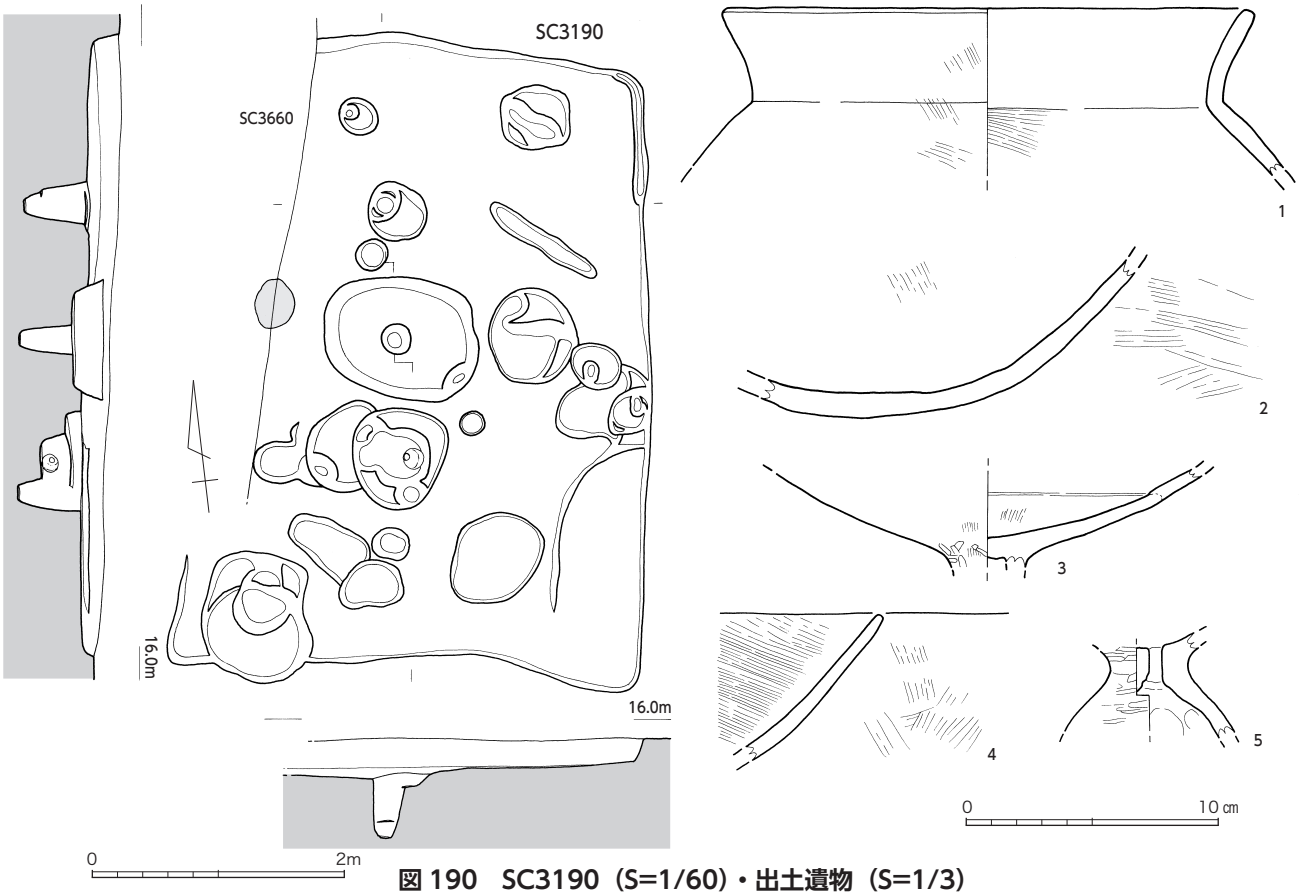


図 190　SC3190（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

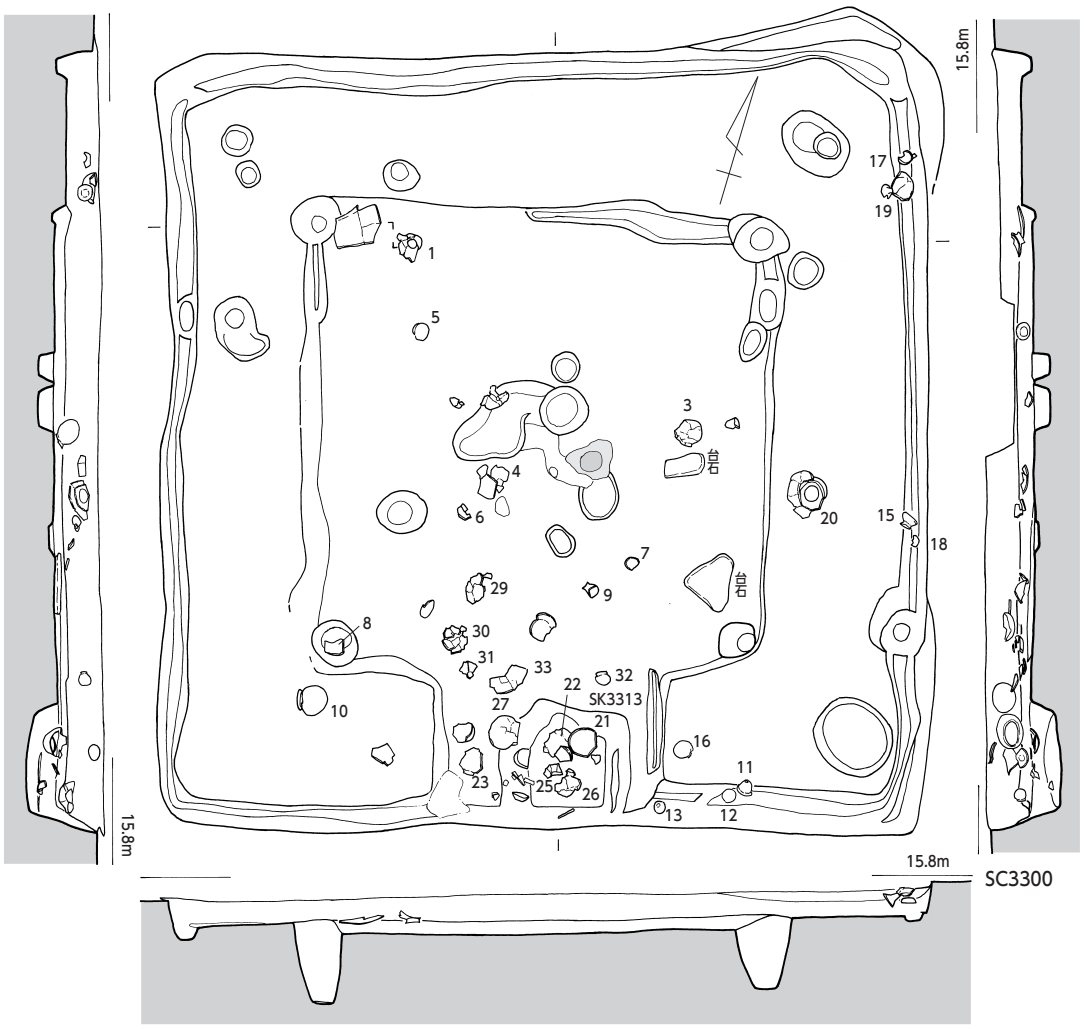


図 191　SC3300（S=1/60）

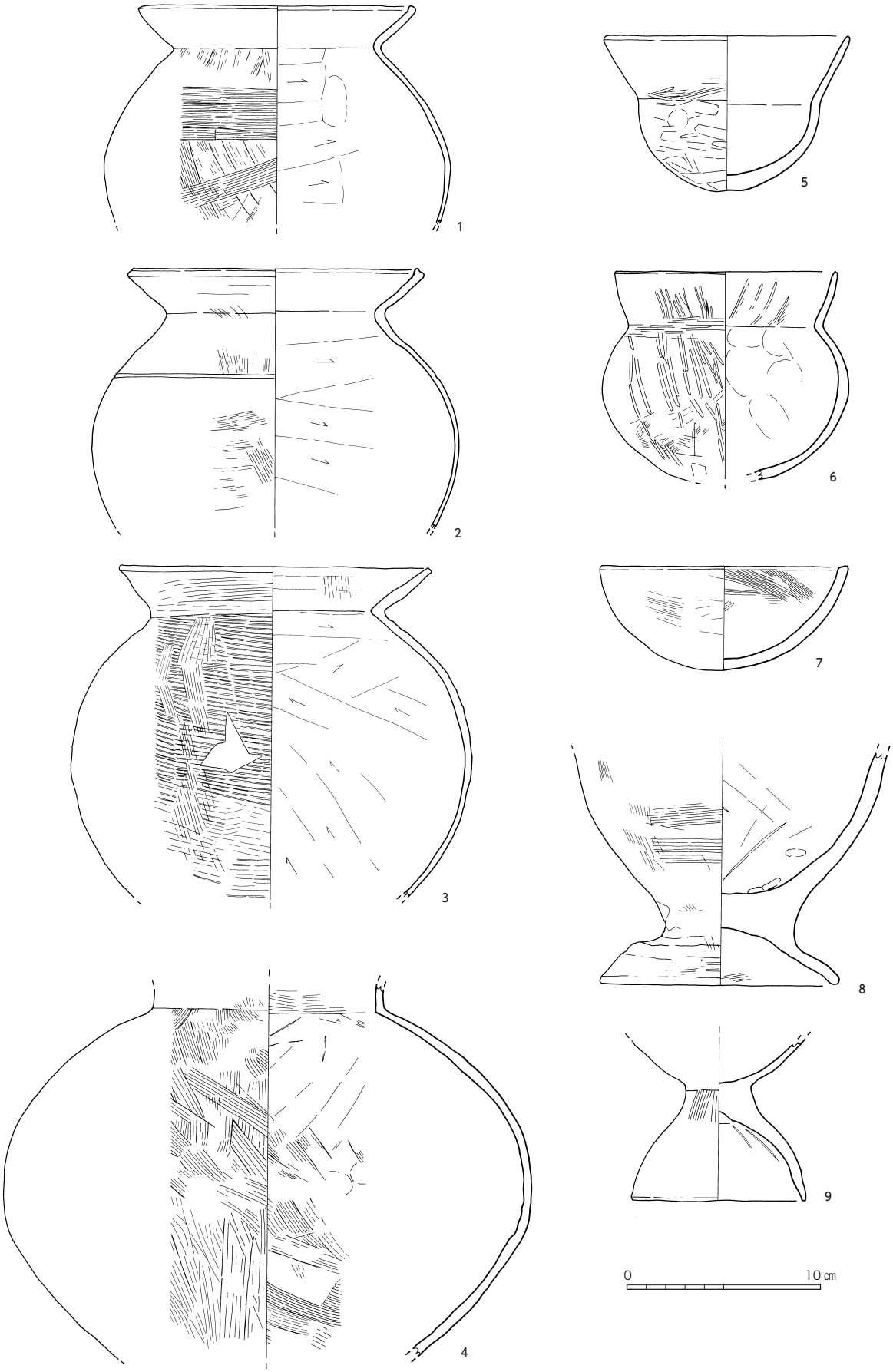


図 192　SC3300 出土遺物（1）（S=1/3）

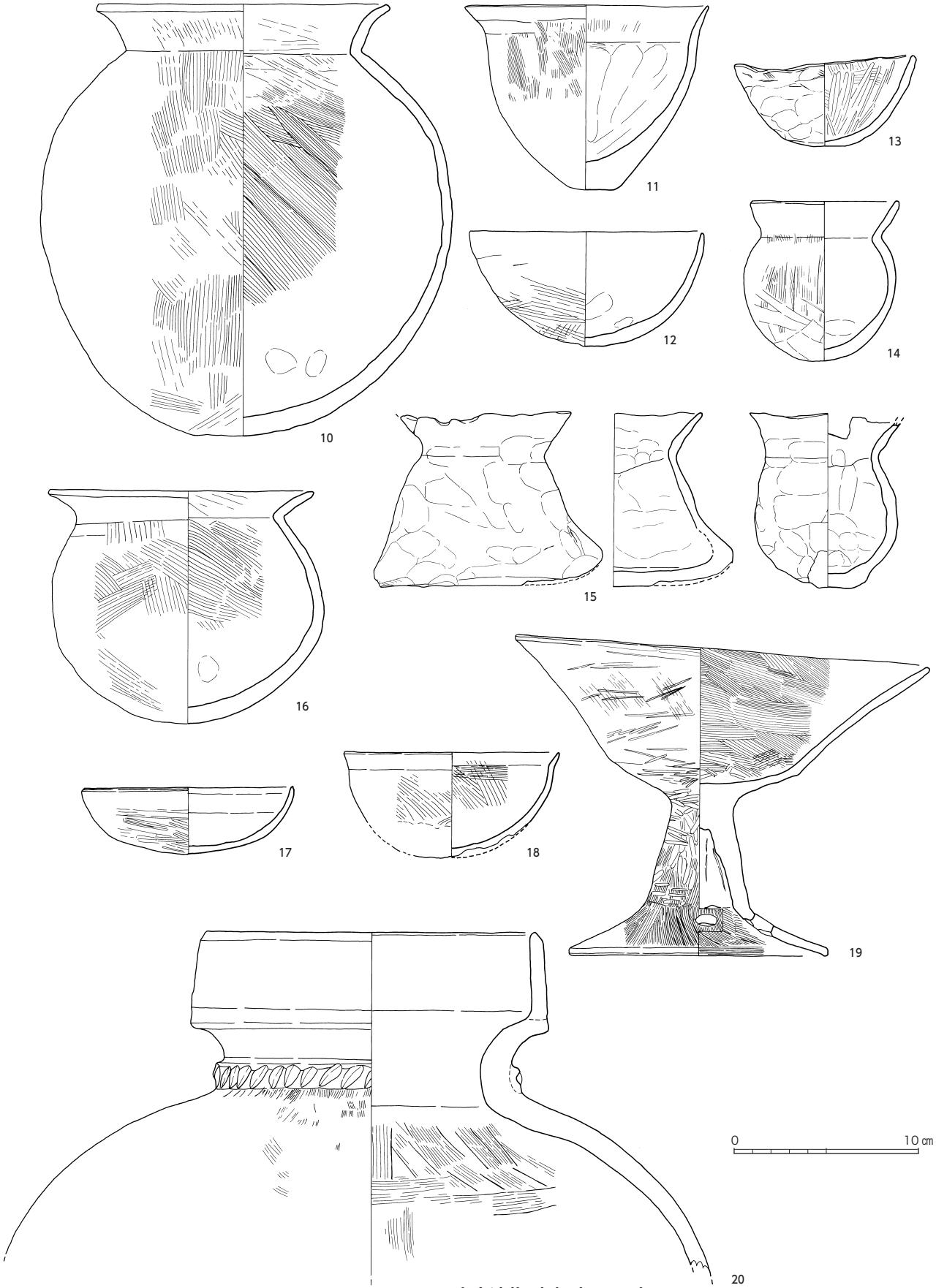


図 193　SC3300 出土遺物（2）（S=1/3）

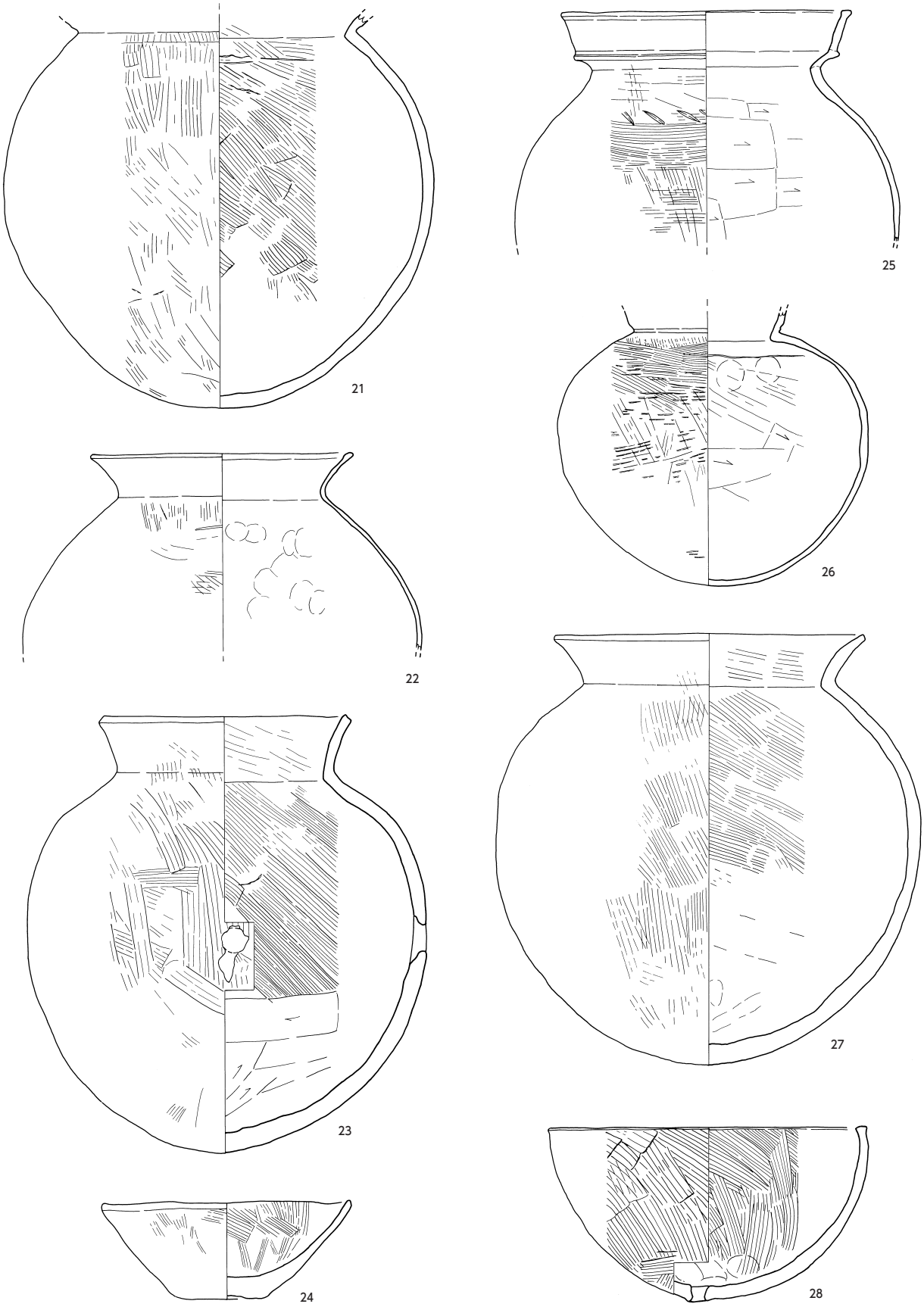


図 194　SC3300 出土遺物（3）（S=1/3）

0　10 ㎝

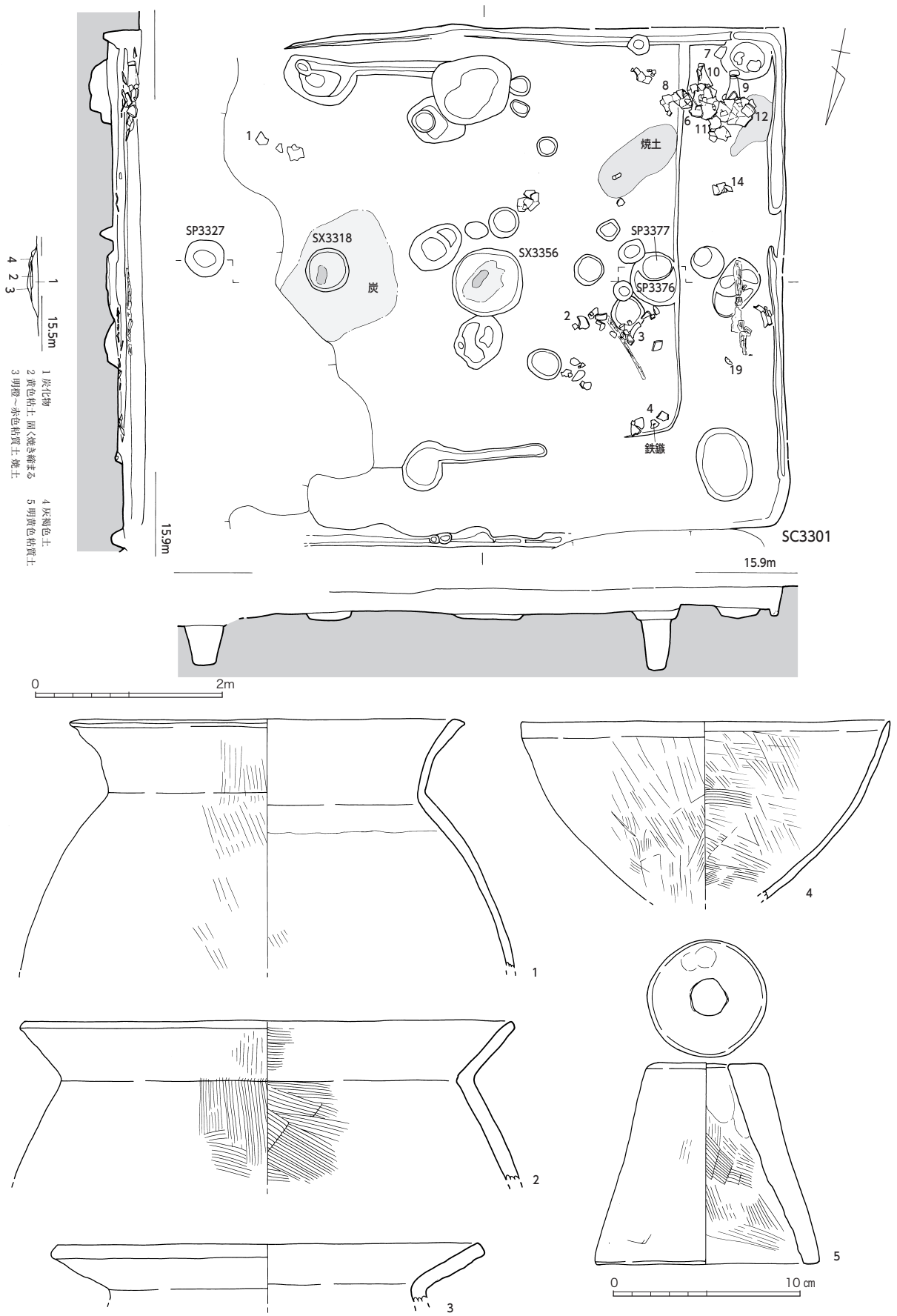


図 195　SC3301（S=1/60）・出土遺物（1）（S=1/3）

図 196　SC3301 出土遺物（2）（S=1/3）

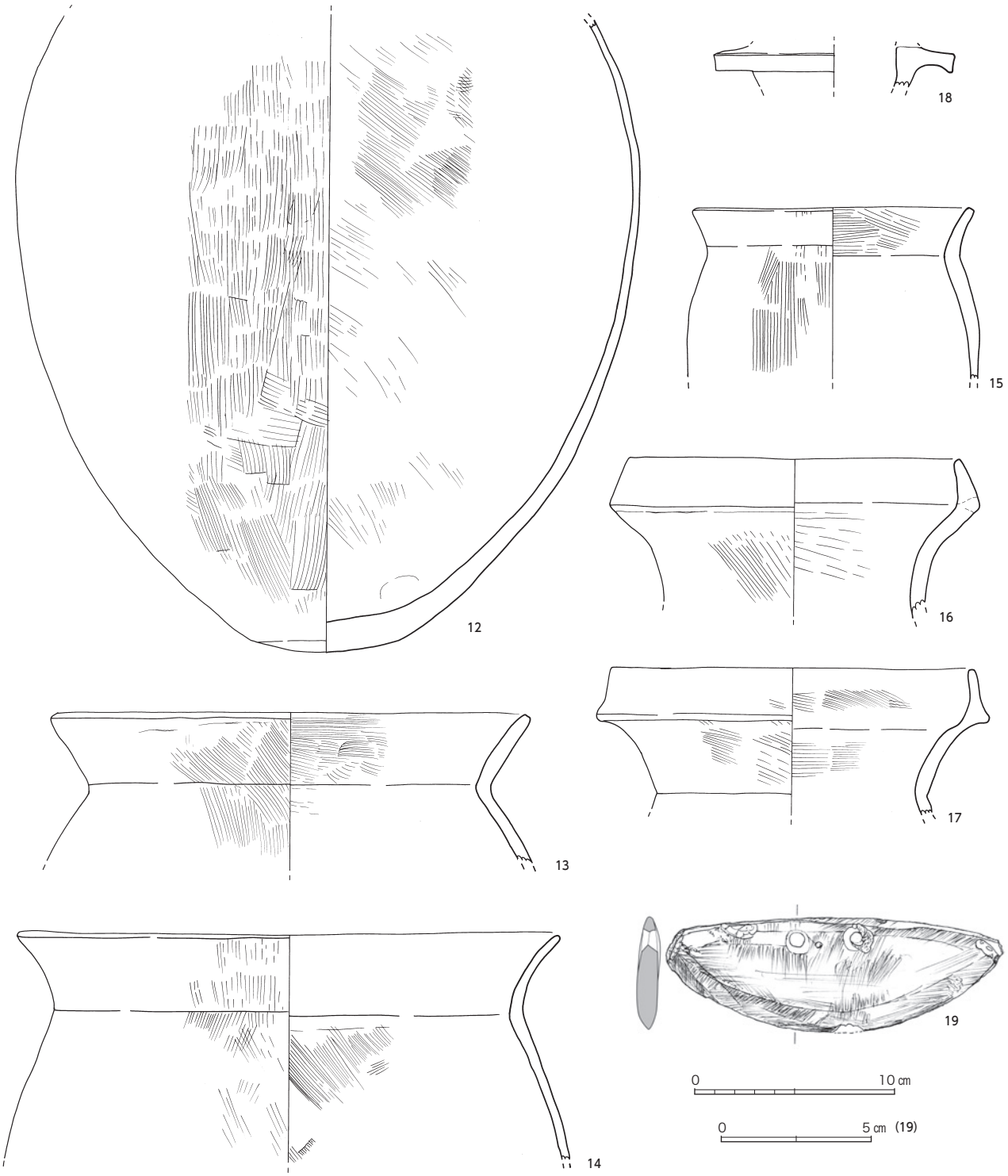


図 197　SC3301 出土遺物（3）（S=1/3）

SC3301（図 195-197）No.37　方形の竪穴建物で、東側は SC2403 との切り合いを認識できずプランを確認できていない。北東側で SC2403 の床に被る貼り床を一部確認し、SC2403 を切ると判断した。北側は SC3300 に切られるが床面で一部壁を確認した。規模は南北 5.6 m、東西は 6 m以上である。壁の深さ 25㎝が残る。壁に沿って壁溝がめぐり、北側と西側に幅 0.8 mから 1 mのベッド状遺構を設ける。東側にもあった可能性はある。ベッド状内側との比高差は 5 ～ 10㎝ほどで北側はプ

ランがはっきりしない。中央には径 75㎝の浅い土坑 SX3356 には炭化物がたまり床の中央部が焼けて赤変する。この 1 m東側にも同様に径 45㎝の浅い土坑 SX3318 に炭が溜り底に焼土面がみられ、周囲に薄く炭が広がる。位置的に SK3356 が中心的な炉と考えられる。SX3318 は SC2403 のプラン内ではあるが SC3301 の貼り床と考えられる上にあり、レベル的にも SC3301 に伴うと考える方が妥当であろう。南西側床とベッド上には焼土を多く含む土の広がりが見られた。床面でピットは検出したがほとんどが深さ 20㎝以下と浅く、西側のベッド際の SP3377 が深く主柱穴の可能性がある。その場合 2 本柱が想定されるが東側では検出できていない。SC2403 の床面で同規模の SP3327 があり図に加えたが、離れすぎる感がある。また、床面に接する状態で遺物が主に西側で出土した。特に南西隅では器台 9、10、甕 6、8、11、12 などがまとまってつぶれた状態で出土した。何らかの行為の痕跡であろうか。南側には炭化材も出土している。遺物は床面で出土したものを示す。1 から 4 はベッド状内出土。6 から 12 は南東隅でまとまって出土した一群。14 は南側ベッド中央部出土で、炭化材の際からは石包丁 19 が出土した。5、15 から 18 は西側の埋土出土。他に埋土からは弥生中期はじめから後期前半の破片が出土している。18 は外面赤色顔料塗布で大型の器台か。北西隅では鉄鏃（図 264-22）、SP3376 からは袋状鉄斧（図 263-2）が出土している。このほか有孔円盤（図 261-18）が出土。弥生時代後期後半。

SC4141（図 198-200）No.48　方形の竪穴建物で、東西軸長 5.2 m以上、南北軸長 4.5 m以上を測る。壁際に幅 60 ～ 80㎝のベッド状の高まりがあり、ベッドまでの深さ 5㎝、床面までの深さ 10㎝である。北壁際には幅 20㎝、深さ 10㎝の壁溝が巡る。主柱穴は不確かだが、東西断面で示した柱穴か。床中央東寄りで、床面に接して土師器、焼土、炭が広がる。個別に取り上げた床面の遺物を中心に示

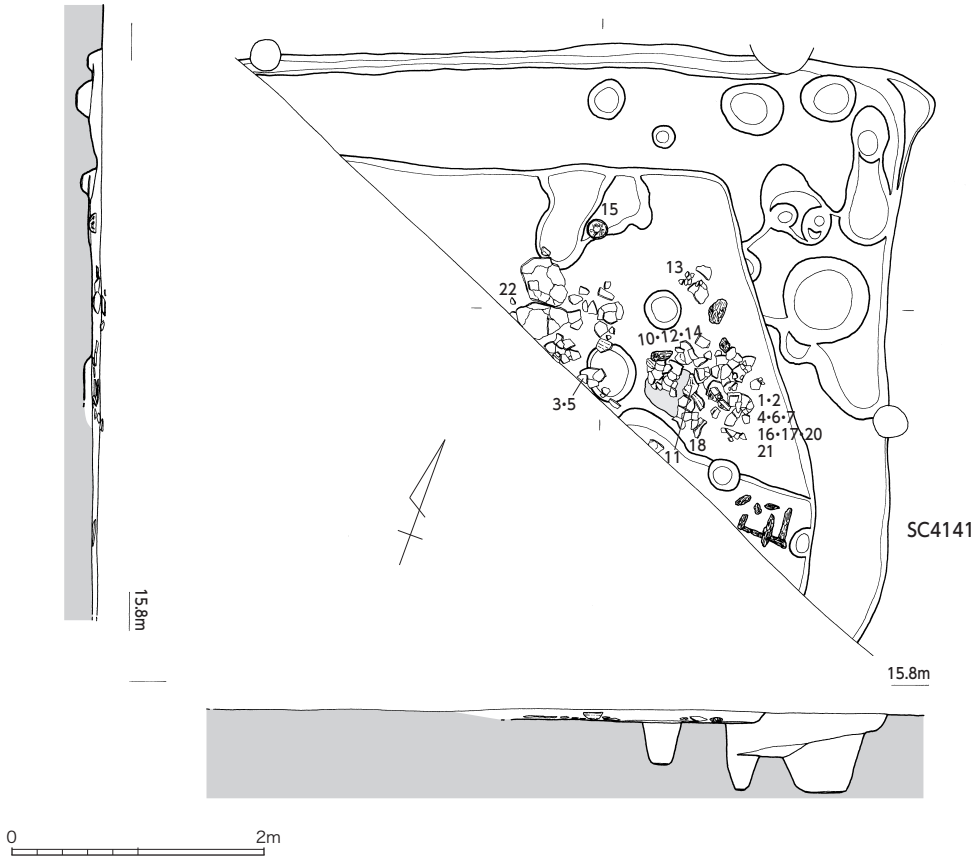


図 198　SC4141（S=1/60）

図 199　SC4141 出土遺物（1）（S=1/3）

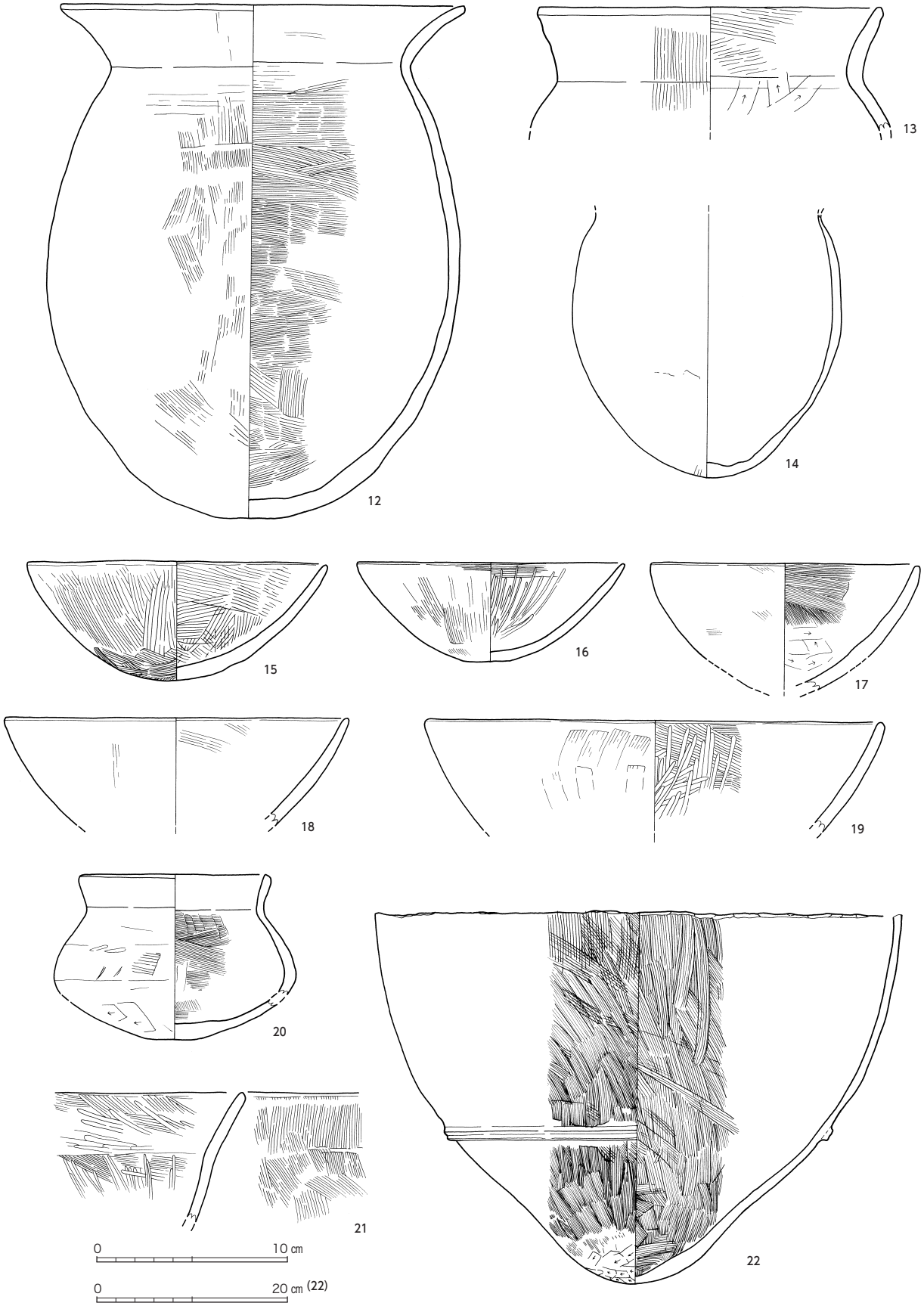


図 200　SC4141 出土遺物（2）（S=1/3・S=1/6）

した。1 ～ 3 は二重口縁壺、4・5 は壺、7 ～ 11 は高坏、12 ～ 14 は甕、15 ～ 19 は鉢、20・21 は丸底壺。22 は大型甕の胴部下半～底部。遺物は薄パンケース 7 箱出土した。

SC4143（図 201）No.47　遺構の切り合いが多く全容が明確ではないが、平行するプランと炉状の遺構から竪穴建物を想定した。北西側は壁に沿って壁溝が見られ一部南西側までめぐり、幅 1.1 m ほどのベッド状遺構がある。南東側の壁は、規模から北西側に対応するベッド状遺構の立ち上がりと考えられる。その場合南西隅と南東隅の短い溝が壁溝と考えられる。以上から短軸 3.3 m、長軸 4 m ほどが復元される。また、南西側にもベッドを伴う可能性がある。大小のピットは伴うものか判断できない。遺物は埋土出土で弥生中期を主とし内面削りの甕がある。1 は内外面刷毛目の壺、3 から 5 は甕、6 と 7 は椀状。5 外面には叩きがみられる。弥生後期から古墳前期か。

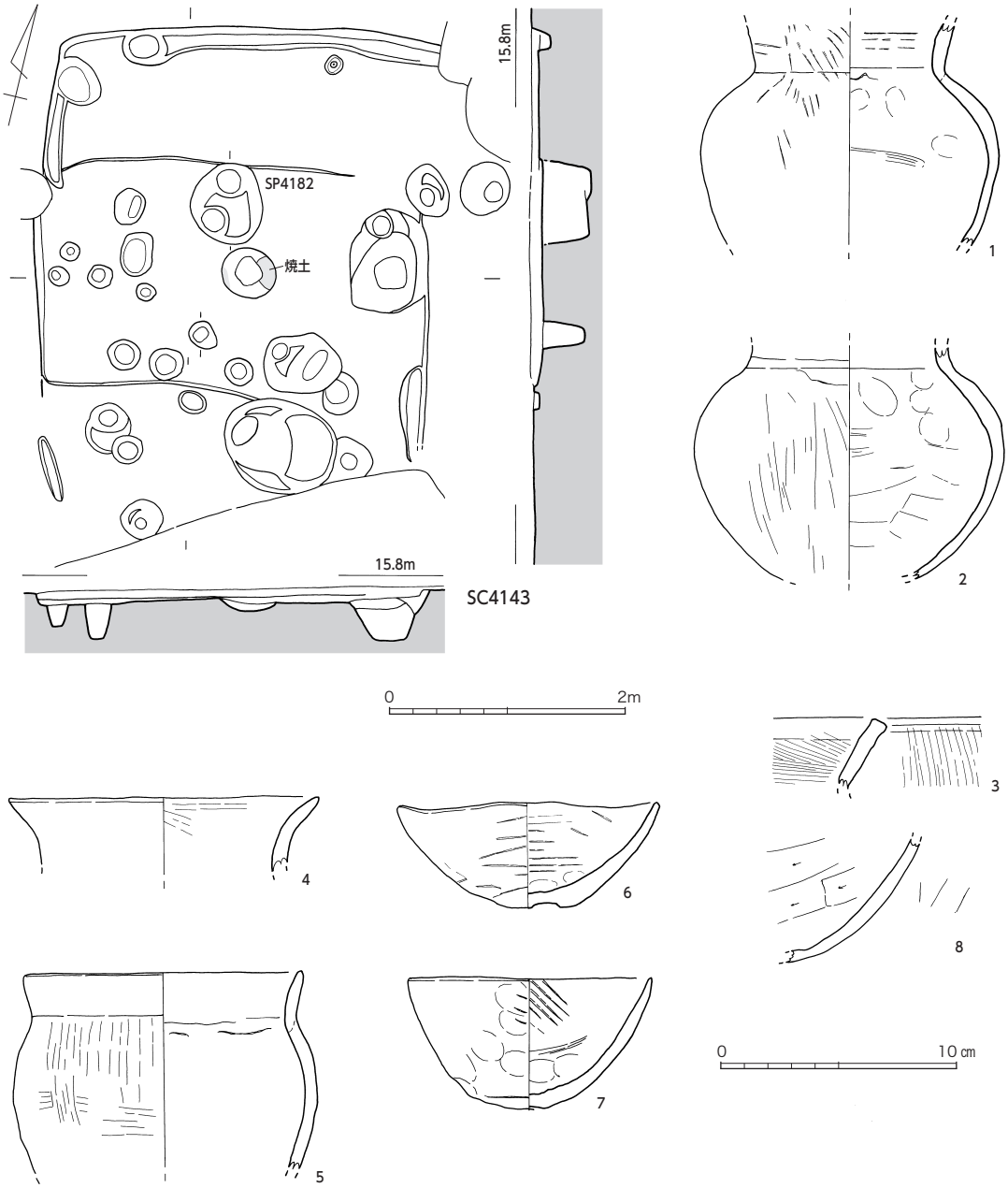


図 201　SC4143（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

SC4145（図 202）No.48　直線的なプランを検出したが、明確な主柱穴・炉が確認できず、竪穴建物かは不確かである。深さは 10㎝程度を測る。1 は甕、2・3 は手捏ね土器鉢、4 は高坏である。

SC4750（図 203・204）No. Ⅳ 4　検出面から床面までの深さ 20㎝を測る。床面から浮いて 1 の壺が出土。2 は甕の口縁部か。摩滅著しいが、内外面に波状沈線文を施す。付近は竪穴建物を想定しうる方形プランの遺構 4748 や 4660 が切り合うが、主柱穴や炉跡は確認できておらず不確かである。

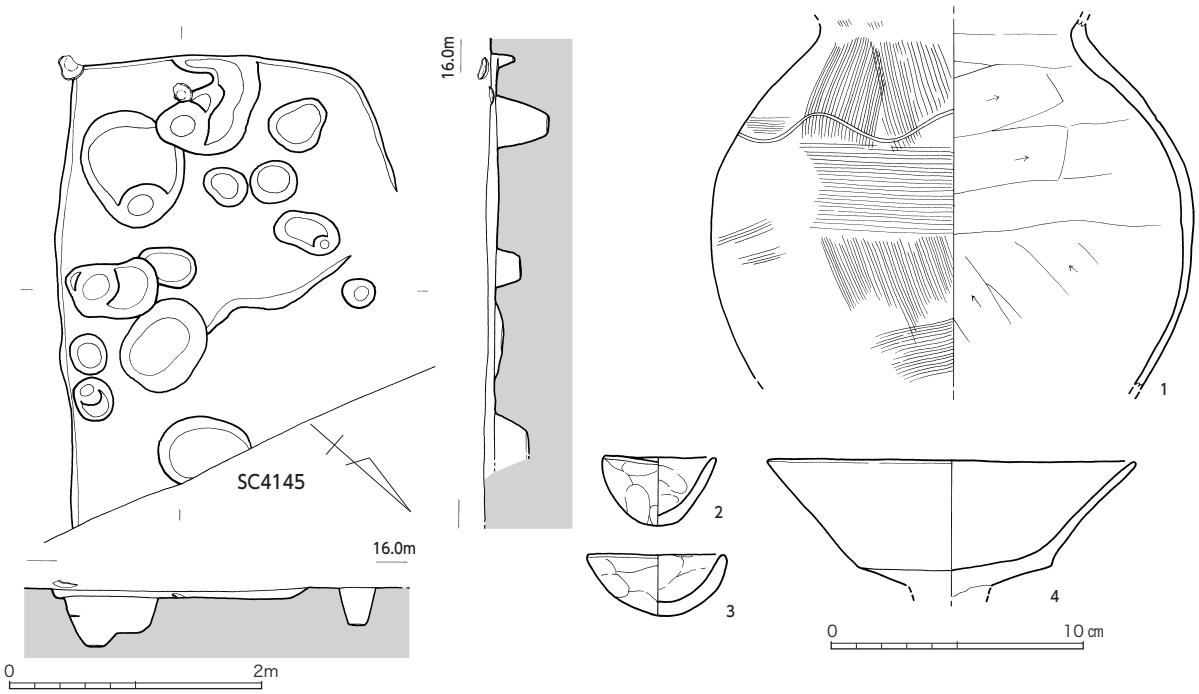


図 202　SC4145（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

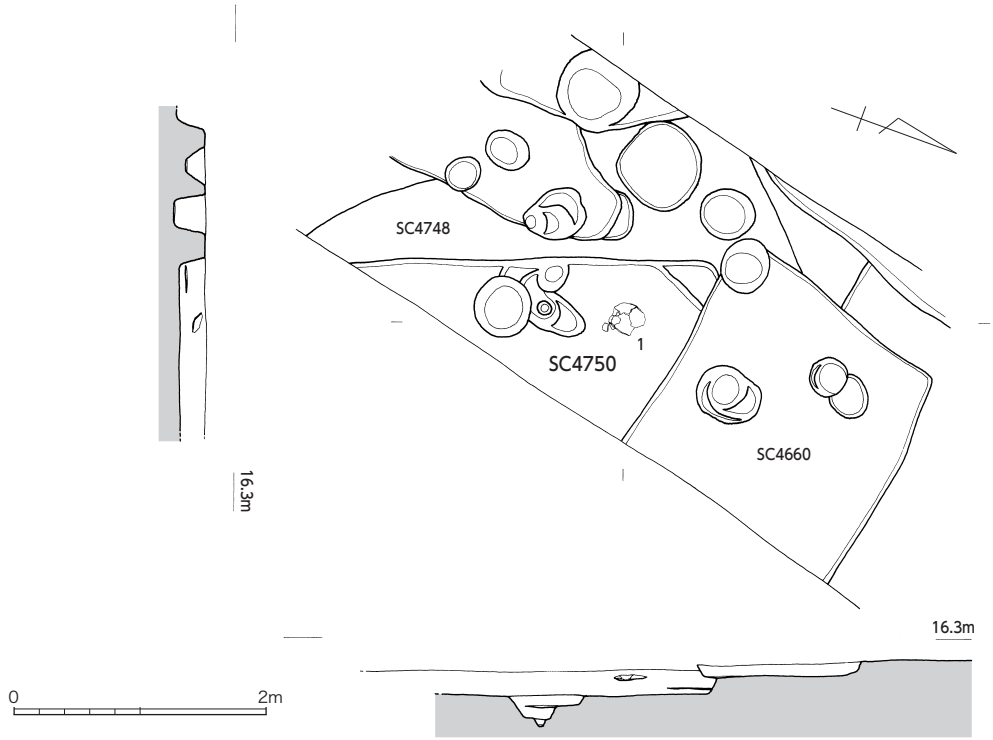


図 203　SC4750（S=1/60）

SC5364（図 205・206）No.83　方形プランで、東西軸長 4.3 m、南北軸長 3.6 m以上を測る。深さは 10 ～ 20㎝程度である。建物内に柱穴は複数あるが、主柱穴は不明確である。建物中央および北東側の床面付近で焼土を確認した。中央のまとまりは炉跡であろう。遺物は薄パンケース 4 箱分出土した。1 ～ 9 は丸底壺、10 ～ 17 は甕、18 ～ 25 は高坏、26 ～ 27 は鉢。

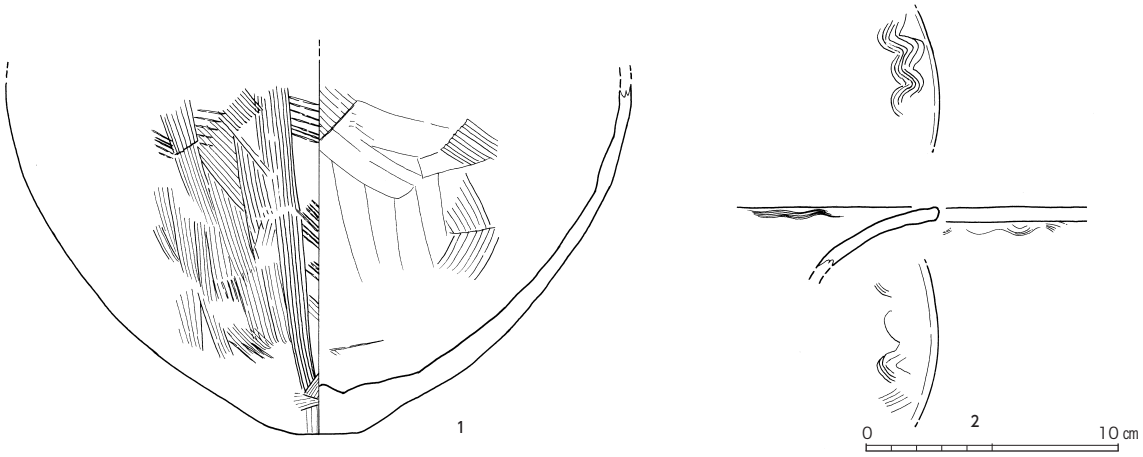
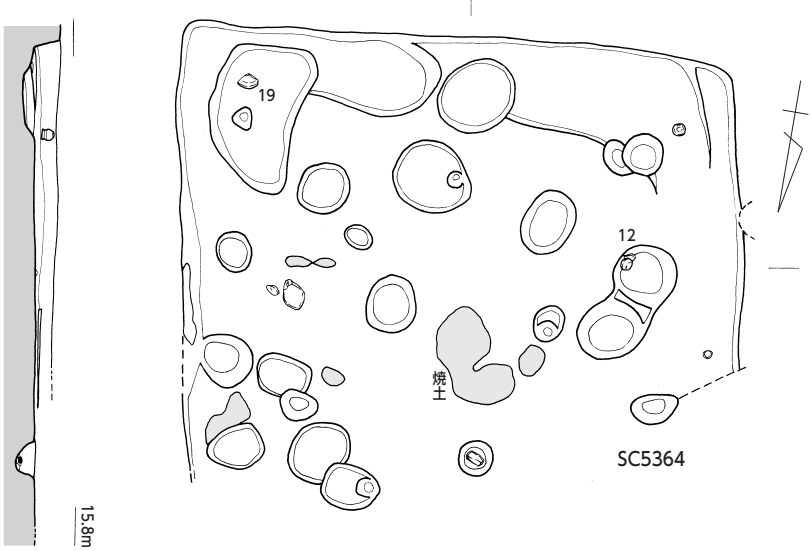


図 204　SC4750 出土遺物（S=1/3）



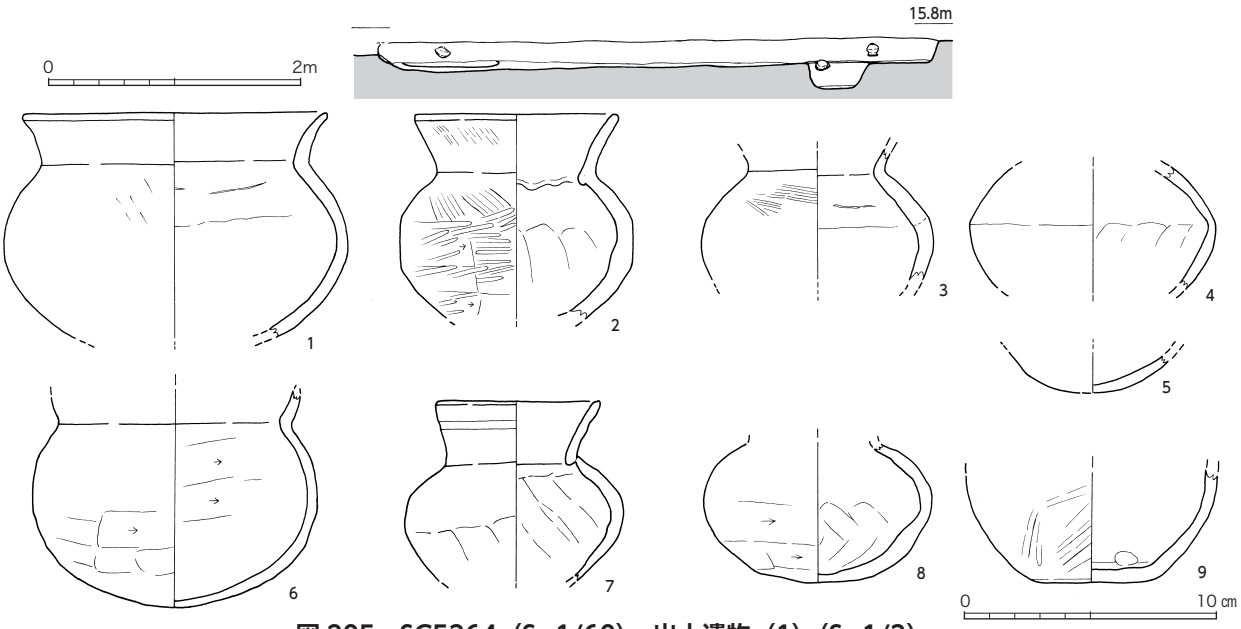


図 205　SC5364（S=1/60）・出土遺物（1）（S=1/3）

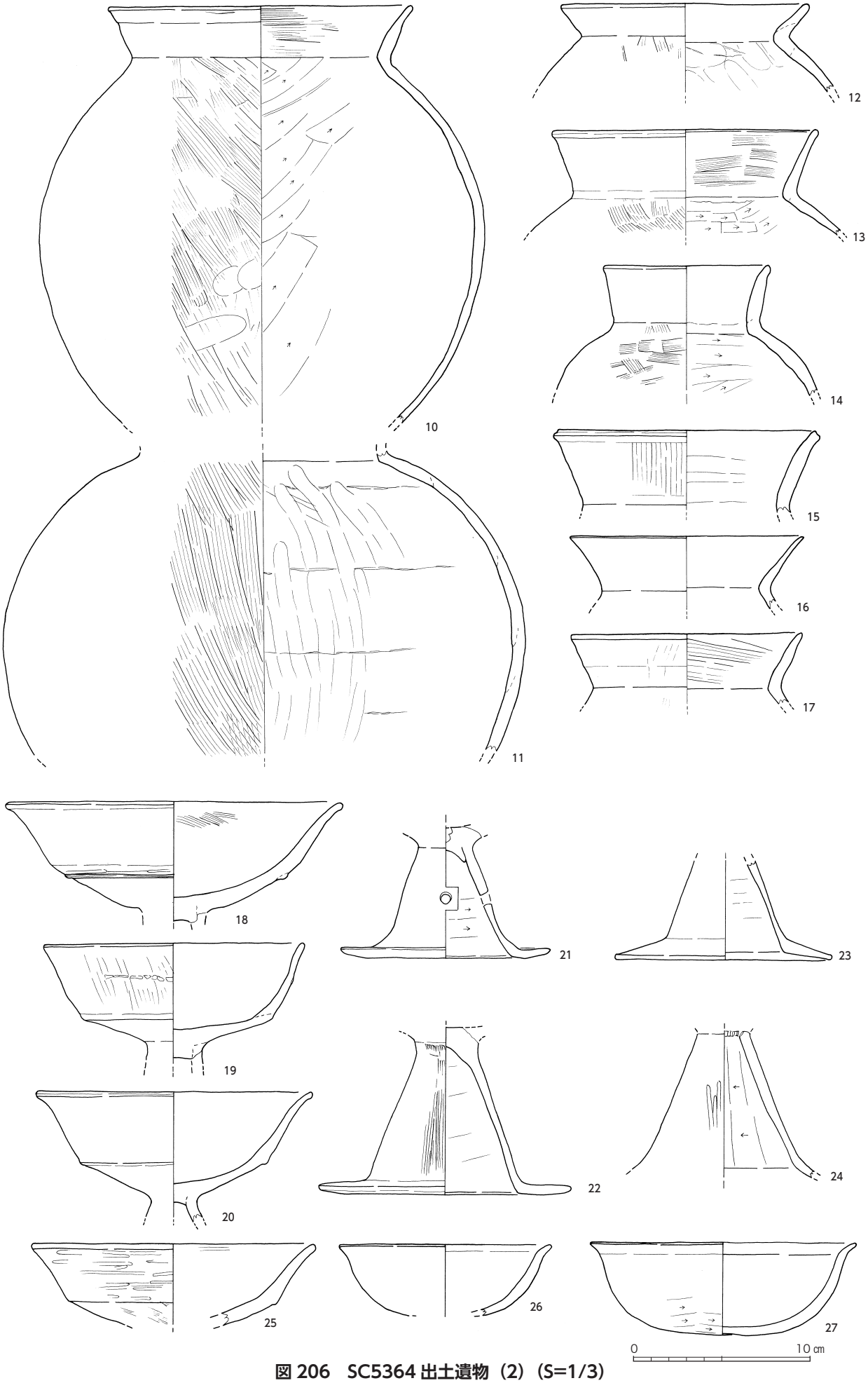


図 206　SC5364 出土遺物（2）（S=1/3）

2）古墳時代中期

SC148（図 207・208）No.3　一辺 450cmほどの方形の竪穴で、南側のプランは不確か。北東隅付近には壁溝が一部みられる。北東側は 10cmほど下げた時点で床に達したが、それより南は直線的なプランで 5cmほど下がる。プランが重なる円形建物など、または貼り床の埋土か。床面北西側では径 20cmほどの範囲が焼け、東側の中央部に薄く炭化物が広がる。床面で検出したピットは多いが伴うのか不明確。小壺 6 の下のピットは径 20cmほどの柱痕がある。埋土出土遺物は弥生中期の破片がほとんどで、その中に土師器が入りこれを中心に図示した。6 は床面出土。1 から 13 は土師器で 4 までは甕、5 から 8 は壺、9 は坏、10 は薄手の鉢、11 から 13 は高坏。14 は打ち欠きの土製円盤。埋土から鉄器片が出土。出土遺物から古墳時代前期後半から中期。

SC321（図 209・210）No.12　SC321 から SC322 にかけては遺物包含層が広がり、これを下げる過程で遺構を検出した。平面方形で東西 430cm、南北 460cm以上、520 以下。南端は SC322 との切り合いがわからず確認できていない。東南部は SK197 に切られ、SK314 と切り合う。SK314 の南の上端が SC321 の床より高く、南限となる。北側と東側の一部に壁溝がみられる。中央には炉 309 がある。80 × 90cmほどの円形で厚さ 5、6cmほどの炭化物が堆積し、底は赤く焼ける。柱穴は 320 と 342 が深く、4 本柱であれば相当するが、南側に展開しない。他のピットも深いものが多い。遺物は上部包含層と帰属が区別し難く、床面の土器をとりあげる。1、2 は「く」の字口縁の甕で 1 は内外面刷毛目調整、2 は指または工具での削り状のなで。他に複合口縁の破片がある。古墳時代中期か。

SC402（図 211-216）No.13　包含層 254 の掘削中に形を保つ土師器が密集して出土し、これを中心に方形のプランを確認した。SC322 を切る。平面は 3.1 × 3.0m ほど、深さ 30cmが残る。中央を試

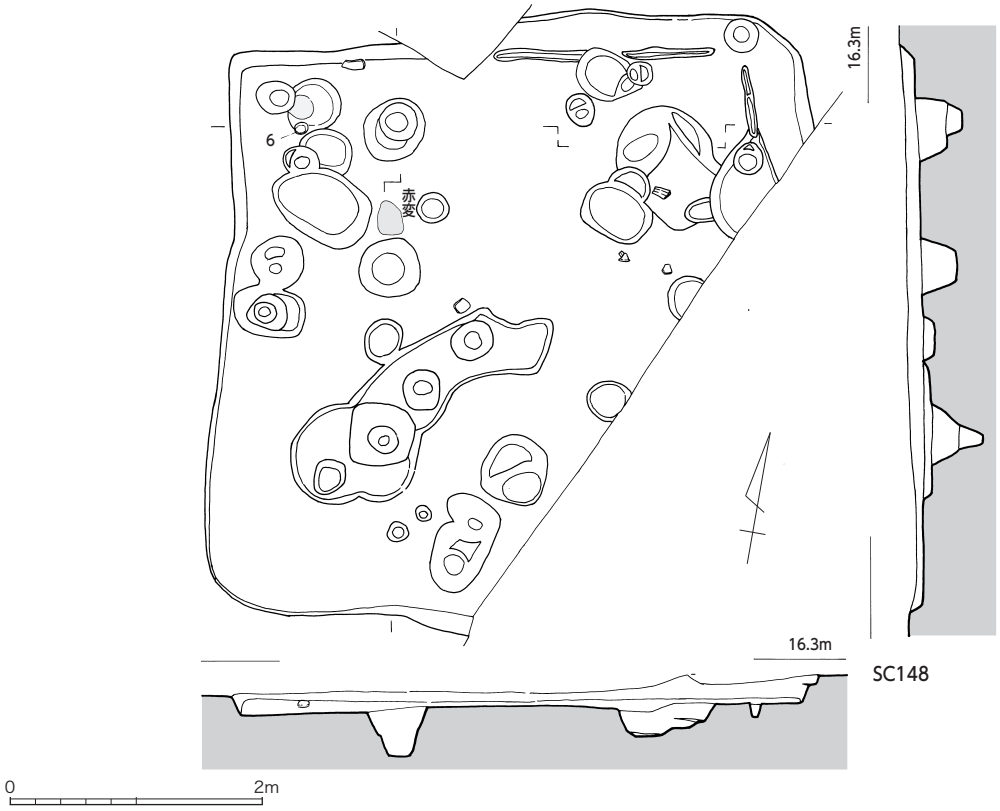


図 207　SC148（S=1/60）

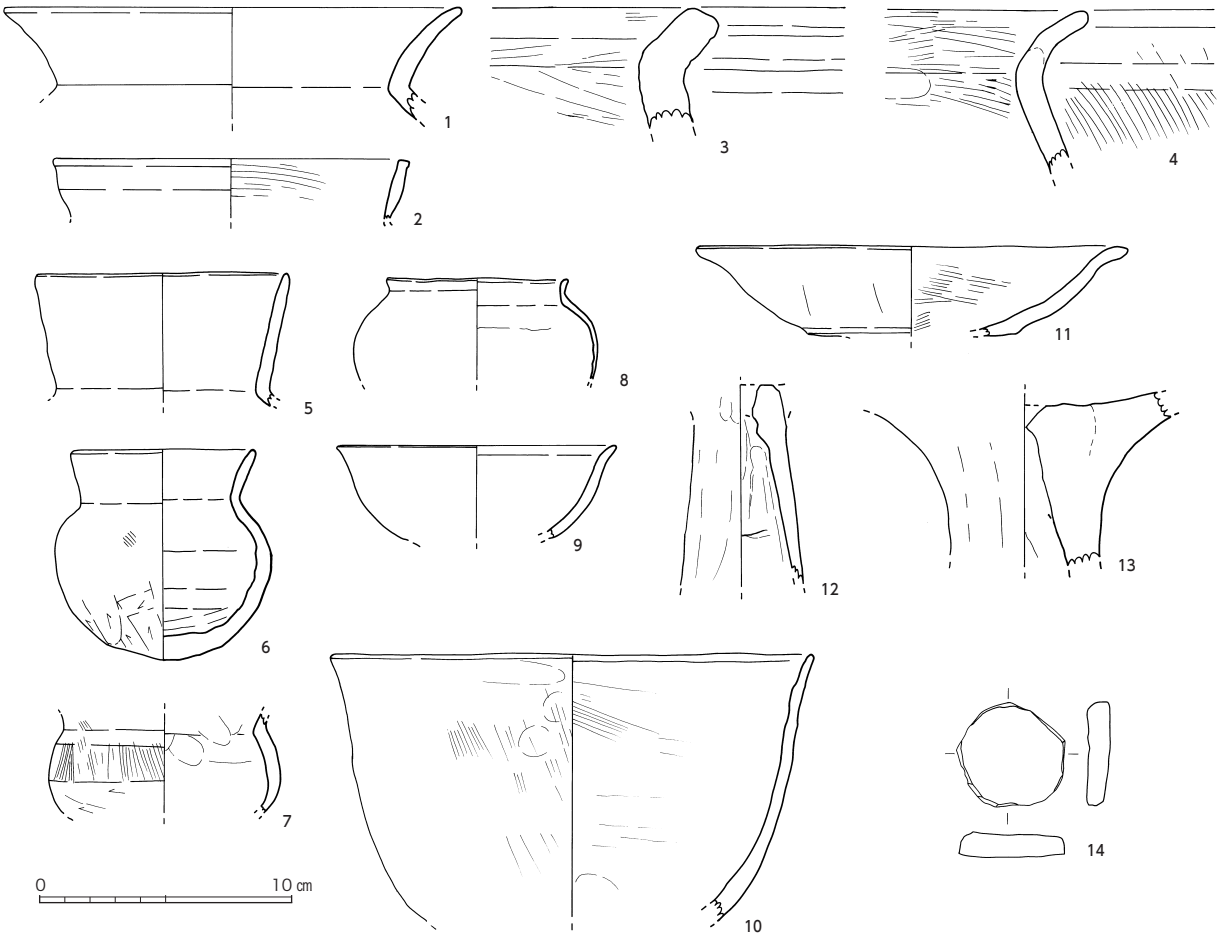


図 208　SC148 出土遺物（S=1/3）

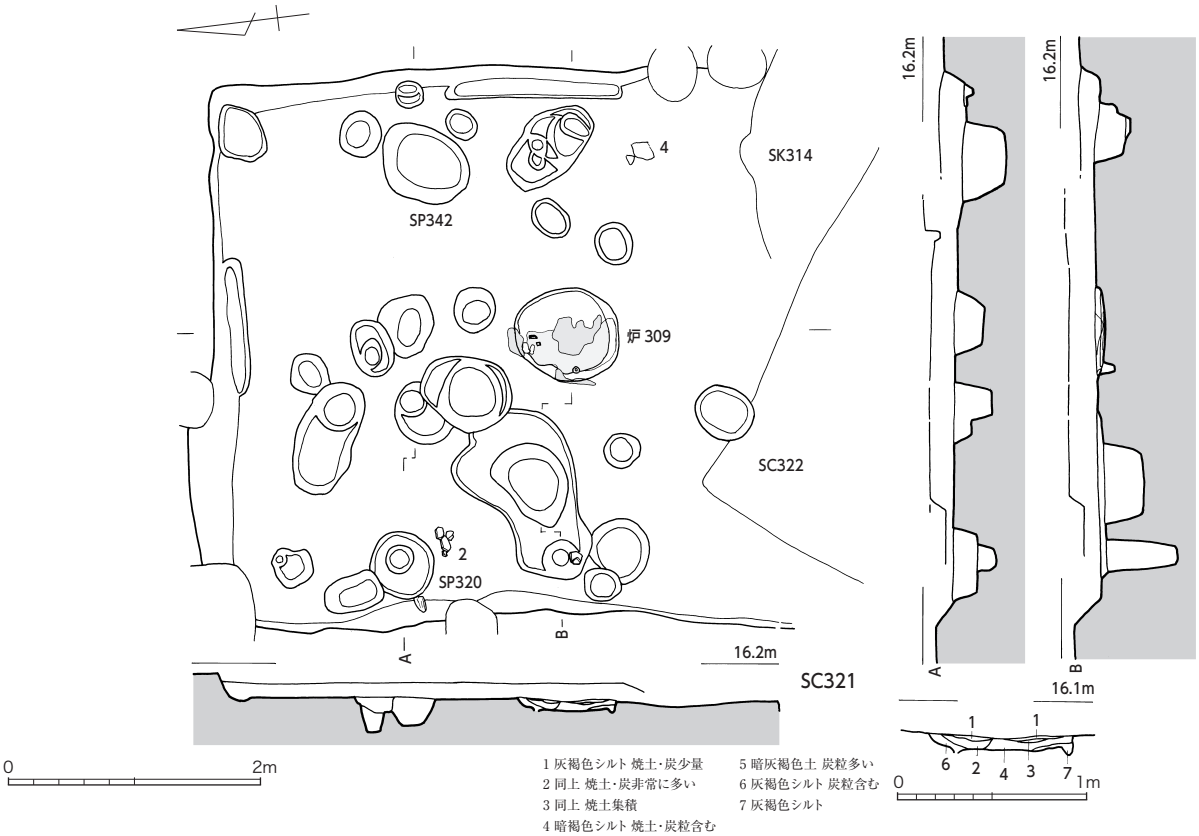


図 209　SC321（S=1/60）・炉（S=1/40）

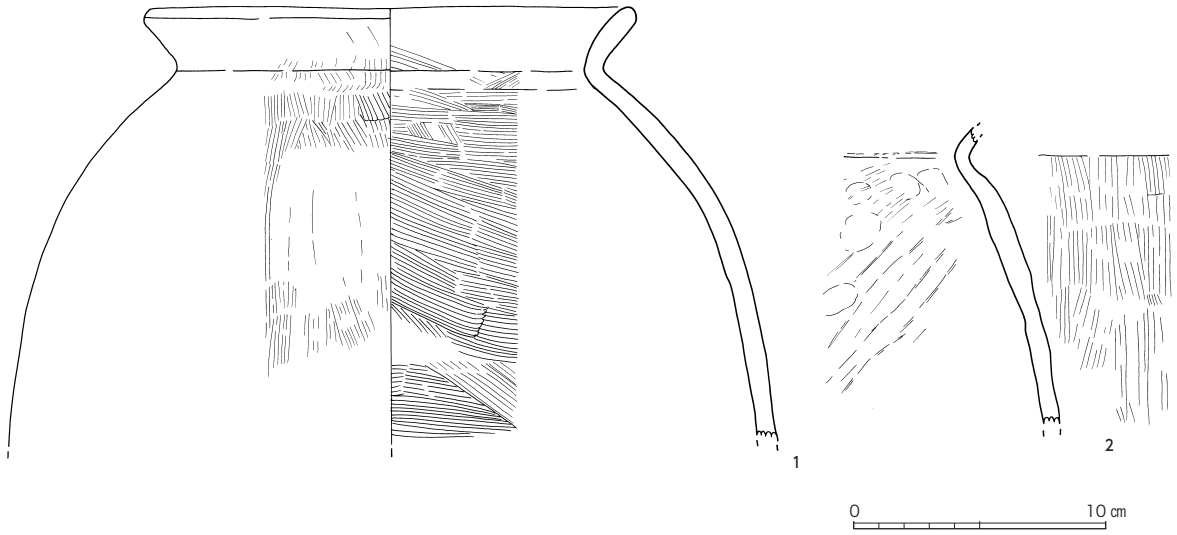


図 210　SC321 出土遺物（S=1/3）

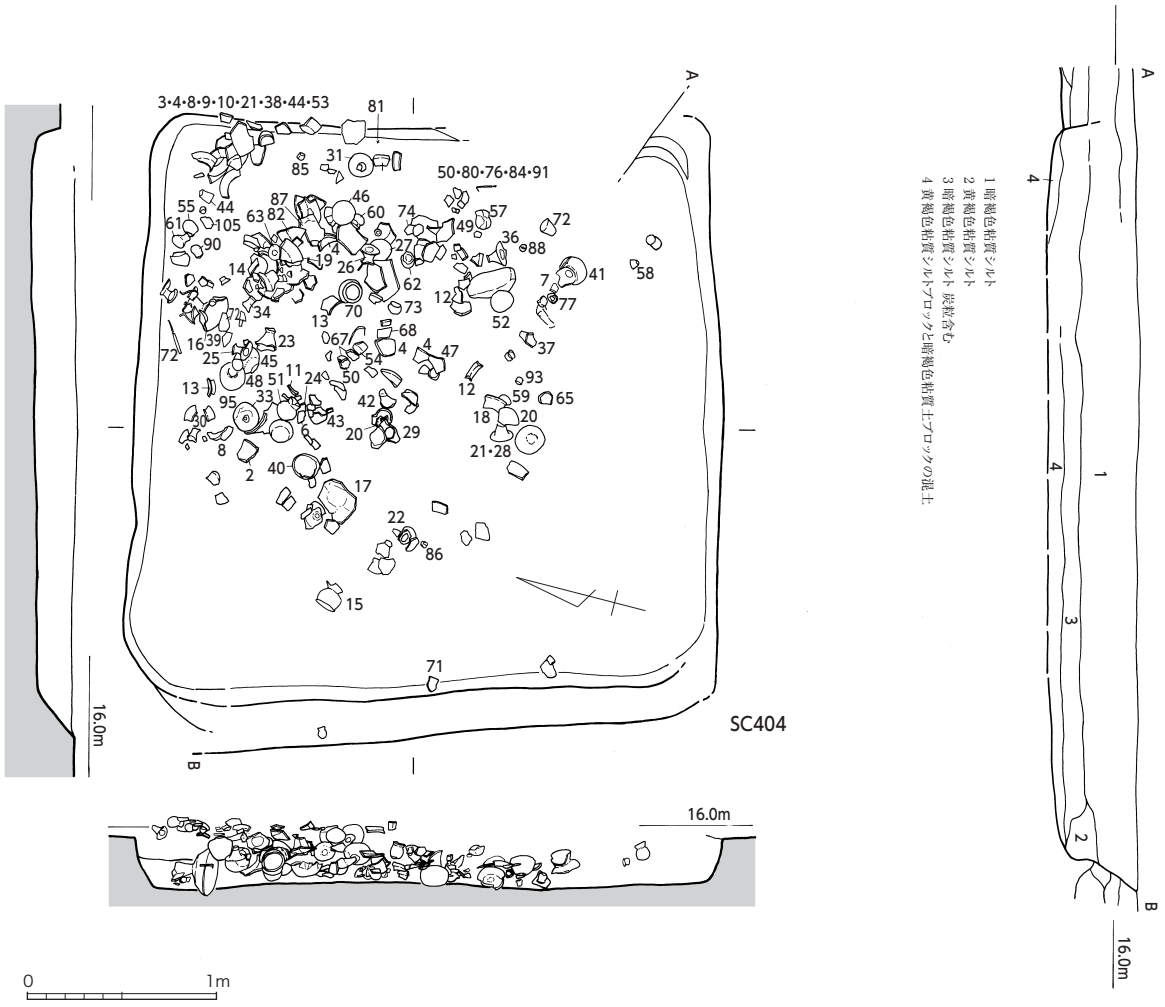


図 211　SC402（S=1/40）

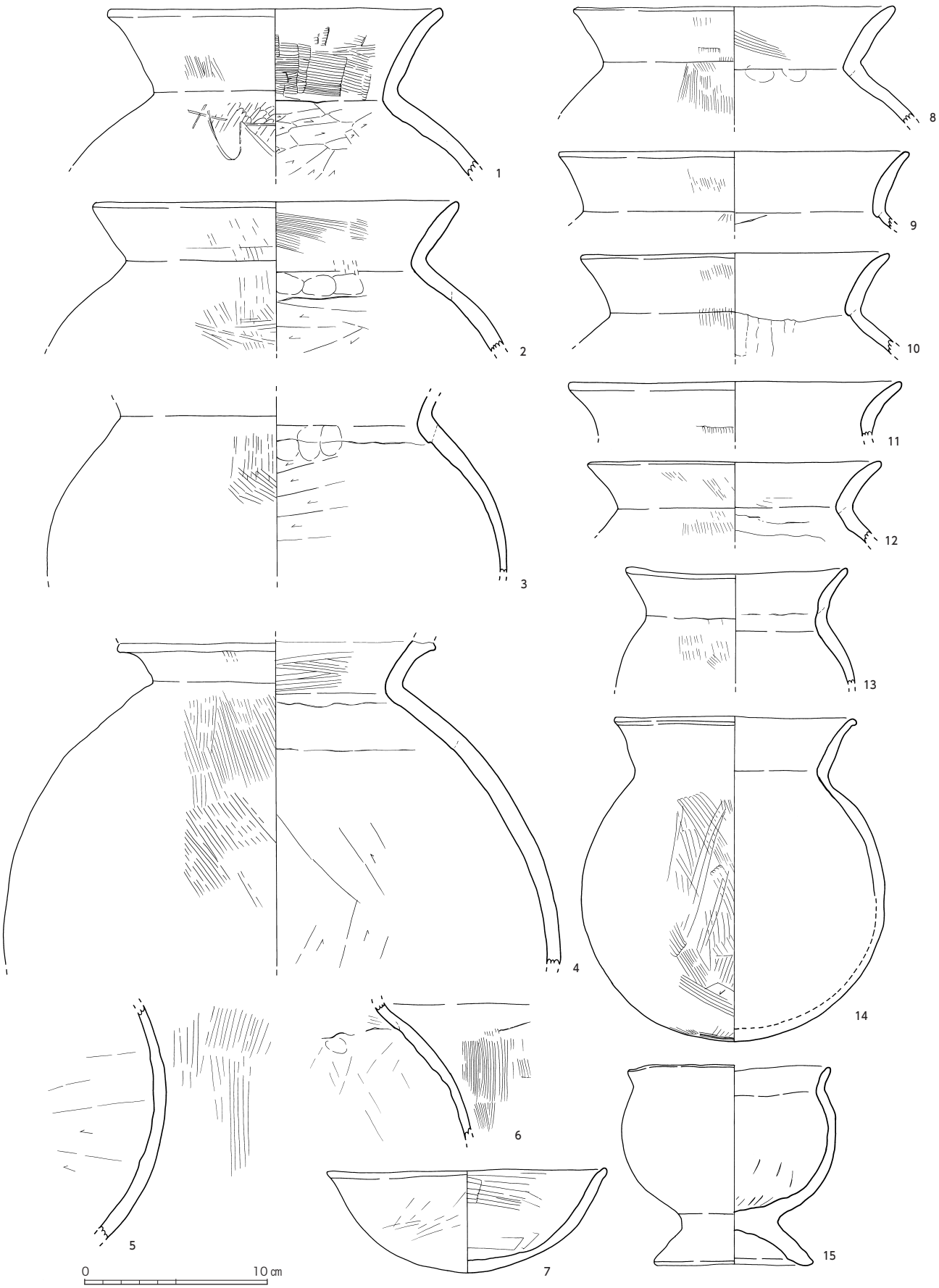


図 212　SC402 出土遺物（1）（S=1/3）

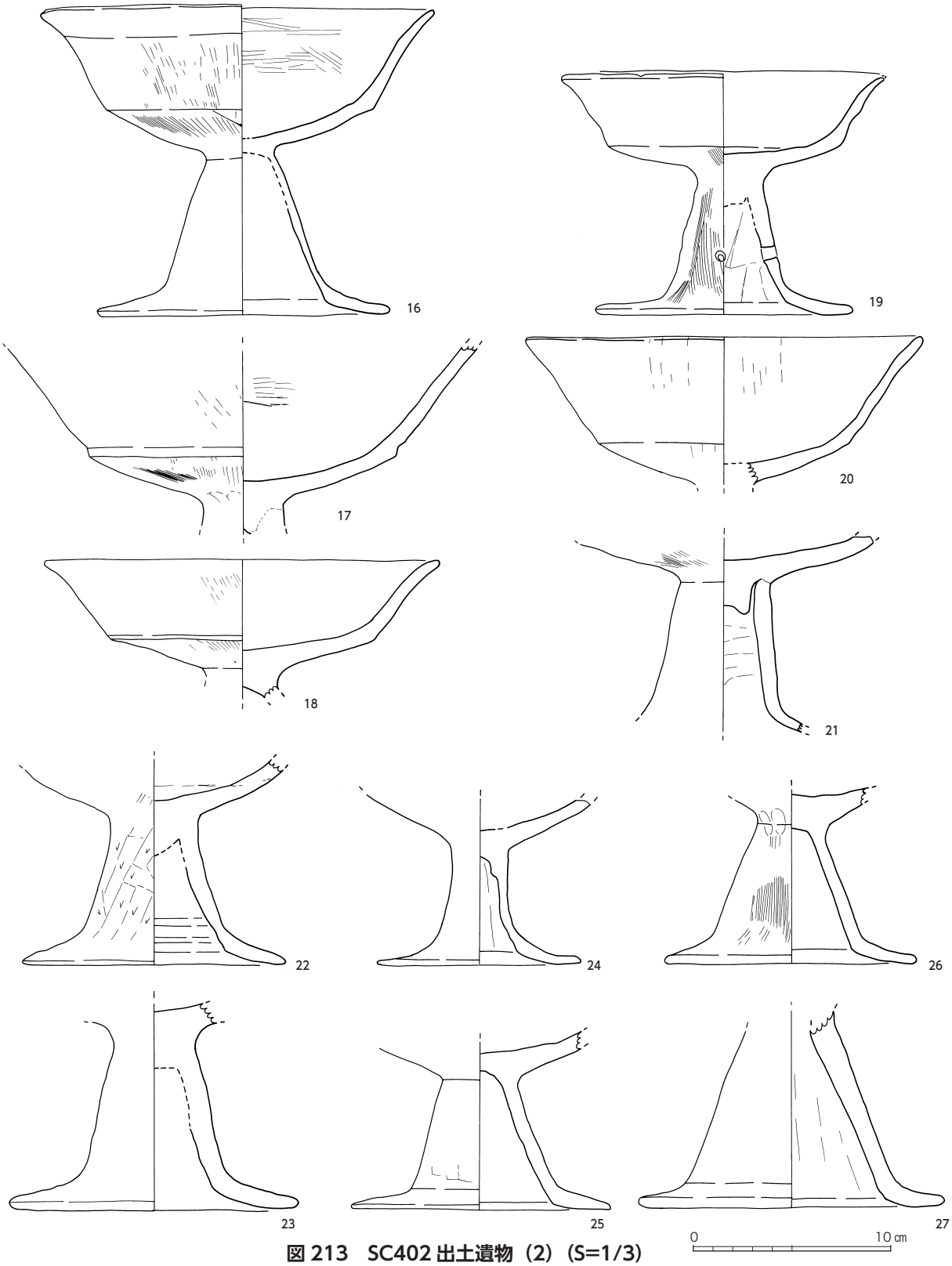


図 213　SC402 出土遺物（2）（S=1/3）

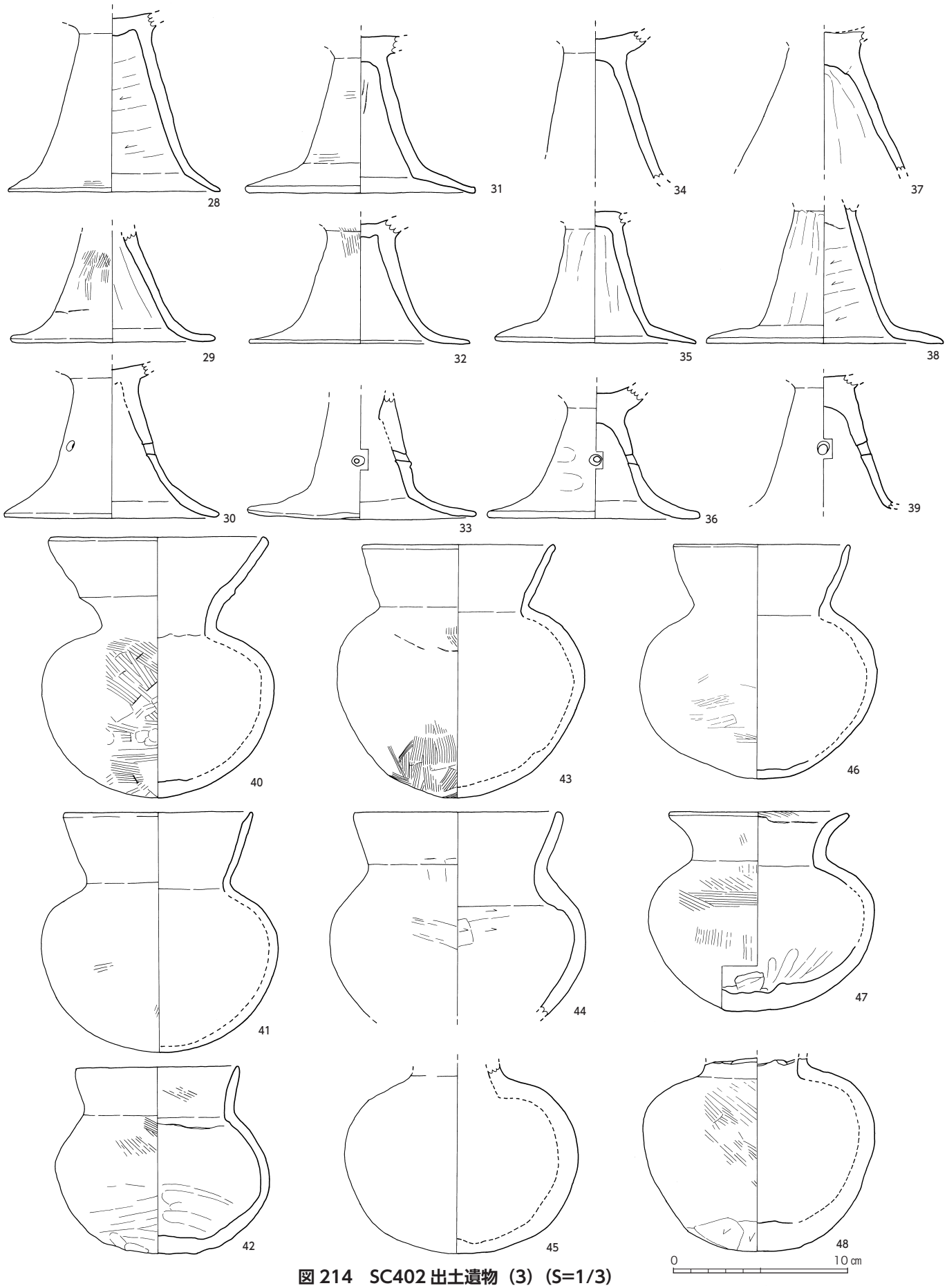


図 214　SC402 出土遺物（3）（S=1/3）

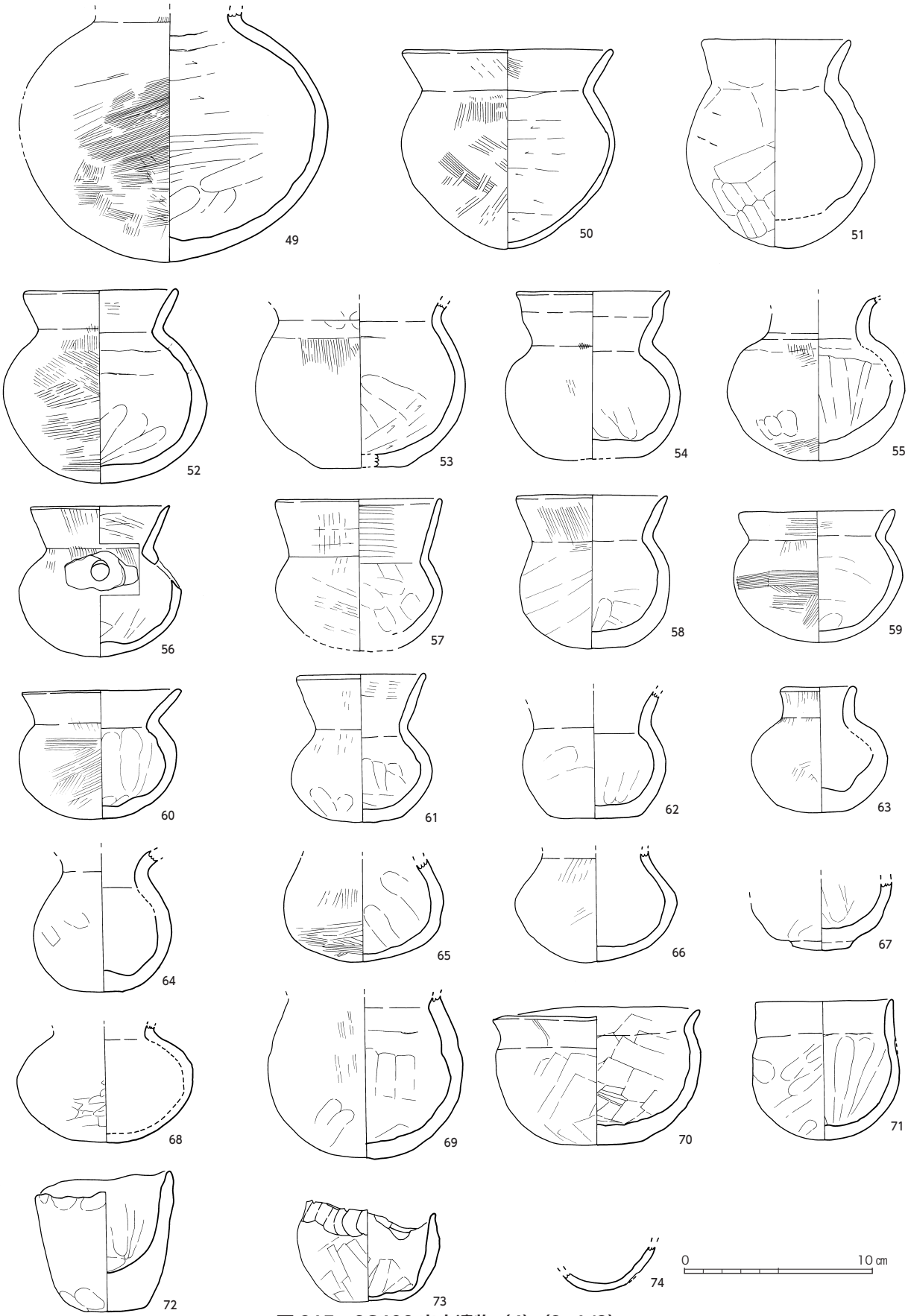


図 215　SC402 出土遺物（4）（S=1/3）

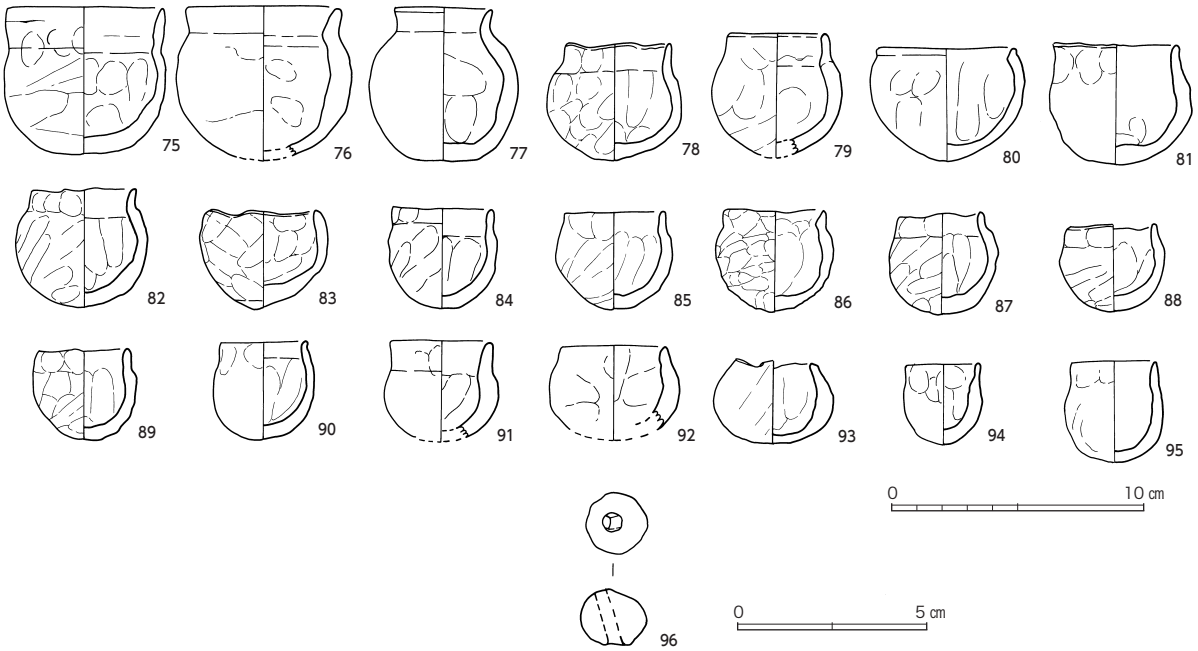


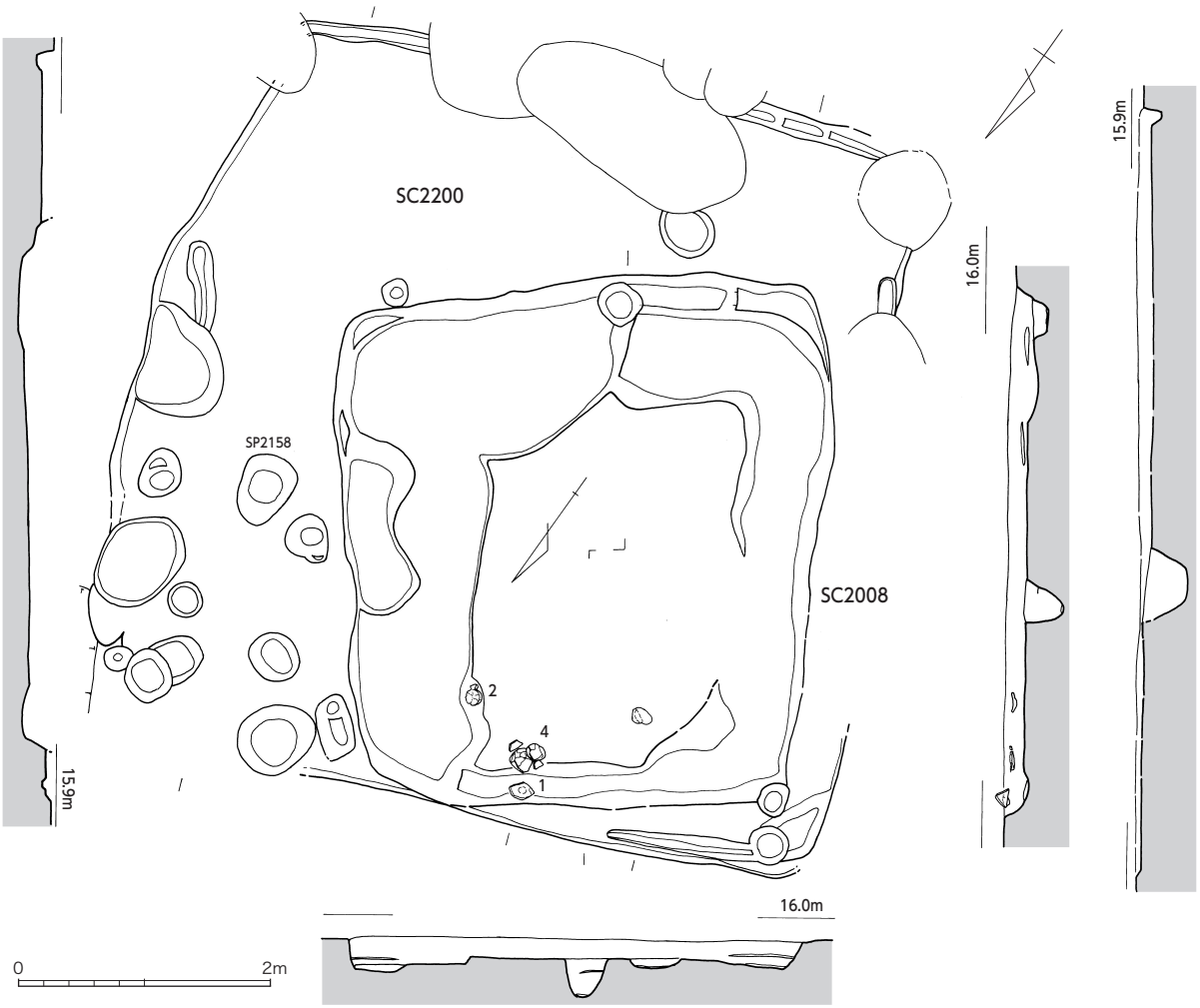
図 216　SC402 出土遺物（5）（S=1/3・S=1/2）

掘トレンチが横断し、この断面では深さ 45cmほどが確認できる。埋土は暗褐色粘質シルトで下部には黄色土ブロックが入る。床面はやや凹凸があるが、ピット等の遺構は見られない。遺物は中央北東寄りの 240 × 220cmの範囲に集中する。床に接するものから 15cmほど浮くものがある。遺物は正置、倒置、横倒しなど様々である。甕、高坏、壺、小型壺、ミニチュアの壺と鉢がそれぞれ同じ形態のものが多くあり、これに坏、台付き鉢がわずかにみられる。小壺に完形が多く、高坏は脚部のみが半数以上である。甕は 1 個体になるものが見られない。土玉 96 と滑石製臼玉（図 261-5）、厚さ 6mmほどの鉄片が出土している。竪穴建物の項で取り上げたが、床にピットなどの施設が見られず、別の機能をなす遺構であろう。古墳時代中期。

SC2008・SC2200（図 217）No.17　SC2008 は平面方形プランの竪穴で 2.6 m × 2.8 m、深さ 22 cmほどが残る。壁際は浅くくぼみ、その幅は 115cmから 80cmと不揃いである。床面のピットは少なく主柱穴と判断できるものはない。遺物は北側でまとまった出土があったが、床からは浮いている。1 は高坏、2 は壺、3 は手捏の小型品、4 は甕か。古墳時代中期。

SC2200　SC2008 の周りを囲むような竪穴で平面 6 × 5.7 mほどの不整方形を呈し、深さは最大で 13 cmと SC2008 より浅い。浅い箇所は 3、4cmほどでプランも不確実である。SC2008 に切られ、他にも SK2151、1944、1936 などの土坑から切られる。南東壁、北西壁に壁溝を確認し、不確かであるが竪穴建物とした。また竪穴の切り合いの可能性も残る。ピットはあるが主柱穴は不明。埋土からの遺物は須玖式を中心とし後期以降を含む。5 は SP2158 出土の高坏。6、7 は埋土出土で甕の口縁部と口縁下に円形浮紋を付す二重口縁壺。5 が伴うものであれば古墳時代以降か。

SC2013（図 218-220）No.8　調査区南西端に位置する方形の竪穴建物で、南西端は調査区外へ広がり、南東側は表土掘削時の掘り過ぎでプラン不明。東西 6.5 m、南北 5.5 m以上の規模と考えられる。南壁際に東西方向の落ちがあり、a-b 断面に見られるように浅いくぼみ状をなす。壁溝は一部途切れながらも確認した。西壁際は南壁まで溝が延びるが東側は北壁から 4.4 mで西へ屈曲し、60cmほどのベッド状遺構がみられ、その内側も平行する溝がみられる。SP2137 の東にも一部東西方向の壁溝状



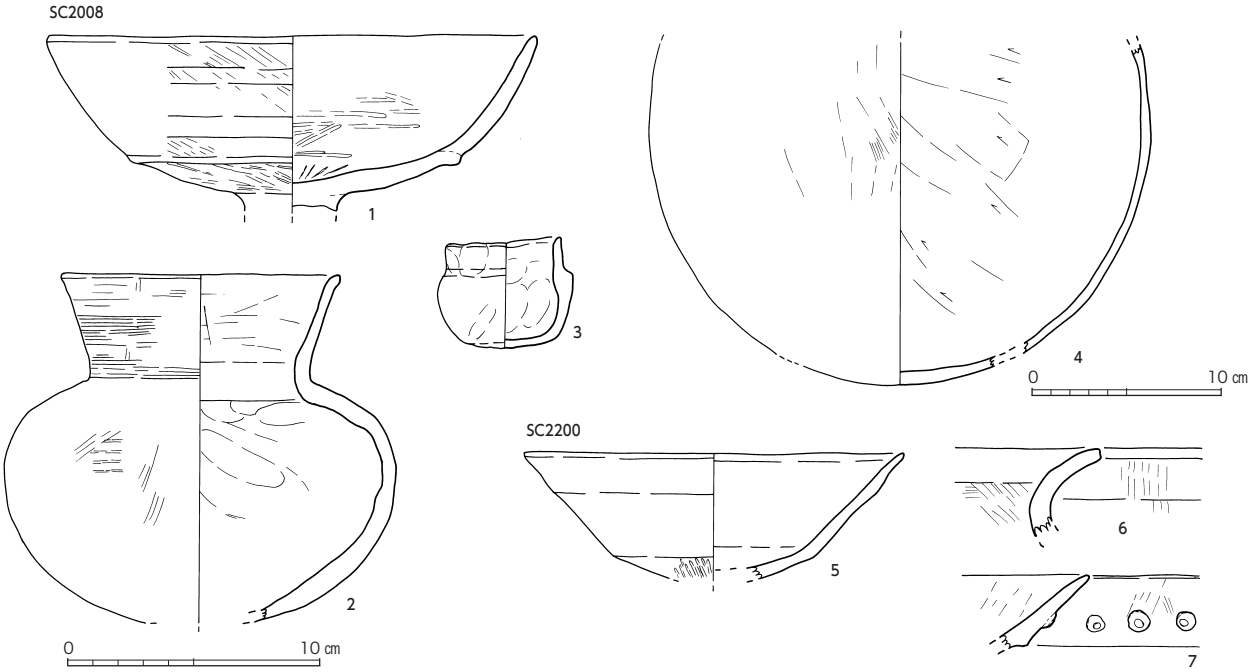


図 217　SC2008・SC2200（S=1/60）・出土遺物（S=1/3・S=1/4）

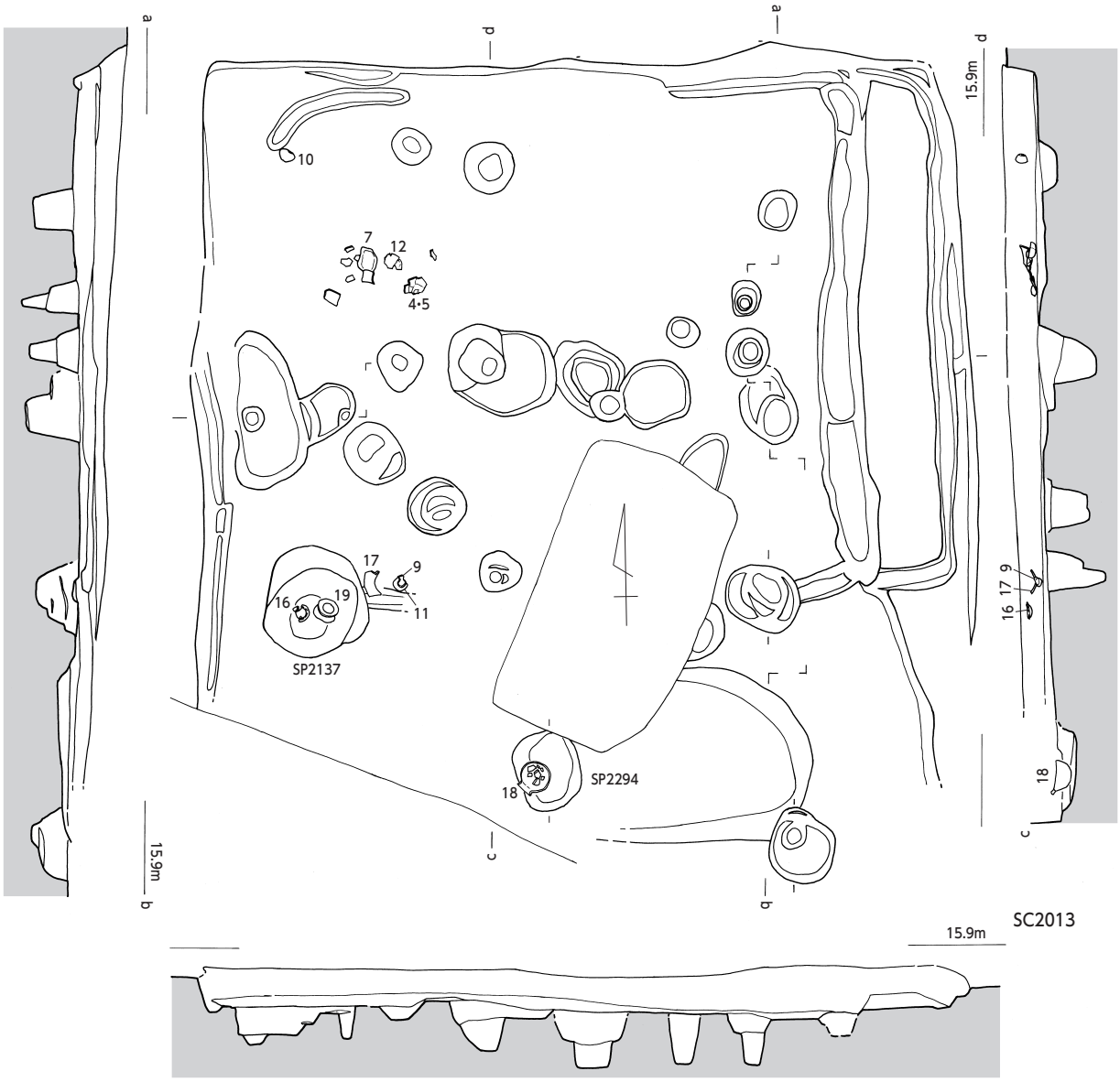


図 218　SC2013（S=1/60）218

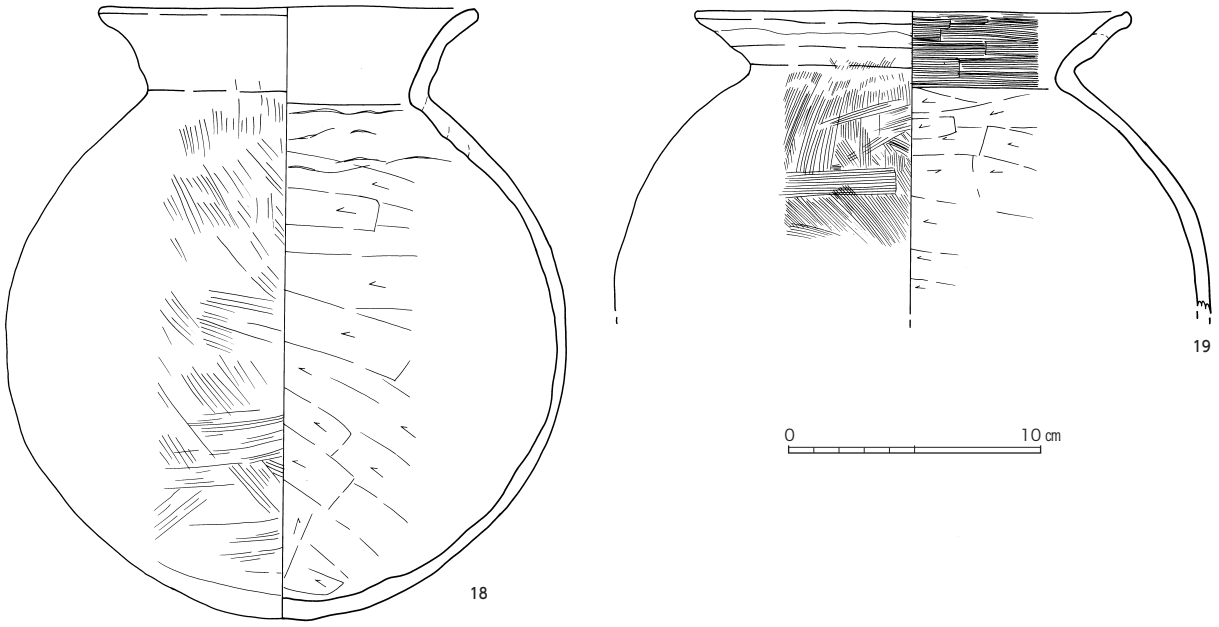


図 219　SP2294・SP2137 出土遺物（S=1/3）

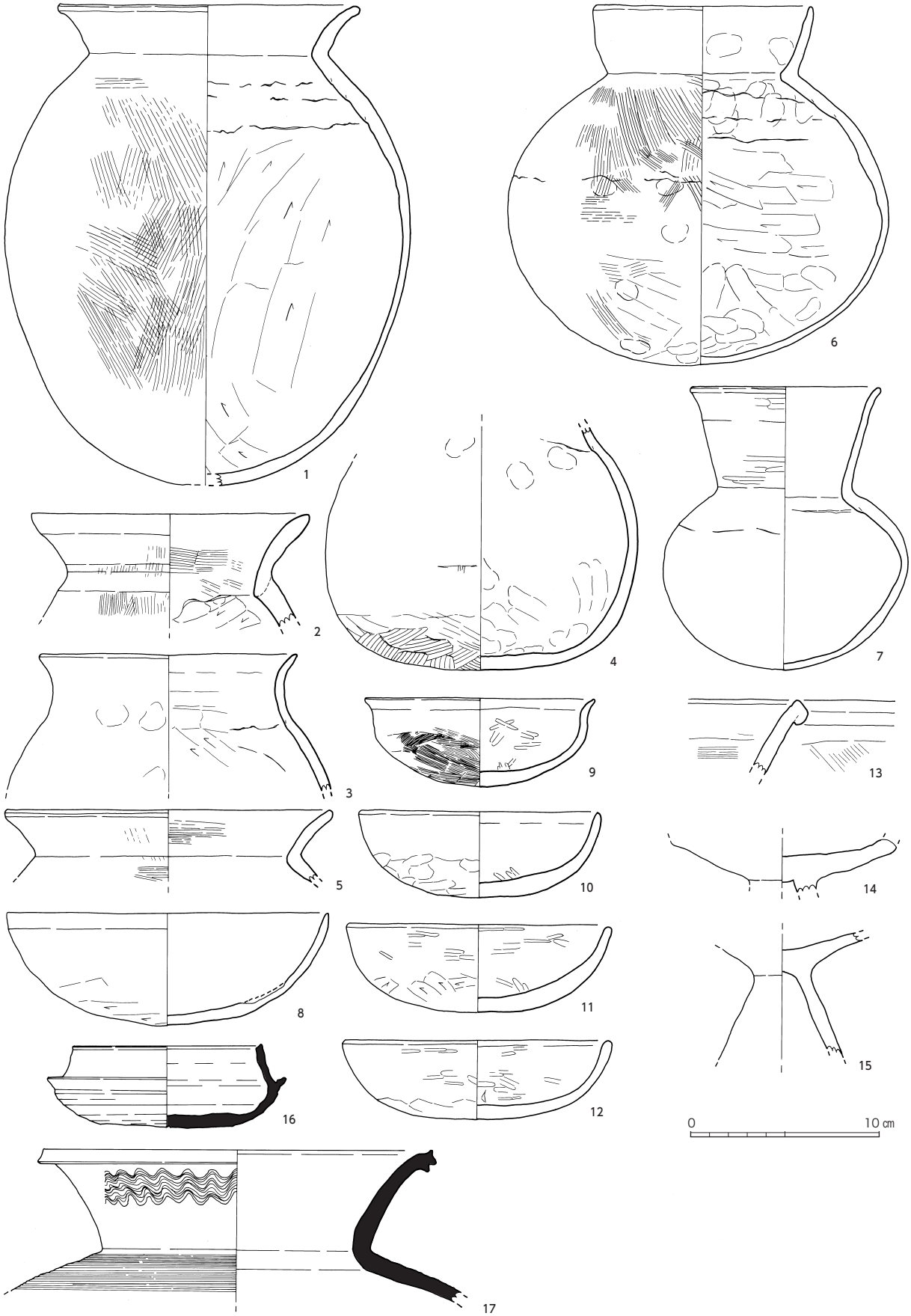


図 220　SC2013 出土遺物（S=1/3）

を確認しており、南側にベッドがあった可能性もある。床面は東側は５～10cmほど低い。埋土は暗褐色土で水気を含む。ピットを多く確認したが主柱穴の配置ははっきりしない。床面で北西、南西側で遺物が出土している。南側のからはSP2137で甕上半の19が正立し、SP2294からは甕18が横に倒れた状態で出土した。埋土の遺物は須玖式の甕が目立ち袋状口縁壺、前期甕もあるが、床面近く、西側の北、南に古墳中期の遺物が出土した。北側は床面直上に近いが、南側は10～15cm浮く。１から15は土師器。1から5は甕で外面刷毛目、内面削り調整。3、4は同一個体で外面をなで仕上げ。6、7は壺。8から12は坏。13は土師質の甕、14、15は高坏。16、17は須恵器の坏身と甕。16は口唇部の段が明瞭で、17は頸部に波状紋、肩部は叩きのあとに掻目を施す。18、19はピット出土の甕。床面、ピットの遺物から古墳時代中期。

SC3820（図221-223）No.47　方形プランで東側は反転前の調査区際で掘り過ぎてプランを確認できていない。SC3300を切る。埋土は黒褐色土でSC3300より黒色が強いが区別し難い。南北は４ｍ、東西は５ｍほどで壁は５～7cmが残る。南側を除いた壁際に幅50cmから80cmのベッド状遺構が巡り、内側との比高差は5cmから8cmである。ベッド状内隅のピット４基が主柱穴と考えられる床面は北側、南側でやや掘り過ぎている。東側中央には支石の上に甕が正置された状態で出土し、その西側に接する床面には径35cmほどの焼土面があり、その上には炭混じり層、黄色粘土が見られた。カマドの構造が残っていたものと考えられる。これに気づかず掘削した。床面近くでは遺物が残り、つぶれた状態のものがある。いずれも６～10cmほど床面から浮いており、貼床を飛ばしている可能性がある。遺物は床面近くの物を中心に示す。3はカマドの支石上で出土した甕の下半で、この中から坏1、底部2が出土した。4から9、12、13はベッド状内出土。4は壺で横に倒れて、5は甕で北西隅につぶれて、甕6は中央部、8は西側で倒立で出土した。9は坏で外面に刷毛目工具痕が残る。10はベッド上出土の坏で磨研痕が残る。12、13は小型の壺型で12は外面に工具痕があるが、13は手捏ねで成形する。17以下は埋土出土。16、17は小型の鉢、18、19は手捏ね成形。20は底に径3cmほどの孔がある底で胎土が細かい。21、22は甑で同一個体と考えられる。22は滑石製の方柱状石製品。他に埋土中には鉄斧（図263-4）、滑石未製品（図261-22）、布留甕片、須恵器片少量などがあり、須玖Ⅰ式片が多い。古墳時代中期。

SC4140（図224）No.48　方形プランで、4.7×5.2ｍ、深さ10cmを測る。西壁、南壁の一部に壁溝が巡る。主柱穴は不確かである。個別に取り上げた遺物は、２の土師器甕は床面からだが、それ以外は床面から10cm前後浮いている。遺物は、薄パンケース３箱分出土した。１～３は土師器甕、４は高坏、５は丸底壺である。出土遺物には、古墳後期の須恵器甕片や、土師器鉢片を含む。新しい遺物は別遺構からの混ざりこみか。古墳時代中期。

3）古墳時代後期

SC970（図225-227）No.33　一辺４～4.2ｍを測る。検出面から深さ10cm前後で、暗黄褐色シルト土の貼床となる。建物北東側、南西隅に土師器甕・鉢を主とする土器が集中する。また、床面南西隅付近に炭のまとまりがある。主柱穴は４本で、貼床上面で検出した。北壁中央にはカマドを配置する。天井部は削平により残っていないが、袖部はかろうじて残る。暗灰黄色シルト土を構築土とする。支脚は自然石で、表面に被熱がみられる。カマド付近から西壁・東壁にかけて幅40～70cm、深さ10cm弱の溝を巡らせる。検出面から深さ30cm程度で掘方の底面となる。1～9は土師器で、1～6は鉢、7は手捏ね土器鉢、8・9は甕、10は須恵器坏身である。埋土から刀子片が出土。古墳時代後期前半。

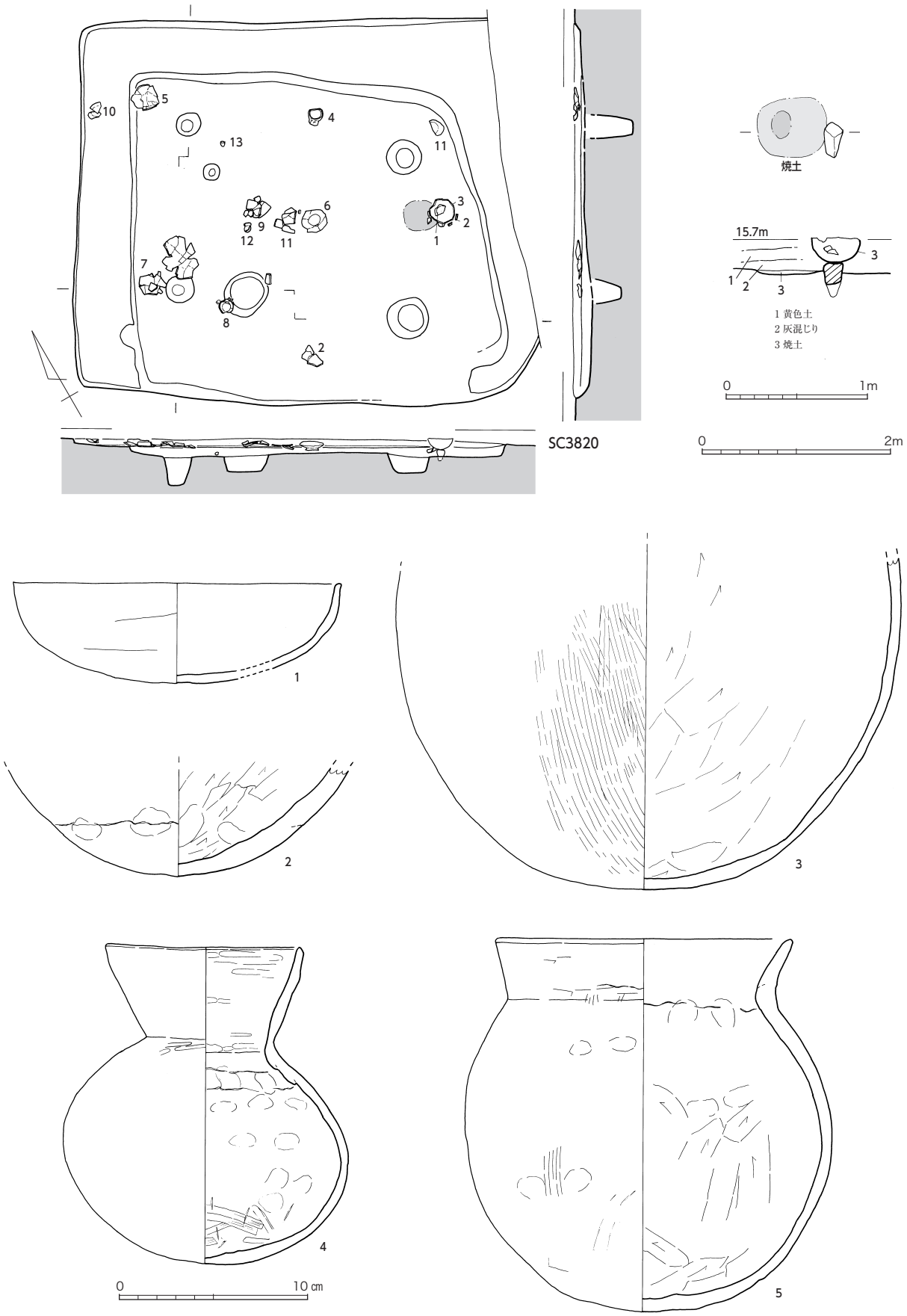


図 221　SC3820（S=1/60）・炉（S=1/30）・出土遺物（1）（S=1/3）

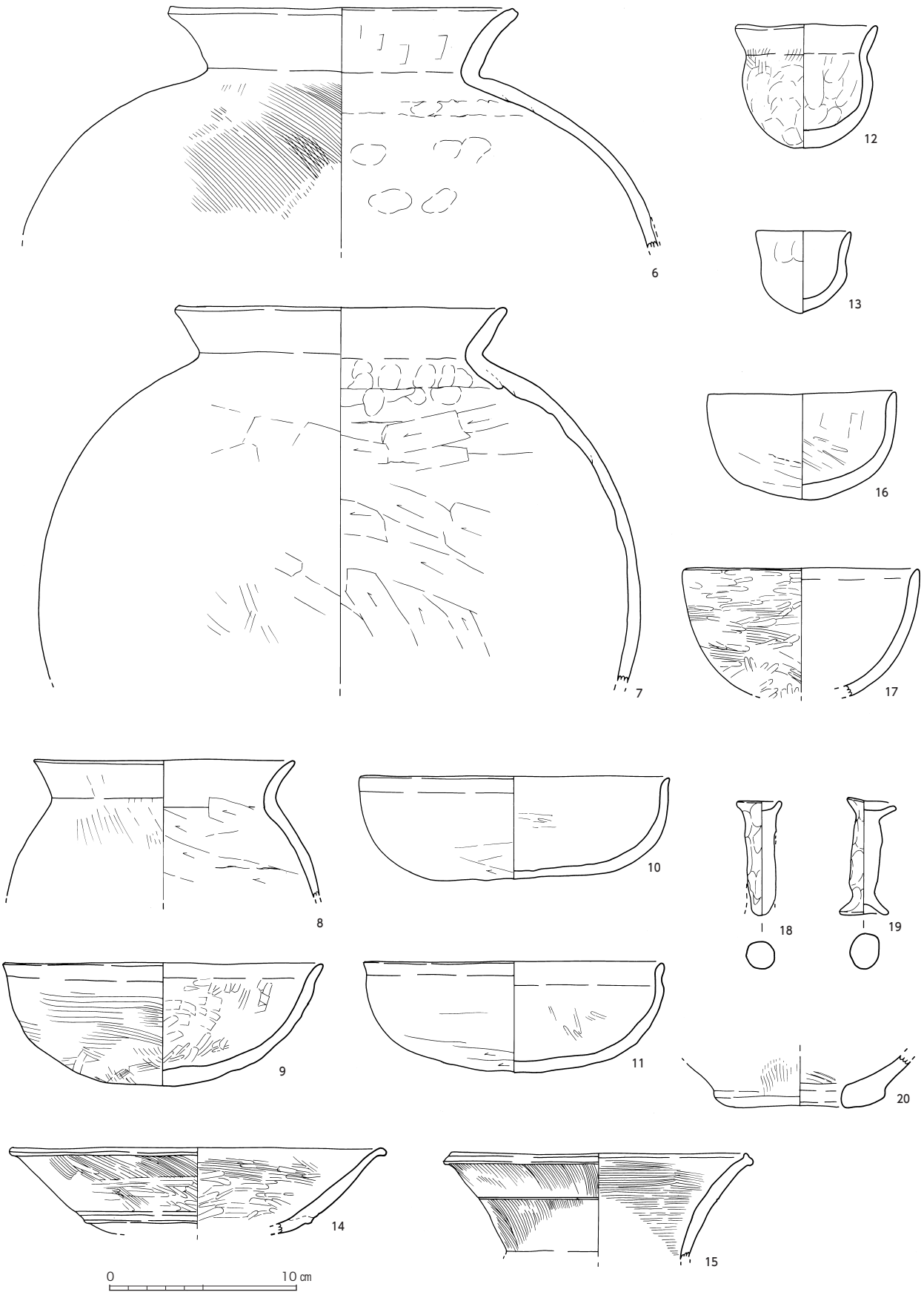


図 222　SC3820 出土遺物（2）（S=1/3）

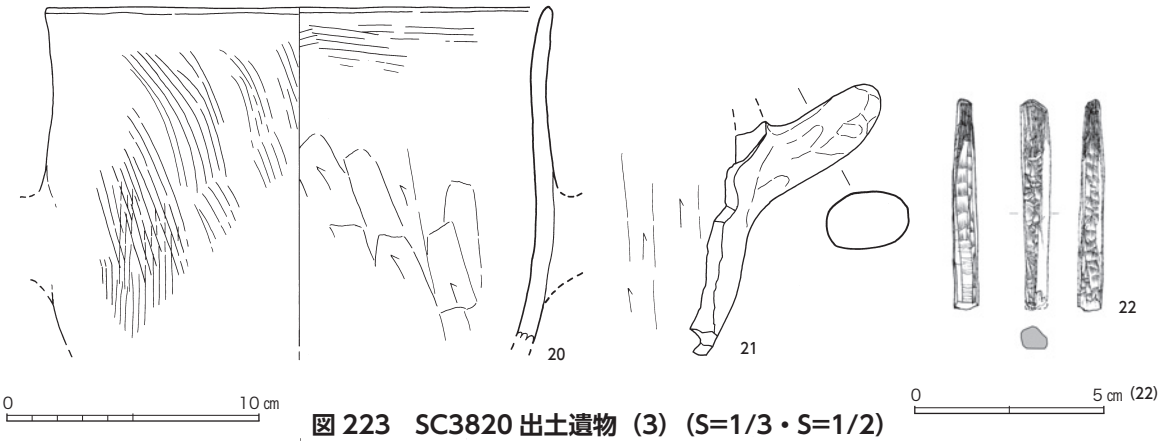


図 223　SC3820 出土遺物（3）（S=1/3・S=1/2）

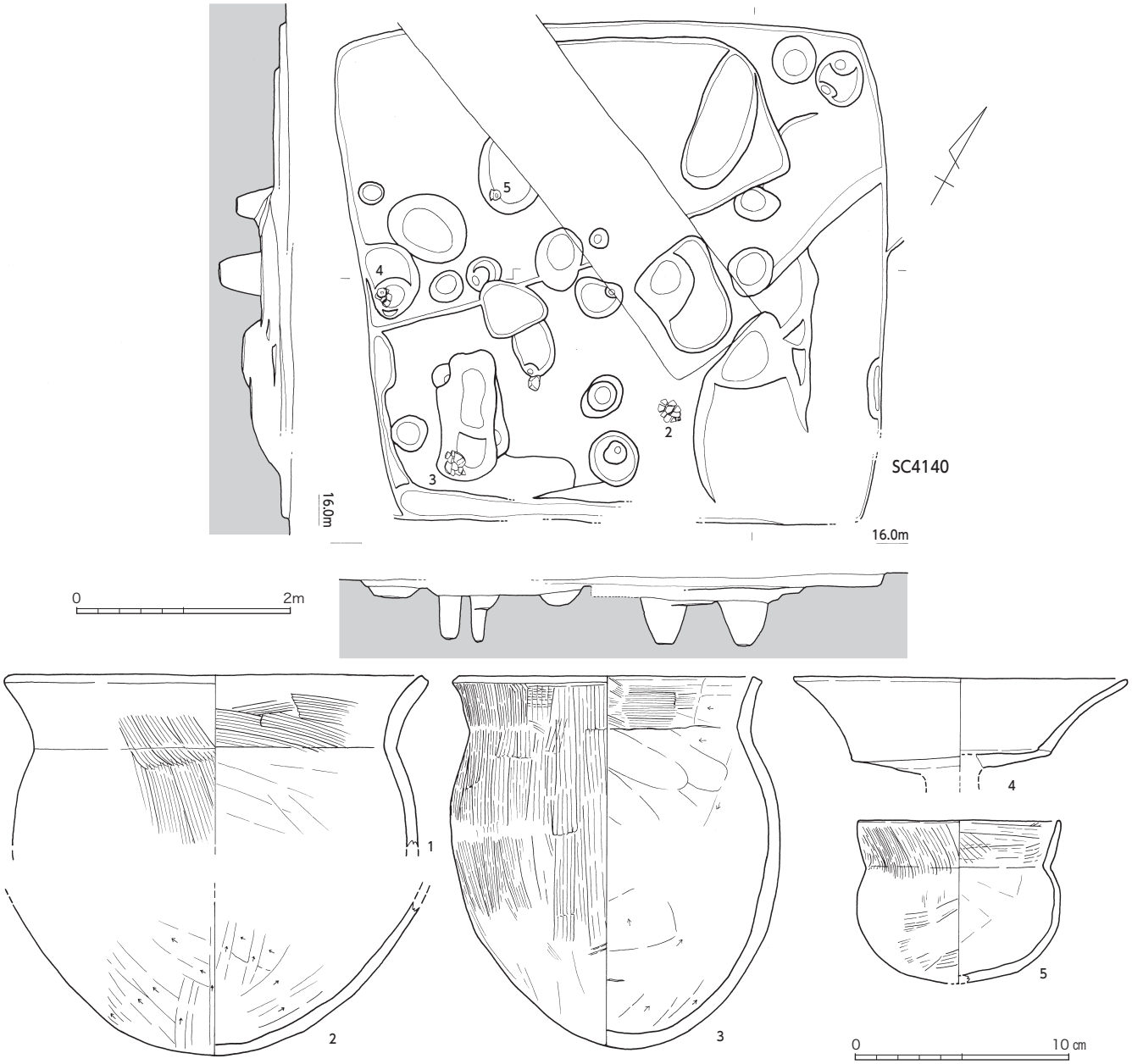


図 224　SC4140（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

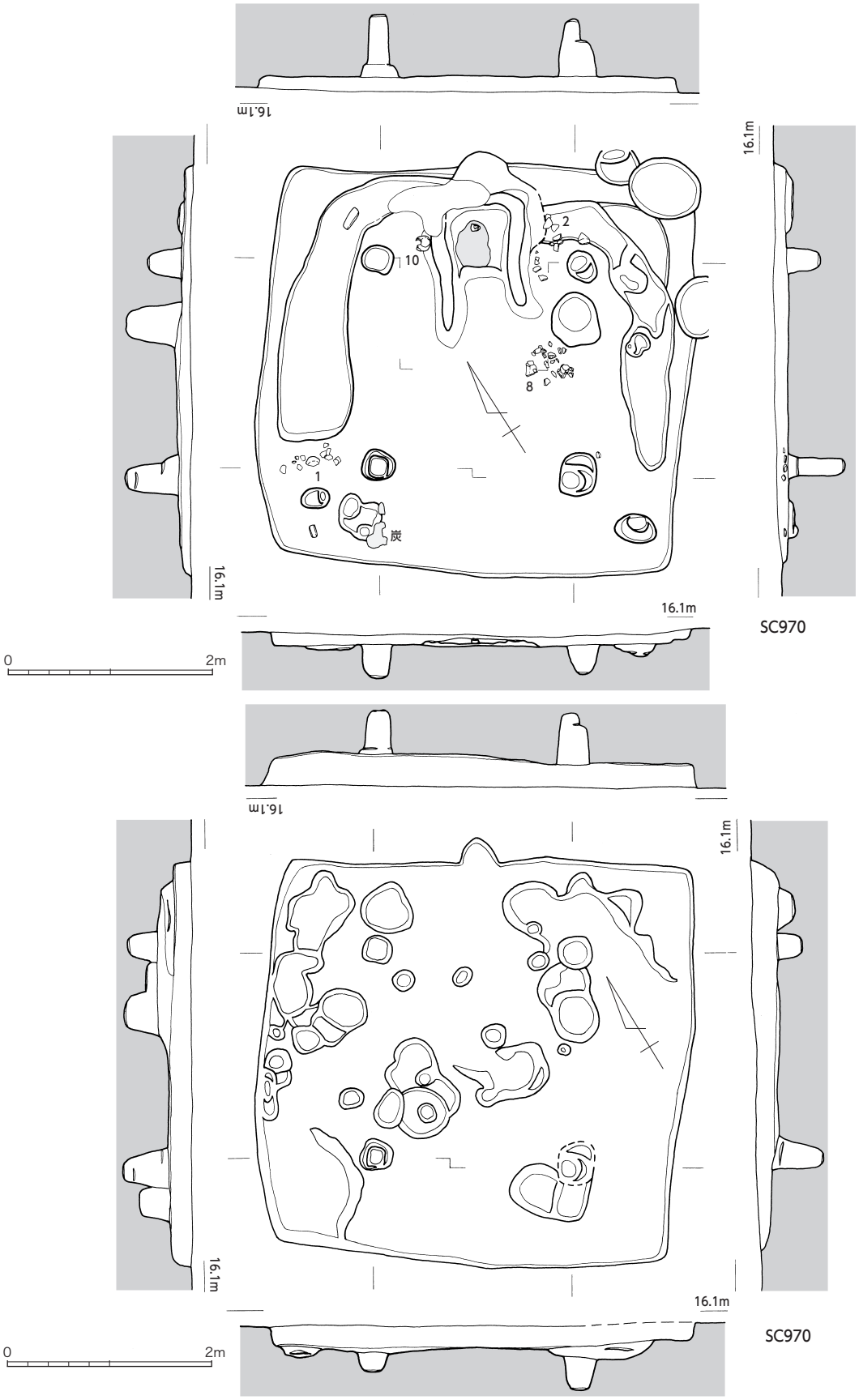


図 225　SC970・掘方（S=1/60）

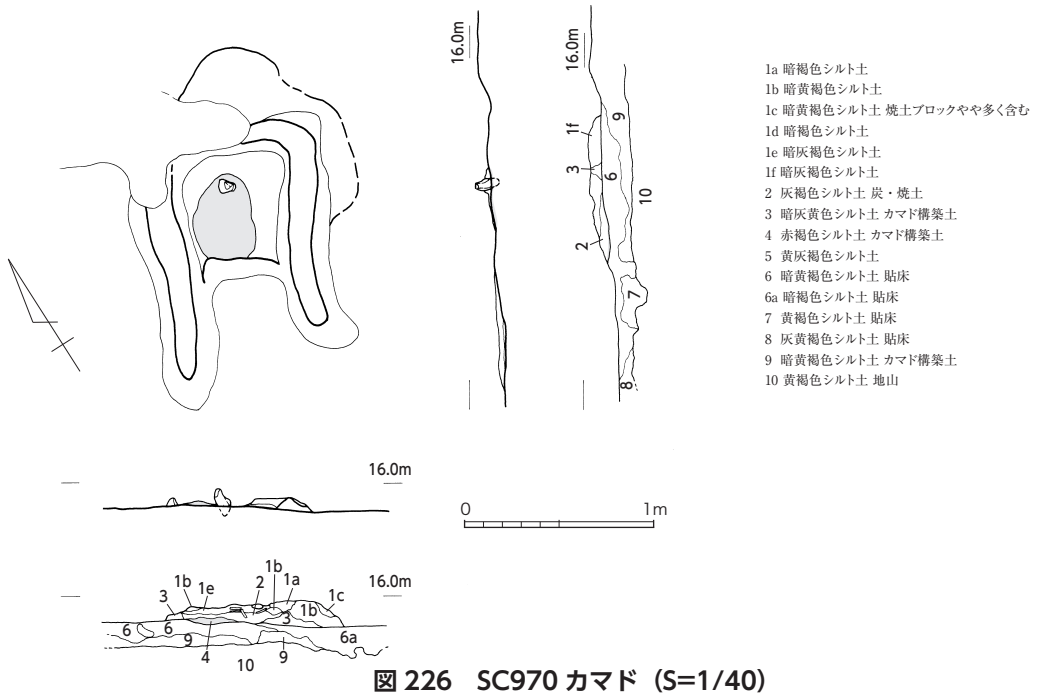


図 226　SC970 カマド（S=1/40）

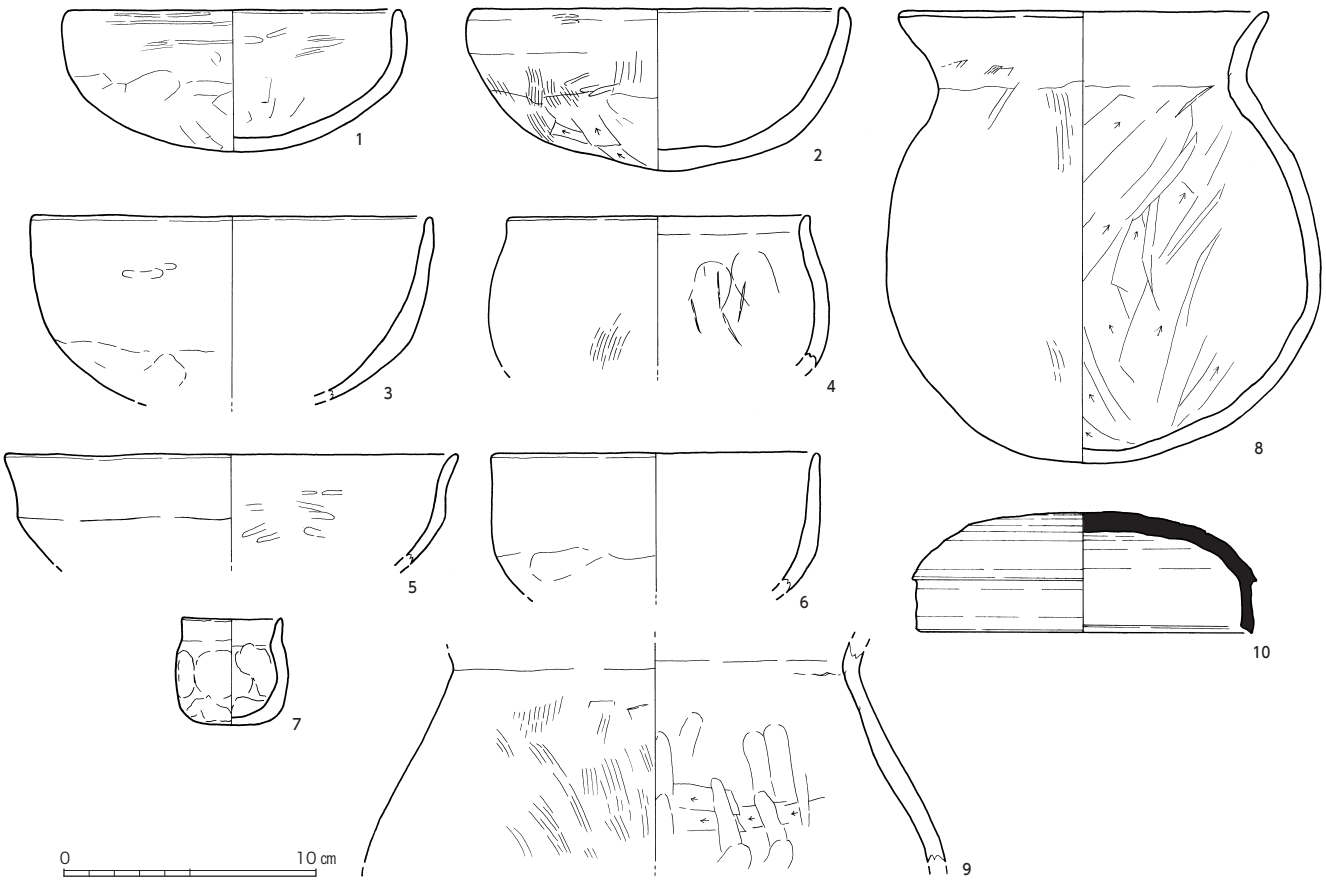


図 227　SC970 出土遺物（S=1/3）

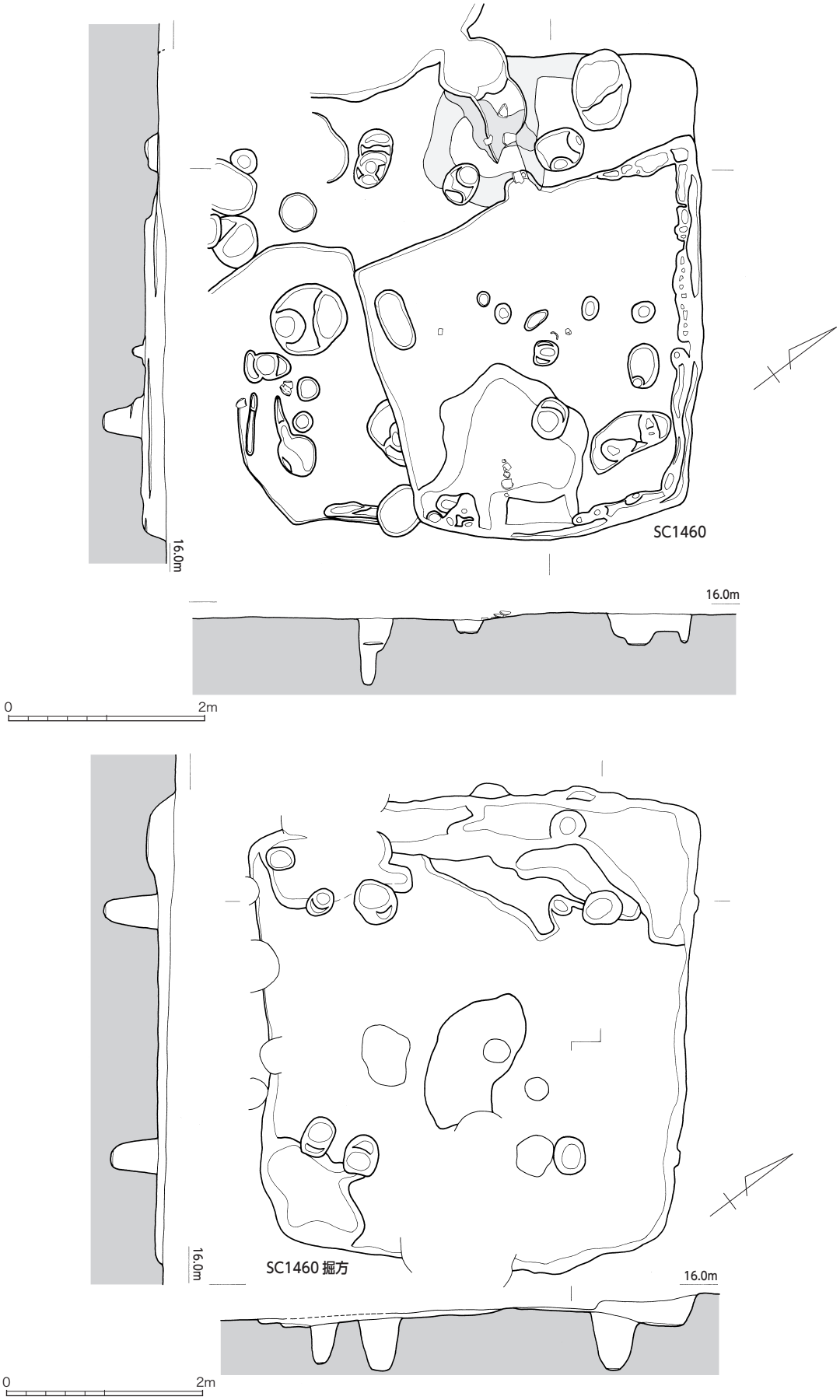


図 228　SC1460・掘方（S=1/60）

SC1460（図 228・229）No.42　一辺 4.6 ～ 4.8 mの方形の竪穴建物で、西壁にカマドがつく。当初から竪穴建物およびカマドの存在を想定していたが、プランを誤って掘り下げた。掘方の掘削時に、本来の主柱穴と壁を捉えた。掘り間違えたため、カマドの構造は不詳だが、平面図によれば、西壁際の中央に支脚と推定される石がある。北東の主柱穴は同規模、同じ底面レベルのものが２つ並びあうため、柱立替の可能性がある。カマド付近に１の土師器甕、建物南東部に土師器鉢ほか破片が広がる。1・2 は土師器甕、3 は把手、3 ～ 5 は鉢である。このほか焼骨片、平根式鉄鏃（図 264-21）、刀子片、管玉（図 261-27）、ガラス小玉（図 261-37）が出土した。

SC1670・SC1920（図 230）No.33　長方形の竪穴建物で、長軸長 5.3m、短軸長 4.8m を測る。検出面が貼床上面に相当し、残りは良くない。SC1920 を切る。主柱穴は 4 本で、同じ箇所に同規模の複数の柱穴が斬り合うため、柱の据え直しが想定される。西壁際中央の焼土と炭のまとまり、石は、石支脚を伴うカマドの可能性がある。遺物は薄パンケース 1 箱で、弥生土器片が多い。須恵器は含まない。1 ～ 4 は土師器で、1 は鉢、2 は丸底壺、3 は高坏、4 は手捏ね土器鉢である。このほか滑石製勾玉（図 261-1）が出土。

SC1920　SC1670 に東側 2/3 程度を切られる。1670 内部に、1920 の東壁のラインが確認できる。そのラインから復元すると、一辺 3.8 mの正方形プランの竪穴建物である。南西壁際付近を中心に、床面に焼土粒、炭粒が広がり、炭化材もみられる。主柱穴は不確かだが、SP1921 は炭化した柱痕跡が

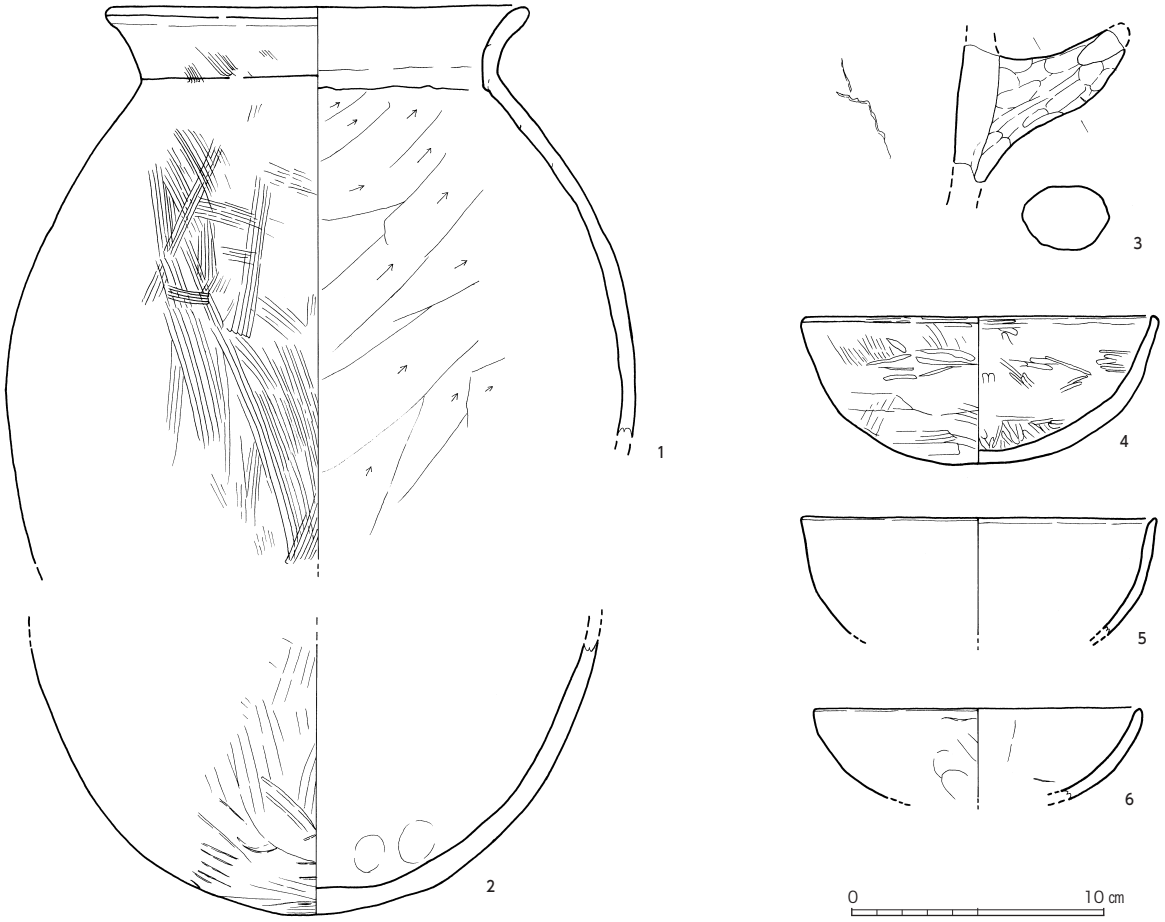


図 229　SC1460 出土遺物（S=1/3）

確認できたため、建物に伴う柱穴の可能性がある。遺物は薄パンケース 1/2 箱出土した。小片が多いが、弥生中期の土器片が主体である。5 は土師器鉢である。

SC3150（図 231）No.42　方形プランで 4.0 × 5.2m、深さ 10㎝を測る。付近は SC3200 ほか複数の遺構が切り合い、プランの把握が難しかったため、付近全体を 3052 の番号をつけて段下げしている。東壁に部分的に壁溝をもつ。主柱穴は不明瞭である。南西側を SD3120 に切られる。南側に複数の直

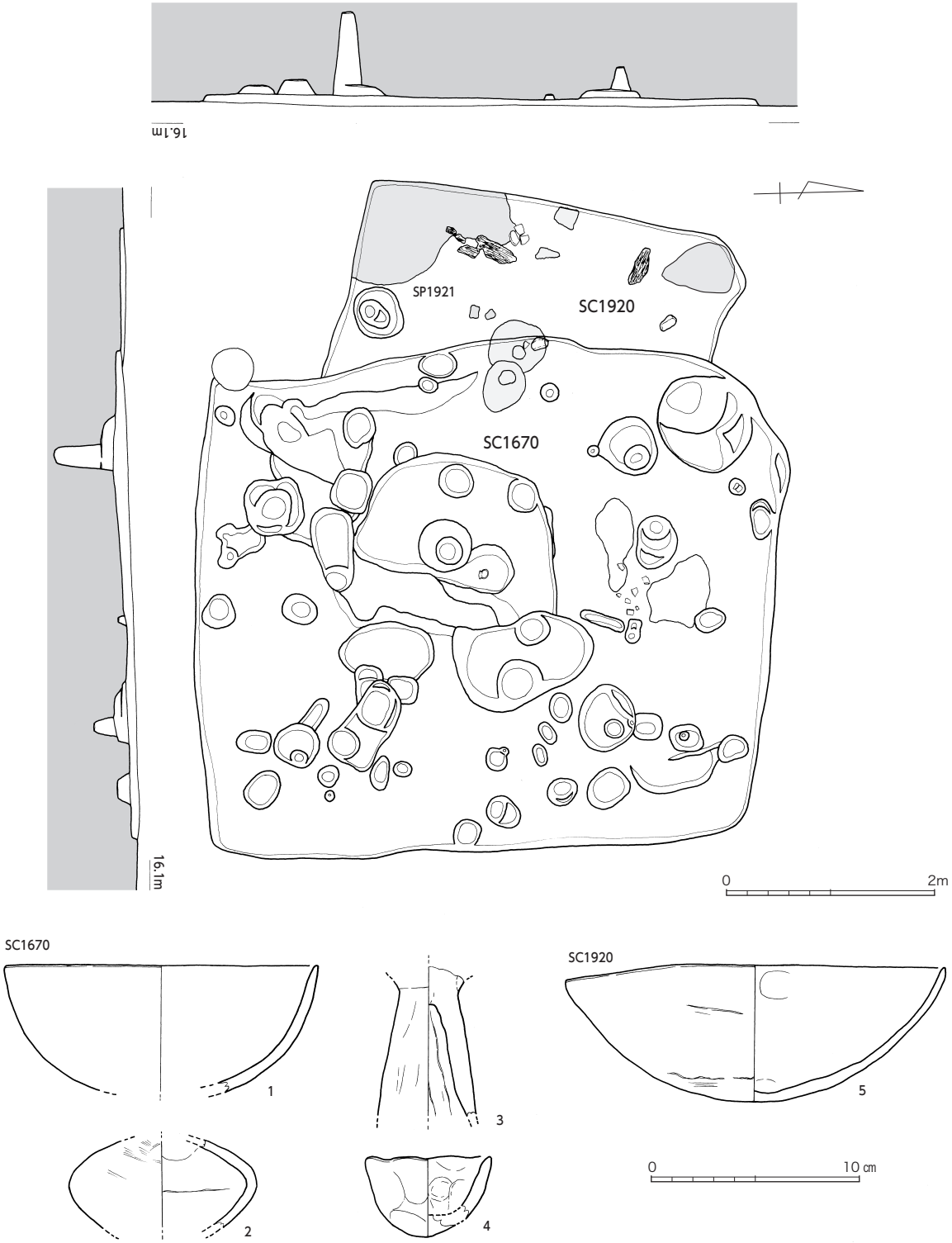


図 230　SC1670・SC1920（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

線的なプランがあり、竪穴建物が複数存在する可能性がある。1・2 は甕、3 は高坏、4 は手捏ね土器鉢である。このほかガラス玉（図 261-36）が出土した。

SC3180（図 232・233）No.44　方形プランで、南北軸長 4.5 m、東西軸長 4.2m を測る。検出面が床面に相当し、掘方までの深さは 30㎝前後、掘方埋土は黒褐色土である。北壁中央にカマドがあり、中央に支脚の石を配置する。天井部は削平により残らず、袖部のみ残る。カマド付近の出土土器は、土師器甕のほか、鉢が多い印象を受ける。主柱穴は 4 本を想定するが、北東部の 1 本はとらえきれなかった。2 ～ 13 はカマド出土遺物で、2 ～ 8 は土師器鉢、9 ～ 11 は土師器甕、12 は土師器鉢、13 は須恵器甕である。14 ～ 19 は遺構全体からの出土で、14 は鉢、15 ～ 18 は甕、19 は坏である。

SC3660（図 234）No.44　長方形プランで、南北軸長 6.8m を測る。大部分を SC3180 に切られる。南壁には幅 25㎝程度、深さ 15㎝の壁溝が巡る。主柱穴は不確かで、炉やカマドは不詳である。遺物は薄パンケース 2 箱出土した。1 は土師器鉢、2 ～ 4 は甕である。このほか、鳥類の骨片 1、ガラス玉（図 261-40）が出土。

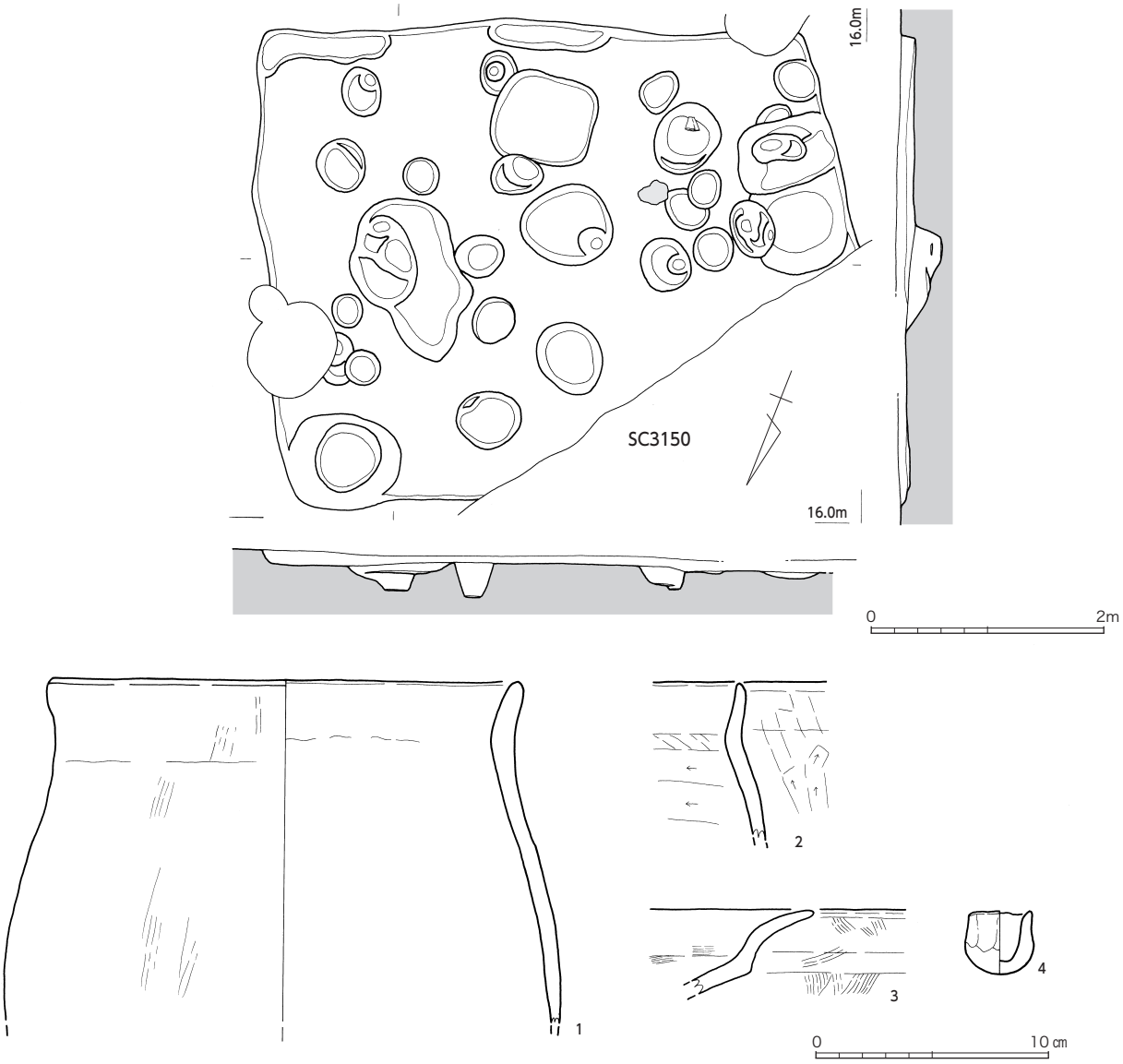
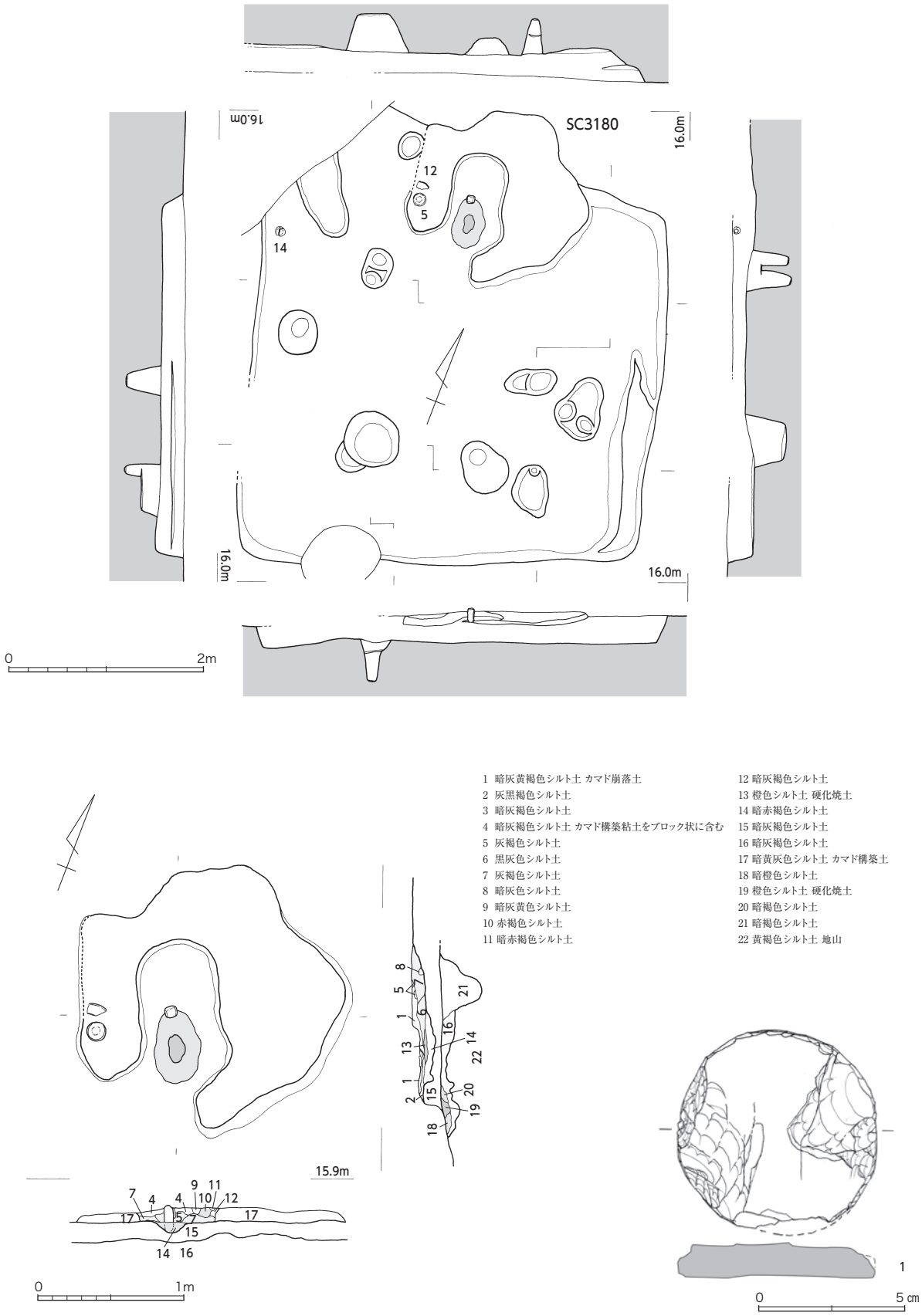


図 231　SC3150（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）



1 暗灰黄褐色シルト土 カマド崩落土
2 灰黒褐色シルト土
3 暗灰褐色シルト土
4 暗灰褐色シルト土 カマド構築粘土をブロック状に含む
5 灰褐色シルト土
6 黒灰色シルト土
7 灰褐色シルト土
8 暗灰色シルト土
9 暗灰黄色シルト土
10 赤褐色シルト土
11 暗赤褐色シルト土
12 暗灰褐色シルト土
13 橙色シルト土 硬化焼土
14 暗赤褐色シルト土
15 暗灰褐色シルト土
16 暗灰褐色シルト土
17 暗黄灰色シルト土 カマド構築土
18 暗橙色シルト土
19 橙色シルト土 硬化焼土
20 暗褐色シルト土
21 暗褐色シルト土
22 黄褐色シルト土 地山

図 232　SC3180（S=1/60）・カマド（S=1/40）・出土遺物（1）（S=1/2）

図 233　SC3180 出土遺物（2）（S=1/3）

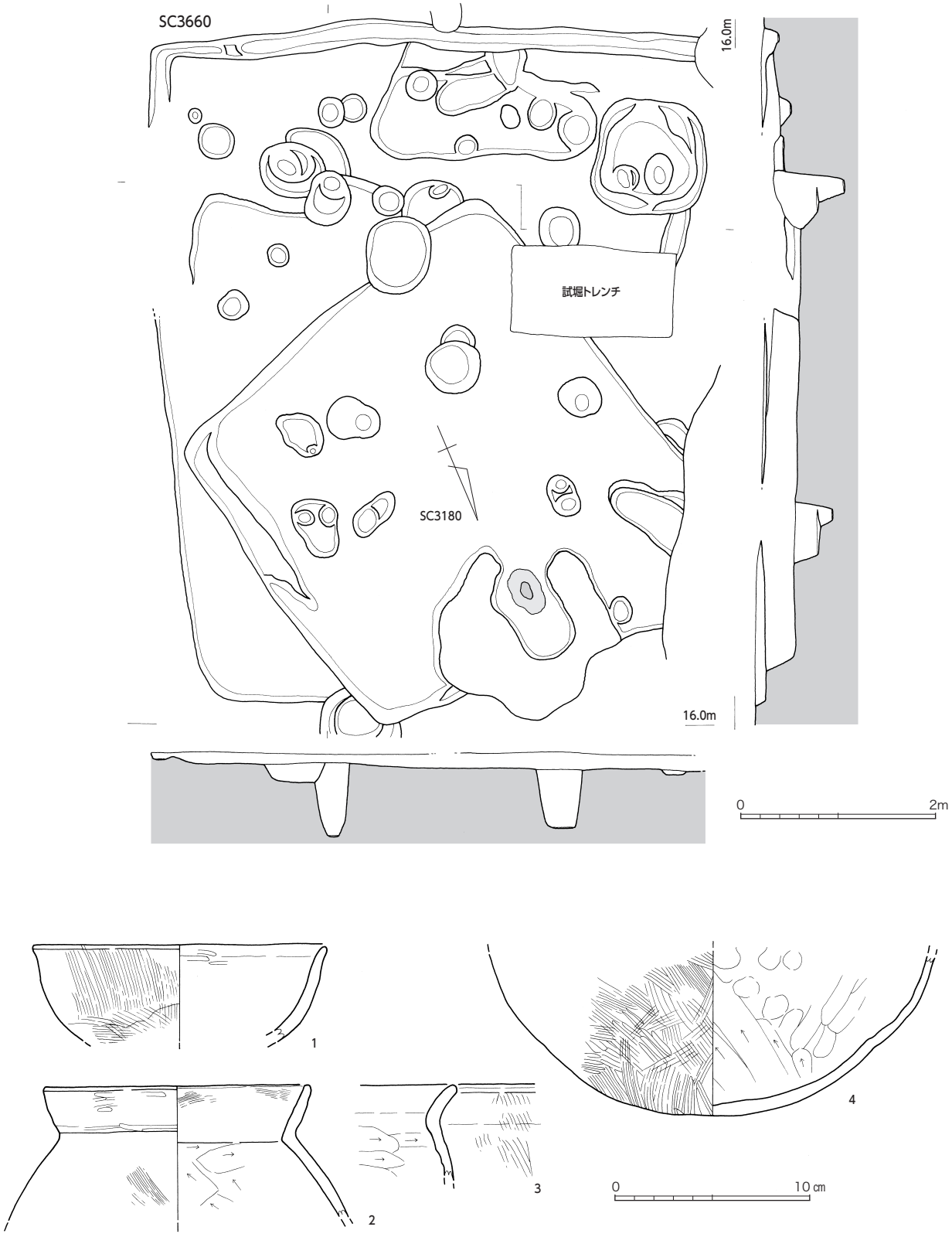


図 234　SC3660（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

SC5362（図 235-240）No.51　調査区北西端で検出した大型竪穴建物で、短軸長 6.4 m、長軸長推定 8 mを測る。床面までの深さは 30㎝程度である。建物北西側に焼土が広がる範囲を確認した。掘方まで下げると、長軸方向に 3 箇所、短軸方向に 2 箇所、計 6 箇所の主柱穴を検出した。主柱穴は同じ個所に同規模の柱穴の切り合いがみられるので、柱の建て替えがあったと考える。埋土から滑石の玉未製品、素材、臼玉が出土しており、滑石製品の工房が想定される。1 ～ 29 は須恵器で、1 ～ 9 は坏蓋、10 ～ 21 は坏身、22・27 ～ 29 は高坏、23 は提瓶、24 はハソウ、25 は甕である。30 ～ 42 は土師質須恵器で、30 は器台、31 ～ 42 は甕である。43 ～ 62 は土師器で、43 ～ 53 は甕、54 ～ 58 は甑、59・60 は坏、61・62 はミニチュア土器である。63 は断面楕円形の円筒形土器。上層出土。外面は摩滅で不詳だが、内面は強い横ナデを施す。床面で台石、砥石が出土。また、滑石の素材、未製品（図 261-19 ～ 21、表 3）、製品（図 261-14 ～ 17）が出た。埋土下層から板状鉄片が出土している。遺物は薄パンケース 13 箱出土。

SC6200・6470（図 241）No.86　SC6200 は方形プランの一辺 4.4 mを測る竪穴建物である。床面までの深さは 15㎝前後である。北壁中央にカマドを配置する。カマドは袖部のみで天井部を欠く。

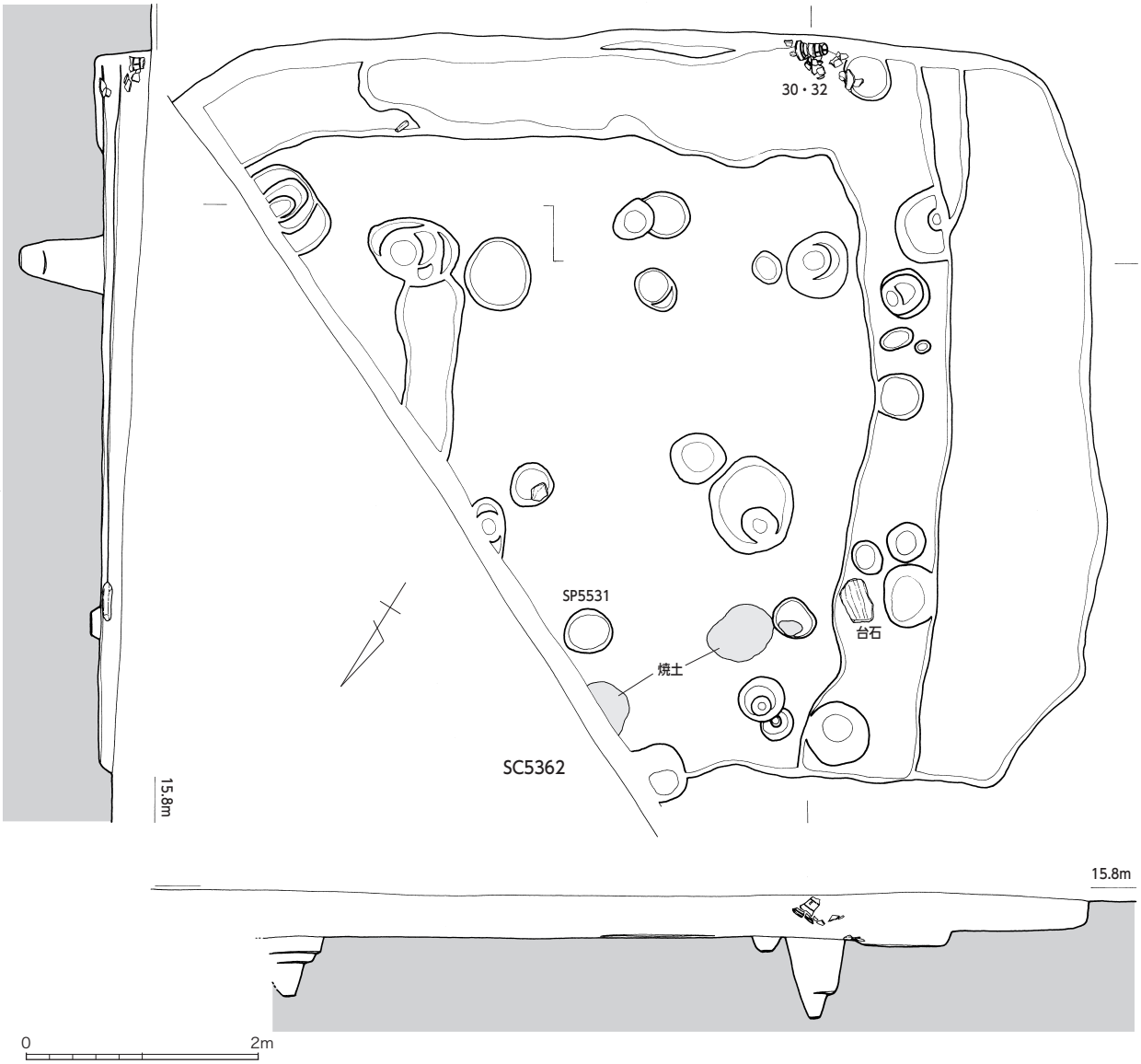


図 235　SC5362（S=1/60）

土師器高坏を倒置し支脚とする。南・西壁に幅 15 ～ 20cmの壁溝が巡る。SC6470 を切る。遺物は薄パンケース 4 箱出土。1 ～ 4 は須恵器で、1 は短頸壺、2 は坏身、3 は高坏である。4 は坏蓋で、外面にヘラ記号がある。5・6 は土師器で、5 は高坏、6 は甑である。このほか、滑石の臼玉（図 261-13）、未製品や砕片（表 3）が出ている。

SC6470　方形プランで、壁には幅 40cm前後の壁溝が巡る。深さ 20cmを測る。6200 に切られる。7 は須恵器提瓶。

SC6230（図 242）No.77　方形プランで、3.4 × 3.8 mを測る。遺物から想定される時期をふまえれば、カマドの存在が想定されるが、確認できなかった。検出面から底面まで深さ 5cm 程度しかなく、削平されたと考える。主柱穴は断面で示した四隅で、西・南壁の一部に壁溝が巡る。1 は土師器甕、

図 236　SC5362 掘方（S=1/60）

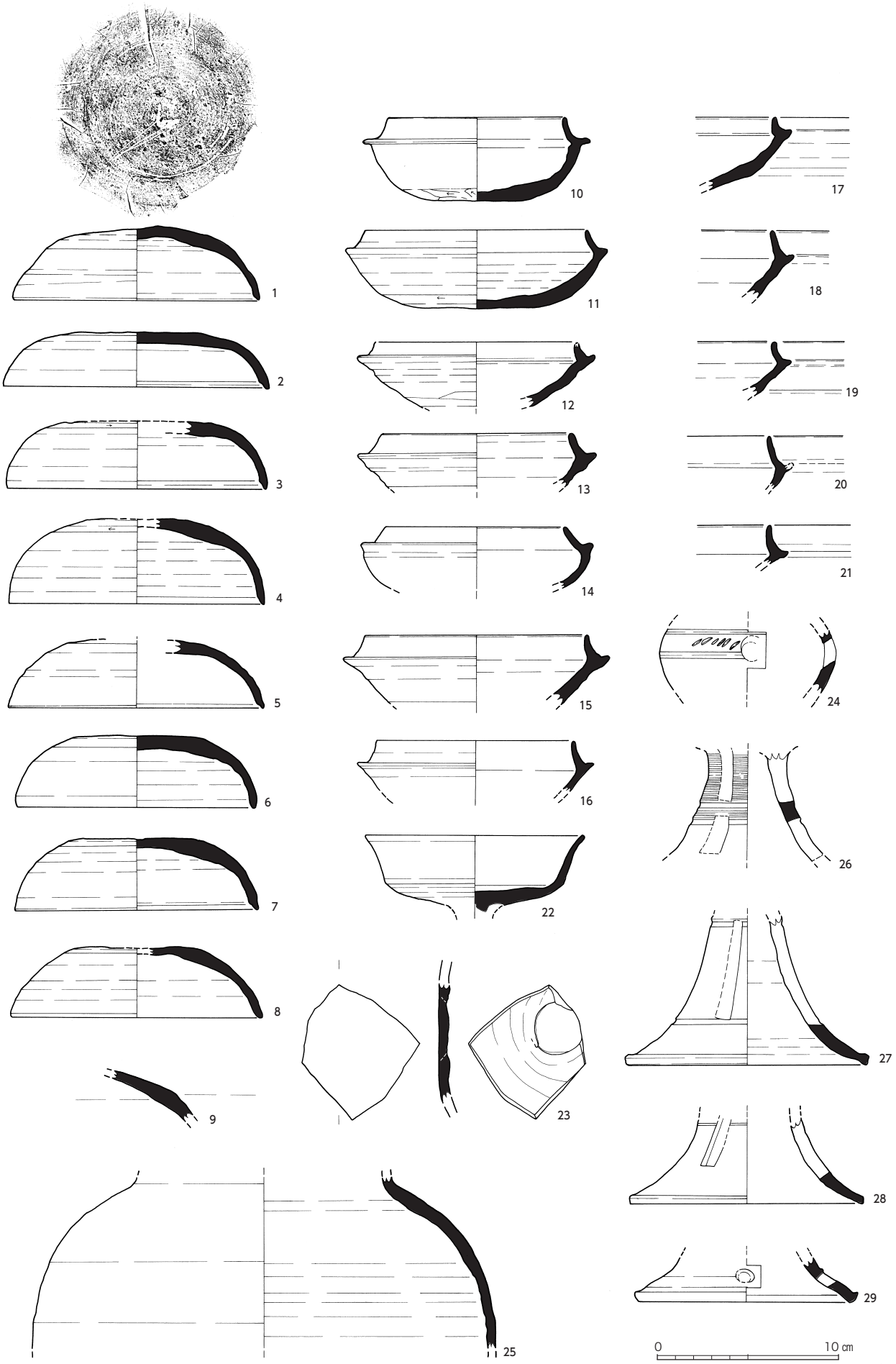


図 237　SC5362 出土遺物（1）（S=1/3）

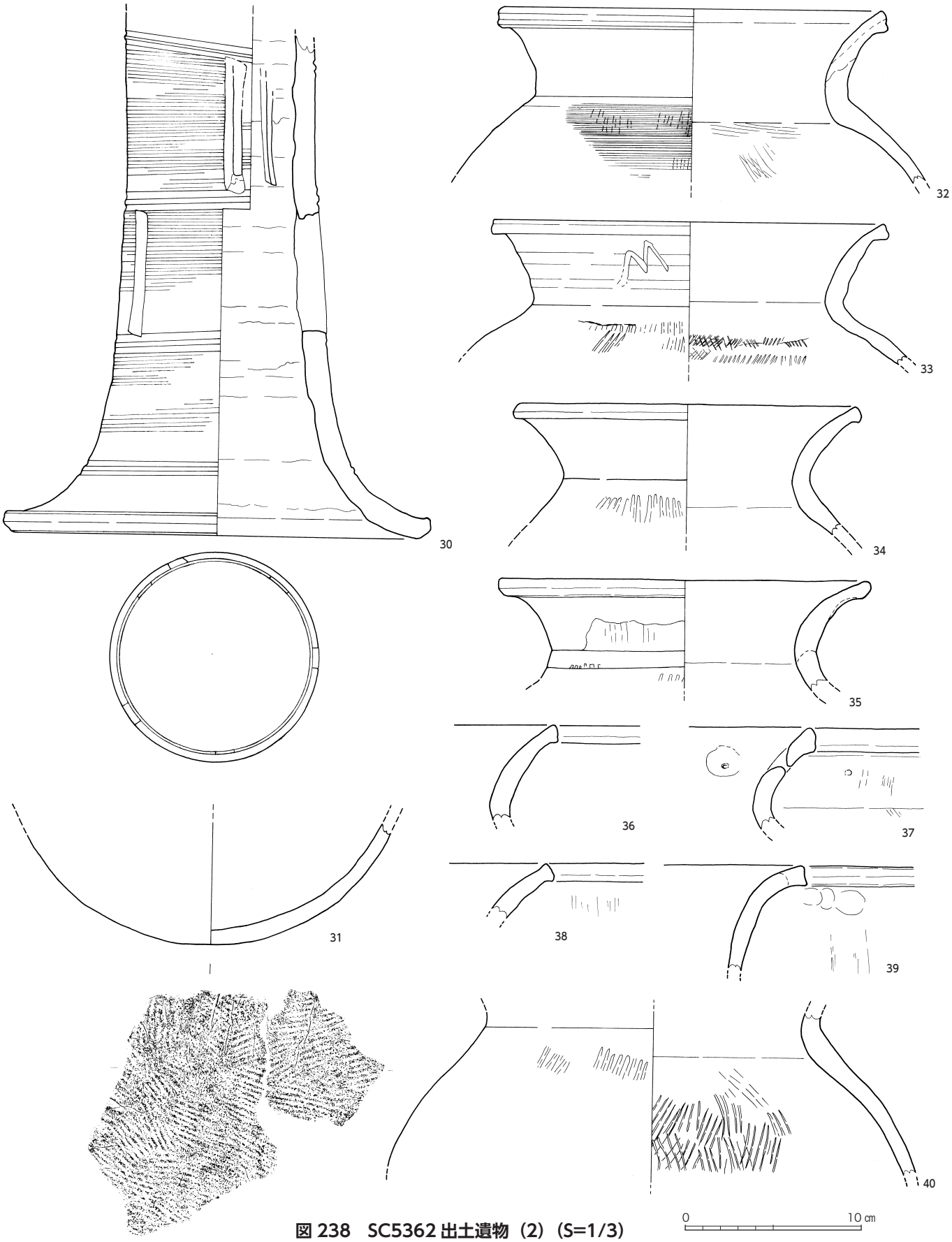


図 238　SC5362 出土遺物（2）（S=1/3）

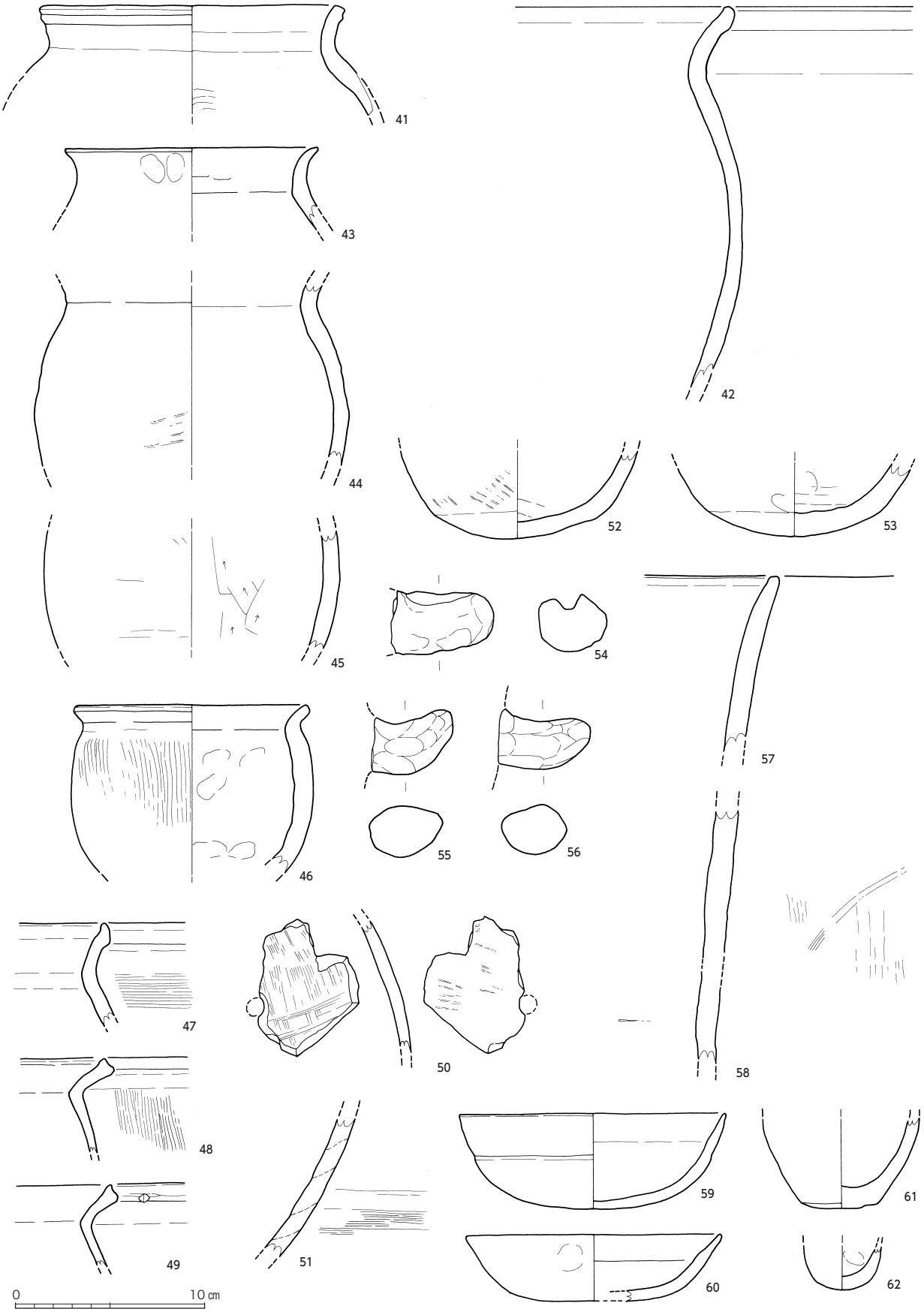


図 239　SC5362 出土遺物（3）（S=1/3）

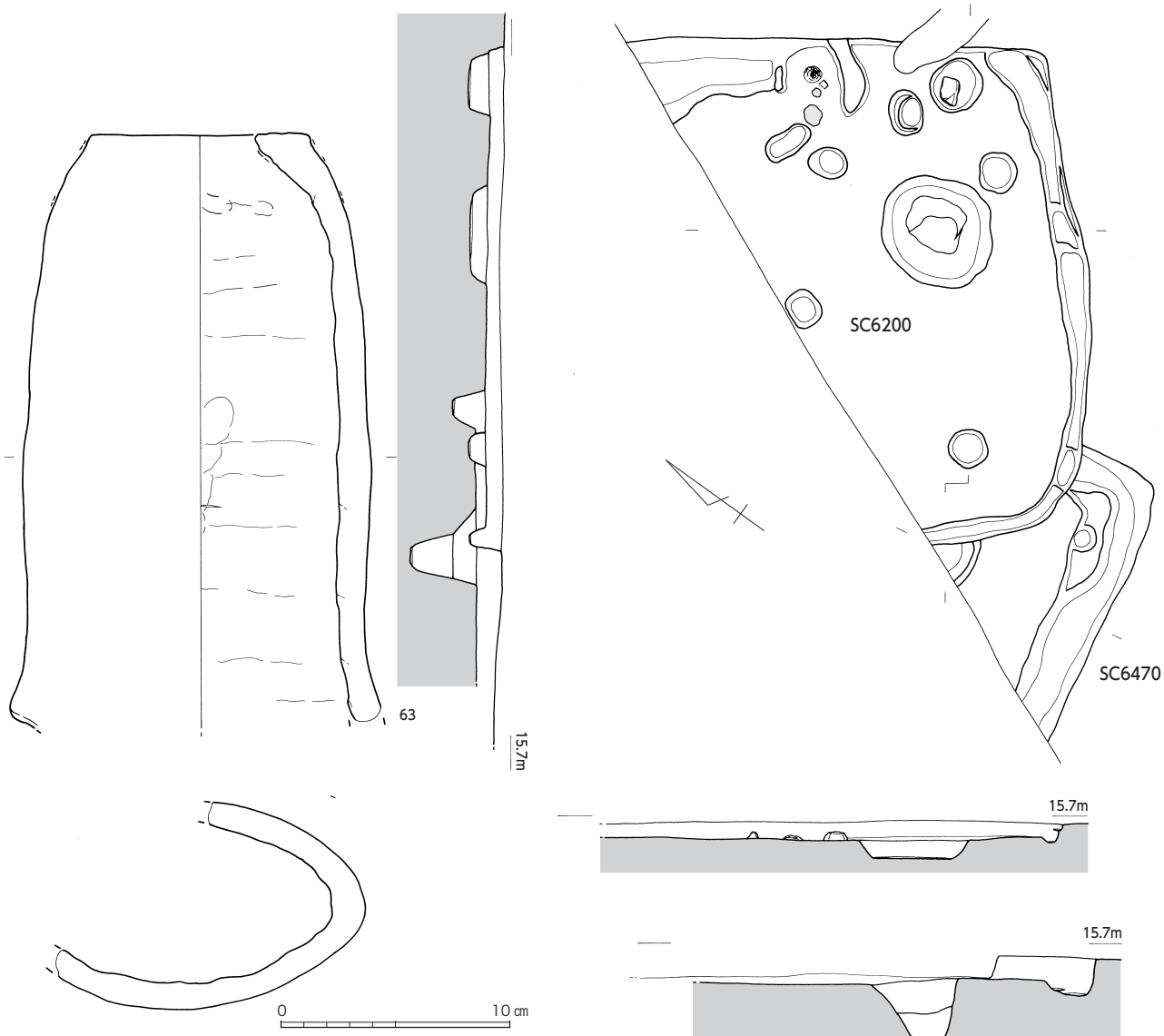


図 240　SC5362 出土遺物（4）（S=1/3）

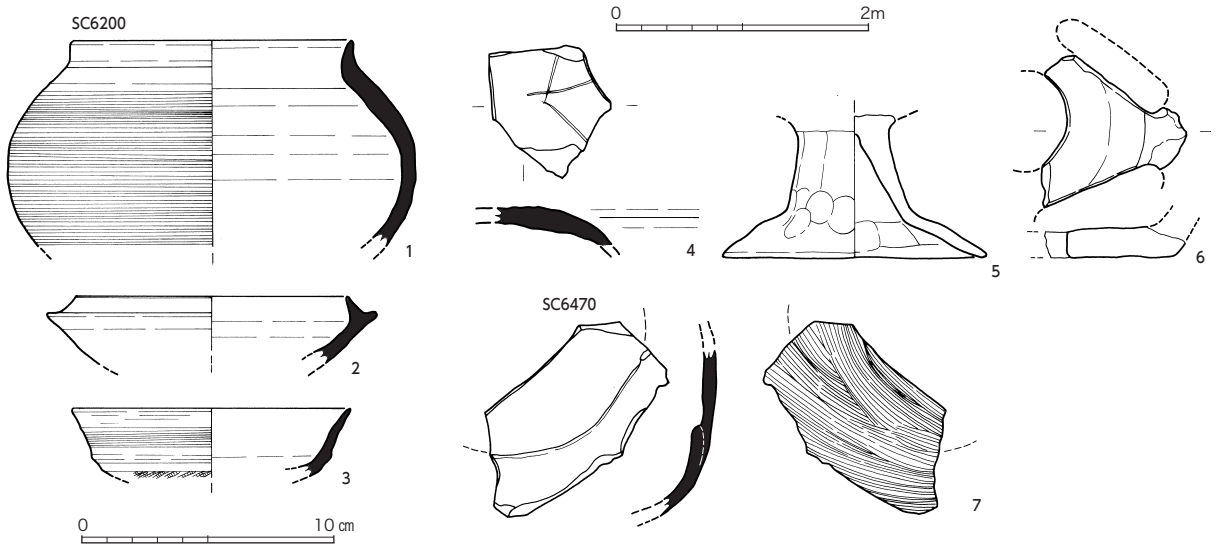


図 241　SC6200・6470（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

2 は須恵器坏蓋である。

SC6300（図 243）No.88　方形プランで、南北軸長 4.6 m以上、東西軸長 3.6 m以上、深さ 5 ～ 10 ㎝を測る。西半は調査区外へのびる。主柱穴は不確かだが、位置と深さを踏まえれば断面で示した柱穴か。東壁と、南壁の一部に壁溝が巡る。床面中央やや東寄りで滑石（石材、未製品など。図 261-23、表 3）が集中して散布する。遺物は薄パンケース 2 箱出土した。1 ～ 5 は須恵器で、1 は坏蓋。外面天井部にヘラ記号を施す。2 ～ 4 は坏身、5 は高坏。6 ～ 8 は土師器で、6 は高坏、7 は甕の口縁部、8 は手捏ね土器鉢である。

SC6331（図 244・245）No.77　短軸長 6.3 m、長軸長 6.9 mの大型方形竪穴建物である。検出面から床面までの深さ 5㎝を測る。北西壁の中央にカマドを配置する。カマドは袖の構築土、燃焼部の焼土が残る。支脚は残っていない。壁には幅 20 ～ 30㎝、深さ 10 ㎝の壁溝を巡らせる。床面までの掘削では主柱穴を捉えられなかったが、掘方まで掘削したところ、断面で示した四本主柱穴を捉えた。遺物は薄パンケース 6 箱出土。1 はカマド、2・3・5・7 は貼床、4 は掘方、7 は SP6789 の出土。1 ～ 4 は土師器で、1・2 は鉢、3 は甕、4 は甑。5 は須恵器の蓋。6・7 は滑石製の紡錘車である。貼床から不明鉄製品が出土している。

SC6840（図 246）No.62　調査区北西際で検出した、一辺 3.8 m を測る方形竪穴建物である。SC5362 に切られる。5362 内の柱穴のいずれかが、SC6840 の主柱穴になると思われる。建物中央南寄りの壁際で焼土と土師器甕胴部片のまとまりを検出した。カマドに相当しうるか。1 は坏蓋で、外面にヘラ記号を施す。2 は坏身である。

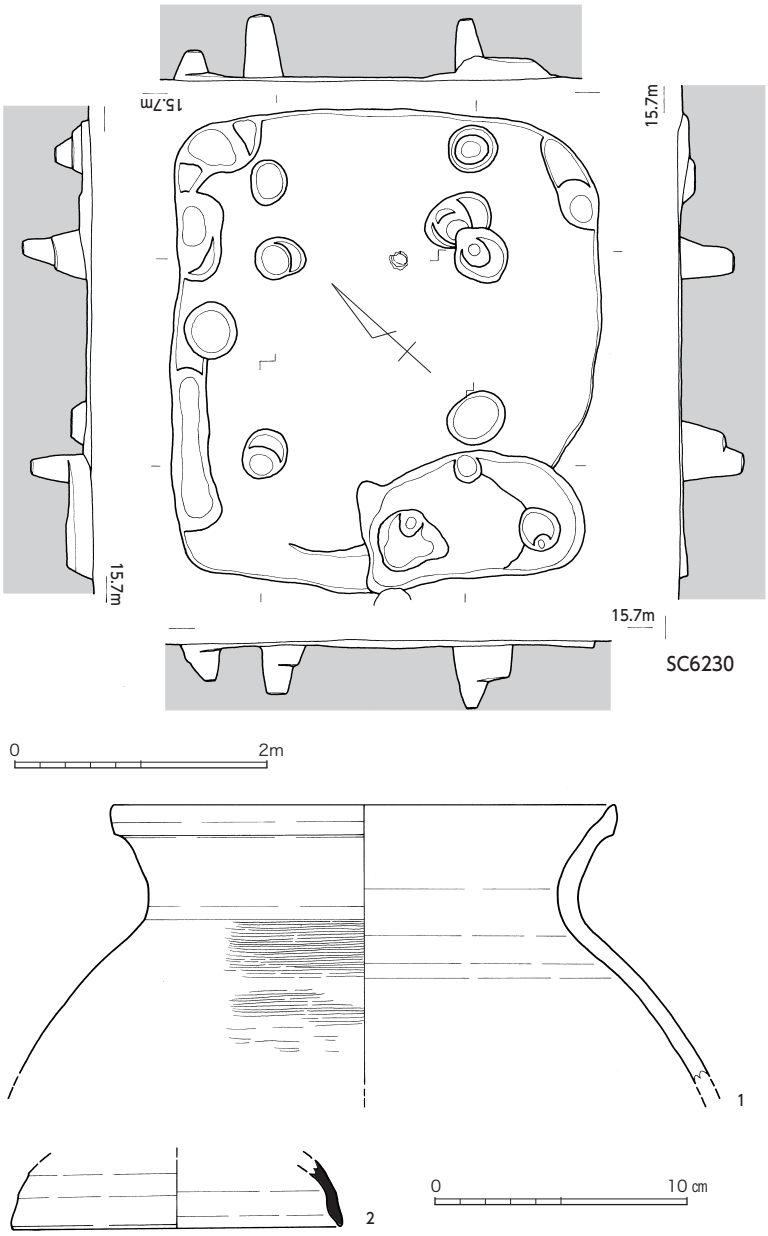


図 242　SC6230（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

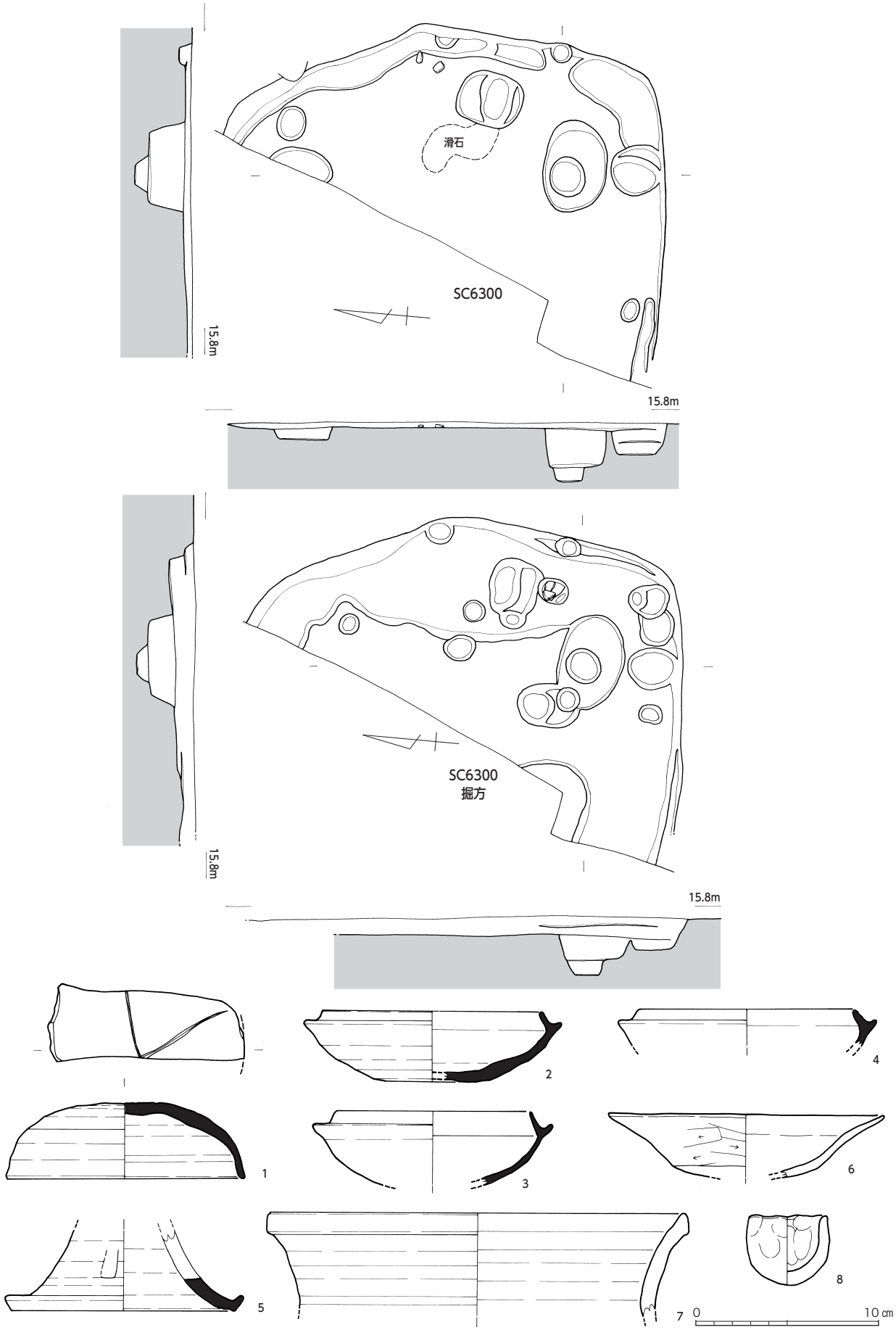
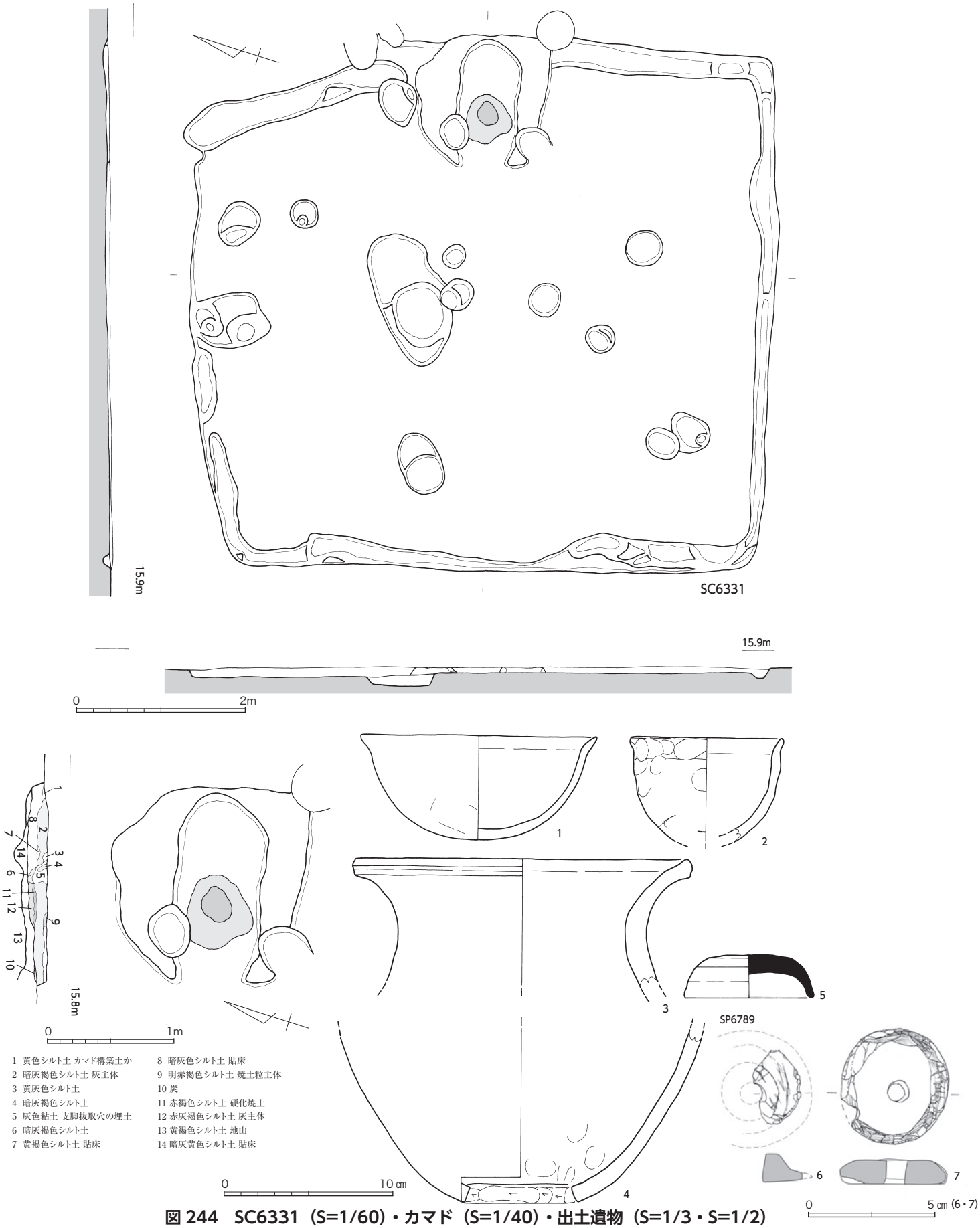


図 243　SC6300（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）



1 黄色シルト土 カマド構築土か
2 暗灰褐色シルト土 灰主体
3 黄灰色シルト土
4 暗灰褐色シルト土
5 灰色粘土 支脚抜取穴の埋土
6 暗灰褐色シルト土
7 黄褐色シルト土 貼床
8 暗灰色シルト土 貼床
9 明赤褐色シルト土 焼土粒主体
10 炭
11 赤褐色シルト土 硬化焼土
12 赤灰褐色シルト土 灰主体
13 黄褐色シルト土 地山
14 暗灰黄色シルト土 貼床

図 244　SC6331（S=1/60）・カマド（S=1/40）・出土遺物（S=1/3・S=1/2）

図 245　SC6331 掘方（S=1/60）

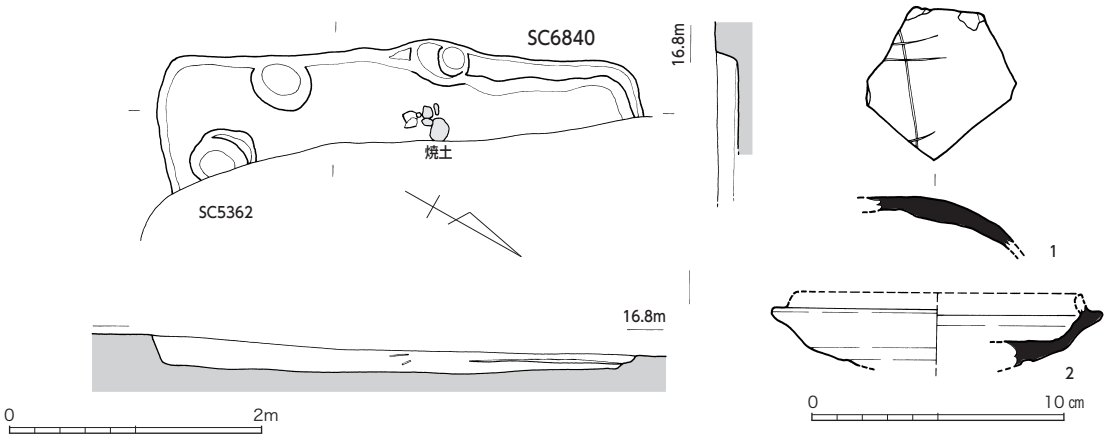


図 246　SC6840（S=1/60）・出土遺物（S=1/3）

（２）土坑

１）古墳時代前期

SK5912（図 247）No.55　平面円形の土坑で、径 50㎝、深さ 30㎝を図る。床面より 15 ～ 20cm 浮いた位置で土師器甕１が倒位、２が横位で出土した。埋土中、検出面のレベルに焼土が入る。

２）古墳時代中期

SK351（図 248）No.13　SC322 のベッド上面で確認した径 50㎝ほどの平面略円形のピット状で深さ 25㎝が残る。土師器の甕の上部が倒置で出土した。SC322 より新しく、上からの掘り込みを確認できなかったものと考えられる。出土した１は器壁がやや厚手で肩部に D 字状の刻線がある。

図 247　SK5912（S=1/40）・出土遺物（S=1/3）

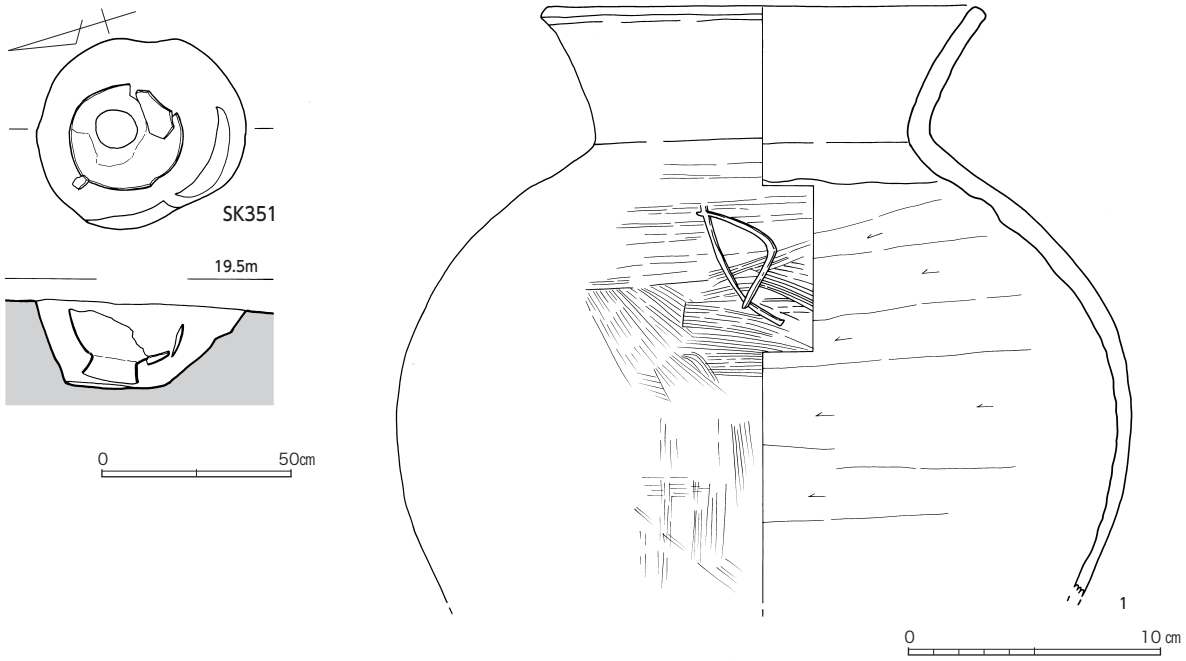


図 248　SK351（S=1/20）・出土遺物（S=1/3）

３）古墳時代後期

SK197（図 249）No.12　平面不整円形の竪穴で 120 × 100㎝、深さ 10㎝が残る。遺構の切り合いを下げる途中で検出した。SC321 を切る。床面より浮いて遺物が出土した。１、２は須恵器の坏。３は須恵器模倣の土師器甕で外面叩き。４、５土師質で外面叩きの後横方向の掻き目を施す。径は 1/6 からの復元。甑か。古墳時代後期。

SK3966（図 250）No.58　平面長楕円形で、長さ 85㎝、最大幅 50㎝、深さ 75㎝を測る。上層で甕１、２が重なって出土し、その甕の中から鉢３が出土した。

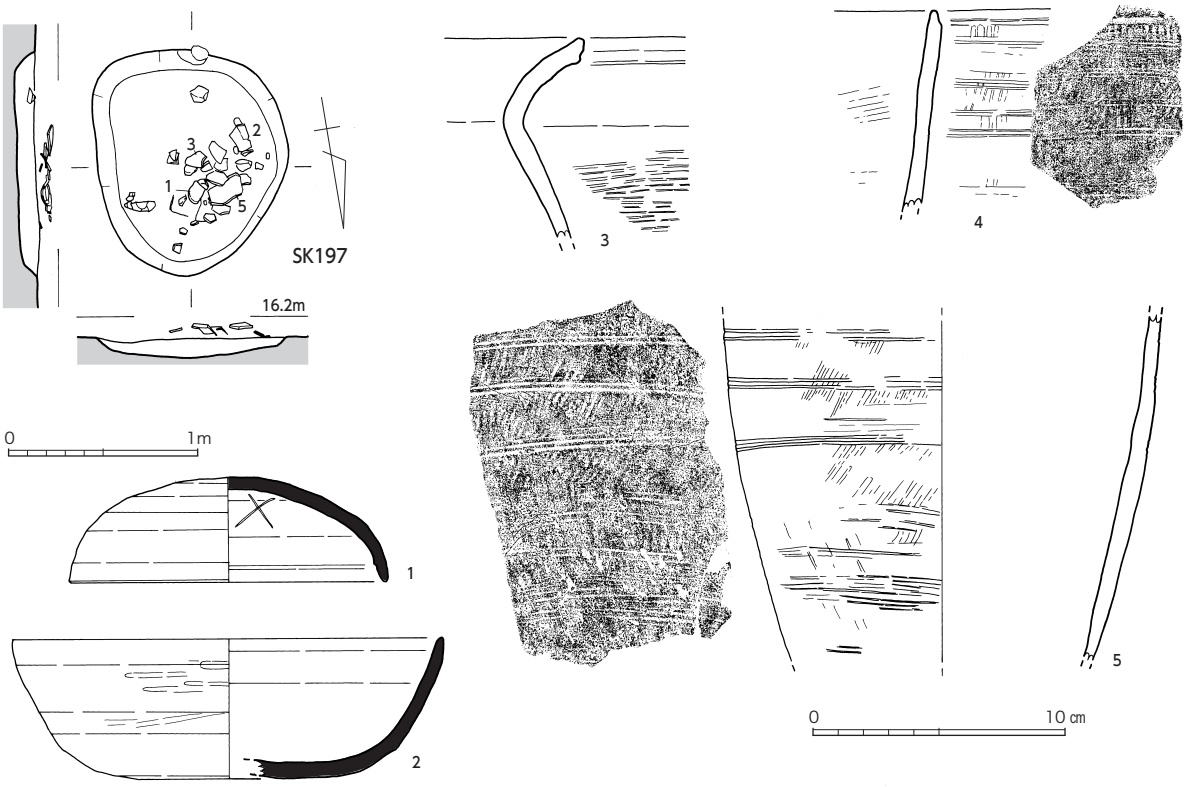


図 249　SK197（S=1/40）・出土遺物（S=1/3・S=1/4）

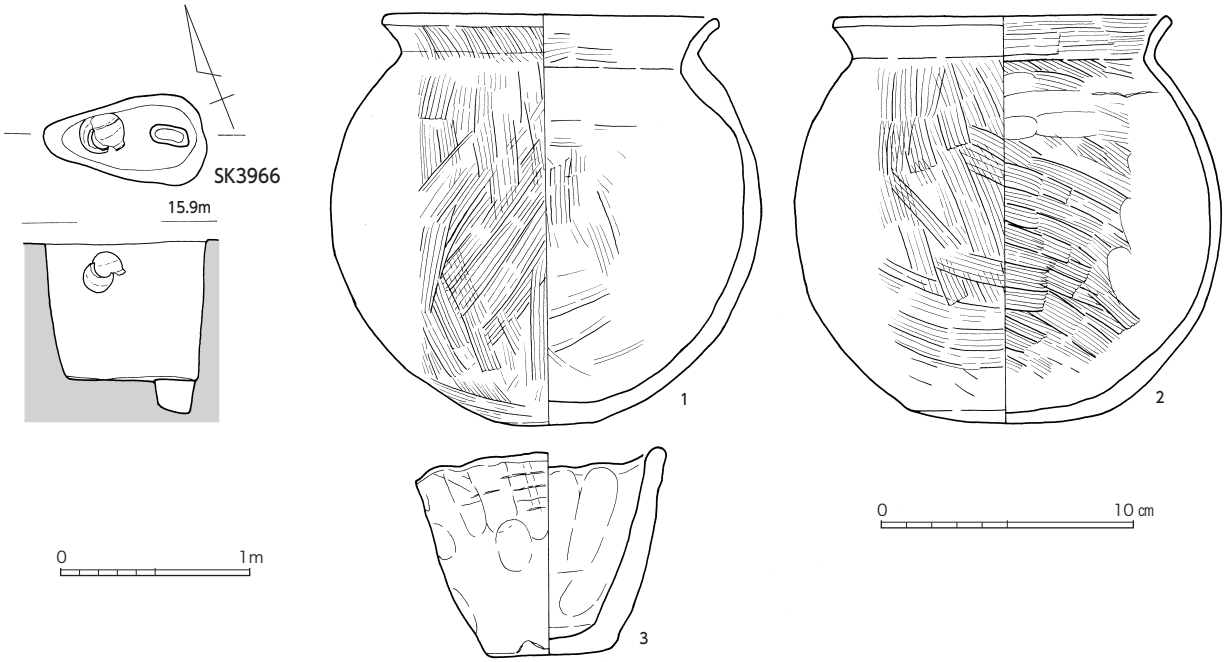


図 250　SK3966（S=1/40）・出土遺物（S=1/3）

（3）溝

1）古墳時代後期

SD3050（図 251・252）No.41　幅 35cm程度、深さ 35 ～ 45cmを測る。調査区を北東 - 南西方向に走り、調査区外へ延びる。SD3120、SD3700 と概ね同方向に延びる。調査区南西部では SD3120 に切られるかたちで SD3120 と合流し、やや幅広の溝となる。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、最下層は黄褐色粘質土である。遺物は、掘削時に任意で上層・下層に分けて取り上げている。薄パンケース 9 箱出土した。1 ～ 4 は土師器で、1・2 は坏、3 は鉢、4 は手捏ね土器か。5 ～ 10 は須恵器で、5・6 は高坏、7 は坏蓋、8 ～ 10 は坏身。1 ～ 4・8・9 は上層、5・7・10 は下層出土。Ⅲ B 期。

SD3120（図 251・253）No.41　幅 60cm程度、深さ 50 ～ 60cmを測る。SD3050 と概ね同方向に延び、調査区南西部で SD3050 を切る。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、全体に橙色焼土を少量含む。遺物は任意で上層・下層に分けて取り上げた。遺物の多くは弥生土器片だが、古墳時代後期の遺物を抽出し図化した。薄パンケース 14 箱出土。2・3・4・7・10・11・16・17 は上層、5・6・8・9・13・15 は下層出土。下層から鉄滓出土。このほかガラス小玉（図 261-38・39）、土製玉（図 261-45）が出土している。Ⅲ B 期。

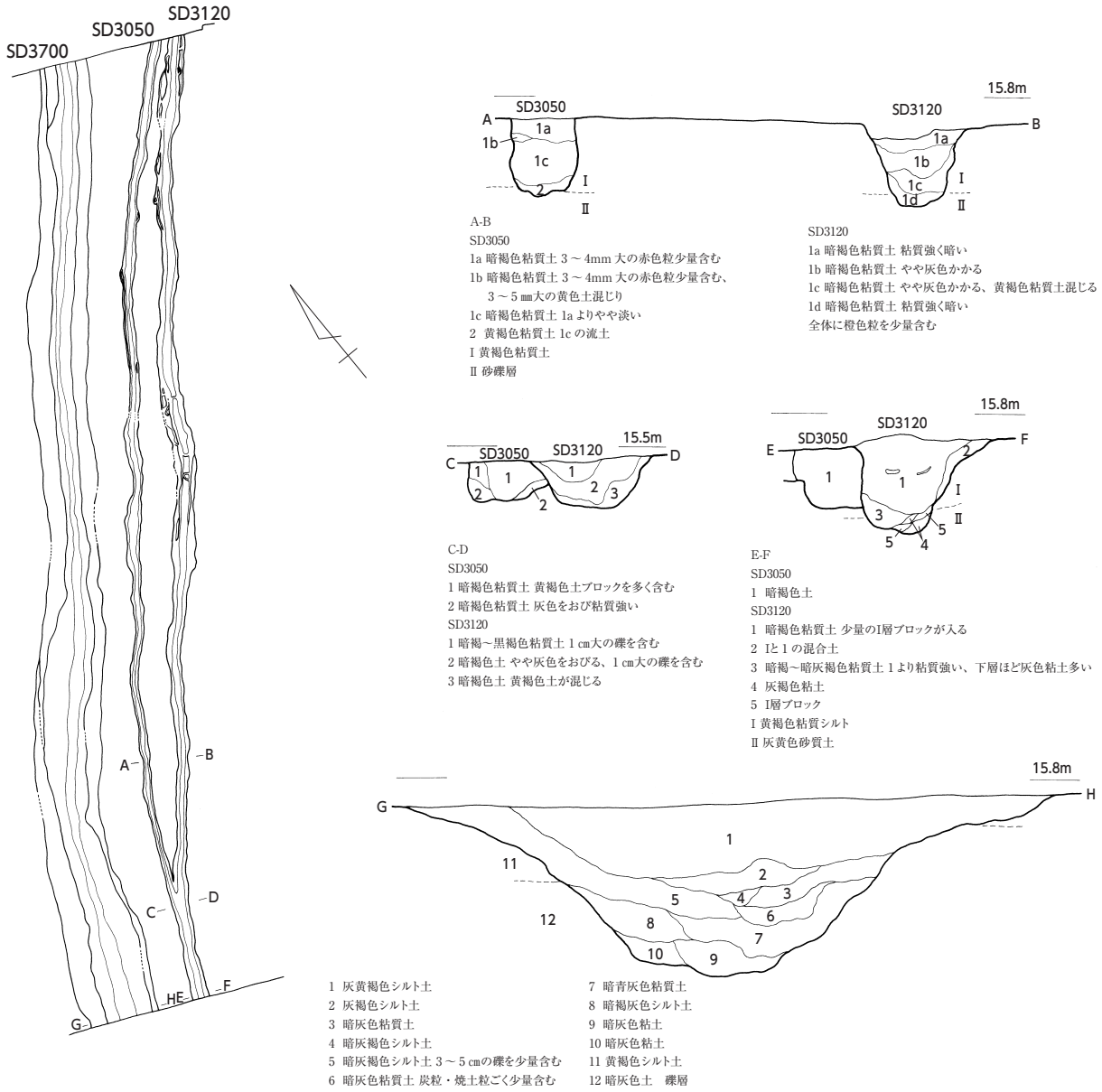


図 251　SD3050・SD3120・SD3700（S=1/400）・土層（S=1/40）

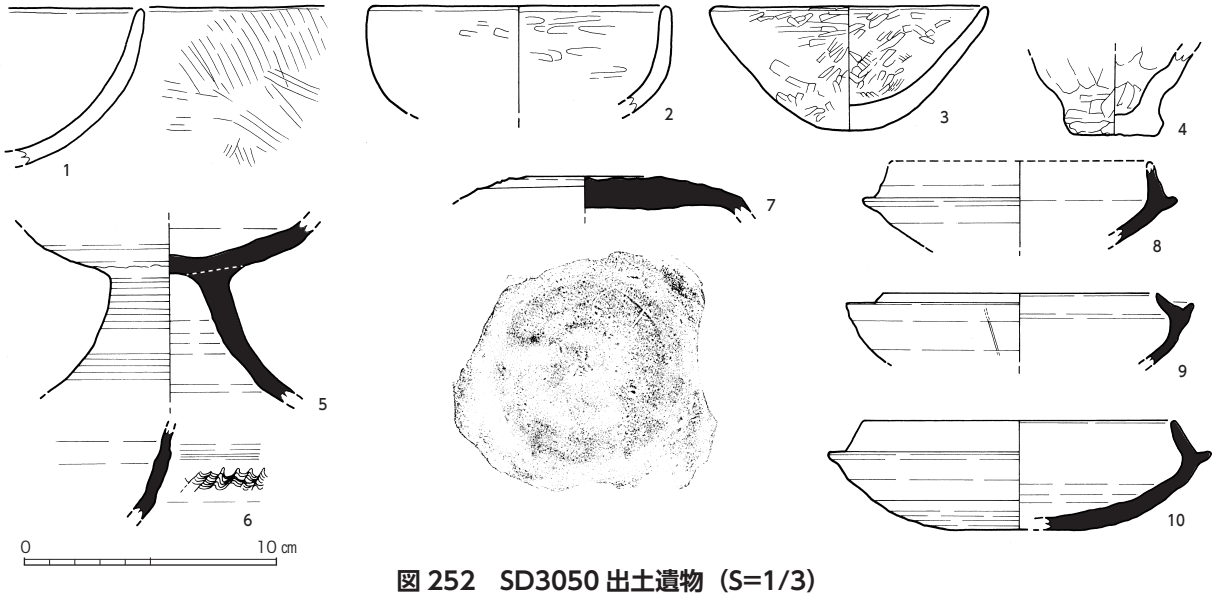


図 252　SD3050 出土遺物（S=1/3）

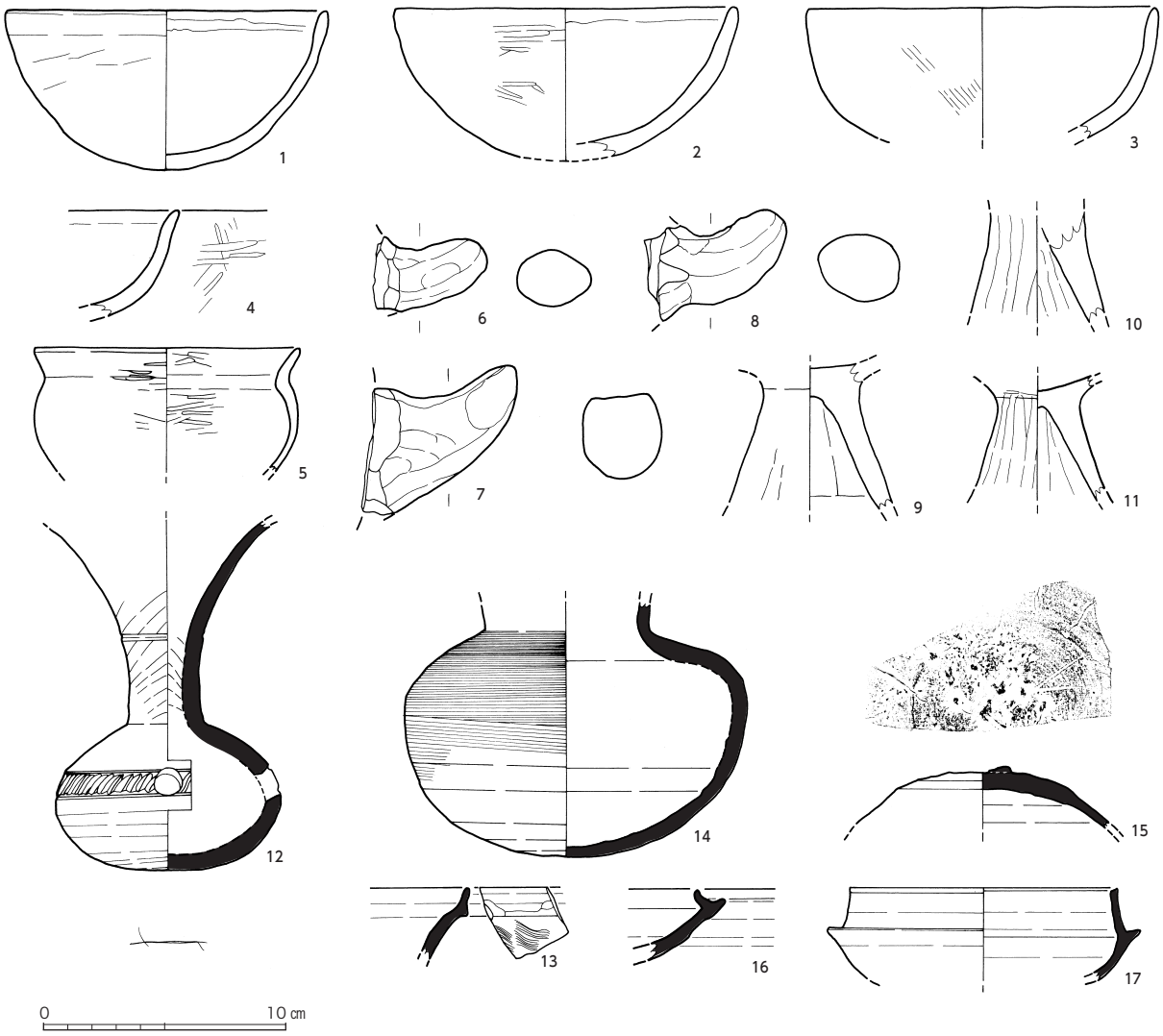


図 253　SD3120 出土遺物（S=1/3）

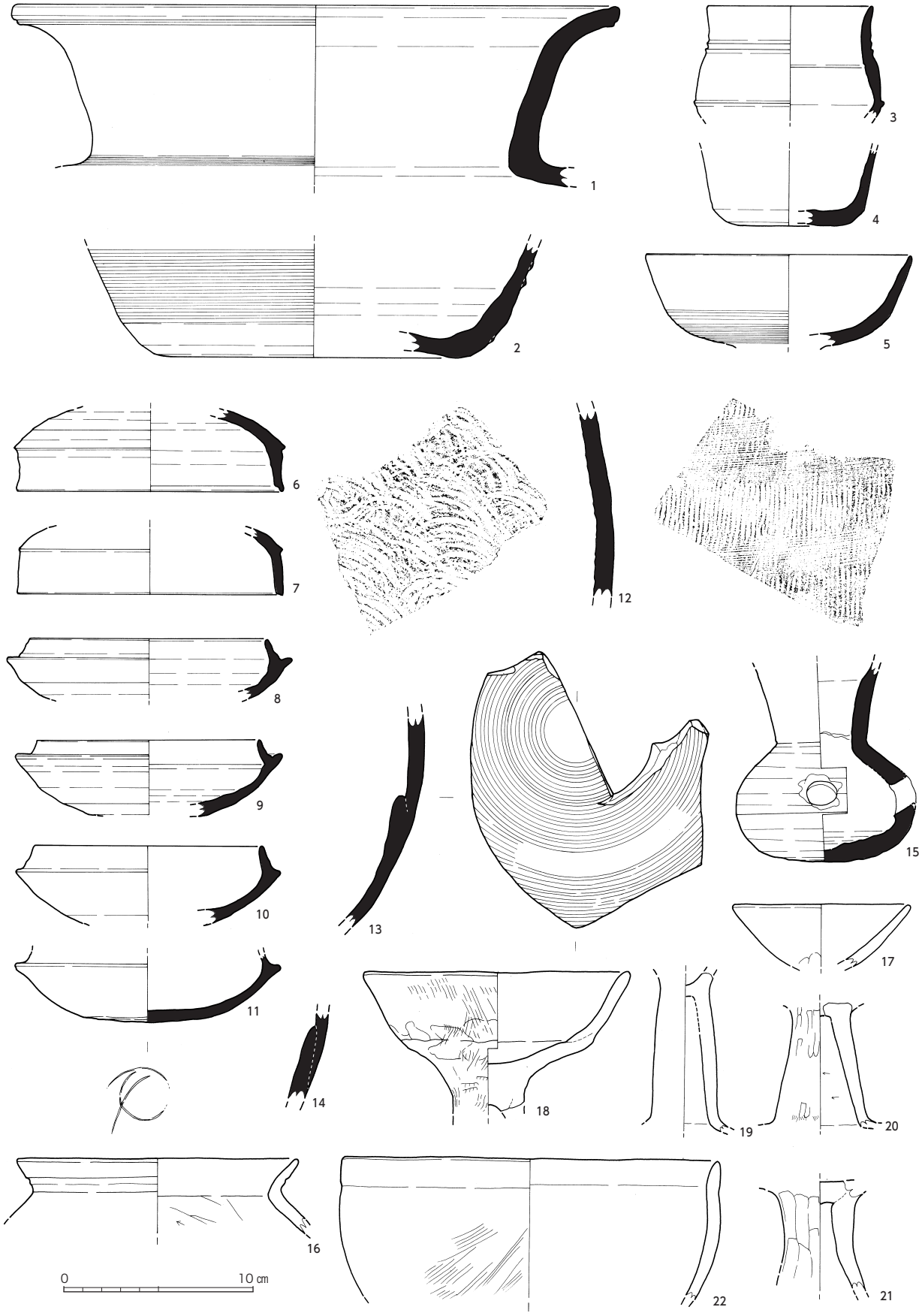


図 254　SD3700 出土遺物（S=1/3）

SD3700（図 251・254）N0.51　幅 380cm程度、深さ 105cm前後を測る幅広の溝である。検出面から 30cm程度は緩やかに傾斜し、以下は傾斜がややきつくなる。埋土は検出面から 30 ～ 40cm前後付近で上層と下層に大別できる。上層・下層ともに地山由来の土壌で、上層ほどシルト質で、下層は礫を多く含む。下層は土器の小片が目立つ。SD3050・SD3120 と概ね同方向に走り、調査区外へ延びる。1 ～ 15 は須恵器で、1・12 は甕、5 は高坏、6・7 は坏蓋、8 ～ 11 は坏身、13・14 は提瓶。16 ～ 22 は土師器。16 は甕、17・22 は鉢、18 ～ 21 は高坏である。7・11・13・22 は下層、5・10 は最下層の出土。埋土から鉄斧と思われる鉄製品が出土している。Ⅲ B 期。

（4）その他の遺構

1）古墳時代中期

SX2421（図 255-257）No.36・37　大型の円形建物 SC7260 の埋土を少し掘削したレベルで、焼土と土器の広がりを確認した。焼土は厚いところで 15cmほどである。焼土には炭化材片も多く含む。遺物は古式土師器で集中する部分もある。比高差 10cmほどの間に見られるが、その後掘削した SD7260 の埋土にも古墳時代の遺物が多く入っており、一連のものと思われる。完形の甕や坏、大きな破片が多い。はっきりとした床面は確認していない。西よりでは床面に相当するレベルには径 25 cmほどに赤変した箇所があり遺構の床面近くに残った可能性がある。1 から 10 は甕、11 ～ 19 は椀または坏。20、21 はミニチュア坏。22、23 は焼土塊でスサの痕跡が見られる。このほか、下層で鉄製刀子（図 264-18）が出土した。

SX3307　SX2421 の南西側を下げる過程で出土した遺物で、古墳時代のものを示す。24 は須恵器の瑳、25 は土師器の壺で内面に粘土接合痕が顕著。26 は坏の底に刻線で十字を描く。27 は小型の深い鉢、26 は小型の坏の底か。古墳中期で SK2421 と近い。

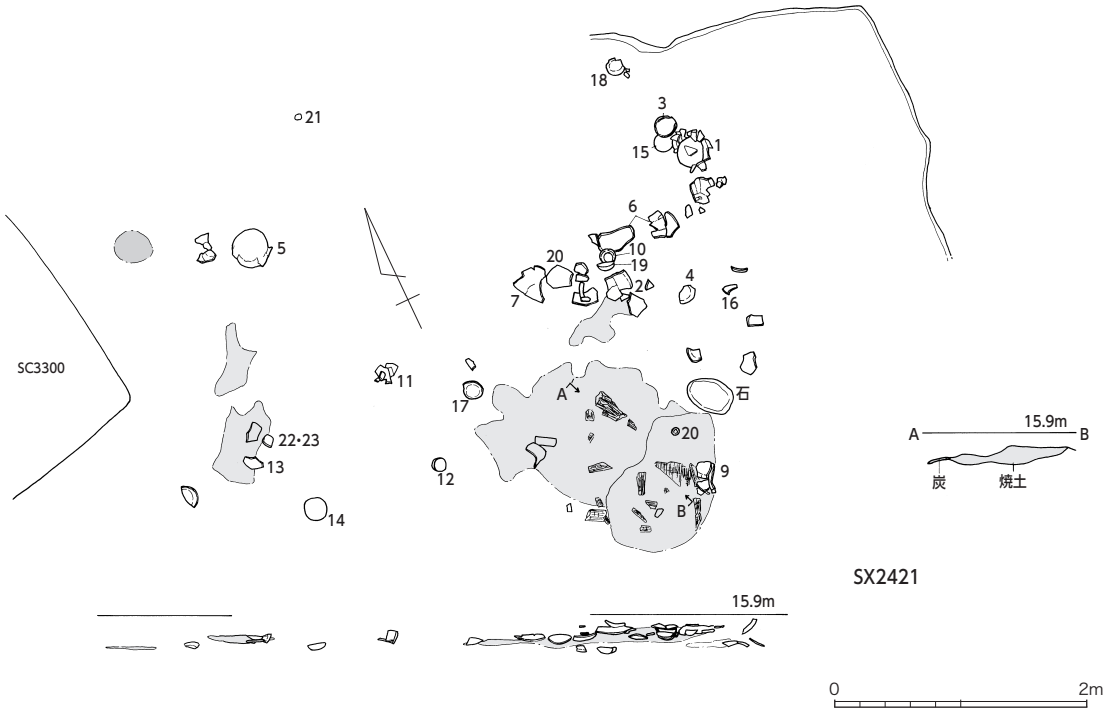


図 255　SX2421（S=1/60）

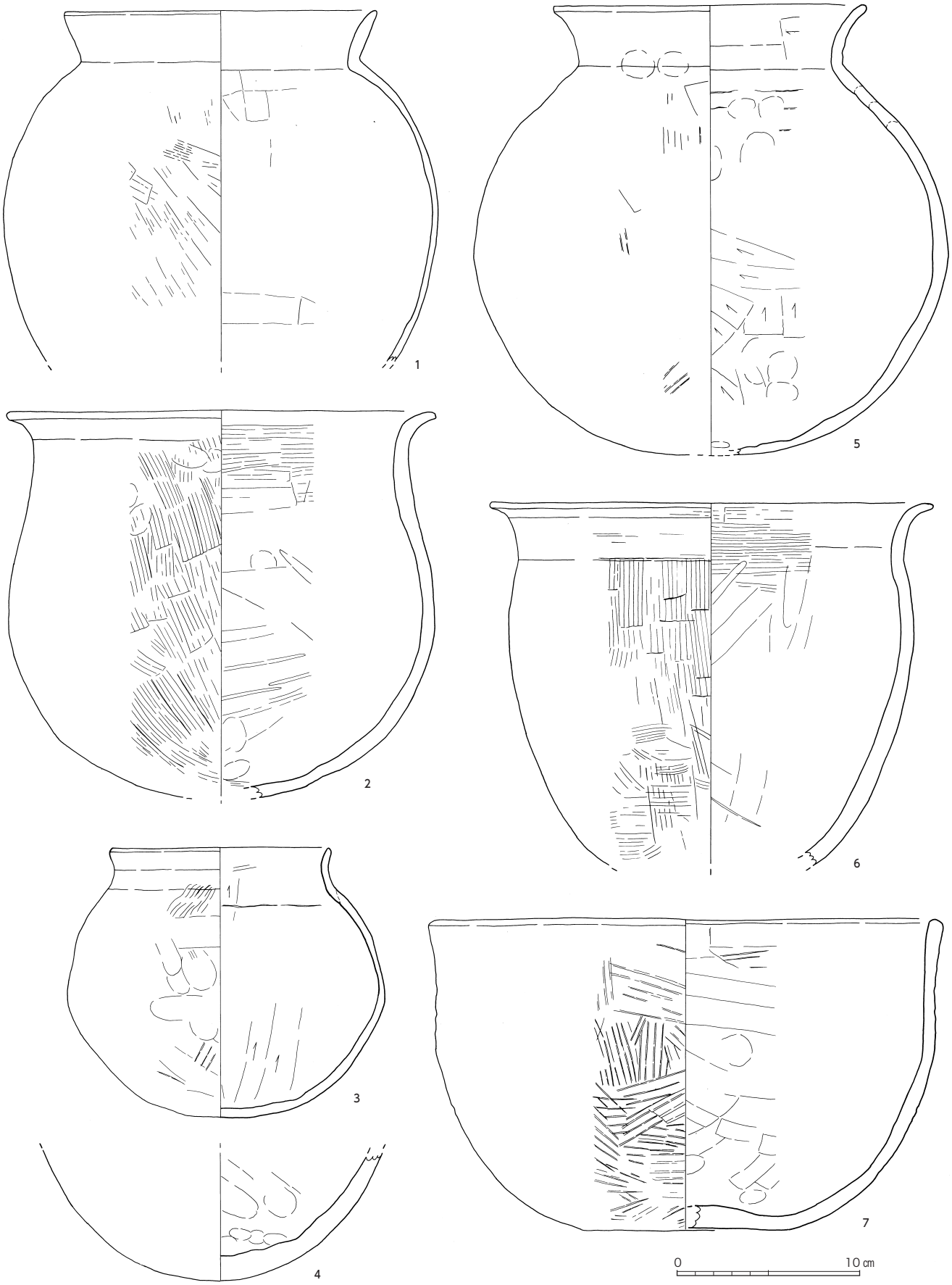


図 256　SX2421 出土遺物（1）（S=1/3）

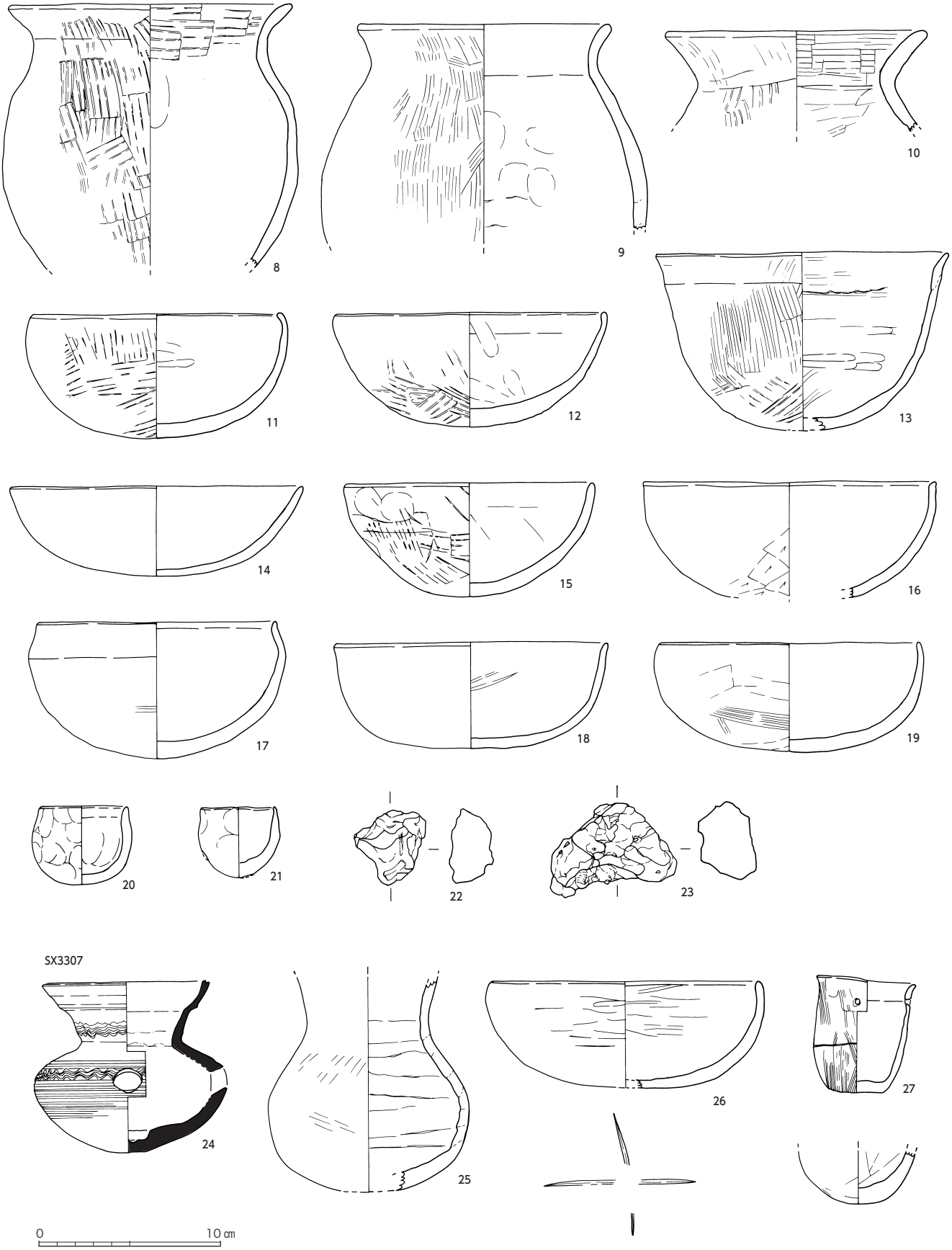


図 257　SX2421 出土遺物（2）（S=1/3）

４. 縄文時代

今回の調査では、遺構面である黄灰褐色シルトおよび礫層から主に後・晩期の遺物を含み、遺構埋土からも出土があった。ここでは出土状況を確認した３か所を縄文期の包含層として取り上げ、加えて後世の遺構等埋土出土の土器を取り上げる。遺構等出土の石器については、次項5.その他の遺物でまとめて示す。

包含層 SX2621(図 258・259) No.15　弥生時代前期の溝状遺構 SD2293 を掘削中にその南東壁に晩期の浅鉢が見られた。このため SD2293 に沿った延長４ｍ、幅１ｍの範囲を縄文時代の包含層として掘削した。この箇所は遺構面から 70㎝ほどが黄茶褐色の粘質シルト１～４層、その下は薄い橙色の鉄分沈着層５層を挟んで青灰色粘質シルト６層、その下は質が異なる砂質土７層が堆積する。１～４層は粘性にやや差があるもが色調は大差ない。このうち茶色粒を含むやや粘質がある２層から少量の晩期の土器が出土した。出土状況はまばらでレベルも一定しない。遺構または安定した包含層ではない。掘削範囲外にも広がるが、その範囲は確認していない。１、２は深鉢の口縁部で、１は外面浅い削り状、内面ヘラなで調整で、２は擦痕が残る。３から６は黒色磨研の浅鉢で、研磨が残るものもあるが器面が荒れている。晩期。

包含層 SX6224（図 259）No.33、34、44　遺構掘削の際に縄文土器の出土が注意され、その周辺の東西７ｍ、南北２～３ｍを遺構面から掘削し比較的密に遺物が出土した。位置は SC1670 西側の床面下で、SK3740 の南付近である。周囲は遺構の掘削で攪乱されており、また時間的に限られた範囲での確認であるためさらに広がると考えられる。出土層位は詳細に記録できていないが、SX2621 と同様の黄灰褐色粘質シルトで、遺物が出土する範囲は 10 ～ 15㎝の比高差内である。またその高さは西側が低く、東端と西端で 10 ～ 15㎝の差がある。地形に沿って堆積した状況であろうか。出土位置を記録して取り上げた点数は 174 点である。このうち 11 点が黒曜石でほかは土器片である。黒曜石はそのほかに 12 点あり計 23 点ほどである。７から 17 は深鉢で横方向の削り状の調整があるものを主とする。18 から 24 は精製の浅鉢で研磨調整が比較的残る。25 から 29 は底部で 26 は浅鉢か。30 は黒曜石の石錐で先端は欠ける。黒曜石は縦長剥片などが出土している。

包含層 SX7179（図 259）No.76　遺構検出中に条痕紋土器が出土したため周囲 1.5 ｍ四方を掘削した。遺物は同一個体と考えられる条痕文土器片が径 30㎝ほどに固まって出土した。細かく割れて接合したものは一部である。31 がそのうちの１片で外面を条痕の後になでる。淡黄褐色で器面に気泡がみられる。

遺構埋土出土の縄文土器（図 260）　遺構の埋土や、壁面に縄文土器が散見された。礫層から出土したものもある。32 から 36 は胎土に滑石を含む阿高式系。32、33 は凹を描くが天地左右不明。34 は浅い小さな列点を施す。天地不明。35 は胴部に、36 は底部外面に凹点を刻む。以上後期前半期か。37、38 は口縁部の内外に太めの沈線文を施す。37 はわずかに山形気味である。北久根山式か。39 から 43 は浅鉢で晩期。39 は山形の口縁部外面に山形および横方向の沈線を施す。胎土精良。40 は口縁部にリボン状がつく。44 から 46 は外面に横方向の条痕を施す深鉢。47 から 53 は深鉢の底部で 50 は底上がり縁が高台状を呈す。内面に条痕がみられる。53 は外面黒褐色で研磨を施し、内面はなで上げる。復元的に反転した。このほかに図示していないが刻目突帯文土器が微量出土している。石器は次節 5.その他の遺物の石器の項で触れる。

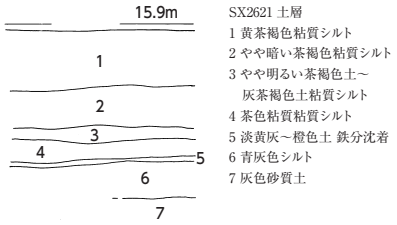


図 258　包含層 SX2621 土層（S=1/40）

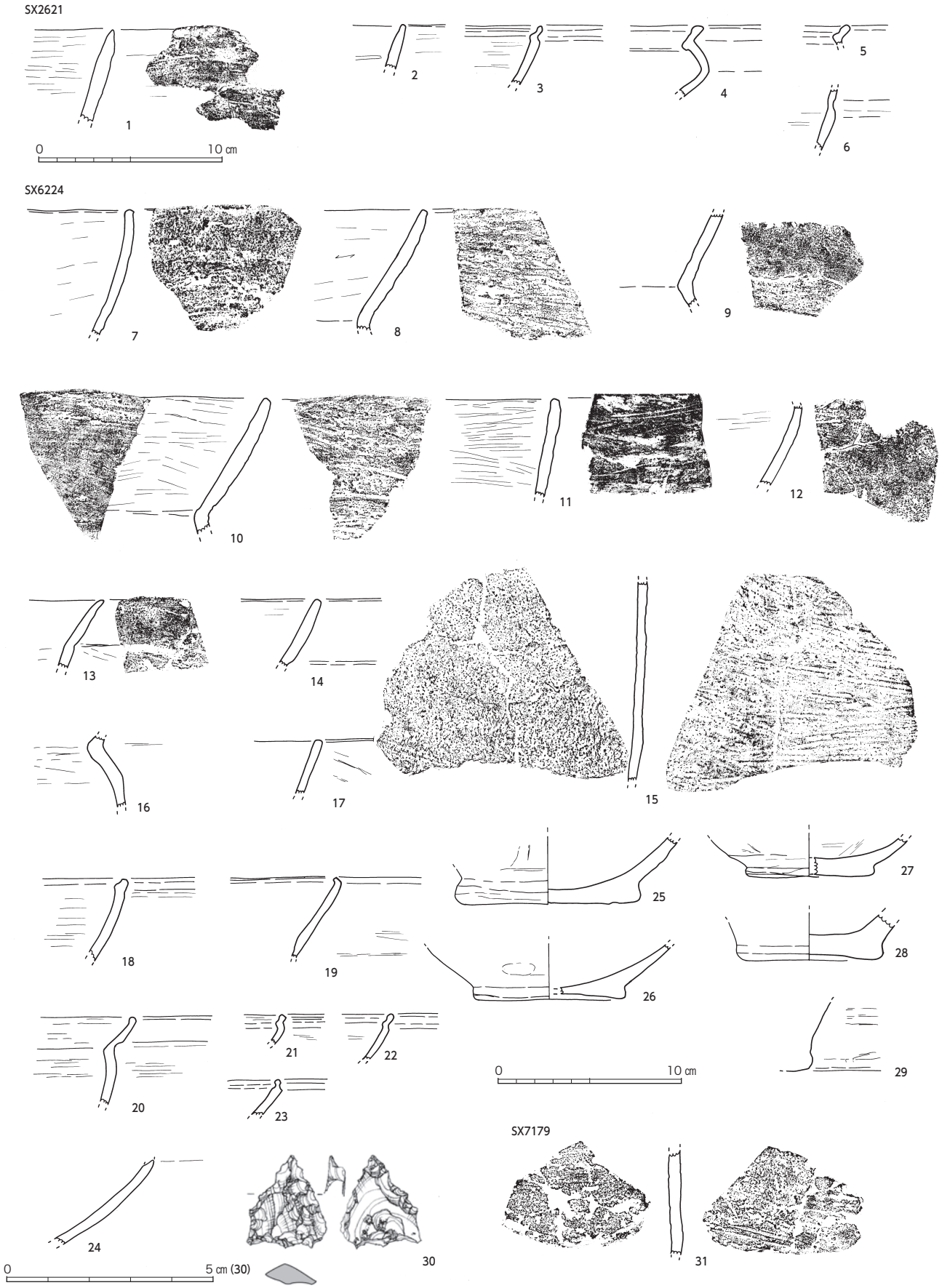


図 259　包含層 SX2621・SX6224・SX7179 出土遺物（S=1/3・S=3/4）

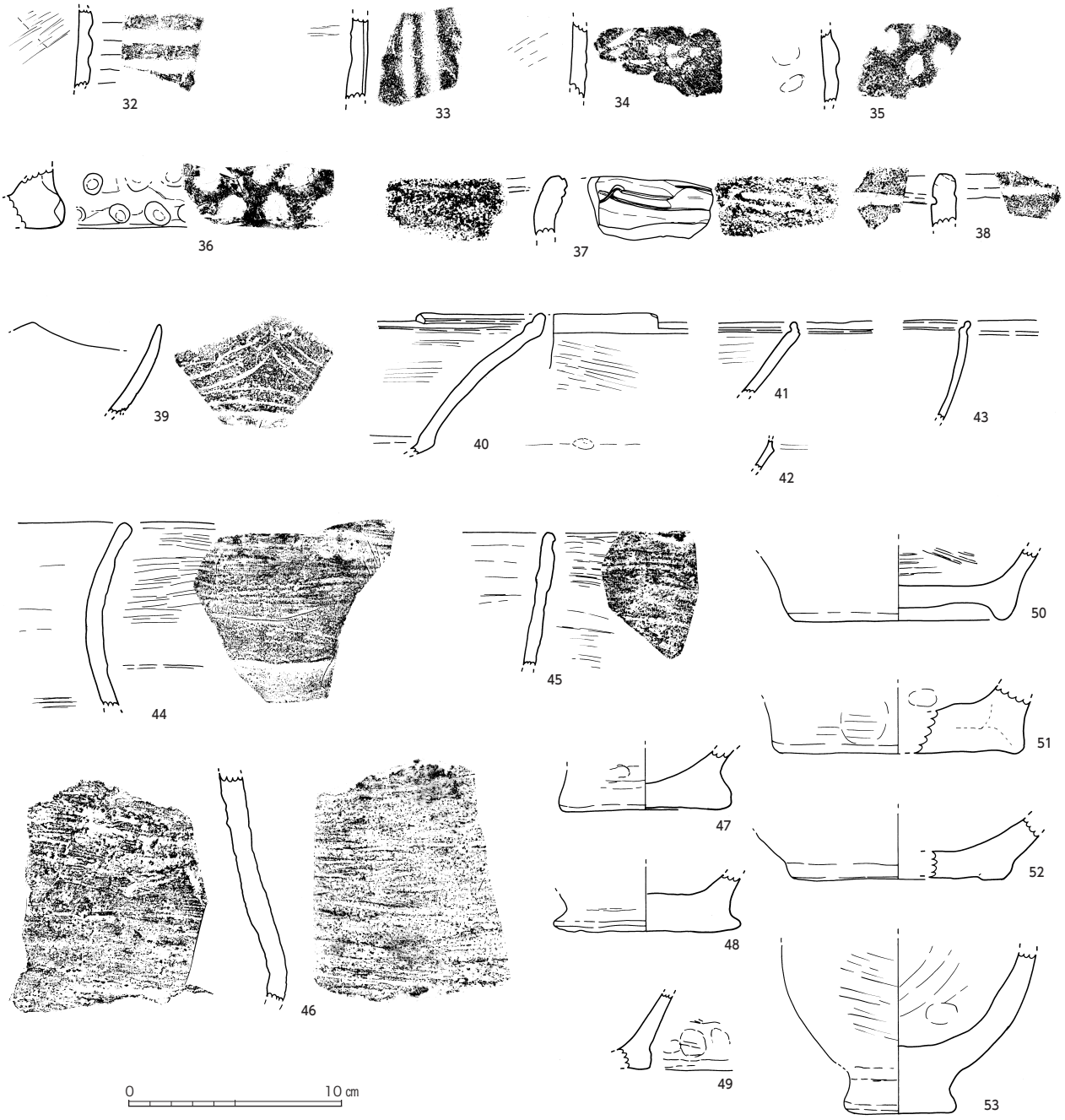


図 260　遺構埋土出土の縄文土器（S=1/3）

５．その他の遺物

これまでの節で遺構出土の遺物を示したが、最後に今回報告した遺構以外から出土した遺物を取り上げる。埋土出土で遺構に伴わないもの、また不明のもの、割付の都合等で示していないもの等を含む。出土位置、重量等を表に示す。

玉類（図 261） 石、ガラス、土製の玉類が遺構埋土、包含層から出土した。いずれも弥生後期以降で古墳時代のものが多いと思われる。滑石は製品のほか、未製品（方形チップ）、割石材片、屑が出土している（表３参照）。時期は古墳時代後期が主体である。とくに SD3700 以西に集中し、SC5362・SC6300 からの出土が際立つ。SC6300 は床面に割材や未製品が広がる。

土製品（図 262） 土製品は出土遺物の総量と比べると少ない。目立つ資料は図に取り上げている。１は土錘で縦に溝を入れる。石錘を含めて漁労具は少ない。２な紡錘車としては穿孔部が中心からずれる。４は不整形の土版状に穿孔する。胎土精良で器面摩耗。６は土製の杓子。７から 29 は投弾。いずれも胎土が細かく砂粒を含まない。出土位置は分散する。13 は半分に割れた断面が強い熱によりガラス化している。

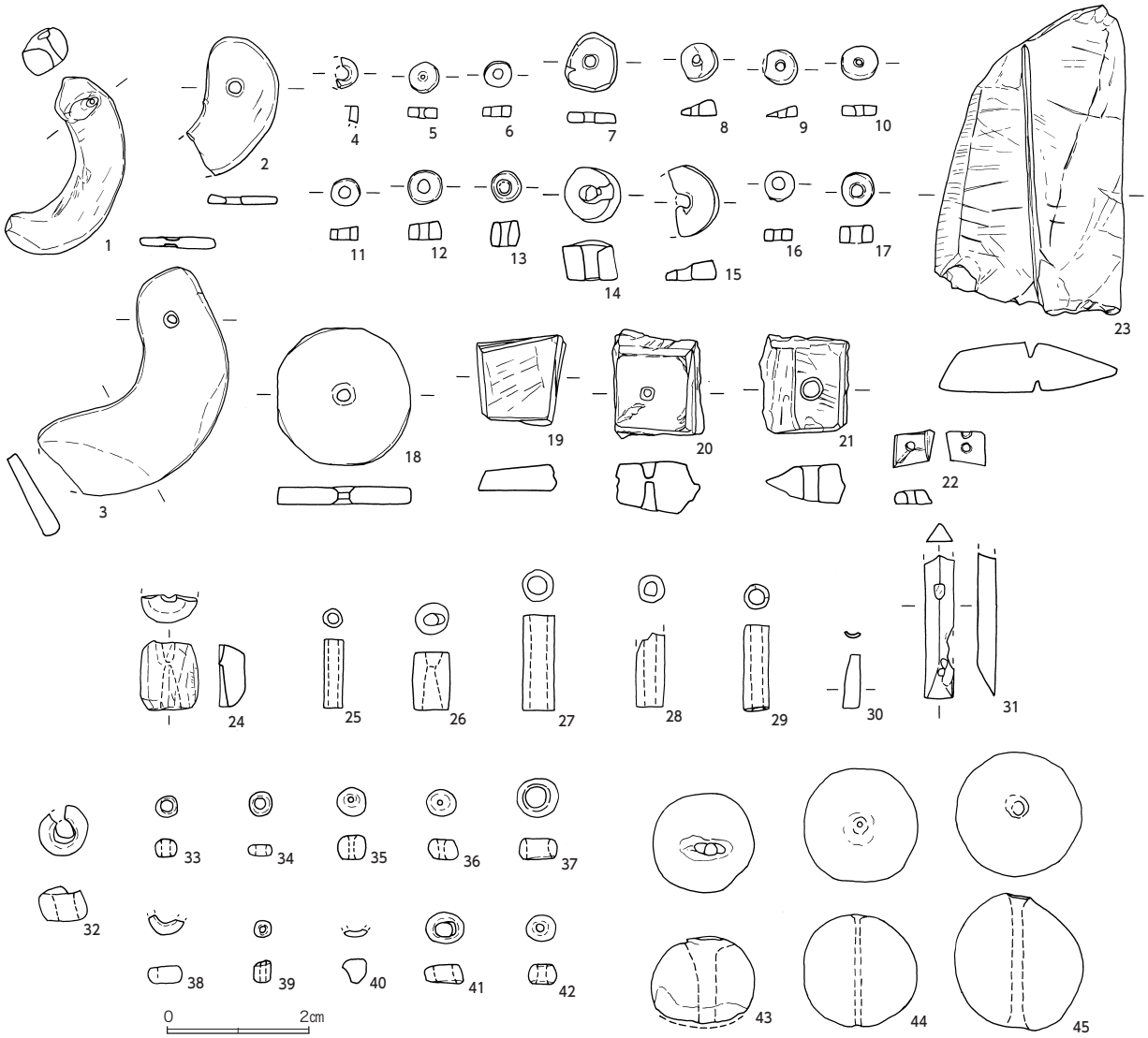


図 261　玉類（S=S=1/1）

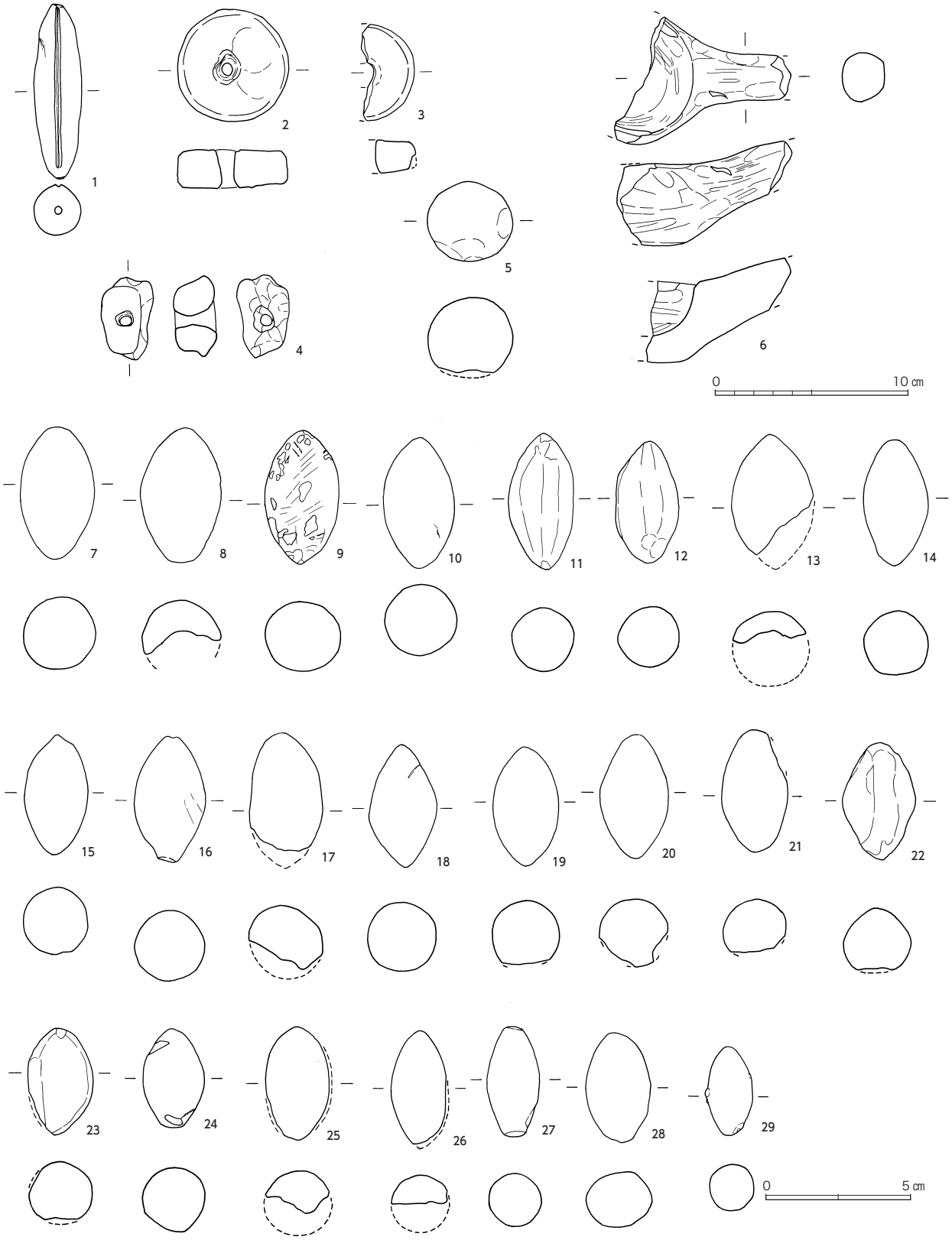


図 262　土製品（S=1/3・S=1/2）

鉄製品（図 263･264） 計 57 点出土し、23 点図化した。鉄斧、鉈、鉄鎌、刀子などの農工具が中心である。鉄鏃や大刀片などの武器もわずかに確認できる。鉄鏃は竪穴建物、大刀片は古墳中期の包含層 SX254 からの出土である。このほか、厚さ 5㎜程度の方形板状や、塊状の鉄製品の出土がやや目立つ。遺構に伴うものは、SC3301 出土の鉄鏃 22 などがある。

1 から 4 は袋状鉄斧。肉眼観察、X 線写真ともに、銹化で袋の折り返し部分や断面の確認が難しい。1 は袋基部から刃部にかけて緩やかなくびれをもつ。残存長 7.2㎝、刃部幅 4.0㎝、袋部幅 3.5㎝を測る。2 は残存長 4.2㎝、刃部幅 4.2㎝。3 は基部端の一部を欠くが、ほぼ完形。長さ 8.8㎝、刃部幅 3.3㎝、基部幅 2.2㎝を測る。4 は残存長 10.1㎝、刃部幅 5.2㎝、袋部幅 4.1㎝を測る。銹化で袋部折り返しは不詳である。5 から 9 は平面方形板状の鉄製品で、一部は鉄斧も含むか。図化していない資料にも同様なものがいくつかある。10 から 12 は鉈。10 は残存長 7㎝、幅 1.9㎝、厚さ 2㎜を測る。裏両側面を中心に木質が付着する。断面弧状を呈する。11 は残存長さ 8.8㎝、幅 1.1㎝を測る。12 は残存長 14.9㎝、幅 1.4㎝、刃部長さ 2.3㎝で、裏面に木質が付着する。13・14 は鎌。14 の基部折り返し部分表面には有機質と思われる痕跡がある。基部幅 4㎝を測る。15 から 19 は刀子。20 から 22 は鉄鏃で、20 は茎部片、21・22 は平根式である。21 は残存長 5.1㎝、最大幅 2.3㎝、最大厚さ 4㎜を測る。肉眼観察では不詳だが、X 線写真で 2 か所の穿孔が確認できる。22 は残存長 7.4㎝、幅 2.7㎝、厚さ 2㎜程度を測る。断面縦方向に湾曲する。23 は断面円形の棒状鉄製品である。

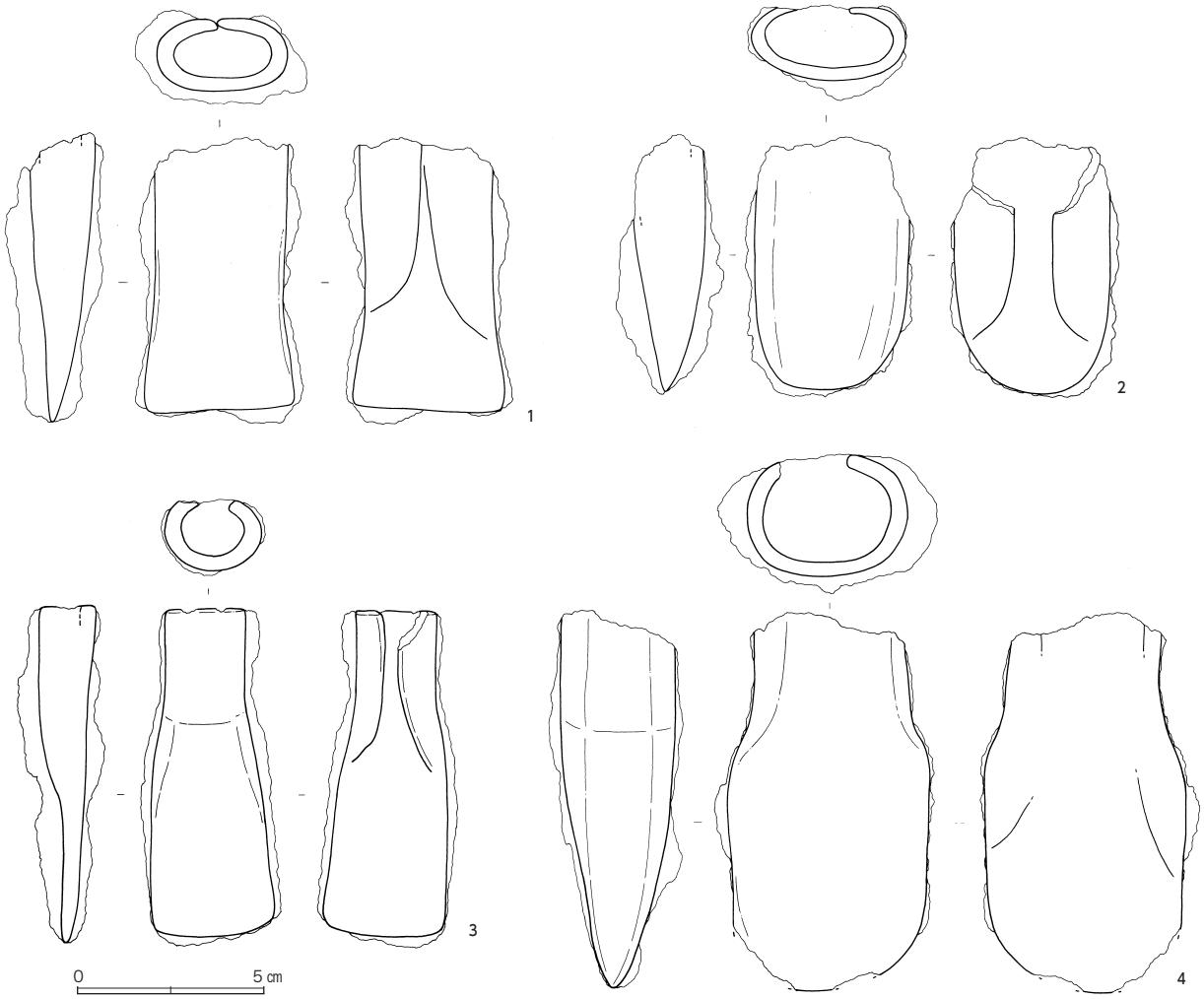


図 263　鉄製品（1）（S=1/2）

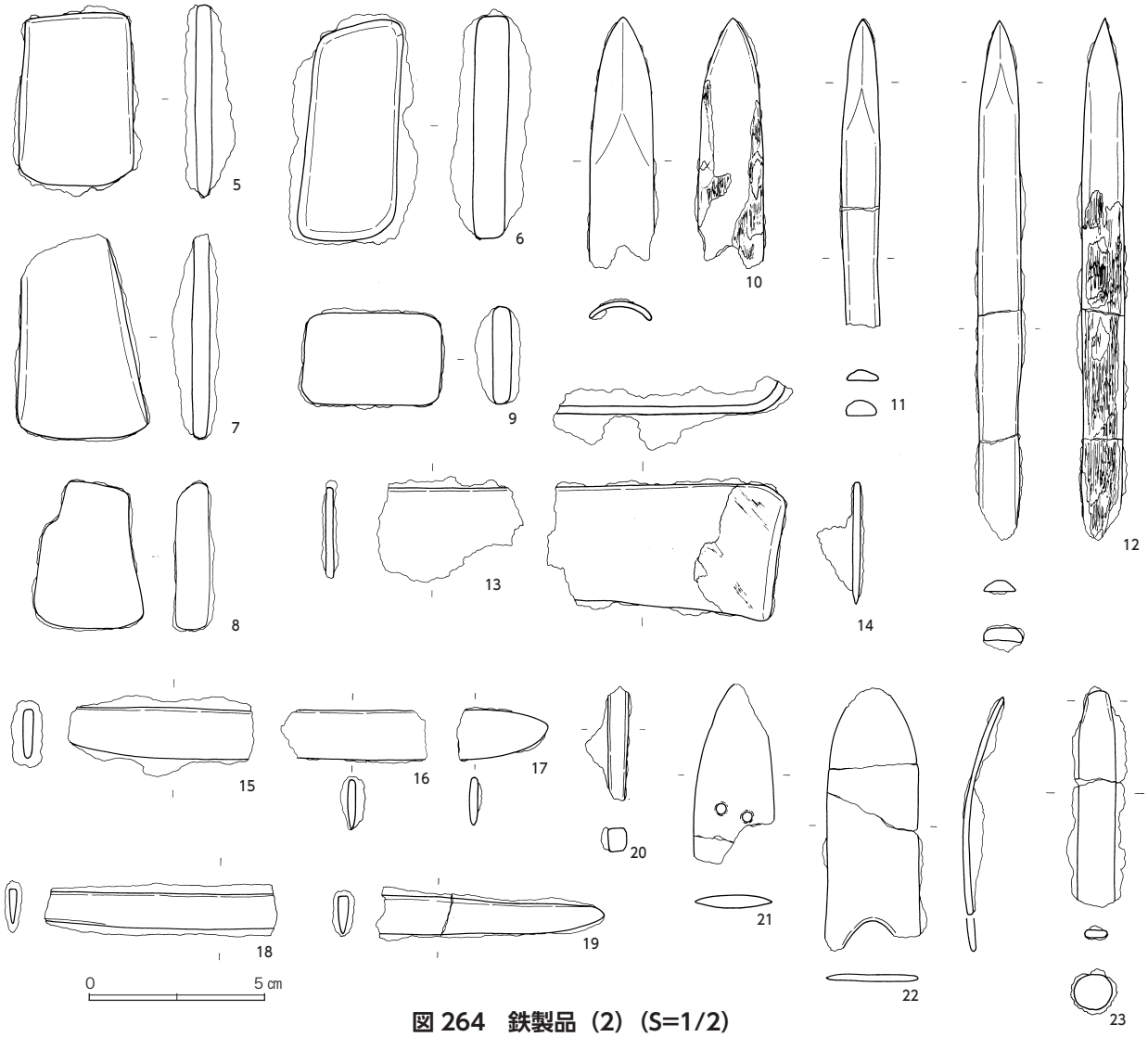


図 264　鉄製品（2）（S=1/2）

石器・石製品（図 265 ～ 275）　黒曜石を主とする剥片石器、縄文時代の石斧類、弥生時代の磨製石器類、各時代の砥石、台石類、叩き石・すり石類、その他がある。特に大陸系磨製石器は多く出土し今回の調査を特徴づけるものとして図化に努めた。一方、各時期の砥石はごく一部図化したのみで、台石類や叩き石類は図化、検討できていない。

表 1

	黒曜石	古銅輝石安山岩
石鏃	31	6
石鏃未成品	55	1
錐	6	1
削器	64	9
掻器	34	1
彫器	1	
楔形石器	1	

剥片石器（図 265･266）は黒曜石と古銅輝石安山岩の石器が出土し、そのほとんどが黒曜石である。剥片、砕片を含めた総数は黒曜石 3748 点、古銅輝石安山岩 56 点、ハリ質安山岩 6 点である。姫島産と考えられる黒曜石が 2 点みられる。剥片石器類について詳細な検討はできていない。石鏃、刃器類等の製品の一部を図示したが、器形の全容など示せていない。石鏃の中には基部に深い抉りが入るものもあり後期を遡る可能性もある。また黒曜石の小円礫の原石が 1 点みられる。石鏃、削器などに縄文期のものが目立つが、弥生時代のものを含む。多く出土した剥片、砕片は弥生期のものを多く含むと思われる。石斧等のうち縄文時代のものと考えられるものを図 267 に集めた。52、53 が遺構面である黄灰褐色シルト出土のほかは遺構埋土の混入である。

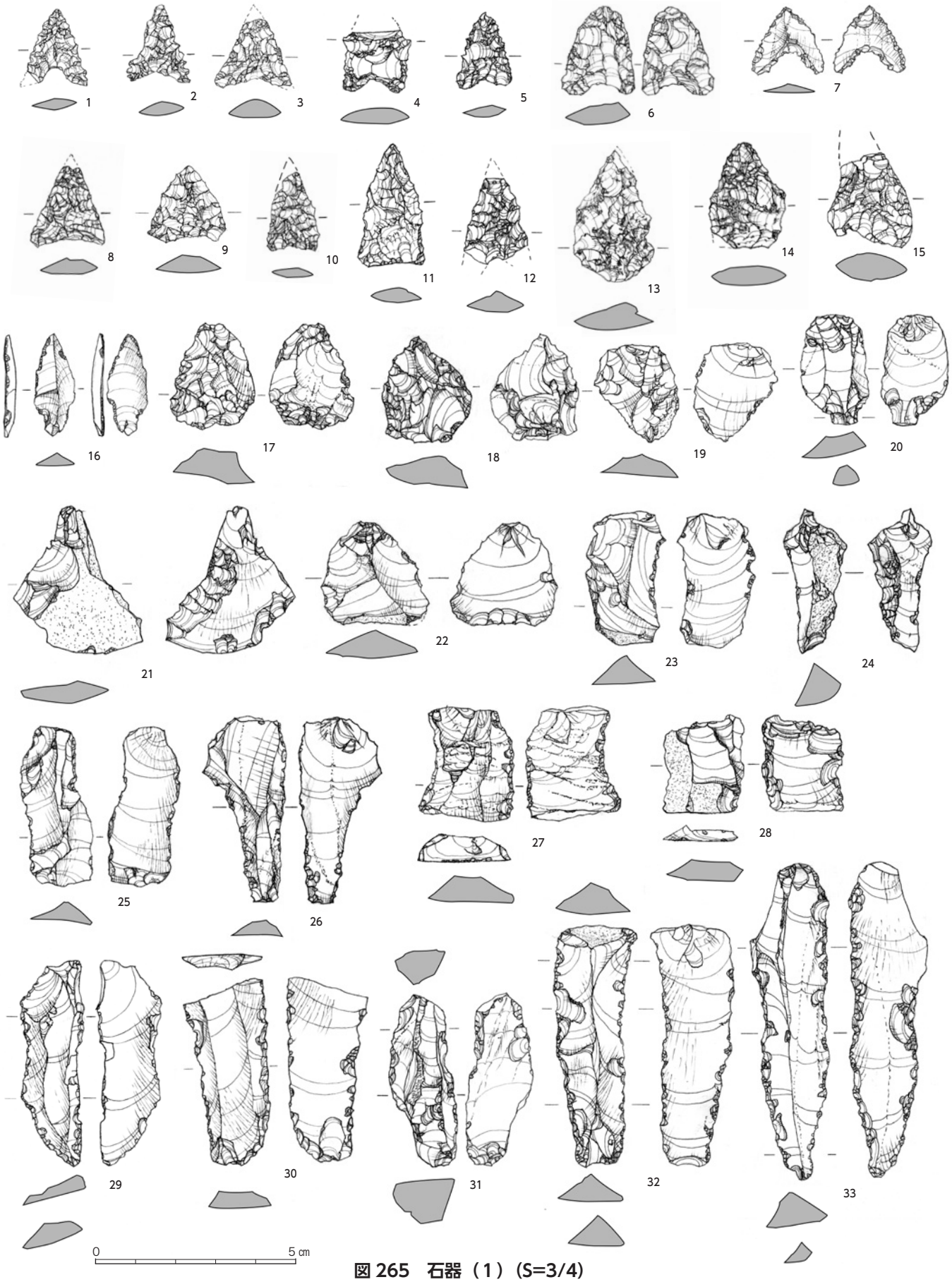

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
5 cm

図 265　石器（1）（S=3/4）

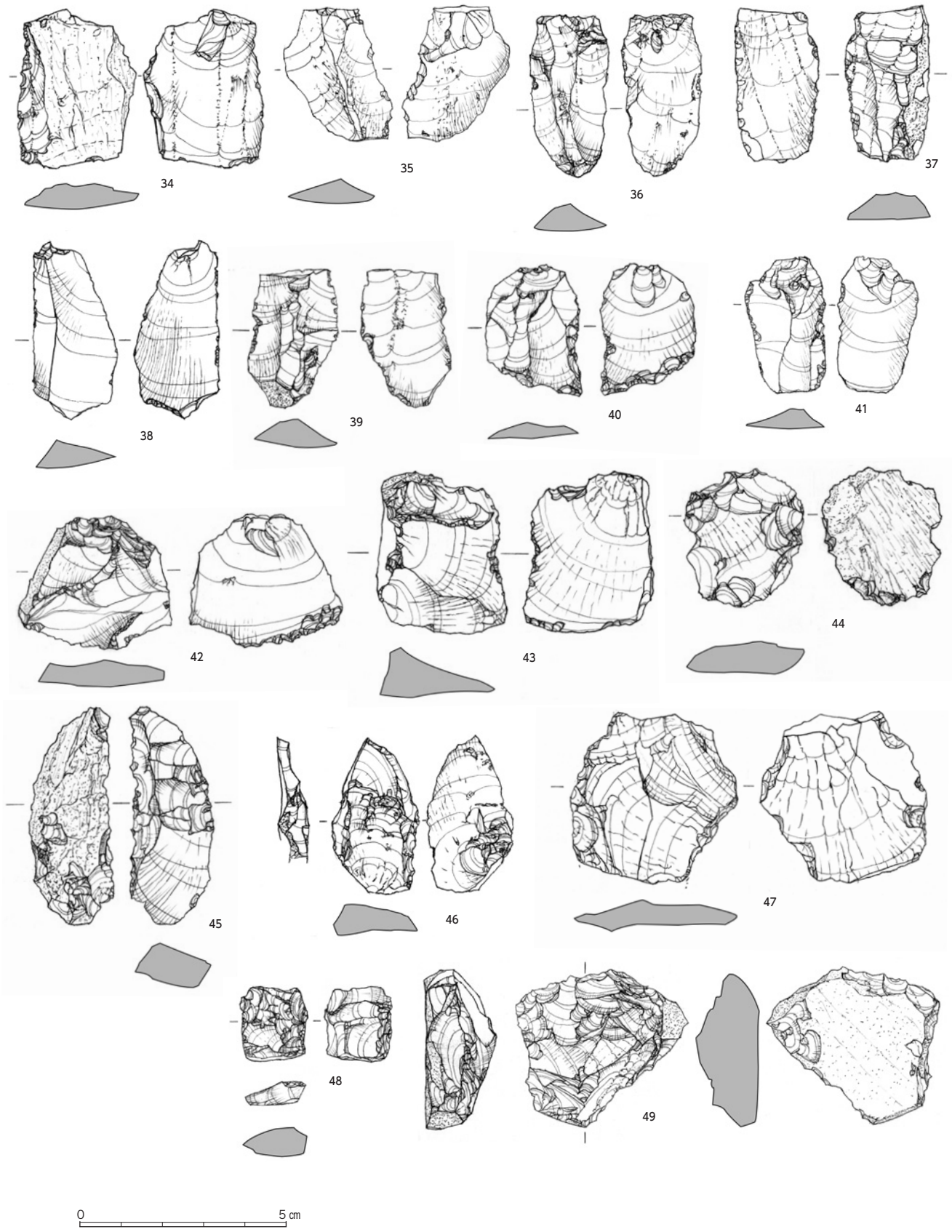


図 266　石器（2）（S=3/4）

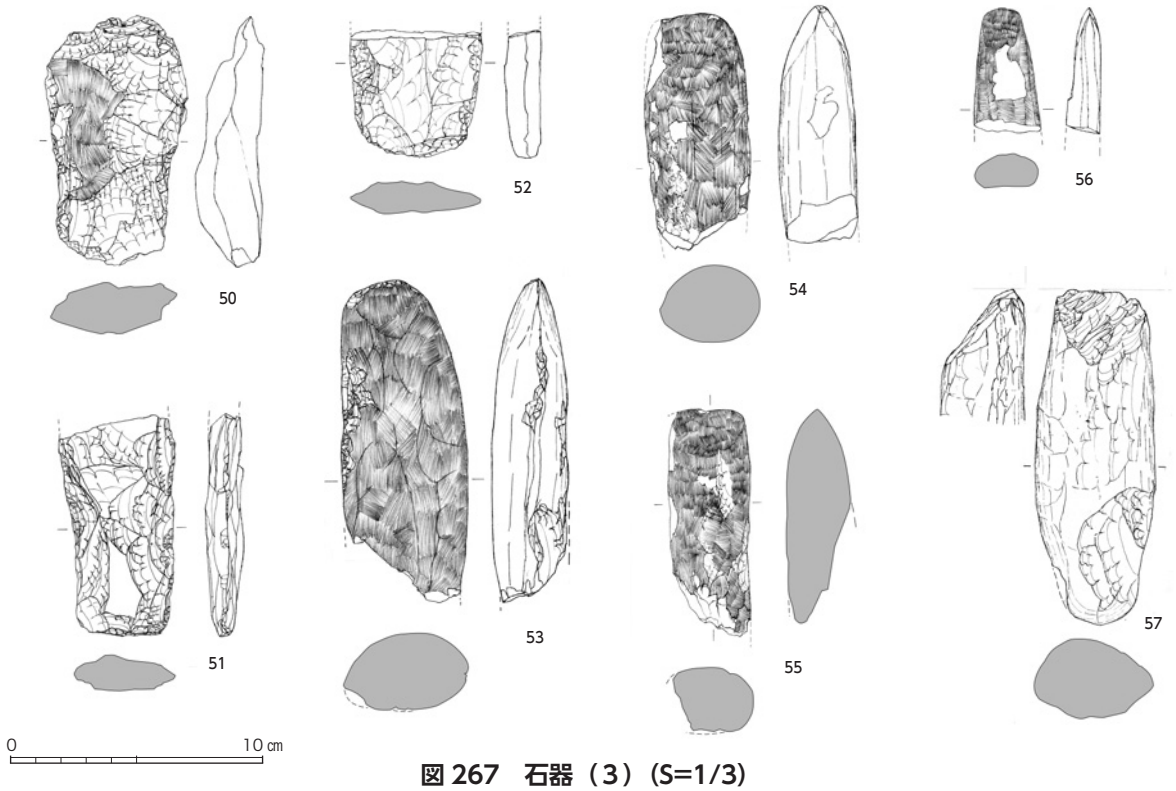


図 267　石器（3）(S=1/3)

弥生時代の磨製石器（石包丁、磨製石鏃、石剣、石戈、石鎌、石斧）は、ある程度の大きさも物は数点を除いて図、表に示した。図化していない小片を含めた数（図掲載数）は石包丁 136(94)、石剣 55（33)、磨製石鏃 15（15)、石戈 5（4)、石鎌 6（5)、蛤刃石斧 59（29)、扁平片刃石斧 43（25)、方柱状片刃石斧 10（12）である。分類は不確かなものを含む。表などの石材名称については近年の動向に合わせたが、認識不足や不確かなものもある。また時期別の検討はできていない。石包丁は菫青石 Hf と小豆色泥岩（立岩系）のものがほとんどで、それぞれの数は同様である。少ないが小豆色泥岩の未製品がみられる。磨製石鏃、石剣、扁平片刃石斧、方柱状片刃石斧には層灰岩が加わる。蛤刃石斧は今山産と考えられる太型蛤刃石斧が 45+ α で主体を占める。ほかに穿孔具と思われる砂岩製の石器が２点ある。

このほかの石器は遺構の項で取り上げたもの以外は時期を示せない。紡錘車は７点すべて図に示した。そのうち滑石製が５点である。各時代のものを合わせた数で土製と合わせても多くはない。石錘は礫の一部を打ち欠いたものがほとんどで 11 点ほどである。図 274-229 のように打ち欠き以外の加工をなすものは他に見られない。これも土製品と合わせても少ない。砥石は 13 点を示したが、大小の破片もあわせて 220 点を数える。その中には図 114-26、図 275-233 から 235 のような薄手の板状のもの、厚さ 1、2㎝程の板状のもの、方柱状で複数砥面が形成され多面体を成すもの、大型礫を使用するものなど多様な形態のものがあり、全体を示せていない。石材は砂岩、凝灰岩質のものが多い。また竪穴建物に据え置いたと考えられるものもある。243 は砂岩製の石製品で、アーチ状の脚部を研磨で成形する。支脚としたが火を受けた痕跡はない。244 は板状の自然石で側片の１片は平滑に磨き成形し、各辺の一部をくぼませた様な箇所がある。上部には赤茶色の２本の線を描き一周する。岩偶状にも見える。このほかに図示できていないものに敲打器（15)、磨石（34)、くぼみ石（2)、石皿（11)、台石（43）がある（総数)。磨石の中には磨面の減りが大きく成形されたようなものもあり、ほかの用途も想定される。いずれにしても多くの石器を検討、提示することができなかった。

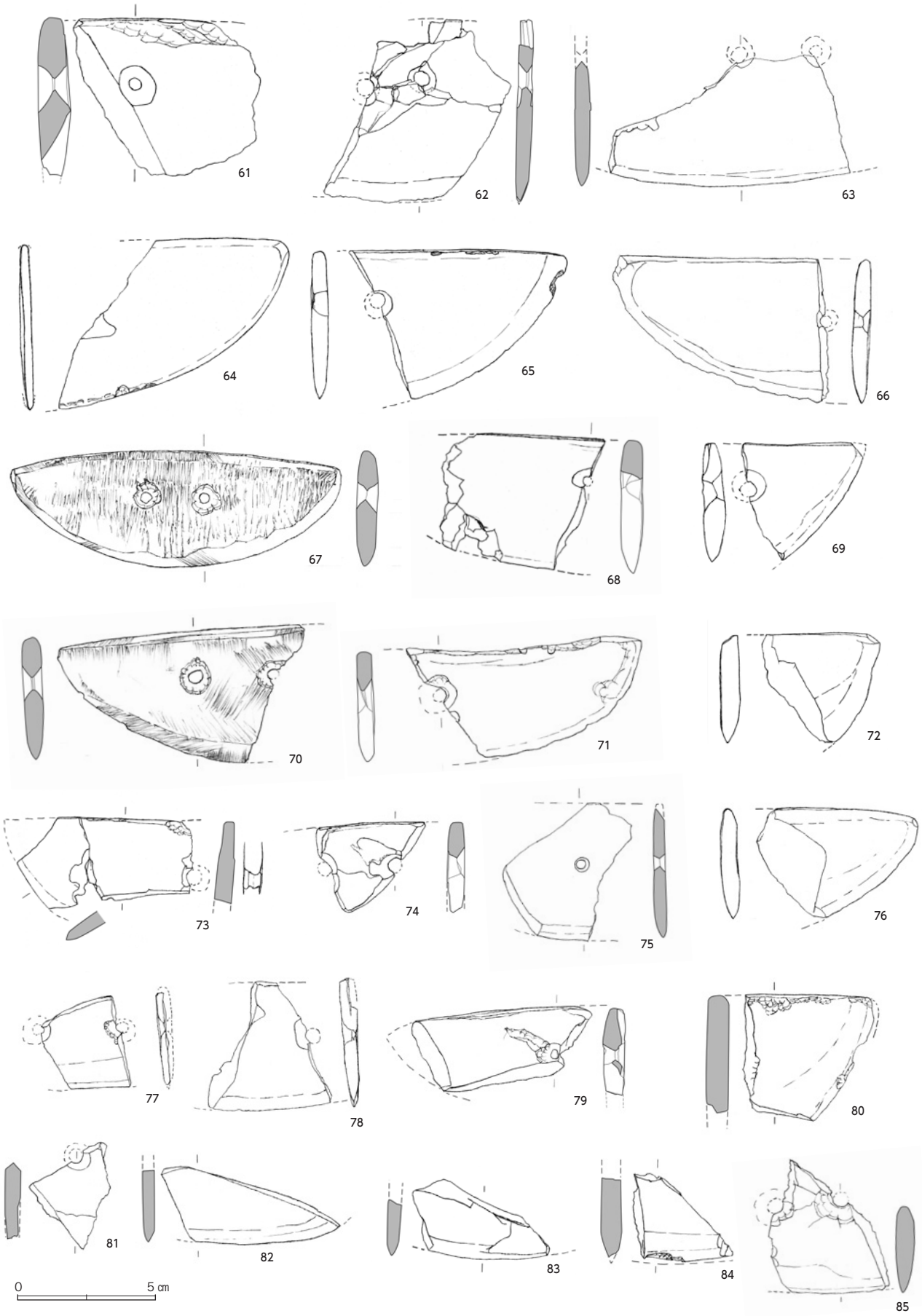

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0
5 cm

図 268　石器（4）（S=1/2）

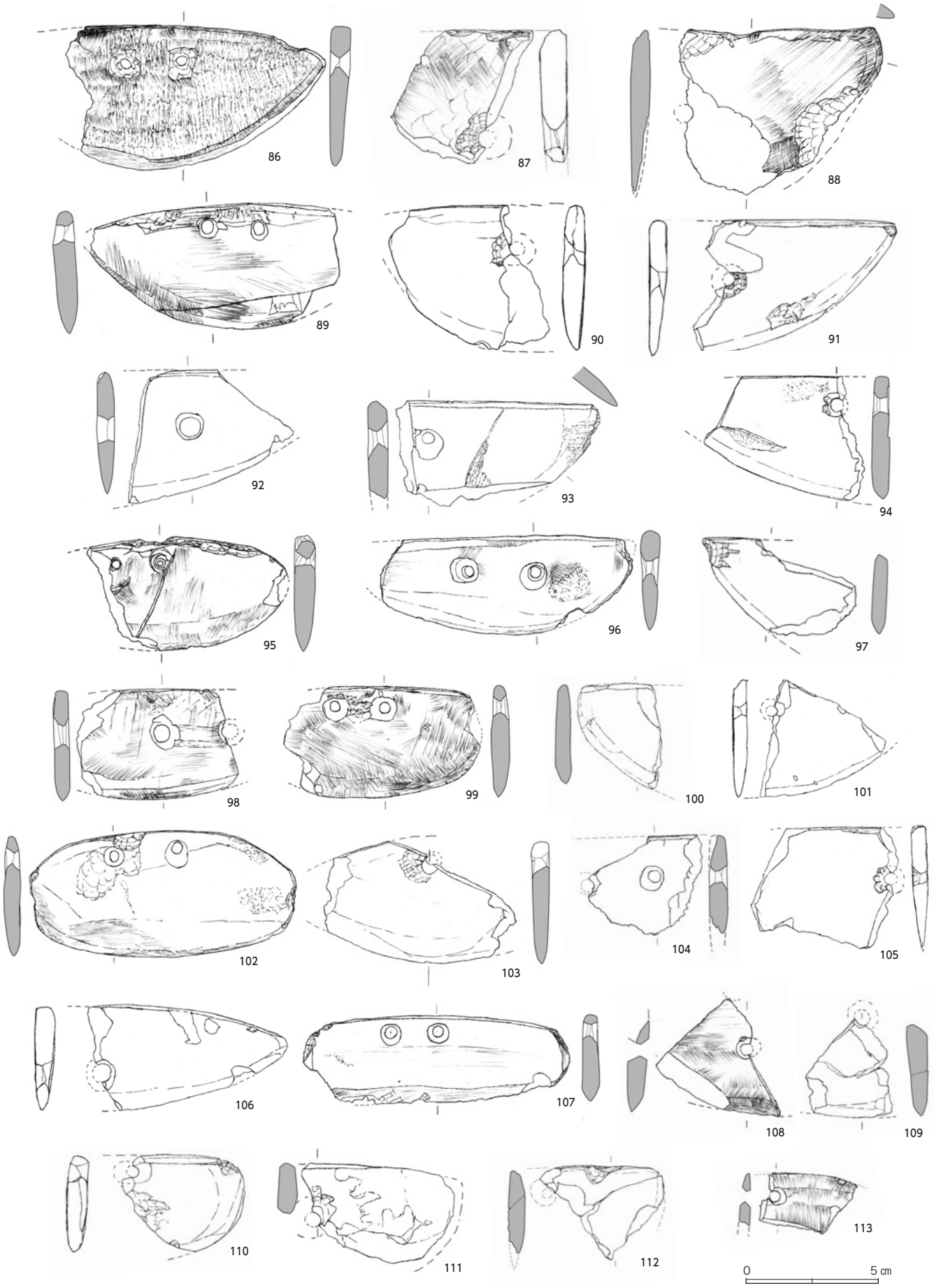

86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
0
5 cm

図 269　石器（5）（S=1/2）

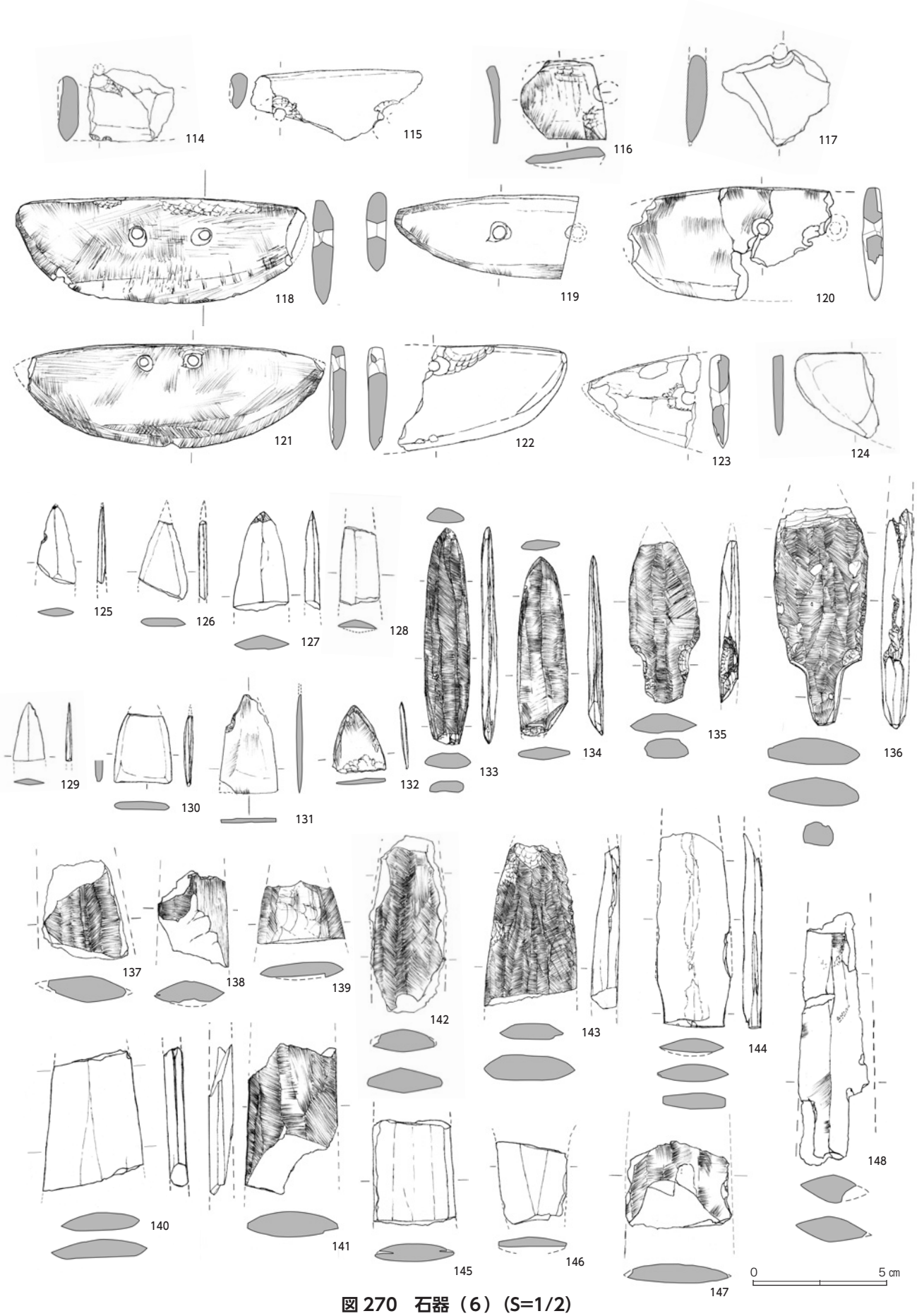

114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
0
5 cm

図 270　石器（6）（S=1/2）

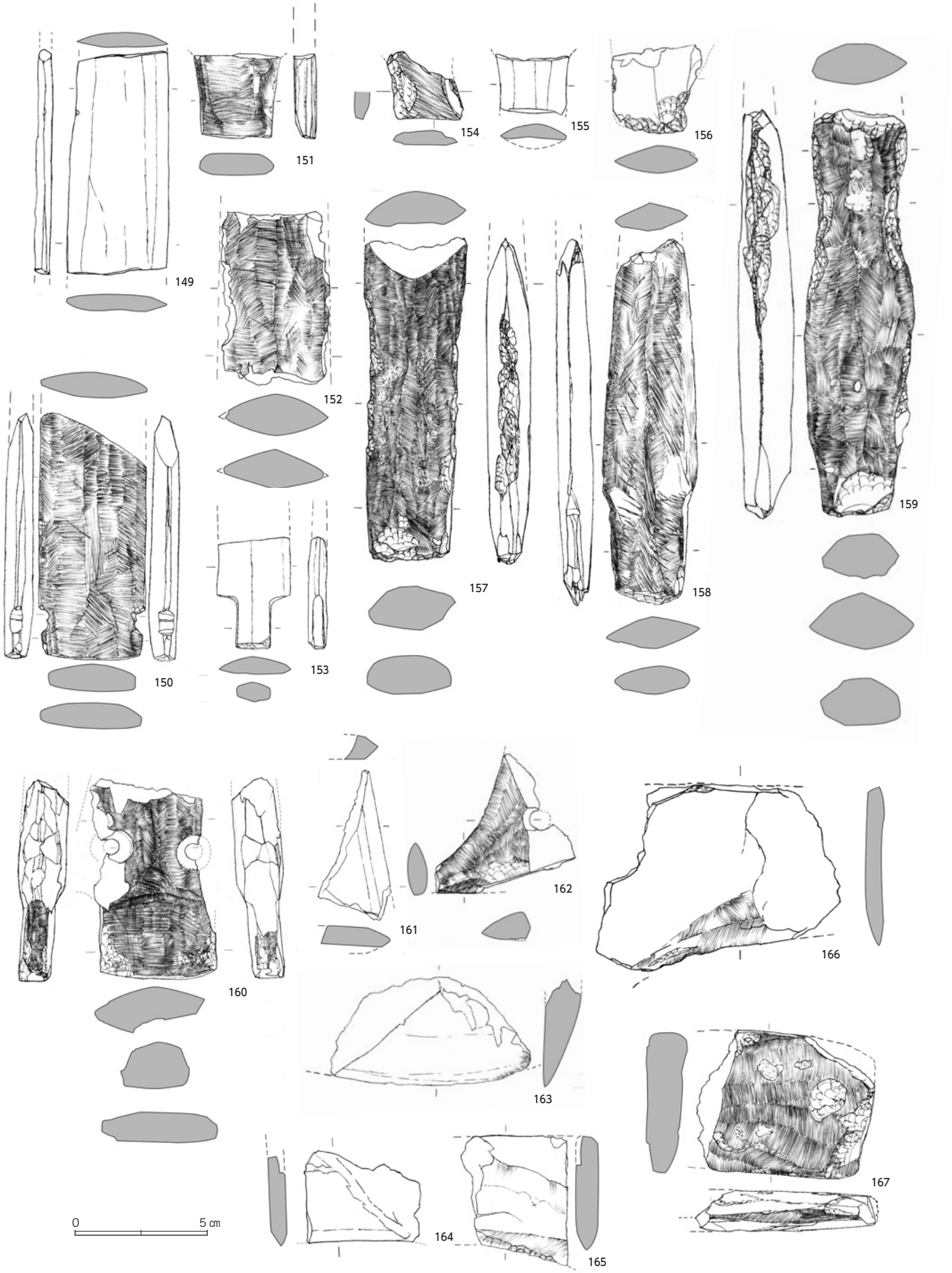

149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
0
5 cm

図 271　石器（7）（S=1/2）

168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
0
10 cm

図 272　石器（8）（S=1/3）

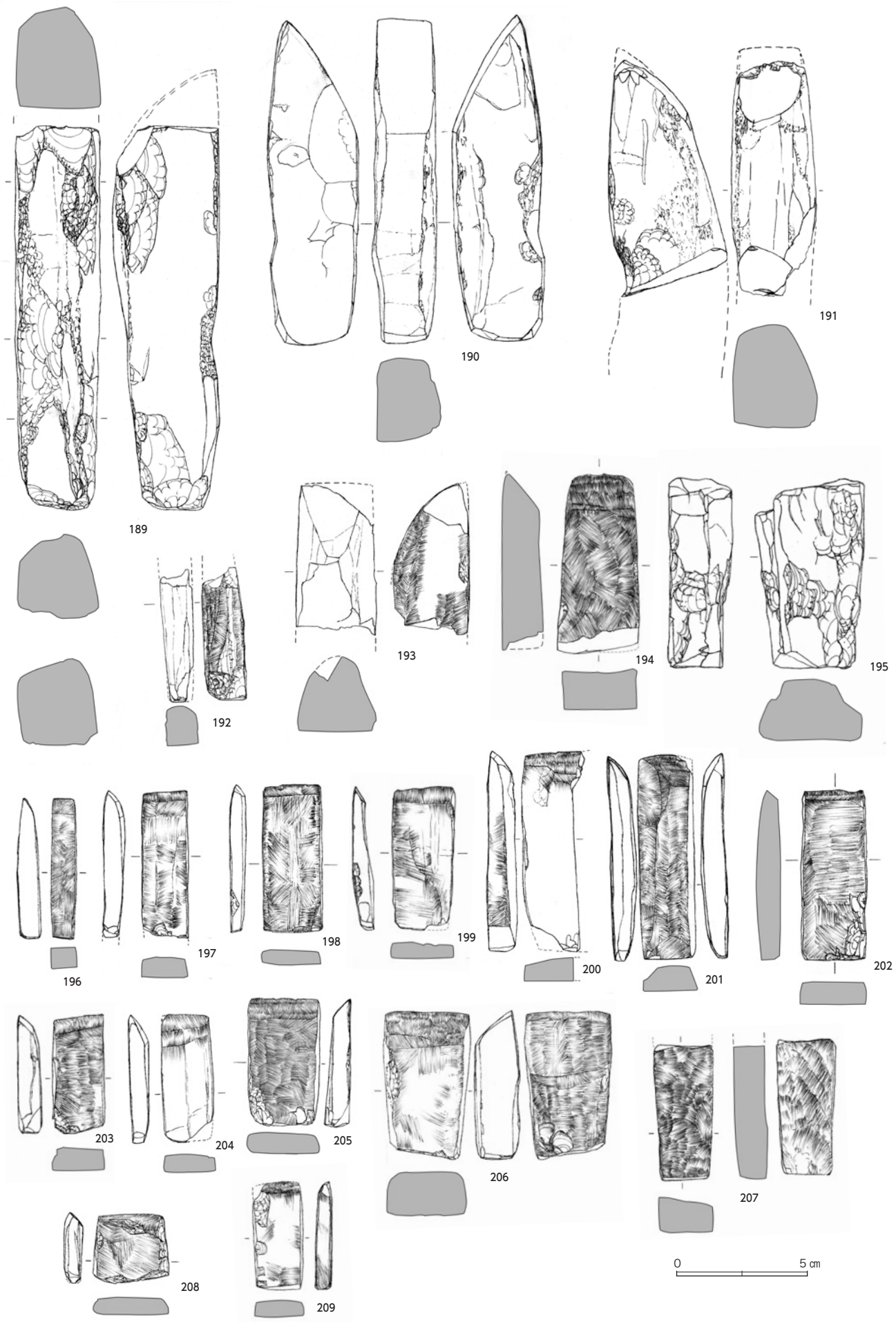

189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
0
5 cm

図 273　石器（9）（S=1/2）

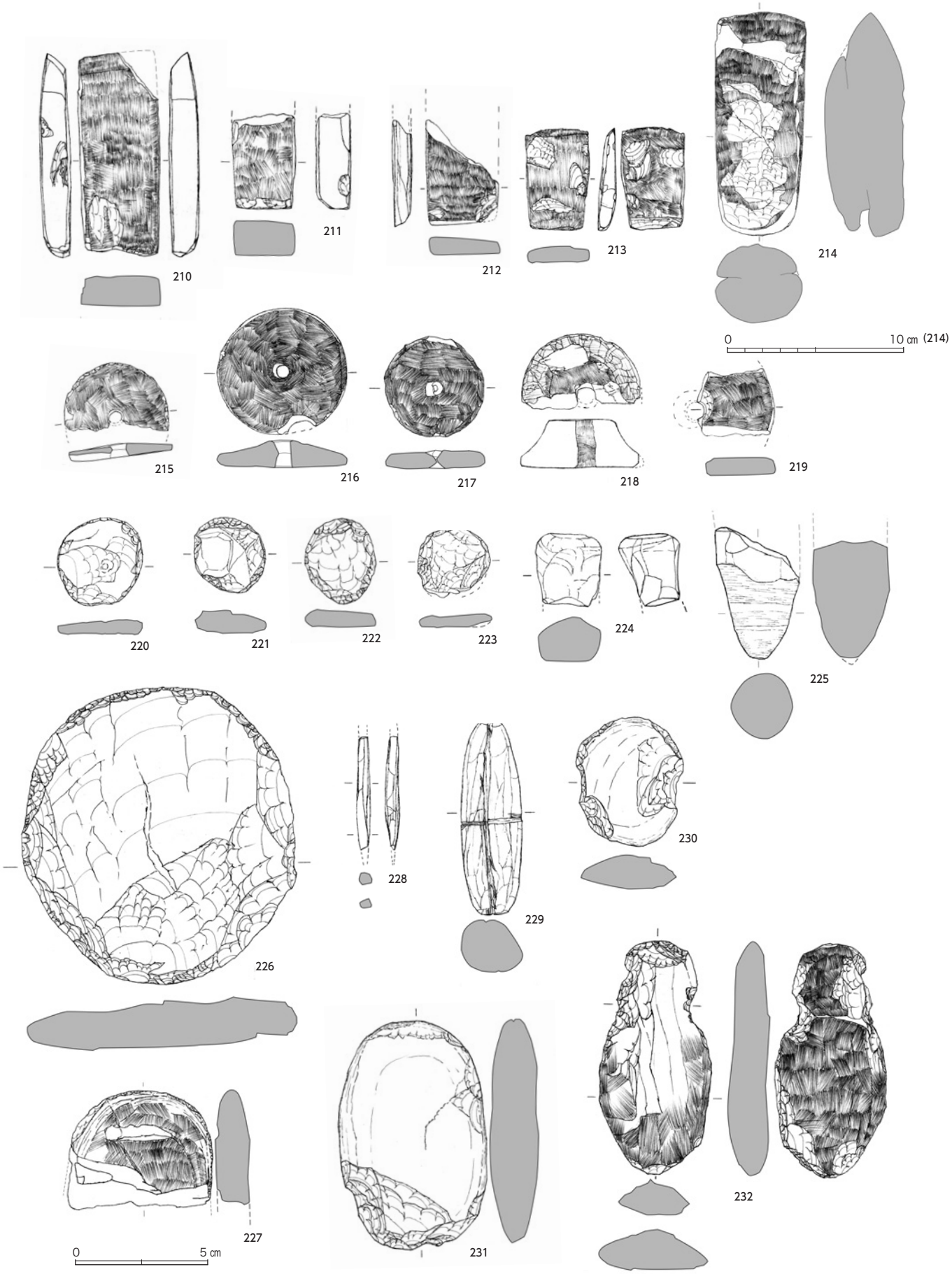


図 274　石器（１０）（S=1/2・S=1/3）

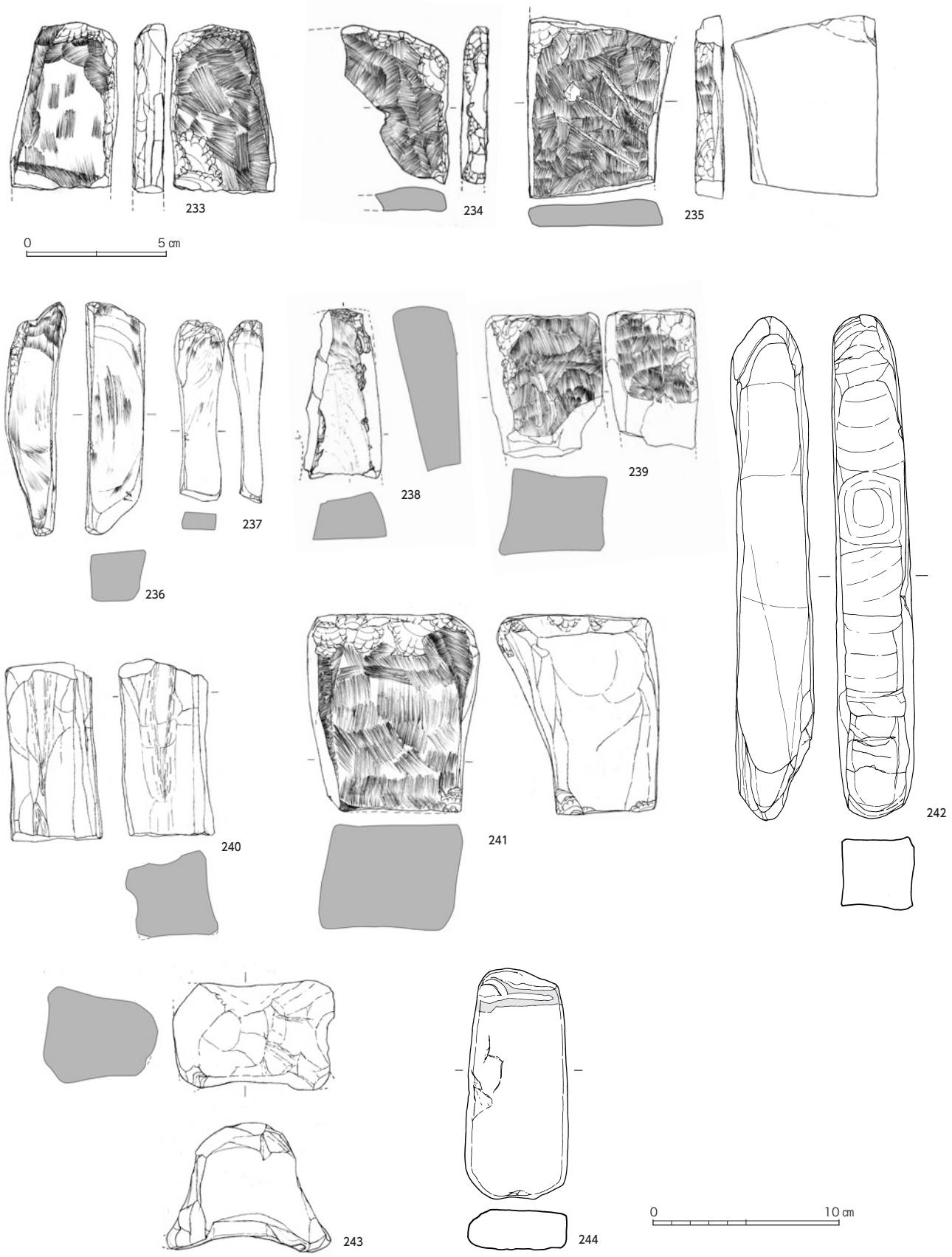


図 275　石器（１１）(S=1/2・S=1/3)

表 2 玉類一覧

図	番号	器種	材質	出土遺構	位置	長さcm	幅・径cm	厚さcm	孔径cm	重さ g	特記事項	遺構時期
図261	1	勾玉	滑石	SC1670	33	2.57	0.75	0.68	0.08	2.9	表面研磨	古墳後期
	2	勾玉	滑石	―	―	1.93+	1.0	0.17	0.15	0.64		
	3	勾玉	滑石	SD5672	35	3.41+	1.25	0.28	0.13	2.45		
	4	臼玉	滑石	段下げ202	13		0.43	0.27+	0.15	0.06		
	5	臼玉	滑石	SC402 R4	13		0.45	0.08	0.15	0.06		古墳中期
	6	臼玉	滑石	SC322内	13		0.4	0.15	0.15	0.04		古墳前期
	7	臼玉	滑石	SP6560	75		0.87	0.15	0.15	0.20		
	8	臼玉	滑石	検出面	―		0.51	0.27	0.12	0.11		
	9	臼玉	滑石	4550	51		0.5	0.17	0.12	0.05	剥離し2分割	
	10	臼玉	滑石	4550	51		0.49	0.15	0.11	0.07		
	11	臼玉	滑石	SP5531 SC5362内	61		0.43	0.21	0.18	0.06		
	12	臼玉	滑石	SP5589	73		0.47	0.28	0.18	0.12		
	13	臼玉	滑石	SC6200	86		0.43	0.38	0.18	0.09		古墳後期
	14	臼玉	滑石	SC5362	51		0.72	0.57	0.19	0.55	やや大振り	古墳後期
	15	臼玉	滑石	SC5362	51		0.98	0.28	0.18	0.31		古墳後期
	16	臼玉	滑石	SC5362	51		0.42	0.18	0.16	0.06		古墳後期
	17	臼玉	滑石	SC5362	51		0.49	0.25	0.18	0.09		古墳後期
	18	有孔円盤	滑石？	SC3301 R2	37		1.92	0.27	0.16	2.05		弥生終末
	19	未製品	滑石	SC5362	51	1.32	1.22	0.38		1.00		古墳後期
	20	未製品	滑石	SC5362	51	1.28	1.26	0.58		1.66	穿孔	古墳後期
	21	未製品	滑石	SC5362	51	1.47	1.37	0.78		2.62	穿孔	古墳後期
	22	未製品	滑石	SC3820	36	0.53	0.42	0.2	0.12	0.11	穿孔	古墳前中期
	23	板状素材	滑石	SC6300	88	4.31	2.62	0.72		13.24	擦切り痕	古墳後期
	24	玉	クロム白雲母	SC322	3	0.98	0.81+		0.14	0.54	緑	弥生終末～
	25	管玉	碧玉	SP382	―	0.96	0.30		0.15	0.13	深緑	
	26	管玉	碧玉	SK736	―	0.8	0.51		0.18	0.28	深緑	
	27	管玉	碧玉	SC1460カマド床面	13	1.38	0.44		0.14	0.44	深緑	古墳後期
	28	管玉	碧玉	SC2403	36	1.25	0.38		0.11	0.24	深緑	弥生後期
	29	管玉	碧玉	SK3310段下げ上層	35	1.04	0.41		0.22	0.29	深緑	
	30	管玉	碧玉	検出面	―	0.8+	0.25+		不明	0.03	深緑	
	31	玉	碧玉	SK1627	24	2.0+	0.38		2.7	0.95	青緑	
	―	管玉	鉛バリウムガラス	SP4582	Ⅳ2	0.68+	0.4		0.19		白　細かく割れる	弥生中期
	32	小玉	カリガラス	段下げ202	13	0.44	0.67		0.31	0.26	淡青　破断　気泡あり	-
	33	小玉	カリガラス	SC469	21	0.28	0.34		0.15	0.05	淡青	古墳前期か
	34	小玉	カリガラス	SK2771	41	0.17	0.34		0.11	0.02	淡青	古墳後期以降
	35	小玉	カリガラス	段下げ3052	43	0.38	0.42		0.07	0.09	淡青	-
	36	小玉	カリガラス	SC3150貼床	42	0.32	0.39		0.07	0.07	淡青	古墳
	37	小玉	鉛ガラス	SC1460	42	0.31	0.58		0.29	0.21	白・緑　風化	古墳後期
	38	小玉	鉛ガラス	SD3120上層	41	0.31	0.54+		0.25	0.06	白　風化	弥生中期
	39	小玉	カリガラス	SD3120上層	41	0.32	0.27		0.1	0.04	淡青	弥生中期
	40	小玉	カリガラス	SC3660	44	0.3+	0.41+		0.2+	0.03	淡青　小片	古墳
	41	小玉	ソーダ石灰ガラス	SC953	41	0.29	0.51		0.3	0.07	濃紺　歪み	弥生後期
	42	小玉	カリガラス	SK1074	31	0.32	0.42		0.08	0.08	濃紺	-
	43	玉	土	包含層254	12・13	1.2	1.4		0.28	2.25		
	44	玉	土	SP602	13	1.79	1.78		0.16	4.23	一部表面剥げる	
	45	玉	土	SD3120	41	1.58	1.67		0.08	5.92	器面研磨	古墳後期

註　遺構名にアミをかけた遺構は第３章で報告している。
SP4582出土管玉は巻頭図版8に掲載している。

表 3 滑石未製品一覧

番号	器種	色	遺構		細分	重g	特記事項	遺構時期
1	板状加工品３？	乳白	段下げ	202		1.19	薄い板状、両面研磨抉りの加工あり	
3	板状片	白淡青	SC	322	南部	8.67	未加工	終末～
6	板状加工品３？	白淡青	SC	918	南西下層	10.44	板状剥片で、平坦面に研磨あり最厚部は5mm程度	弥生後期
8	板状加工品３？	白淡青	SC	2013	下段	2.04	板状剥片で、両辺研磨側面の一部に研磨あり厚1.5～2mm	古墳後期６C前半？
9	砕片	白橙	SK	2014		9.79	表面やや摩滅	
10	板状加工品２か３	白橙	SC	2408	一段下	17.25	研磨あり	
11	砕片	白淡青	SX	2421	焼土下	3.09	１～1.5cm大の屑２点	古墳
12	不整形玉	白淡青	SX	2421	焼土下	1.61	粗割、穿孔で玉とする	古墳
13	不整形勾玉	白淡青	SX	2421		20.22	粗割、穿孔表面を研磨し、細長い勾玉状におおよその整形する	古墳
14	不整形玉	白淡青	SX	2421		19.88	粗割、穿孔で玉とする勾玉の失敗作？も含むほかの2421出土品も含めて、すべて整形は雑４点	古墳
15	砕片	橙白	SX	2421		9.28	1点	古墳
16	板状加工品３	白青	SP	2488		17.09	2点	
17	棒状加工品？	白青	SK	2775		21.03	1点	
18	粗割石材	橙白	SD	3050	上層	166.80	1点７～８cm大	古墳後期
19	板状加工品３	青白	SD	3050	上層	6.65	1点両面丁寧な研磨側面も研磨あり	古墳後期
20	粗割石材	白青	SD	3050	下層	71.03	1点	古墳後期
21	砕片	白灰・青白	SD	3050	下層	5.70	2点	古墳後期
22	板状加工品３	白灰	SD	3120	上層	12.89	2点細長板状の個体は、短辺に擦切痕跡あり	古墳後期
23	砕片	灰白	SD	3120	上層	37.47	5点１～３cm大	古墳後期
24	板状加工品３？	橙白	SD	3120	下層	4.66	1点両面研磨	古墳後期
25	紡錘車片？	白淡青	SC	3138	一段下	10.94	1点残存1/2	
26	砕片	白淡青	SP	3141		2.90	１点	
27	砕片	白淡青		3151	段下げ	18.60	１点	
28	砕片	白淡青	SC	3163		2.54	１点	
29	砕片	白灰	SK	3215		5.59	１点	
30	棒状加工品？	白淡青・小豆	SK	3296		54.65	１点	
31	砕片	灰小豆	SC	3300		1.09	２点屑小片加工痕跡なし	終末～古墳前　ⅣB期
33	方形チップ	白淡青	SP	3317	SC3301内	0.73	方形チップ（穿孔あり・なし）各1点	弥生終末
34	砕片	白小豆青	SP	3358		3.04	1点	
35	砕片	白小豆	SP	3509		0.45	1点	
36	砕片	灰白青	SP	3550		0.95	3点	
37	砕片	青灰	SC	3660		0.55	1点加工痕跡なし	
38	砕片	灰青	SP	3739		0.50	1点	
40	砕片	灰青	SC	3820	上層	5.21	4点	
41	砕片	灰小豆	SP	3904		0.30	1点	
42	砕片	灰		4079 4080	検出	0.52	1点	
43	砕片	灰淡青		4148	他検出面	2.15	4点	
44	板状加工品2？	青灰	SP	4104		13.93	1点	
45	砕片	灰青	SK	4193		1.44	1点	
46	砕片	灰黄青	SK	4545		3.31	1点板状剥片	
47	砕片	灰黄青	SK	4545		4.50	1点板状剥片表面研磨か摩滅	
48	砕片	灰	SP	4550		3.36	小片10点程度	
50	砕片	灰青	SP	4799		2.35	1点	
51	砕片	青灰	SP	4930		0.77	1点	
52	砕片	青	SP	4968		0.51	1点	
53	砕片	青黄灰	SP	5034		22.77	15点前後	
54	砕片	白灰	SP	5069		4.57	1点	
55	板状加工品3	白淡青	SP	5156		15.46	1点側面・表面研磨有、擦切有	
56	砕片	白黄	SP	5118		1.03	1点側面擦切痕あり	
57	砕片	白灰青	SP	5238		3.41	1点	
58	砕片	白黄灰	SP	5254		6.94	2点	
59	砕片	灰黄青		5312		0.67	1点側面・表面研磨有、擦切有	
60	棒状加工品	灰淡青	SC	5362		207.23	2点	古墳後期
61	板状加工品・片	灰青黄	SC	5362		109.30	3点 2点は表面研磨あり5、6cm大	古墳後期
62	砕片	灰青	SC	5362		91.46	10点 比較的大きいもの加工痕跡がないもの	古墳後期
63	砕片	灰青	SC	5362		113.47	多数　比較的小さいもの加工痕跡がないもの	古墳後期
64	砕片	灰青	SC	5362		18.49	多数　加工痕跡が認められるもの	古墳後期
65	方形チップ1	灰青・灰黄	SC	5362		13.14	27点　破片も含む穿孔が見られる	古墳後期
66	方形チップ2	灰青	SC	5362		2.24	5点 穿孔なし	古墳後期
67	方形チップ・円形	灰青	SC	5362		1.95	3点 穿孔あり	古墳後期
68	方形チップ	灰青	SC	5362	貼床	4.81	5点　穿孔なし	古墳後期
69	砕片	灰青	SC	5362	貼床	12.88	4点　擦切等加工あり	古墳後期
70	砕片	灰青	SC	5362	貼床	66.33	多数　比較的小さいもの一部に加工	古墳後期
71	板状	灰青・灰黄	SC	5362	貼床	93.74	3点	古墳後期
72	礫	灰黄	SC	5362	下層中心	42.60	１点厚手	古墳後期
73	板状加工品	灰青	SC	6300		22.42	d	古墳後期
74	石材・未成品等	灰青	SC	6300		198.60	大小片多数　擦切加工品あり	古墳後期
75	石材・未成品等	灰青	SC	6300		192.76	大小片多数　擦切、穿孔加工品あり	古墳後期
76	石材・未成品等	灰青	SC	6300		53.55	小片主体　擦切、穿孔加工品あり	古墳後期
77	素材礫	灰青	SK	5486		3.92	１点	
78	素材礫	灰青	SK	5486		7.46	１点	
79	板状小片	灰青	SK	5495		4.72	6点　方形チップ１含む	
80	板状素材	灰青	SP	5531		14.95	1点	

番号	器種	色	遺構		細分	重g	特記事項	遺構時期
81	板状小素材	灰青	SP	5537		4.48	1点	
82	砕片	灰青	SD	5539		1.13	2点	
83	砕片	灰青	SP	5542		2.65	3点	
84	板状素材	灰青	SC	5547	一段下	149.12	5点	
85	方形チップ	灰青	SK	5513	5514	1.36	1点　穿孔	
86	方形チップ、小片	灰青	SP	5562		3.15	4点　穿孔方形２	
87	板状素材	灰黄		5595	一段下	125.09	2点　大型１	
88	砕片	灰黄	SP	5644		1.86	1点	
89	素材礫	灰青	SP	6545		7.10	1点	
90	円形加工品片	灰青	SK?	5652		3.87	1点　穿孔	
91	板状加工品	灰青	SP	5773		2.40	1点	
92	砕片	灰青	SK?	5774	一段下	2.15	1点	
93	大型素材礫	灰青	SP	5776		101.61	1点	
94	板状加工片	灰青	SP	5783		6.06	5点　擦切加工品あり	
95	板状礫	灰黄	SP	5852		1.25	1点	
96	小加工品	灰青	SP	5805		2.79	1点	
97	小加工片	灰青	SP	5812		17.55	1点	
98	砕片	灰青	SC	6200		5.24	1点	
99	砕片	灰青	SC	6200		35.66	多数　穿孔品あり	
100	砕片	灰青	SC	6230		6.03	3点　擦痕	
101	砕片	灰青	SP	6238		2.13	1点	
102	礫、板状加工品	灰青	SK	6244		89.89	4点　擦切り加工品あり	
103	砕片	灰青	SD	6245		29.58	2点	
104	板状加工小片	灰青	SK	6282		3.72	4点	
105	板状小礫	灰青	SP	6588		9.85	1点	
106	大型石錘片か	灰青	SK	6682		206.40	1点　復元径2cmほどの穿孔	
107	砕片	灰青	SC	7000		5.23	2点	
108	砕片	灰青	SK	7023		0.96	2点	
109	小加工品	灰青	SC	7046		0.49	1点　穿孔あり薄い	
110	砕片	灰青	SC	6470		7.06	12点　方形チップ 穿孔片１	
111	砕片	灰青	SX	254	包含層	47.86	1点	

註　遺構名にアミをかけた遺構は第３章で報告している。

表４ 土製品一覧

図	番号	器種	遺構	位置No.	長さ cm	幅 cm	厚さcm	重量 g	遺構時期
図262	1	土錘	SC4149		6.0	1.62	1.72	16.0	
	2	紡錘車	SP6079　SC6080内	38	3.9	3.8	1.3	25.3	
	3	土球	SP5072	73	2.8	2.9	2.9	22.2	
	4	穿孔土版	202段下げ	13	2.9	1.8	1.5	5.1	
	5	紡錘車	SK680		3.3+	1.7+	1.1		
	6	杓子	SP5014	74	6.6+	4.2+	2.6	111.3	
	7	投弾	SP3231	43	4.55	2.5	2.5	25.8	
	8	投弾	SD6663	76	4.6	2.8	1.1	16.9	弥生中期
	9	投弾	SP4465	46	4.6	2.5	2.5	25.7	
	10	投弾	SK261	12	4.5	2.55	2.5	22.8	弥生中期
	11	投弾	SK6288	76	4.7	2.2	2.2	20.6	
	12	投弾	SD4700	Ⅳ5	4.2	2.2	2.1	17.2	
	13	投弾	SP6997 SC6331内	77	4.1+	2.8	1.1	9.01	古墳後期
	14	投弾	SP4215	44	4.3	2.2	2.2	18.0	
	15	投弾	SC6331	77	4.1	2.2	2.3	17.9	古墳後期
	16	投弾	SK5596	74	4.3	2.4	2.4	20.7	
	17	投弾	SP1500	23	4.1+	2.6	1.9+	17.1	
	18	投弾	SC2300	7	4.3	2.4	2.5	19.5	弥生終末
	19	投弾	SP2300床	7	4.18	2.3	2.4+	19.0	弥生終末
	20	投弾	3307段下げ	35	4.27	2.4	2.4	16.0	
	21	投弾	SK2637	36	4.15+	2.3	2.2+	14.8	弥生中期
	22	投弾	3022段下げ	33	4.1	2.6	2.1	18.2	
	23	投弾	3307段下げ	35	3.7	2.2	1.9	13.0	
	24	投弾	SP3141	52	3.4	2.1	2.2	12.3	
	25	投弾	SK874	23・22	3.9	2.2+	1.4+	9.2	
	26	投弾	SP2528	38	3.9+	1.9+	1.0+	7.9	
	27	投弾	SC850	14･24	3.8	1.8	1.9	10.9	弥生終末
	28	投弾	3307段下げ	35	3.8	2.3	1.9	20.1	
	29	投弾	SC1800	15・16	3.06	1.6	1.6	6.4	弥生後期

註　遺構名にアミをかけた遺構は第３章で報告している。

表５　金属器一覧

図	図番	遺構	番号	内容	遺構位置	種類	特記事項	時期
図263	1	SP	3359		38	鉄斧	SC3363内	弥生後期
	2	SP	3376		37	鉄斧	SC3301内	終末～古墳前期
	3	SP	4621		Ⅳ4	鉄斧	袋状	
	4	SC	3820		36	鉄斧		古墳前期後半から中期
図264	5	SC	2007		6	板状鉄斧		
	6	SC	2007		6	鉄斧		
	7	SC	2408		26	板状鉄斧か	壁溝	大型円形SC7260
	8	SK	3549		36	板状鉄製品		
	9	SC	2300	上～中層	7	鉄斧？		弥生終末ⅣAB
	10	SP	3953		58	鉄製鉈	木質遺存	
	11	SP	4134		48	鉄製鉈		
	12	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	3024		43	ヤリガンナ		
	15	刀子	3743		45	刀子		
	18	SX	2421	下層	36	鉄製刀子		古墳中期
	19	SP	5894		58	鉈		
	21	SC	1460		32	平根系鉄鏃		古墳後期
	22	SC	3301		37	鉄鏃	図195に出土位置	弥生後期後葉
	23			E-1検出		棒状		
	12・13	SC	3300	南部	36	鎌		終末～古墳前期　ⅣB期
	16・17	SP	4591		Ⅳ3	鉄刀子？		
未掲載		包含層	254	R17-4	12	大刀片		古墳中期・終末
		SC	148		3	不明	厚い	古墳前期後半から中期
		SK	2291	上層	25	鉄滓		弥生中期前半
		SC	1460		32	刀子？		古墳後期
		SC	970		32	刀子？		古墳後期
		SC	322	R6	3	不明	断面円形　図164に出土位置	
		SC	2408		26	鋳造鉄斧？		大型円形SC7260
		SK	626		12	鉄斧？	板状方形	
		土器	583		13	不明	ハクリ	
		SP	658	R1	24	鉄鏃		
		SK	379	R1	21	刀子？	352で報告　SKの位置不明	
		SD	3120		41	鉄滓	下層	古墳後期
		SK	6286		67	鉄塊		
		SC	1600		5	不明棒状	東側？	弥生後期後葉
		SK	5689		46	板状鉄製品	SK4461と同じ	中期中ごろ　須玖2か
		鉄器	4752		Ⅳ4	不明	細片化	
		SK	185		12	刀子		後期・須玖出土
		SC	402		13	鉄片	厚さ6mm程度	
		SP	849		32	鉄斧？		
		SC	2408	２段目	26	鉄斧		大型円形SC7260
		SC	2403	西側ベッド	36	不明棒状		
		一段下げ	3052	一段下げ	35	鉄斧？	方形、板状	
		SD	3120		41	鉄片	器種不明	
		SK	3687		51	刀子		
		SD	3700		51	鉄斧？		
		SP	4937		63	鉄片	厚さ1.5cm	
		SC	5362	下層中心	51	板状鉄片		
		SP	5752		73	刀子		
		SP	5802		47	半球状鉄製品		
		SC	6331	貼床	77	不明鉄製品	細片化で不詳	
		SK	6902		51	不明	細片化で不詳	
				E-1検出		刀子		
				表土はぎ		板状	新しい	
				Ⅱ-1検出		鉄滓		
		一段下げ	3151			鎌？		
		SX	903		14	不明鉄片		SC850内　ベッド落ち際の埋土

註　遺構名にアミをかけた遺構は第３章で報告している。

表 6 石器・石製品一覧

図	遺物番号	器種	石材	出土遺構	位置	器長	器幅	最大厚	重さ	備考	遺構時期
6	9	太型蛤刃石斧	玄武岩	SP4362 SD4108内	2・12	14.6+	7.2+	4.85+	914.83	頭部幅(6.5) 刃なし	
8	9	方柱状片刃石斧	頁岩	SC6327	67・68	3.35+	1.7	0.95	9.17	刃幅(1.6)　刃角45°	
8	10	石庖丁	小豆色泥岩	SP5977 SC6327内	67	7.0+	3.9+	0.7		孔心間2.6cm	
8	11	方柱状片刃石斧	頁岩	SP6778 SC6327内	67	(5.35)	1.3	1.05	14.0	刃幅1.0　刃角45°	
10	9	石庖丁未製品	小豆色泥岩	SC056 R21		(14.2)	5.85	1.0	88.90	孔無し	
12	10	石庖丁	小豆色泥岩	SC084追加		4.3+	3.45+	(0.55)			
15	1	石庖丁	菫青石Hf	SC2400 R12	27	11.5+	(7.3)	(0.6)		一孔あり	
15	2	磨製石剣	菫青石Hf	SC2400	27	3.7+		(0.6)	8.55	基部幅1.1～2.6	
18	1	石庖丁	菫青石Hf	SC3163	33・34	12.9+	6.8+	0.65		孔心間3.0cm	
18	2	石庖丁	菫青石Hf	SC3163	33・34	4.85+	5.15+	(0.45)		孔なし	
18	3	石庖丁	菫青石Hf	SC3163	33・34	5.3+	2.1+	0.45+		孔なし	
24	6	石庖丁	菫青石Hf	SC4730 上層	Ⅳ1	5.6+	6.2+	(0.6)		一孔あり	
26	14	扁平片刃石斧	頁岩	SC5363	63	3.0	3.0	0.85	14.02		
28	6	石庖丁	菫青石Hf	SC5500	63	10.0+	6.75+	0.7		一孔あり	
30	12	石庖丁	菫青石Hf	SC5843	45	3.65	2.45	0.55		刃幅2.1～2.3　頭部幅1.1	
34	3	磨製石鎌	小豆色泥岩	SC6274	68・69	5.3+	4.9+	(1.1)	27.42		
34	4	蛤刃石斧	安山岩	SC6274	68・69	10.7+	2.7+	4.0+	105.20		
34	5	石庖丁	菫青石Hf	SP6267 SC6274内	68	7.05+	4.7+	(0.65)		孔なし	
35	8	磨製石鏃	層灰岩	SC6276貼床	78・79	6.1	2.05	0.85	11.92	中茎長1.9中茎最大厚0.85	
36	10	石庖丁	菫青石Hf	SC6328覆土	76・77	4.85+	3.5+	0.55		孔心間2.5cm	
36	11	石庖丁	菫青石Hf	SP6396 SC6328内	77	3.05+	(4.7)	(0.6)		2.8cm	
36	12	紡錘車	凝灰岩	SK6424 上層SC6328	77	径(5.4)		0.5+	3.25	軸孔径(0.8)	
37	3	磨製石剣	菫青石Hf	SC6528	68	7.1+		0.85	24.25	基部長2.0　基部厚0.75	
38	8	石庖丁	小豆色泥岩	SC6930	56・66	5.4+	4.4	0.7		孔心間2.3cm	
38	9	抉入片刃石斧	頁岩	SK6879 SC6930内	66	5.4+	1.8+	3.5+	47.11		
41	8	磨製石鏃(石剣？)	凝灰岩Hf	SC7000	(53・63)	4.9+	2.15+	(0.65)	9.67	石剣？	
48	14	石庖丁	菫青石Hf	SP3416 SC2408内	26～27	3.3+	3.3+	0.5+		孔心間3.0cm	
48	15	扁平片刃石斧	菫青石Hf	SK2636 SC2400内	26	2.8+	(2.3)	(0.5)	4.64	刃角50°	
48	16	蛤刃石斧	安山岩	2345 SC2407内	26～27	12.7+	5.3+	4.5+	469.72	刃角75°刃部破損後再生	
48	17	石庖丁	小豆色泥岩	SP2702 SC2408内	27	6.95+	4.2+	0.6		孔なし 刃幅2cm	
48	18	石庖丁	小豆色泥岩	溝状2657 SC7206内	26	5.75+	(4.95)	0.75		一孔あり	
48	19	磨製石剣	菫青石Hf	SK3310 SC7206内	36	7.1+	3.7+	(1.45)	37.07		
48	20	磨製石剣	菫青石Hf	SP3416 SC7206内	27	(13.65)	4.0+	(0.55)	37.49	基部幅2.25+α～3.3+α	
51	14	石庖丁	菫青石Hf	SC918東側ベッド上	3・4	8.95+	4.0+	(0.55)			
59	5	石庖丁	小豆色泥岩	SC2403 R1	36・37	11.35	3.6	0.6	36.30	孔心間2.2cm	
59	6	石庖丁	小豆色泥岩	SC2403 R2	36・37	11.1	3.75	0.4	30.80	孔心間2.2cm	
59	7	石庖丁	小豆色泥岩	SC2403 R3	36・37	11.05	2.65	0.6	31.56	孔心間2.7cm	
59	8	石庖丁	小豆色泥岩	SC2403 R7	36・37	10.2	3.4	0.6	31.36	孔心間2.0cm	
79	16	磨製石剣	菫青石Hf	SK2605	38	9.65+	3.9	1.3	61.08	基部幅2.25	
80	8	円盤	緑色片岩	SK3148	34・44	径4.1～4.75		1.25	34.73		
97	8	磨製石鏃	菫青石Hf	SK081西側		6.3+	1.35+	0.35+	2.88		
97	9	石庖丁	菫青石Hf	SK081一段下げ		5.75	3.8+	0.75		一孔あり	
100	4	磨製石剣	泥岩	SK261下層	12	5.55+	3.95+	(1.25)	31.09		
101	6	石庖丁	菫青石Hf	SK856	23	4.0+	2.25+	(0.6)		一孔あり	
103	13	砥石	凝灰岩Hf	SK1811	4	6.1+	5.65+	4.1+	173	仕上げ砥石か	
109	8	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SX2036 上層R1	14・15	9.9+	8.0+	(4.5)	525.48	頭部幅6.5	
110	1	磨製石剣	菫青石Hf	SK2051	6	4.3+	2.15+	(0.7)	5.43	石鏃？	
111	6	石庖丁	菫青石Hf	SK2147	18	4.35+	4.1+	0.4+		一孔あり	
111	7	扁平片刃石斧	粘板岩	SK2147	18	5.9	2.5	1.05	29.74	刃角60°	
114	25	方柱状片刃石斧	頁岩	SK2148	17	5.4	1.05	0.85	9.25	刃角50°	
114	26	砥石	中粒砂岩	SK2148	17	3.95+	(3.95)	(0.6)	13.62	板石	
115	4	石庖丁	小豆色泥岩	SK2180追加	18	11.0	6.1	0.6	41.70	孔心間2.0cm	
117	10	太型蛤刃石斧	玄武岩	SK2183 R1	6	13.0	5.95	4.3	509.40	刃部破損後、刃部再生使用	
119	8	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SK2291 上層	25	6.15+	7.6+	4.95+	314.97	刃幅7.0　刃角59°	
128	9	砥石	中粒砂岩	SK3687	51・52	6.9+	4.85+	3.4+	151.1	4面使用	
130	9	石庖丁	菫青石Hf	SK4400	46	12.0+	(6.5)	(0.75)	95.09	孔心間3.0cm　大型	
130	10	石製品	滑石片岩	SK4400	46	2.7+	1.9+	(0.4)		十字型石器？	
130	11	石庖丁	凝灰岩Hf	SK5690	46	4.05+	3.85+			一孔あり	
130	12	磨製石剣（石戈？）	菫青石Hf	SK5690	46	3.4+	3.4+	0.7+			
132	1	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SK4975 上層	Ⅳ6	15.6+	6.95+	5.0+	806.89	胴部	
135	10	磨製石剣	頁岩	SK5719	46	4.5+	2.85+	0.75+	8.89		
137	2	扁平片刃石斧	層灰岩	SK5900	46	4.4+	2.0+	(4.1)	68.66		
137	3	磨製石鏃	頁岩	SK5900床面	46	3.7+	1.6	0.35	2.59	基部幅1.6	
150	7	紡錘車	粘板岩	SK7023	62	径 (4.4)		(0.65)	10.60	軸最少径(0.4)	
156	9	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SD1046 上層	41	7.3+	6.9+	4.5+	376.37	頭部幅6.4	
158	31	扁平片刃石斧	層灰岩	SD2293 東側上層	15～26	5.15	1.5	0.6	8.57	刃幅1.0+α　頭部幅1.5　刃角55°	
165	30	玉	碧玉	SC322南側ベッド貼床	3	径3.0	孔径0.35	0.4			
173	5	玉	凝灰岩	SC1173南西側床上	14	4.2	1.5	0.85	9.21	穿孔最少径0.55	
182	6	石庖丁	小豆色泥岩	SC1851	4	17.5	8.0	0.7	122.69	孔心間2.65cm	
188	8	石庖丁	小豆色泥岩	SC2012 下層	7	7.0+	3.9+	(1.1)		一孔あり	
197	19	石庖丁	小豆色泥岩	SC3301 R20	37	11.35+	3.8	0.7	40.91	孔心間2.0cm	
223	22	方柱状石製品	片岩	SC3820検出時	37・47	5.5	0.8	0.6	4.65	装身具か	
232	1	円盤形石製品	緑色片岩	SC3180	44・45	径6.7～7.0		1.15	102.78		
244	6	紡錘車	滑石	SP6789 6331下面	78	残存径4.1		(1.1)	7.07	軸孔径(0.9)	
244	7	紡錘車	滑石	SC6331貼床	77・78	径4.2～4.55		0.95	30.53	軸孔最少径0.65	
259	30	石錐（オール）	黒曜石	6224R162	33	2.25	1.9	0.5	1.81	気泡多し　縄文包含層	
265	1	打製石鏃	黒曜石	SP2069	16	1.9	1.5+	0.25	0.63		
265	2	打製石鏃	黒曜石	SC4730 上層	Ⅳ1	1.9	1.55	0.35	0.67		
265	3	打製石鏃	黒曜石	SC4143	47	1.6+	1.9+	0.45	0.83+		ⅣA～
265	4	打製石鏃	黒曜石	SC6276	78・79	1.55+	(1.65)	(0.35)	1.06		弥中前

遺構時期：Ⅲ（弥生後期中頃）、ⅣA・B（同終末）　福岡市報1385集

図	遺物番号	器種	石材	出土遺構	位置	器長	器幅	最大厚	重さ	備考	遺構時期
265	5	打製石鏃	黒曜石	SK261下層（南半）	12	1.9	1.4	2.5	0.62		中期
265	6	打製石鏃	黒曜石	SP1246	23	2.2	1.8	0.55	1.93		
265	7	打製石鏃	黒曜石	SP7103	52	1.65	1.8	0.25	0.46		
265	8	打製石鏃	古銅輝石安山岩	撹乱6541	65	2.0+	1.85	0.4	1.08		
265	9	打製石鏃	黒曜石	SD3120 上層	41ほか	1.9	1.95	0.55	1.20		古墳
265	10	打製石鏃	黒曜石	SP5459	62	1.95+	1.3	0.3	0.67		
265	11	打製石鏃	古銅輝石安山岩	SK4975	Ⅳ6	3.05	1.9	0.4	1.72		弥生中
265	12	打製石鏃	黒曜石	SC6329	77	2.5+	1.6+	0.5	1.3		
265	13	打製石鏃	黒曜石	SP1363	43	3.25+	2.0	0.7	3.08		－
265	14	打製石鏃	黒曜石	SK6288	76	2.65	1.95	0.45	2.05		
265	15	打製石鏃	黒曜石	SK2535 SP2683と同じ	28	2.4+	2.15+	0.7	2.9	姫島産か	
265	16	打製石鏃	黒曜石	SP3274	38	2.55	1.0	0.3	0.47		
265	17	打製石鏃未製品	黒曜石	SC3140	33	2.65	2.1	0.85	3.61		弥生後
265	18	打製石鏃未製品	黒曜石	SP6056	44	2.65	2.25	0.7	4.64		
265	19	打製石鏃未製品	黒曜石	SC5362	51・61				2.37		古墳後期
265	20	剥片鏃素材剥片	黒曜石	SC3227	53	2.7	1.7	0.5	2.52		
265	21	石器未製品	黒曜石	SC6900	64	3.65	3.2	0.55	4.83		
265	22	打製石鏃未製品	黒曜石	表採Ⅱ・Ⅲ区中心		2.55	2.65	0.8	3.95		
265	23	削器	黒曜石	SD4643	Ⅳ1	3.3	2.0	0.7	4.41		
265	24	削器	黒曜石	表採Ⅱ・Ⅲ区中心		3.6	1.55	1.0	3.85	再利用	
265	25	削器	黒曜石	SK3346	36	3.95	1.85	0.45	3.33		
265	26	削器	黒曜石	SK095		4.6	2.1	0.35	3.5		
265	27	削器	黒曜石	SP7212	74	2.8	2.4	0.65	4.94		
265	28	削器	黒曜石	表採		2.45	2.0	0.5	3.1		
265	29	削器	黒曜石	SX2421	36・37	5.15	1.6	0.5	4.61		
265	30	削器	黒曜石	SP5328	73	4.6	2.05	0.4	4.19		
265	31	削器	黒曜石	SK7098	52・53	4.25	1.65	1.1	7.24		
265	32	削器	黒曜石	SC4143	47	6.0	2.1	0.85	8.53		ⅣA～
265	33	削器	黒曜石	SC5362	51・61	7.85	1.9	0.8	9.57		古墳後期
266	34	削器	黒曜石	SP4563	Ⅳ1	3.8	2.85	0.6	7.27		
266	35	削器	黒曜石	SC6331	78	3.2	2.6	0.65	4.25		古墳後期
266	36	剥片	黒曜石	SX2865	6	3.9	1.9	0.75	5.19		
266	37	剥片	黒曜石	SC3227	53	3.7	2.0	0.65	5.41		
266	38	剥片	黒曜石	SC1399	14	4.3	2.05	0.7	5.84		
266	39	削器	黒曜石	表採		3.3	2.2	0.65	4.3		
266	40	削器	黒曜石	SP6122	66	3.2	2.3	0.4	3.17		
266	41	削器	黒曜石	SP6870	56	3.25	1.95	0.5	2.48		
266	42	削器	黒曜石	表採Ⅱ・Ⅲ区中心		3.25	3.7	0.7	8.27		
266	43	削器	黒曜石	2－2区E-6住居検出面		3.9	3.1	1.2	12.25		
266	44	石器未製品	黒曜石	検出		3.35	2.9	0.75	8.83		
266	45	掻器	黒曜石	表採		5.3	2.0	0.9	9.88		
266	46	彫器	黒曜石	SK6257 SC6274内	68	3.75	2.1	0.7	4.79		弥生中
266	47	削器	古銅輝石安山岩	202・250・251段下げ	13	4.15+	4.05	0.75	12.57		
266	48	楔形石器	黒曜石	SK1587	3’～4’	1.8	1.6	0.7	2.3		
266	49	石核	黒曜石	SP4056	46	3.8	4.2	1.65	22.49		
267	50	打製石斧	緑色片岩	SP4180 SC4143内	47	9.8	5.6	2.5	165.14	刃幅5.55　頭部幅4.1	ⅣA
267	51	打製石斧	緑色片岩	撹乱6630	75	8.75	4.6	1.4	84.69	頭部幅3.6	
267	52	打製石斧	緑泥片岩	SC4148他検出面		5.0+	5.25+	(1.35)	60.38	未製品	
267	53	蛤刃石斧	蛇紋岩？	SK2605東壁	38	12.75+	5	3.0	280.36	刃幅3.5　刃角60°	弥生前
267	54	蛤刃石斧	火成岩	SK6070R1	38	9.3+	4.1	(3.0)	186.49	刃幅（3.6）　刃角60°	
267	55	蛤刃石斧	蛇紋岩？	SC1920の炉	43・44	9.0+	3.4+	(3.65)	107.05	刃幅3.0+α　刃角55°	古墳
267	56	蛤刃石斧	緑色片岩	SK3031	51	4.9+	2.6+	1.25+	26.11	刃幅1.5　刃角45°	
267	57	礫器（チョッパー）	緑色片岩	SP3998	47	13.2	4.75	3.25	298.83	刃幅3.5　刃角45°	
268	61	石庖丁	菫青石Hf	SP4559	Ⅳ1	6.75+	5.7+	(1.15)		一孔あり　大型	－
268	62	石庖丁	菫青石Hf	SK7253	84	6.75+	(6.6)	(0.55)		孔心間2.0cm	－
268	63	石庖丁	菫青石Hf	SC1670	43・44	8.7+	4.6+	(0.6)		孔心間2.8cm	古墳後
268	64	石庖丁	菫青石Hf	SK2460	28	8.5+	6.0+	0.35+			－
268	65	石庖丁	菫青石Hf	SP1372	4	7.85+	5.35+	0.6		一孔あり	－
268	66	石庖丁	菫青石Hf	SP7101　SC7098	52	7.75+	5.2+	(0.55)		一孔あり	
268	67	石庖丁	菫青石Hf	段下げ3052	43	12.0	4.2	0.75	47.18	孔心間2.0cm	段下げ
268	68	石庖丁	菫青石Hf	SC4748	Ⅳ4	5.8+	4.8+	0.75		一孔あり	終末ⅣＡ～
268	69	石庖丁	菫青石Hf	SC6329	77	4.4	4.2+	0.75		一孔あり	－
268	70	石庖丁	菫青石Hf	4511		9.0+	4.85+	0.7	34.12	孔心間2.8cm	－
268	71	石庖丁	菫青石Hf	SP1681 SC1670内	34	8.5+	4.0+	0.55		一孔あり	古墳後
268	72	石庖丁	菫青石Hf	SP4989	64	4.25+	3.9+	(0.7)			－
268	73	石庖丁	菫青石Hf	2-2区F5 検出面		6.4+	3.3+	(0.6)		一孔あり	
268	74	石庖丁	菫青石Hf	ラベルなし		4.0+	3.2+	(0.6)		孔心間2.5cm	
268	75	石庖丁	菫青石Hf	SP1169	33・23	4.75+	(5.0)	(0.45)		一孔あり	－
268	76	石庖丁	菫青石Hf	SP4337	56	5.8+	3.95+	(0.6)			－
268	77	石庖丁	菫青石Hf	SC3300 北部	37・47	3.1+	3.25+	0.3+		孔心間3.1cm	ⅣB～
268	78	石庖丁	菫青石Hf	SC850 東半	14・24	4.45+	(4.7)	(0.6)		一孔あり	ⅣB～
268	79	石庖丁	菫青石Hf	SC2013	8	6.5+	3.1+	(0.7)		一孔あり	古墳中期
268	80	石庖丁	菫青石Hf	SC5380	64	4.7+	4.55+	0.8			
268	81	石庖丁	菫青石Hf	SC3300 南部	37・47	2.95+	3.9+	(0.55)	42.01	一孔あり	ⅣB～
268	82	石庖丁	菫青石Hf	土器集中 SP3454	34	6.45+	2.75+	(0.45)			－
268	83	石庖丁	菫青石Hf	SC7002	62・63	5.0+	2.85+	(0.55)		孔なし	－
268	84	石庖丁	菫青石Hf	SP1788	24	3.45+	3.2+	(0.75)			－
268	85	石庖丁	菫青石Hf	SP4182 SC4143内	47	4.25+	4.9+	(0.7)		孔心間2.5cm	ⅣA～
269	86	石庖丁	小豆色泥岩	SP1989	18	9.8+	5.45	0.75	53.36	孔心間2.1cm	－
269	87	石庖丁	小豆色泥岩	SK1720	23	5.25+	5.05+	1.0		一孔あり	－
269	88	石庖丁	小豆色泥岩	SP388 SC321内	12	7.7+	6.1+	(0.75)		一孔？あり	古墳

図	遺物番号	器種	石材	出土遺構	位置	器長	器幅	最大厚	重さ	備考	遺構時期
269	89	石庖丁	小豆色泥岩	SX2421床面	36・37	9.4	4.7	0.85	44.54	孔心間1.9cm	古墳中期
269	90	石庖丁	小豆色泥岩	SP4487	56	5.95+	5.4+	0.7		一孔あり	−
269	91	石庖丁	小豆色泥岩	SP3773 SC3770内	54	7.7+	5.1+	0.65		一孔あり	−
269	92	石庖丁	小豆色泥岩	SC5362	51・61	6.35+	6.95+	(0.6)		一孔あり	古墳後期
269	93	石庖丁	小豆色泥岩	SK？4543	57	7.65+	3.95+	(0.75)		一孔	−
269	94	石庖丁	小豆色泥岩	SP296 SC431内	12	6.0+	4.65+	0.65		一孔あり	−
269	95	石庖丁	小豆色泥岩	SX2421 R18	36・37	7.5+	(4.25)	0.8	35.35	孔心間1.7cm	古墳中期
269	96	石庖丁	小豆色泥岩	段下げ2248	6～7	9.6+	3.7	0.75	37.60	孔心間2.5cm	段下げ
269	97	石庖丁	小豆色泥岩	段下げ202、250、251	13	5.8+	4.6+	(0.6)			段下げ
269	98	石庖丁	小豆色泥岩	SP879・880	24	6.1+	(4.1)	(0.6)		孔心間2.5cm	−
269	99	石庖丁	小豆色泥岩	SK3731	45	12.5+	4.2	0.7	32.53	孔心間1.9cm	−
269	100	石庖丁	小豆色泥岩	SK6692	86	3.1+	4.0+	(0.55)			弥生中
269	101	石庖丁	小豆色泥岩	SP762 SC322内	13	4.8+	4.45+	(0.55)		一孔あり	古墳前期
269	102	石庖丁	小豆色泥岩	SD3120 上層	41ほか	10.0	5.7	0.6	51.04	孔心間2.4cm	古墳後期
269	103	石庖丁	小豆色泥岩	SC850 東半	14・24	7.3+	4.5+	0.65		一孔あり	ⅣB～
269	104	石庖丁	小豆色泥岩	SC1460	42・32	4.35+	3.65+	(0.6)		孔心間2.6cm	古墳後
269	105	石庖丁	小豆色泥岩	SD3700 追加	51他	5.55+	4.6+	0.6		一孔あり	古墳後期
269	106	石庖丁	小豆色泥岩	SK4652	Ⅳ2	7.5+	3.95+	0.75		一孔あり	−Ⅳ区
269	107	石庖丁	小豆色泥岩	SC3190	44・45	10.05	3.75	0.65	32.40	孔心間1.8cm	終末～古墳
269	108	石包丁OR石戈	小豆色泥岩	SP658	24	4.65+	4.5+	(0.8)		一孔あり	−
269	109	石庖丁	小豆色泥岩	SC7002	62・63	3.2+	3.7+	0.8		一孔あり	−
269	110	石庖丁	小豆色泥岩	SC2013	8	4.6+		0.75		一孔あり	古墳中期
269	111	石庖丁	小豆色泥岩	SC7002	62・63	5.8+	3.7+	0.7		一孔あり	−
269	112	石庖丁	小豆色泥岩	SD3050 上層	41ほか	3.65+	3.6	0.6		一孔あり	古墳後期
269	113	石庖丁	小豆色泥岩	SC1460	42・32	3.35+	2.5+	0.4+		一孔あり	古墳後
269	114	石庖丁	小豆色泥岩	SD3120 上層	41ほか	3.2+	2.7+	(0.75)		一孔あり	古墳後期
269	115	石庖丁	小豆色泥岩	SP4634	Ⅳ2	6.4+	2.6+	0.6+		一孔あり	−
269	116	方形石製品	小豆色泥岩	SP992	22	3.0	3.1	0.35		石庖丁転用	−
270	117	石庖丁	凝灰岩Hf	SC6900	64	4.05+	3.6+	0.75		一孔あり	
270	118	石庖丁	菫青石Hf	SC960	32	(10.9)	4.9	0.8	49.89	孔心間2.5cm	終末～
270	119	石庖丁	菫青石Hf	SC3300 南半側床上	37・47	6.85+	(3.1)	0.75		孔心間2.8cm	ⅣB～
270	120	石庖丁	泥岩	SC2008	17	7.7+	(4.1)	(0.7)		孔心間2.7cm	古墳
270	121	石庖丁	緑青色片岩	遺構面4129	48	(11.6)	3.85	0.6	40.02	孔心間1.8cm	−
270	122	石庖丁	泥岩	Ⅰ−2区西側検出時		6.3+	3.9+	(0.7)		一孔あり	
270	123	石庖丁	菫青石Hf	SD3120 下層	41ほか	4.3+	3.45+	(0.7)		一孔あり	古墳後期
270	124	石庖丁	粘板岩	SD3050 上層	41ほか	3.15+	3.15+	0.5+			古墳後期
270	125	磨製石鏃	菫青石Hf	SC970掘方	32・33	2.9+	1.45+	0.3+	1.09		古墳後
270	126	磨製石鏃	菫青石Hf	ABC−1,2D区清掃		2.95+	1.8+	0.3	1.60		
270	127	磨製石鏃	菫青石Hf	SC6840	61・62	3.7+	2.05+	0.55	4.23		古墳後期
270	128	磨製石鏃	小豆色泥岩	SK749	34	2.85+	1.5+	0.3+	1.60		−
270	129	磨製石鏃	層灰岩	SK1621	34	2.15+	1.2+	0.25+	0.34		−
270	130	磨製石鏃	層灰岩	SK3682	42	2.55+	基部2.15	0.3	2.66		−
270	131	磨製石鏃？	層灰岩	SC322 SC402	42	3.7+	2.1	0.2	2.29		古墳前期
270	132	磨製石鏃	緑色片岩	SK7035	62	2.45	2	0.2	1.29	平茎	−
270	133	磨製石鏃	小豆色泥岩	SK1627	24	8.1	1.7	5.5	8.41	基部幅0.95	−
270	134	磨製石鏃	小豆色泥岩	SC4148他検出面		(6.65)	1.9	0.5	8.90		検出面
270	135	磨製石鏃	菫青石Hf	SC918 上層	3・4	6.0+	2.65	0.7	12.79		弥後期Ⅲ
270	136	磨製石剣？	小豆色泥岩	遺構面3927	56	8.2+	3.5	11.05	37.54		検出面
270	137	磨製石剣	菫青石Hf	SD3120 下層	41ほか	3.7+	3.2+	(1.05)	37.66		古墳後期
270	138	磨製石剣	菫青石Hf	段下げ東半3052	43	3.53+	2.65+	0.7+	6.37		段下げ
270	139	磨製石剣	菫青石Hf	SP5146	74	2.35+	3.3+	0.6+	5.23		−
270	140	磨製石剣	菫青石Hf	SC1173	14	5.15+	3.8+	(0.7弱)	21.0		Ⅳ期
270	141	磨製石剣	菫青石Hf	SC1219	34・2	5.6+	3.45+	(0.9)	17.76		須玖1
270	142	磨製石剣	菫青石Hf	SD3120 下層	41ほか	6.6+	(2.9)	(0.9)	24.87		古墳後期
270	143	磨製石剣	菫青石Hf	SP3644	45	6.1+	3.45+	0.95+	25.26		−
270	144	磨製石剣	層灰岩	SK1652	33	7.3+		0.7	19.19		−
270	145	磨製石剣	菫青石Hf	SC4140	38・48	3.95+	3.1+	(0.65)	13.52		古墳中
270	146	磨製石剣	層灰岩	SX5740　SC5362内	61	3.1+	2.2～2.65+	0.35+	4.57		古墳後期
270	147	磨製石剣	凝灰岩	SC1173	14	3.25+	3.95+	(0.7)	10.87		Ⅳ期
270	148	磨製石剣	凝灰岩	SP1374 SC1990内	6	9.4+	2.65+	(1.05)	26.74		弥生後期
271	149	磨製石剣	層灰岩？	段下げ454	11	8.45+	3.8+	(0.65)	33.86		−
271	150	磨製石剣	頁岩	SP2095 SK2154内	16	9.25+	4.1	1.0強	50.80		−
271	151	磨製石剣	層灰岩？	SK5488	6	3.2+	2.65～2.75	(0.85)	15.00		−遺物多い
271	152	磨製石剣	泥岩	SC6300	88・89	6.6+	4.0+	(1.55)	52.75		古墳
271	153	磨製石剣	菫青石Hf	SP6095 SK6283 SK6284内	67	4.2+	2.75	(0.75)	14.0		
271	154	磨製石剣？	小豆色泥岩	SP1868追加 SC1173内	15	2.6+	2.85+	(0.55)	4.57		Ⅳ期
271	155	磨製石剣	層灰岩？	SD3713追加	53	2.2+	2.45～2.75+	0.5+	4.74		−
271	156	磨製石剣	小豆色泥岩	SC6692	86	3.35+	3.4+	(1.05)	13.38		弥生中
271	157	磨製石剣	小豆色泥岩	SP4710	Ⅳ2	12.3+	3.85	1.65	107.68		−
271	158	磨製石剣	菫青石Hf	SC6650	58・68	13.75+	3.5	1.2	65.05		弥生後期前半
271	159	磨製石剣	菫青石Hf	SK5485	52	15.35+		2.1	172.27		−
271	160	磨製石戈	菫青石Hf	SC2850	32・33	7.6+	4.7+	1.8	77.93		古墳中～
271	161	磨製石戈or剣	菫青石Hf	SP6552	65	4.9+	3.9+	0.9+	11.81		−
271	162	磨製石戈	菫青石Hf	SK3929	58	5.3+	5.3+	1.05+	21.57		−
271	163	石戈？（石製穂摘具未成品）	小豆色泥岩	段下げ862		7.5+	4.35+	(1.3)	25.16		古墳SC内
271	164	磨製石鎌	菫青石Hf	SK3040	54	4.4+	3.4+	(0.65)	14.25		弥生中期
271	165	磨製石鎌	菫青石Hf	SC3300 北部	36	4.1+	4.9+	(0.9)	27.06		ⅣB～
271	166	磨製石鎌	菫青石Hf	SP5453	62	9.3+	7.0+	(0.65)	52.32		−
271	167	磨製石鎌	小豆色泥岩	SP6298	54	6.5+	(5.4)	(1.45)	70.27	基部厚0.1～1.0+α	−
272	168	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SD4643	Ⅳ1	20.7+(21.4)	7.55+	(5.1)	1109.0	頭部幅4.5　刃なし	Ⅳ区−
272	169	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	排土中（35内か）		14.2+	6.45+	4.9+	631.23	刃角57°	

図	遺物番号	器種	石材	出土遺構	位置	器長	器幅	最大厚	重さ	備考	遺構時期
272	170	蛤刃石斧	火成岩	SK4400	46	13.6+	5.8+	(4.8)	593.44	頭部幅3.9　刃なし	弥生中
272	171	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	4555	野帳	10.7+	7.75+	5.05	639.57	胴部	−
272	172	太型蛤刃石斧	安山岩？	SD3289 SD2511の続き	38	11.6+	(7.75)	3.6+	517.92		−
272	173	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SK3940	58・59	13.5+	7.2+	(4.1)	637.38	頭部幅4.3	−
272	174	太型蛤刃石斧	安山岩？	撹乱6541	65	10.1+	−6.7	3.1+	317.33	頭部幅5.2	
272	175	蛤刃石斧	玄武岩	SC322 R2	3	9.5+	(6.2)	(2.4)	218.41		古墳前期
272	176	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SK6682	76・86	11.85+	7.2+	3.75+	534.51	頭部幅5.7	−
272	177	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SP2608	15	14.15+	7.0+	4.7+	577.03	頭部幅(2.3)	−
272	178	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SP4962 SC4940下	Ⅳ5	7.0+	−7.2	3.95	312.37	刃部幅(0.7) 刃角88°	弥生中？Ⅳ区
272	179	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	2585全体下げ	28	9.6+	−6.9	3.8+	385.22	刃幅6.6　刃角42°	−
272	180	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SP4108	35	9.9+	6.3+	4.15+	387.95	頭部幅5.5+α	−
272	181	扁平蛤刃石斧	今山産出玄武岩	SD3050 上層	41・42	6.75	3.75	1.25	45.91		古墳後期
272	182	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	SC5362 下層中心	51・61	4.5+		0.9+	29.70	刃部幅5.3　刃角80°	古墳後期
272	183	太型蛤刃石斧	玄武岩(今山産)	段下げ2525	28	4.0+		2.5+	41.27	刃部幅4.8+α	−
272	184	蛤刃石斧	玄武岩	SP3305	36	3.55+	4.75+	1.5+	33.38	刃部あり	−
272	185	蛤刃石斧？	緑色片岩	SC1460	42・32	4.2+	2.6+	0.7+	6.87		古墳
272	186	扁平蛤刃石斧	凝灰岩Hf	SP3655	35	4.4+	5.7+	0.8+	16.17		−
272	187	蛤刃石斧	火成岩	検出面4073	46	5.1+		3.0+	64.34	刃幅4.2+α　刃角68°	
272	188	蛤刃石斧	玄武岩	SC3300 北部	37・46	3.5+	5+	2.2+	41.96	刃部幅5.0+α　刃角70°	ⅣB～
273	189	抉入片刃石斧	Hf	包含層2984	5	14.7+	2.2～3.2	(4.0)	372.61	塩基性が高い堆積岩	段下げ
273	190	抉入片刃石斧	層灰岩	SC2012 上面	7	12.4	刃幅2.05	3.9	189.97	頭部幅1.85　刃角50°	Ⅳ期
273	191	抉入片刃石斧	Hf	SC4140 北側検出時	38・47	9.0+	2.65−～	(4.1)	203.25	塩基性が高い堆積岩　再利用	古墳中
273	192	方柱状片刃石斧	板岩	SC5362	51・61	5.0+	1.2	1.55	17.42	刃幅1cm	古墳後期
273	193	方柱状片刃石斧（抉入片刃？）	Hf	SP7241	62	5.7+	(3.05)	(2.9)	78.47		
273	194	方柱状片刃石斧	層灰岩	SK3051	42	(6.8)	3.1	1.55	55.90	刃幅2.3　刃角45°	古墳後期
273	195	扁平片刃石斧	頁岩	SP6785 SD6663内	76	7.2	4.2	2.4	113.31	未製品？	弥生中
273	196	方柱状片刃石斧	層灰岩	段下げ312	略図	5.3	0.95	0.8	9.55	刃幅0.8　刃角40°	段下げ
273	197	扁平片刃石斧	層灰岩	SP2593　SC1800下	16	5.6+	1.75	0.8	16.79	刃部幅1.65　刃角55°	弥生後
273	198	扁平片刃石斧	層灰岩	SC850 東半	14・24	5.6		0.6	16.37	刃幅2.2　刃角55°	ⅣB～
273	199	扁平片刃石斧	層灰岩	SK2405	28	5.45	2.45	0.7	16.40	刃幅2.25　頭部幅（2.05）　刃角43°	後期Ⅲ
273	200	扁平片刃石斧	層灰岩	SC3300 北部	37・46	(7.6)	2.45+	(1.15)	33.70	刃幅2.2+α　刃角50・	ⅣB～
273	201	扁平片刃石斧	層灰岩	Ⅲ−2検出		7.8	2.15	0.95	29.81	刃部幅2.05　頭部幅1.85　刃角50°	
273	202	扁平片刃石斧	層灰岩	SC953	41	6.7	2.5	0.9強	32.86	刃幅2.2　頭部幅2.3　刃角65°	弥後期後
273	203	扁平片刃石斧	層灰岩	SK3670	51	4.5	2	0.9	17.45	刃幅1.9　頭部幅(2.0) 刃角55°	−
273	204	扁平片刃石斧	層灰岩	SC2007 北側	6	4.8	1.95	0.7	14.24	刃部幅1.8　刃角41°	ⅣA～古墳
273	205	扁平片刃石斧	層灰岩	SK081		4.85	2.75	0.9	25.93		
273	206	扁平片刃石斧	層灰岩	SD3700	51他	5.6	3.3	1.7弱	64.74	刃幅3.15　頭部幅2.6　刃角60°	古墳後期
273	207	扁平片刃石斧 OR 砥石	凝灰岩	段下げ5765	73	5.1+	1.9～2.2+	(1.45)	24.98		段下げ
273	208	扁平片刃石斧	凝灰岩？	検出面	1	2.65	2.85	0.7	7.50	刃幅2.45	
273	209	扁平片刃石斧	層灰岩	SP2718	41	4.1	1.9	0.6強	10.17	刃幅(1.8)　頭部幅1.65	−
274	210	扁平片刃石斧	層灰岩	段下げ2585中央	15	(7.7)	3.05	1.1強	52.26	刃幅(2.9)　頭部幅2.7　刃角65°	段下げ
274	211	扁平片刃石斧	シルト岩	検出面 SC7206付近		3.6+	−2.4	(1.3)	21.98	頭部幅2.1	
274	212	扁平片刃石斧	頁岩？	SC148	3	4.0+	−2.5	(0.7)	11.22	頭部幅(2.5)	古墳前～中
274	213	扁平片刃石斧	碧玉？	SK5737	56	3.8	2.45	0.6強	8.51	刃部幅2.35　頭部幅1.95　刃角52°	−
274	214	蛤刃石斧	火成岩	SD3120 上層	41ほか	12.6	5.05	4.5	474.97	刃部幅4.8　頭部幅4.0　刃角75°	古墳後
274	215	紡錘車	滑石	SP300	13	径3.9～4.0		0.5	7.00	軸孔最大径(0.7)　軸孔最少径0.5	−
274	216	紡錘車	滑石	段下げ3052	43	径4.7～4.9		1.0	25.71	軸穴最大径0.65　軸穴最少径0.45	−
274	217	紡錘車未製品	緑色片岩	SD2913	18	径3.7～3.75		0.6	16.29	穿孔部最小厚0.1	弥生中？
274	218	紡錘車	滑石	段下げ3052	43	径(4.5)		1.85	29.74	軸穴最少径(0.6>)	−
274	219	紡錘車？	凝灰岩	SP6467 SC6300内	88	2.8+		(0.65)	8.3	径(6.0)　軸孔径(0.65)	古墳後期
274	220	円盤	緑色片岩	SK1113	33	径3.2～3.3		0.55	9.27	穿孔途中	−
274	221	円盤	片岩	SP3153	44	径2.7～2.8		0.9	9.47		−
274	222	円盤	緑色片岩	SC4987	Ⅳ5	径2.65～3.2		0.65	9.16		弥生中？
274	223	円盤	緑色片岩	SP6699	75	径2.7～2.7+		0.45	5.28		−
274	224	穿孔具？	中粒砂岩	SP3496	42	2.7+	(2.3)	(2.25)	19.00		−
274	225	穿孔具	中粒砂岩	SK6979	87	5.0+	3.15+	(2.9)	43.71		−
274	226	円盤	緑泥片岩	SC3190	44・45	径10.1～10.3		1.85	326.67		終末～古墳
274	227	楕円形石製品	緑泥片岩	SC7002	62・63	4.5+	5.4+	(1.35)	52.32		
274	228	針状石製品	滑石片岩？	SP4961	Ⅳ6	4.2+	0.5	0.5	1.84		−
274	229	石錘		SD4405追加　SC6020	45・55	7.3	2.3	1.95	55.87		弥生中
274	230	楕円形石製品	緑泥片岩	SK3682	42	(8.6)	5.6	1.85	143.24	石錘？	−
274	231	石錘	緑泥片岩	Ⅰ区排土		4.8	4.05	1.25	36.71	打ち欠き部最小幅3.5	
274	232	網錘or打製石斧	緑泥片岩	段下げ3307	35	8.8	4.3	1.5	81.99	紐縛部最大幅2.6	弥後期Ⅲ
275	233	砥石	凝灰岩Hf	SC1600 西側	5	(3.7)	6.0+	(1.1)	39.28	板石　石鎌？	弥生終末ⅣA～
275	234	砥石	中粒砂岩	SC2408 一段下	26～27	5.7+	3.8+	(0.9)	22.15	1面	弥生中期
275	235	砥石	Hf	SC5364	73・83	6.5+	5.2+	(0.95)	51.65	2面	古墳前期後半
275	236	砥石	凝灰岩	SK3096 R6	43	12.4	3.15	2.65	175.05	2面	
275	237	砥石	凝灰岩	SC322	3	9.7	2.7	1.75	555.16	表裏が主　4面	古墳前期
275	238	砥石	頁岩	3−1区検出面		9.1+	4.2	3.1	186.55		
275	239	砥石	中粒砂岩	SK5688	46	7.6+	(6.15)	(4.85)	308.33	4面	
275	240	砥石	中粒砂岩	SC970	32・33	9.55	4.3	4.5	327.96	4面	
275	241	砥石	中粒砂岩	SC6300 張床	88・89	10.6	9.3	8.1	1261.8	設置石　仕上用か　4面	古墳後期
275	242	砥石	凝灰岩	SC2978	27	26.8	5.2	4.1	777.68	4面使用	弥生中期
275	243	支脚	中粒砂岩	SK3450	37・55	(6.9)	底（5.9）		333.56	底部長8.7+α	
275	244	石製品	中粒砂岩	SP6446　SC6276内	78	8.2	3.7	1.4	58.0	顔料塗布か	弥生中期前半

第４章　蒲田部木原遺跡 13 次調査　土層観察メモ

下山　正一（佐賀大学非常勤講師）

トレンチ壁面の土層

蒲田部木原遺跡 13 次調査地の主な埋蔵文化財は発掘上面から掘り込まれた弥生時代の生活遺構である。本遺跡の土層の特徴を明らかにするため、発掘上面（標高 15.8m）から 1.6 m掘り込んだトレンチの土層断面を観察した。土層は上から、黄褐色シルト層、砂礫層、灰色砂層、礫層の４層に区分される（図 1）。最上部の黄褐色シルト層は細粒塊状で、しばしば円礫や炭化木片を交える。植物の根茎痕と思われる垂直方向の線状生痕が無数に見られる。黄褐色シルト層からは縄文時代晩期の土器片が出土する。砂礫層は厚さ 15-20㎝で細礫を主体としている。砂層は中粒砂からなり成層し、斜交葉理も見られるので、流水による自然堆積と考えられる。この中からも希に縄文時代晩期の土器片が出土する。最下部の礫層は多くが 5㎝以上の大礫から成り礫同士が接して基質支持となっている。礫種は主に結晶片岩である。トレンチ断面では礫層が砂礫層と砂層に大きく切られている様子が観察された（図 1、図 2C）。

土層の成因について

発掘区域内での最上部の黄褐色シルト層の厚さはまちまちで、薄い場合は下位の礫層が表面近くまで達する。厚い場合は下に砂礫層と侵食面が存在する。これらの状況から、黄褐色シルト層、砂礫層、灰色砂層は下に凸のレンズ状断面を持った洪水層のセットと考えられる。堆積セットの形成プロセスは、まず洪水の強い水流が礫層を下方浸食と側方浸食で削って浸食凹地を形成し、続いて水流で砂礫層と砂層が浸食凹地に堆積、最後に洪水で懸濁した泥水が残った窪地に沈積して黄褐色シルト層が形成されたと考えられる。黄褐色シルト層の成因は基本的には洪水による自然堆積層だが、植物生痕があり砂や円礫や炭化物を頻繁に含有していることから、堆積後に植生や耕作などによる攪乱をうけた攪乱土層でもある。最下部の礫層は谷を埋積しており、土石流で河川主部を運ばれた礫が流速低下によって河床に堆積した河川（河床）堆積物である。礫層の区分は年代が特定されていないため、決め手を欠くが、黄褐色シルト層との時間差を小さく考えるなら、沖積段丘を構成する完新世の沖積砂礫層、あるいは時間差を大きく考えるならば更新世後期の低位段丘層と考えられる（図 3）。

遺跡立地面の評価について

遺跡が立地する平坦面は現河床を含む沖積低地より 1-2 段高いので、段丘面と考えられる。段丘最上部の黄褐色シルト層に弥生時代前期の住居遺構が掘り込まれていること、洪水層の中から縄文時代晩期の土器片が多数出土（希に縄文時代後期の土器も出土）することから、この段丘面の構成層は少なくとも弥生時代前期に離水した沖積段丘砂礫層と考えられる（図 3）。沖積段丘砂礫層の形成時期は縄文時代前期から弥生時代前期の間と考えられる。その間何度か河川氾濫による洪水があり、側方侵食と堆積を繰り返しながら土層が形成された。縄文時代晩期の土器がまとまって出土することもあるので、洪水の合間に縄文時代晩期の生活地が不安定な沖積地に形成された可能性がある。

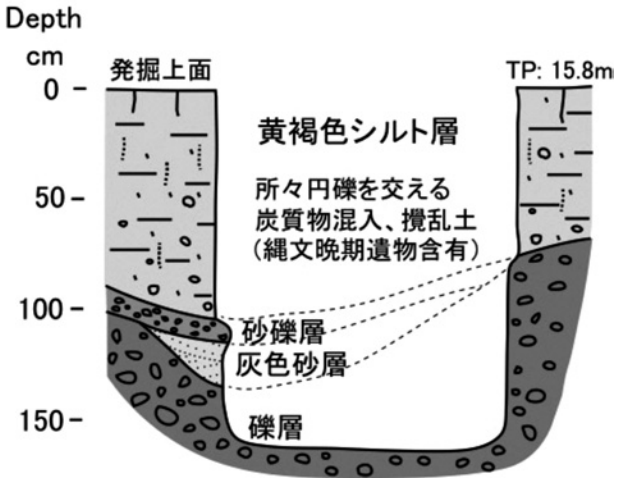


図１　トレンチ土層断面

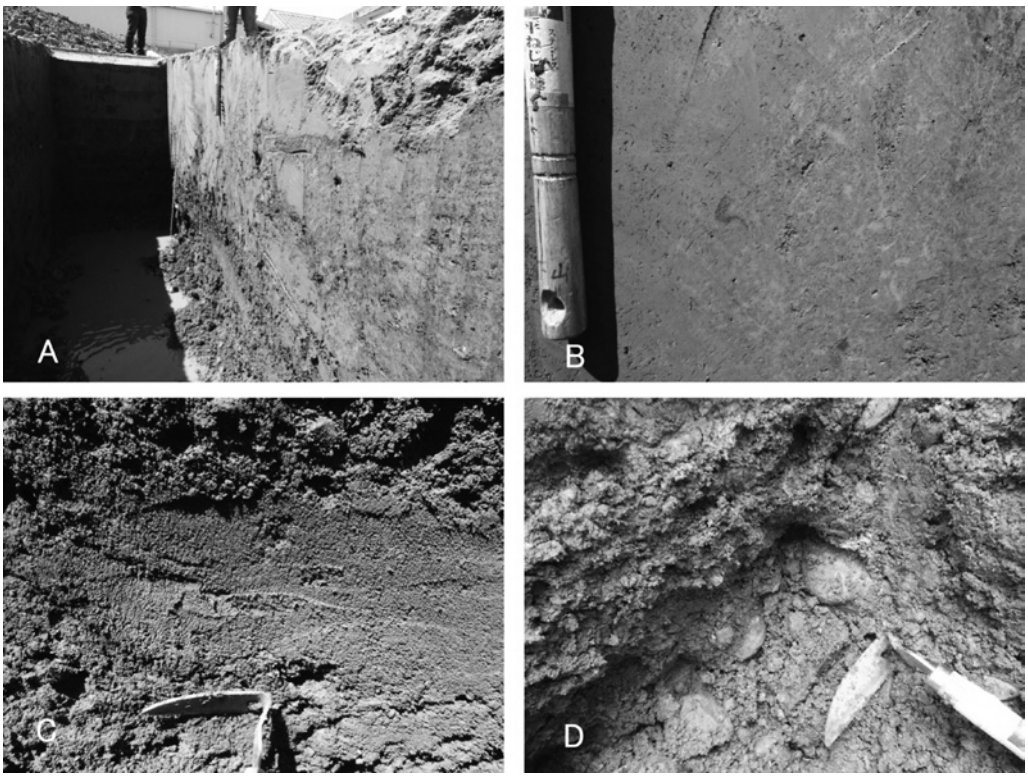


図２　トレンチ壁面の土層

A: 礫層を切る砂礫層と砂層、B: 黄褐色シルト層、C: 砂礫層と褐色～灰色砂層、D: トレンチ最下部の礫層

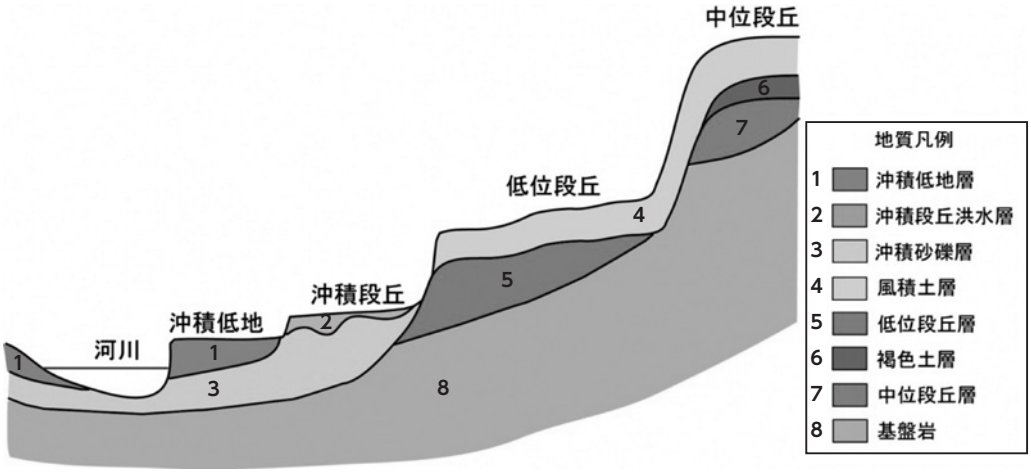


図３　蒲田付近の中位段丘層から沖積低地層までの模式断面図

第５章　蒲田部木原遺跡 13 次調査出土の動物遺体・骨角製品

新美倫子（名古屋大学博物館）

蒲田部木原遺跡の 13 次調査では遺構の埋土などから 120 点の動物遺体と 1 点の骨角製品が出土した。これらはすべて調査時に取り上げられたものであり、所属時期は大半が弥生～古墳時代と考えられる。ほぼすべての資料がよく焼けて白色化し、割れて小さな破片となったものが多い。動物遺体では貝類・魚類・鳥類・爬虫類・哺乳類の破片が確認できたが、120 点のうちの 111 点は哺乳類であった。表 1 にこれらの出土遺構・層位・所属時期と出土資料の内容を示した。なお、福岡市埋蔵文化財課の池田祐司氏にはこの資料を分析する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1、貝類・魚類

貝類は SP3773 から二枚貝と思われる破片が 1 点（No.30）出土した。種は不明である。

魚類は SK4061 からサメ類の歯 1 点（No.34）と SP3773 から種不明の椎骨破片 1 点（No.30）が出土した。サメ類の歯は細い三角形の歯冠部の表層のみが残っており、切縁には鋸歯がないタイプであった。椎骨破片は全体の 1/3 程度のみが残っており、この部分だけを見るとクエに類似するが、残存部分が少ないために種はわからない。

2、爬虫類・鳥類

爬虫類は 4 点出土した。スッポン背甲破片が SX6931 から 1 点（No.51）と陸ガメ類甲羅破片が SK3220・SP4830・SP5002 からそれぞれ 1 点ずつ（No.19・41・42）出ており、いずれもよく焼けた小さな破片であった。陸ガメ類のうち SK3220 出土資料は背甲、SP4830 出土資料は腹甲であるが、SP5002 出土資料は背甲・腹甲のどちらであるか不明である。

鳥類は段下げ 3151 と SC3660 で種不明の四肢骨破片が 1 点ずつ（No.18・26）見られた。

3、哺乳類

出土した 111 点の中で種を同定できたのは、シカ 12 点・イノシシ類 12 点・ヒト 1 点である。これらのうち、シカの出土内容と出土遺構を表 2 に、イノシシ類の出土内容と出土遺構を表 3 に示した。

シカは頭蓋骨破片 1 点・下顎骨破片 2 点・中手骨破片 1 点・中手または中足骨破片 1 点・寛骨破片 1 点・大腿骨破片 1 点・踵骨破片 1 点・中節骨遠位部 1 点・角破片 3 点が出土した。いずれもよく焼けて縮小し、長さ 3.2cm の寛骨破片 1 点を除いて、すべて長さ 3cm 以下の破片であった。中手骨破片は右中手骨近位部の内側かつ後側の破片である。角破片 3 点にはいずれも角の外表面の凹凸と内側中心部の海綿状組織が見られた。

イノシシ類は下顎骨破片 4 点・上腕骨破片 1 点・尺骨 1 点・寛骨 1 点・大腿骨 1 点・踵骨破片 1 点・末節骨 2 点・肋骨破片 1 点が出土した。すべてよく焼けて破片になっており、野生イノシシであるかブタであるかはわからない。下顎骨破片 4 点のうち 2 点は下顎連合部の破片（No.15・20）である。No.15 は下顎連合部の上面のみの破片であり、歯槽の形から見て第 2 切歯はまだ萌出途中かもしれない。また、No.20 は下顎連合部の後ろ半分程度の破片であり、この資料も歯槽の形から見て第 2 切歯は萌出途中かもしれない。下面の形状は残存部分が少ないのではっきりとはわからないが、残った部分から推測すると、凹む可能性が大きいように思われる。もし凹むのであれば、家畜化現象が認められるので、この個体はイノシシではなくブタである。残りの下顎骨破片のうち No.4 は右の犬歯と前臼歯に挟まれた部分の破片であり、犬歯歯槽の形から見て雌である。No.9 は下顎角部分の破片であった。

イノシシ類において特徴的なのは、資料の大きさにかなり変異があることである。筆者所蔵の現生

表1　動物遺体・骨角製品出土内容

No.	遺構	位置No.	層位など	所属時期	種・部位・点数	計
1	SC322	3	南端埋土3段目	終末～古墳前？	イノシシ類寛骨右1焼	1
2	SP849	32		-	陸獣破片1焼	1
3	SP897	14	SC850内	古墳前期	陸獣破片1焼	1
4	SC960	32		弥生後期～終末	イノシシ類下顎骨右破片1焼	1
5	SP1080	34		弥生中期後半～	陸獣破片1焼	1
6	SC1460	42		古墳後期	シカ下顎骨破片1焼、ヒト四肢骨破片1焼、陸獣破片2焼	4
7	SC1460	42	カマド全体	古墳後期	イノシシ類踵骨左破片1焼	1
8	SP1742	15			シカorイノシシ類四肢骨破片1焼	1
9	SK2010	15		弥生中期前半	イノシシ類下顎骨破片1焼	1
10	SP2393	25	SK2777内	弥生中期前半～	イノシシ類上腕骨右下破片1焼	1
11	SP2735	43		弥生中期前半～	陸獣破片1焼	1
12	SD3050	54	上層	６世紀後半～末	イノシシ類大腿骨頭のみ左1ハズレ若焼、シカ角破片1焼、陸獣破片5焼	7
13	段下げ3052	43	SC3200上層	弥生中期	シカorイノシシ類四肢骨破片1焼	1
14	段下げ3052	43	SC3200上層	弥生中期	シカ中節骨下1焼	1
15	段下げ3052	43	段下東半		イノシシ類下顎連合部破片1焼	1
16	SD3120	41	上層	６世紀後半～末	陸獣破片3焼	3
17	SD3120	41	上層	６世紀後半～末	シカorイノシシ類椎骨破片1焼、シカ角破片2焼、陸獣破片3焼	6
18	段下げ3151		一段下		鳥類四肢骨破片1焼	1
19	SK3220	43		弥生後期前半？	陸ガメ背甲破片1焼	1
20	SK3220	43		弥生後期前半？	イノシシ類下顎連合部破片1焼	1
22	SP3372	37	SC3301内	弥生後期か～	シカ大腿骨左中破片1焼	1
23	SK3450	55		古墳前期後半～中期	陸獣破片2焼	2
24	SK3475	43		弥生中期か	シカ中手骨右上破片1焼	1
25	SC？3492	44		ー	シカ下顎骨破片1焼	1
26	SC3660	44	追加	古墳後期	鳥類四肢骨破片1焼	1
27	SX3696	53		弥生中期～	陸獣破片1焼、不明破片1焼	2
28	SP3711	53		古墳後期	陸獣破片1焼	1
29	段下げ3734	44			シカ頭蓋骨破片1焼	1
30	SP3773	54		弥生前期～	魚類椎骨破片1焼、貝類破片1焼？	2
32	SP3795	54		古墳後期	陸獣破片1焼	1
33	SK3811	43		弥生中期前半～	陸獣破片1焼	1
34	SK4061	47		弥生中期初頭～前半	サメ類歯1焼？	1
35	SP4559	Ⅳ1		弥生中期後半～	陸獣破片1焼	1
36	SK4560	Ⅳ1		弥生中期	陸獣破片2焼、不明破片1焼	3
37	SK4630	Ⅳ2		弥生中期後半	陸獣破片1焼	1
38	SP4788	65		ー	陸獣破片2焼	2
39	SP4800	64		弥生中期後半～	陸獣破片2焼	2
40	SP4816	63		弥生中期後半	陸獣破片6焼	6
41	SP4830	64		弥生中期前半～	陸ガメ腹甲破片1焼	1
42	SP5002	64		弥生後期？～	陸ガメ甲羅破片1焼	1
43	SK5495	52		弥生中期前半	シカ中手足骨中破片1焼、イノシシ類末節骨（側指）上1焼、陸獣破片2焼	4
44	SP5913	55		弥生後期か	シカorイノシシ類脛骨中破片1焼	1
45	SK6066	44		弥生中期後半か	陸獣破片2焼	2
46	SK6081	38	SK2605内	弥生前期後半	不明破片5焼	5
47	SP6095	67		弥生中期前半～	イノシシ類尺骨右上1焼、陸獣破片1焼	2
48	SP6211	76		ー	シカorイノシシ類尾椎破片1焼	1
49	SK6420	66	西側		シカ踵骨右破片1若焼	1
50	SK6802	76		古墳中期	シカ角or陸獣骨製加工品1焼	1
51	SX6931	66	SC6930内	弥生中期	イノシシ類肋骨破片1焼、シカorイノシシ類肋骨破片5焼、陸獣破片4焼 スッポン背甲破片1焼、不明骨片13焼	24
52	SC7000	53		弥生中期前半	陸獣破片5焼	5
53	炉7060	63	SC7046	弥生中期	イノシシ類末節骨1焼、陸獣破片4焼、不明破片1焼	6
54	ー		E-1検出面	ー	シカ寛骨右腸破片1焼	1
					計	121

註　No.21と31は欠番。SC：竪穴建物、SK：土坑、SD：溝、SP：ピット、SX：そのほかの遺構、段下げ：遺構検出作業時出土。
上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。腸：腸骨部分、焼：焼けた資料、
ハズレ：成長途中であるため骨端が分離していることを示す。若：若獣、若のないものは成獣。
遺構名にアミをかけた遺構は第3章で報告している。

ニホンイノシシ標本（雌・岐阜県産）と比較すると、No.15・20 の下顎連合部破片はかなり小さく、半分程度の大きさしかない。寛骨（No.1）は寛骨臼がほぼ完全に残っていたが、標本の 7 ～ 8 割程度の大きさであり、右上腕骨遠位部破片（No.10）は若干小さい。また、右尺骨（No.47）は標本と同程度の大きさであり、踵骨破片（No.7）は若干大きい。どの資料もよく焼けているので本来の大きさより縮小しているはずであるが、各資料が焼ける前には一様に上述の現生標本よりやや大きかったとすると、資料によって縮小率にかなり差があることになる。あるいは、縮小率は同じぐらいで、焼ける前の資料にすでに大きいものと小さいものがあったのかもしれない。そうであれば、下顎連合部破片 2 点はもともと現生標本よりもかなり小さく、尺骨や踵骨はかなり大きかったことになる。

ヒトは SC1460 から出土しており（No.6）、よく焼けた長さ 3.8cm の四肢骨中間部破片である。残存部分が少ないので部位がよくわからないが、橈骨の中間部破片かもしれない。他にはシカまたはイノシシ類の破片が 10 点、陸獣類破片が 55 点、小さいために陸獣か海獣かの区別もできない不明哺乳類破片が 21 点出土した。これらもみなよく焼けていた。

4、骨角製品

棒状の骨角製品が SK6802 から 1 点出土した（No.50）。よく焼けて細かく割れており、もとの全体の長さはわからない。幅は 5 ～ 6mm ほどで断面は半円形であり、シカの角または陸獣骨製である。

表2　シカ出土内容

部位・点数	No.	出土遺構
頭蓋骨破片1焼	29	段下げ3734
下顎骨破片2焼	6・25	SC1460・SC？3492
中手骨右上破片1焼	24	SK3475
中手足骨中破片1焼	43	SK5495
寛骨右腸破片1焼	54	E-1検出面
大腿骨左中破片1焼	22	SP3372
踵骨右破片1若	49	SK6420
中節骨下1焼	14	段下げ3052
角破片3焼	12・17	SD3050・SD3120
計　12点		

註　表1参照。

表3　イノシシ類出土内容

部位・点数	No.	出土遺構
下顎連合部破片2焼	15・20	段下げ3052・SK3220
下顎骨右破片1焼	4	SC960
下顎骨破片1焼	9	SK2010
上腕骨右下破片1焼	10	SP2393
尺骨右上1焼	47	SP6095
寛骨右1焼	1	SC322
大腿骨頭のみ左1ハズレ若焼	12	SD3050
踵骨左破片1焼	7	SC1460
末節骨1焼	53	炉7060
末節骨（側指）上1焼	43	SK5495
肋骨破片1焼	51	SX6931
計　12点		

註　表1参照。

第６章　蒲田部木原遺跡 13 次調査出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

福岡県福岡市の蒲田部木原遺跡第 13 次調査で出土した炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、竪穴住居跡 SC2007 から出土した炭化材５点である。発掘調査所見では、遺構の時期は古墳時代前期と考えられている。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のサクラ属とウツギ属？、カキノキ属の計３分類群がみられた。また、試料の劣化が激しく、広葉樹までの同定となった試料が２点みられた。同定結果を表１に示す。

表1　蒲田部木原遺跡第13次調査出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	遺構	遺物No.	種類	樹種	時代
1	SC2007	炭1	炭化材	広葉樹	古墳時代前期
2	SC2007	炭2	炭化材	サクラ属	古墳時代前期
3	SC2007	炭3	炭化材	広葉樹	古墳時代前期
4	SC2007	炭4	炭化材	ウツギ属？	古墳時代前期
5	SC2007	炭5	炭化材	カキノキ属	古墳時代前期

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) サクラ属（広義）　Prunus s.l.　バラ科　図版１　1a-1c（No.2）

小型の道管が単独ないし数個､放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１列が直立する異性で、1～５列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(2) ウツギ属？　Deutzia?　アジサイ科　図版１　2a-2c（No.4）

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材であるが、年輪界が確認できなかった。道管の穿孔の形状は確認できなかった。内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、幅１～４列、長さは 1mm 以上となる。また、放射組織は鞘細胞を有する。

ウツギ属にはウツギ、マルバウツギなどがあり、日当たりの良い小川付近などに分布する落葉低木である。代表的なウツギの材は重硬で、切削加工は中庸である。

(3) カキノキ属　Diospyros　カキノキ科　図版１　3a-3c（No.5）

中型の道管が、単独ないし２～３個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、１～３列となる。また放射組織は、層階状に配列する。

カキノキ属には栽培種のカキノキや野生種のトキワガキなどがあり、日本に自生するトキワガキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の小高木～高木の広葉樹である。材はやや重硬で

靭性がある。

(4) 広葉樹　Broadleaf-wood　図版１　4a-4c（No.1)、5a-5c（No.3）

横断面では道管が確認できたが、試料の劣化が激しく、年輪界が確認できなかった。道管は単穿孔を有する。放射組織は単列同性である。

4. 考察

古墳時代前期の竪穴住居跡 SC2007 から出土した炭化材は、サクラ属とウツギ属？、カキノキ属、広葉樹であった。試料はいずれも建築部材の可能性が考えられる。サクラ属とウツギ属、カキノキ属はいずれも堅硬な部類に属する樹種である（伊東ほか，2011)。

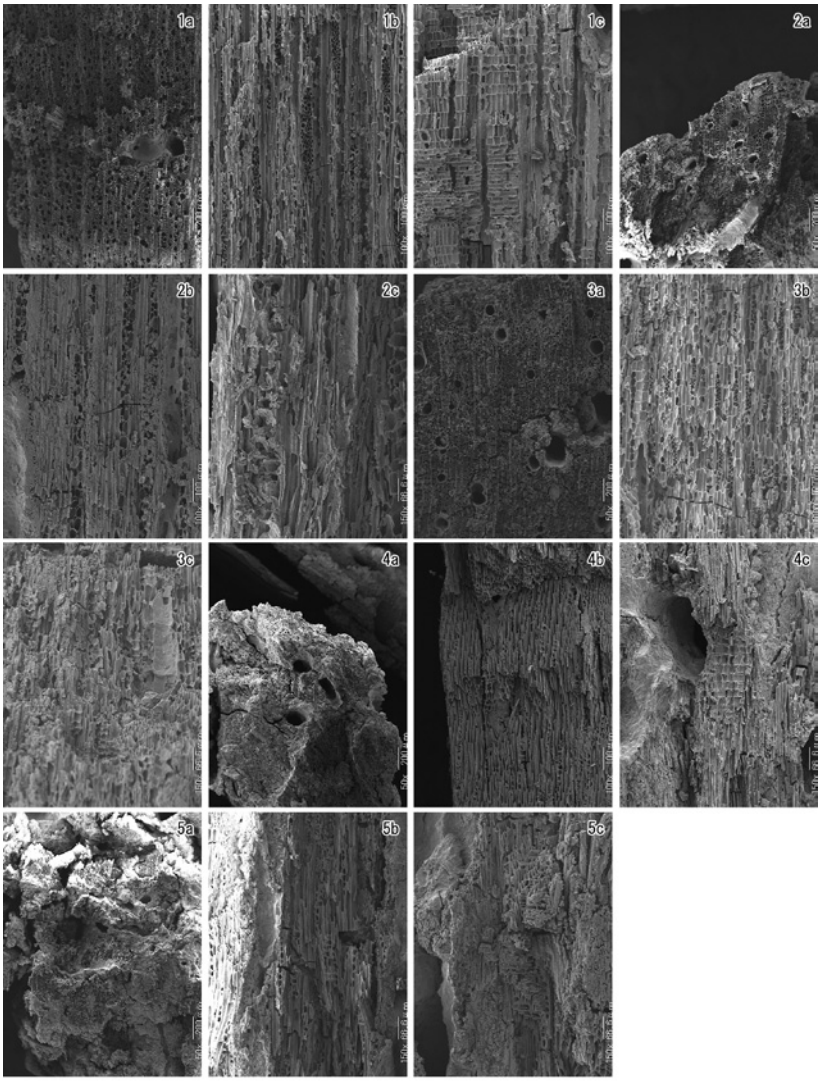
福岡県の古墳時代頃の建築材の集成では、サクラ属やカキノキ属が確認されており（伊東･山田編，2012)、傾向は概ね一致する。

引用文献

平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社



図版１　蒲田部木原遺跡第 13 次調査出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. サクラ属（No.2)、2a-2c. ウツギ属？（No.4)、3a-3c. カキノキ属（No.5)、4a-4c. 広葉樹（No.1)、5a-5c. 広葉樹（No.3）

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第７章　まとめ

蒲田部木原遺跡第 13 次調査では、縄文時代の遺物と弥生時代前期から古墳時代後期までの集落跡を確認した。ここでは報告をふり返りつつ補足を行いたい。

立地　今回の遺構面は黄褐色シルトおよび砂礫層上面で、黄褐色シルトからは縄文晩期の遺物が出土した。調査終盤、これらの堆積の状況を確認するためにSK2399の東（No.25-26）でトレンチ調査を行い、下山正一氏に所見をいただいた（第５章）。その結果、調査地点の遺構面は弥生前期までの河川氾濫による浸食と堆積の繰り返しによって形成され、黄褐色シルト層は洪水の最後に懸濁した泥水が沈積して形成されたと考えられる。洪水の合間に晩期の生活地が形成された可能性の指摘は、晩期の包含層の在り方と合致する。これに対し北西 100 mに位置する蒲田水ヶ元遺跡３次調査地点では、黄褐色シルト上面で縄文後期の竪穴建物が確認されている。遺構面は 13 次より 50 ～ 60㎝高くより古い堆積の上に遺構が形成されたと考えられよう。また 13 次調査区南東端では北東から南西方向に延びる溝状の SD2105 を確認し、埋土から弥生中期の遺物が出土した。さらに南に接する敷地で、今回の調査とは別に行った確認調査では、北側に暗褐色粘土、淡黄茶色粘土を埋土とする広い落ちがあり、弥生中期を主体とする遺物が多く出土している。13 次調査区に近い北端が最も深く、地表面から 180㎝を測り、SD2105 で確認した底より 60㎝ほど低い。この状況から SD2105 を北岸とする河川状の落ちが想定されよう。さらに調査区南東部 SC2300 付近では遺構面下の粗砂層から弥生土器片出土しており、小さな浸食と堆積が弥生時代以降にもあったと考えられる。一方、調査区北西端では古墳後期の SC5364 などが現在も流れる河川によって切られる。この流れは水ヶ元３次でも調査区西側を浸食し古墳後期までの遺構を切っている。ただし３次地点の浸食を受けた未調査範囲には削平面に遺構が残り保存されている。以上のように調査地点周辺は河川氾濫が繰り返し起こり形成されたことがこれまでの調査事例からも窺うことができる。

弥生時代の遺構と遺物　確認した弥生時代の遺構は前期後半から多くなり中期後半から後期前葉は少なく後期中ごろから増加する。各時期とも調査区全域に分布し特に偏りはない。遺物は刻目突帯文土器が遺構埋土から少量出土し、口縁部外面肥厚の壺など前期はじめの遺物もわずかに見られる。竪穴建物は前期から中期前半は平面円形で、中期前半から方形が見られる。ただしいずれも残りが悪く、伴う遺物、プランが不明確なものもあり、特に方形のものは不確実である。遺物も少ない。また No. ２･12、63・73 付近では弧状のプランやピットの配置から円形竪穴建物が想定され、十分確認できていない遺構がほかにもあると考えられる。後期では SC1800 のように一辺が北東から南東の方向に向く竪穴建物の一群が後期中ごろから終末期に見られるなど、継続した集落の営みが見られる。また、この遺構の方向は、弥生期の溝、連続するピットも同様で地形に沿ったものと考えられる。

特徴的な遺構として底に焼土を多く含む土坑や埋土に焼土粒、炭化物面、炭化物粒を含む土坑があげられる。特に後者は多く、前期後半から中期前半に集中する。前期後半の SK4133、6706、中期前半の SK2051 などは床面に焼土が厚く溜まる顕著な例である。多くは埋土下部に薄い炭化物の広がり、炭粒、焼土粒を含む堆積がみられる。これらに遺構の壁や床が焼けた明確な例はない。その遺構で焼成がなされたというより、それらを含む土壌が周囲から入った状況と考えられる。周囲で何らかの焼成をともなう営みがあったことは確かである。報告できていないが、遺構面に焼土面が見られる箇所がありこれらが該当するのかもしれない。これらの成因の一つとして土器焼成が想定されよう。遺構埋土から焼けた粘土塊が出土することも多くその行為が行われた可能性はある。またこの時期の土坑は底に多量の土器が出土する例が多く、調査中これら遺構についても土器焼成の痕跡の指摘があった

が、焼土を多く伴う例、壁、床面が焼けた例はなく、積極的に肯定する状況にはない。

また強い熱を受けた動物遺体が多く出土したことも今回の調査の特徴である。遺構埋土などから120点の動物遺体と1点の骨角製品が出土し、ほとんどが強く焼けて白骨化した状態であった（第5章新美倫子氏報告）。多くが遺構埋土出土であるが、SX6931、炉SX7060はそれぞれ竪穴建物SC6930、SC7046の炉跡と考えられる遺構で、いずれも遺物が少なく確実ではないが中期初頭から前半を想定している。この時期が正しければ、焼骨を中期前半に生成した場所と言えよう。その後の弥生後期、古墳時代の遺構埋土からも出土しているが、埋土には弥生中期の遺物も多く中期前半までに生成されたものが混じった可能性もある。古墳後期ではSC1460のカマドからの出土があり、カマドで生成されたことも考えられるが、周辺の遺跡でカマドからの出土は一般的ではなく、これも埋土の混じりこみの可能性も残る。焼骨は調査区内の全域に広がり、特にNo.43、54周辺に出土例が集まる。遺構掘削の精度の違いもあり、取りこぼした遺構も多いと考えられる。また近接する10次調査でも17点の焼骨が報告されている。10次調査の遺構は弥生前期後半から古墳前期までと本調査とほぼ同じであり、焼けた骨の存在を含めて同様の状況が二つの調査地点を結ぶ範囲に広がることが想定される。焼土を伴う遺構、土坑底の遺物の集中、焼けた動物遺体の成因を示すことはできないが、今後、ほかの遺跡、調査での出土に注意する必要がある。

このほかに、出土遺物では中期初頭前後の土坑出土の一括遺物、綾羅木系土器、多くの磨製石器の出土が注意される。ここで綾羅木系土器（田畑2003）としたのは口縁部内面に貼り付け突帯をもつ壺で、SK721(図70)、SK5690(図130)、SK4975(図132)が前期から中期前半の遺構で出土した。特にSK5690出土の壺は長い頸部に連続する工具痕で5条の直線紋を施し特徴的である。胎土も精良でほかの土器と異なり搬入品の可能性がある。これらの壺は宗像などでも出土例があるが、福岡平野では見られない。今回の調査地周辺が南限に近いと考えられる。

今回の13次と10 次地点では弥生時代前期後半から中期にかけての集落遺構が集中した。竪穴建物は残りが悪く特に前期は検出数が少ないが、土坑の多さからして相当数の建物があったものと考えられる。特に中期前半では大型の円形竪穴建物SC7260などがその中心となる施設の一つと想定される。蒲田部木原、水ケ元遺跡では弥生前期から中期の遺構は低地部に展開する。その中で集落遺構は13次地点から南西側の5次地点にかけて広がり、12、 4次調査地点では中期後半が目立つ。一方墓域は7次地点で汲田式、11次で汲田式と中期前半までの小型棺、北東側の水ヶ元3次で前期の木棺墓と土壙墓、中期の城ノ越、汲田式甕棺と小型棺が確認されている。13次に対応する時期の墓域であるが、金海式甕棺がみられない。

弥生時代終末期から古墳時代の遺構と遺物　竪穴建物をはじめとする遺構は、弥生後期後半に増加がみられたのち、弥生終末から古墳前期に継続する。建物プランは方形で2本主柱穴、ベッドを有するもののほか、方形で四方もしくは三方にベッドを有し、ベッド際4隅に主柱穴をもつものがある。これらは弥生後期の遺構と同様、配置方向を意識している。当該期の集落は、部木原10次や水ヶ元2次などで認められるが顕著でなく、本調査地点に一定のまとまりがある。遺跡の低地部に立地が集中するようである。また、焼失竪穴建物が複数ある点も特徴といえる。近接する部木古墳群のほか、周辺には上大隈平塚墳丘墓や上大隈丸山古墳などの墳墓があり、本調査区を主とする蒲田部木原・水ヶ元の集落が対応するのだろう。

古墳中期には前期に比べて遺構数は減り、散漫となる。遺跡全体でみると、中期の集落は前期までと同様低地部が中心で、10・12次などで検出している。このほか、台地部に位置する3次でも認められる。ただし、いずれの地点も遺構数は少なく、集落全体の動向として、中期が少なくなるようで

ある。中期後半からカマドをもつ竪穴建物がみられ（12 次）、出土土器は土師器が主体で、須恵器は少ない。

古墳後期になると遺構数が再び増加し、調査区を縦断する SD3700・SD3050・SD3120 以西に分布が集中する。これらの溝が古墳前期までの遺構配置の方向を意識せずに掘削されている点は留意すべきである。いずれも大きな時期差はなく、概ねⅢ B 期におさまる。竪穴建物は、カマドをもち一辺 4 ～ 5 m程度の小規模の方形が主体で、中期ほどではないが須恵器は少なく、須恵器系土師器が多い印象を受ける。そのなかで、一辺 6 m以上の大型方形建物は目立つ存在である。SC5362 は床面に台石・砥石を据え、滑石の製品・未製品・石材が出土することから滑石製品の工房とみてよい。規模だけでなく、壁際で出土した須恵器系土師器の器台からも、一般的な竪穴建物とは異なる存在であることがうかがえる。器台の上層からは甕片が出土しており、器台の上に甕が据えられていた状況が想定される。また、SC6331 は長軸長 6.9 m を測り、北西壁中央にカマドを配する。周辺における同規模の竪穴建物は、時期は下るが阿恵遺跡官衙関連地区の竪穴建物 SC-1 がある。規模が大きく、政庁成立前後に単独で出現することから、「公的な性格を持つ施設」とみる意見がある（西垣 2023：p.43）。

蒲田では、古墳後期の集落は台地部の 2・3 次、低地部の 12 次・本調査地点に認められる。特徴的な遺構として、排水溝を持つ方形竪穴建物があり（2 次）、渡来系要素とみる意見がある（重藤 2020 など）。本調査地点では排水溝付の建物は未検出だが、渡来系要素でみると、有溝把手付土器が SC5362 で出土しており、近隣では名子遺跡や粕屋町内橋登上り遺跡などで認められる。また、水ヶ元 3 次の新羅土器や、粕屋町脇田山古墳の百済系平底短頸壺も留意すべきだろう。

古墳後期の蒲田の集落に対応しうる墳墓は、篠栗町松浦横穴、粕屋町真覚寺古墳・脇田山古墳、かけ塚山古墳群などが想定される。とくに、かけ塚山古墳群は本調査地点に近接し、時期も大差ない。かけ塚山では、小札甲や竪矧広板鋲留衝角付冑片、鉄地金銅張鞍金具などが採集されており、副葬品が際立つ。

そのほか、滑石製品の製作跡を複数検出した点は本調査地点の特徴といえる。SC5362、SC6200、SC6300 など古墳後期の竪穴建物に主に認められ、滑石の石材・未製品・製品が床面を中心に出土している。蒲田では部木原 3 次の 5 号竪穴住居跡で未製品が出土し、報告では弥生後期後半から終末を想定している。周辺では、粕屋町古大間池遺跡、須恵町牛ガ熊遺跡などにあり、古大間池周辺には滑石の露頭がある。

今回の調査では弥生前期後半から古墳時代後期までの集落を確認した。特に弥生時代前期後半から中期前半にかけては遺構、遺物とも多く、低地部に展開した中心的な集落と考えられる。

参考・引用文献

久住猛雄　2019「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅱ－古墳時代前期末～古墳時代中期－　第 22 回九州前方後円墳研究会宮崎大会　追加資料』

重藤輝行　2020「古墳時代九州北部の排水溝付竪穴住居と渡来人」『福岡大学考古学論集 3 －武末純一先生退職記念－』 pp.367-382

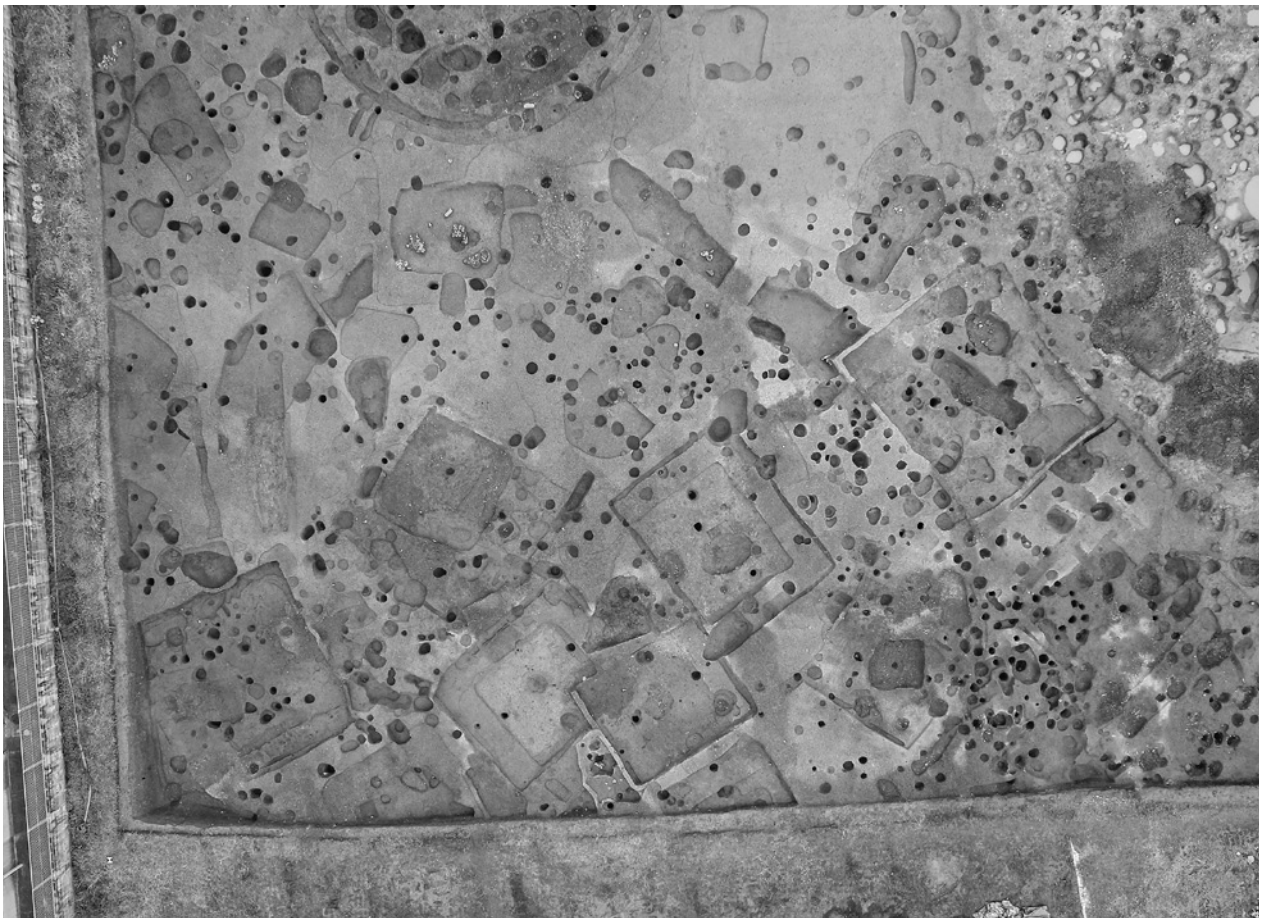
田畑直彦　2003「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集』

寺村光晴　1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館

西垣彰博　2023「阿恵官衙遺跡周辺の官衙関連遺跡について」『令和 5 年度九州考古学会総会　研究発表資料集』 pp.34-43

調査区北東側調査中（北東から）

調査区北東（北から）



調査区南東側（東から）

東半調査中（北から）

中央部調査中（北東から）

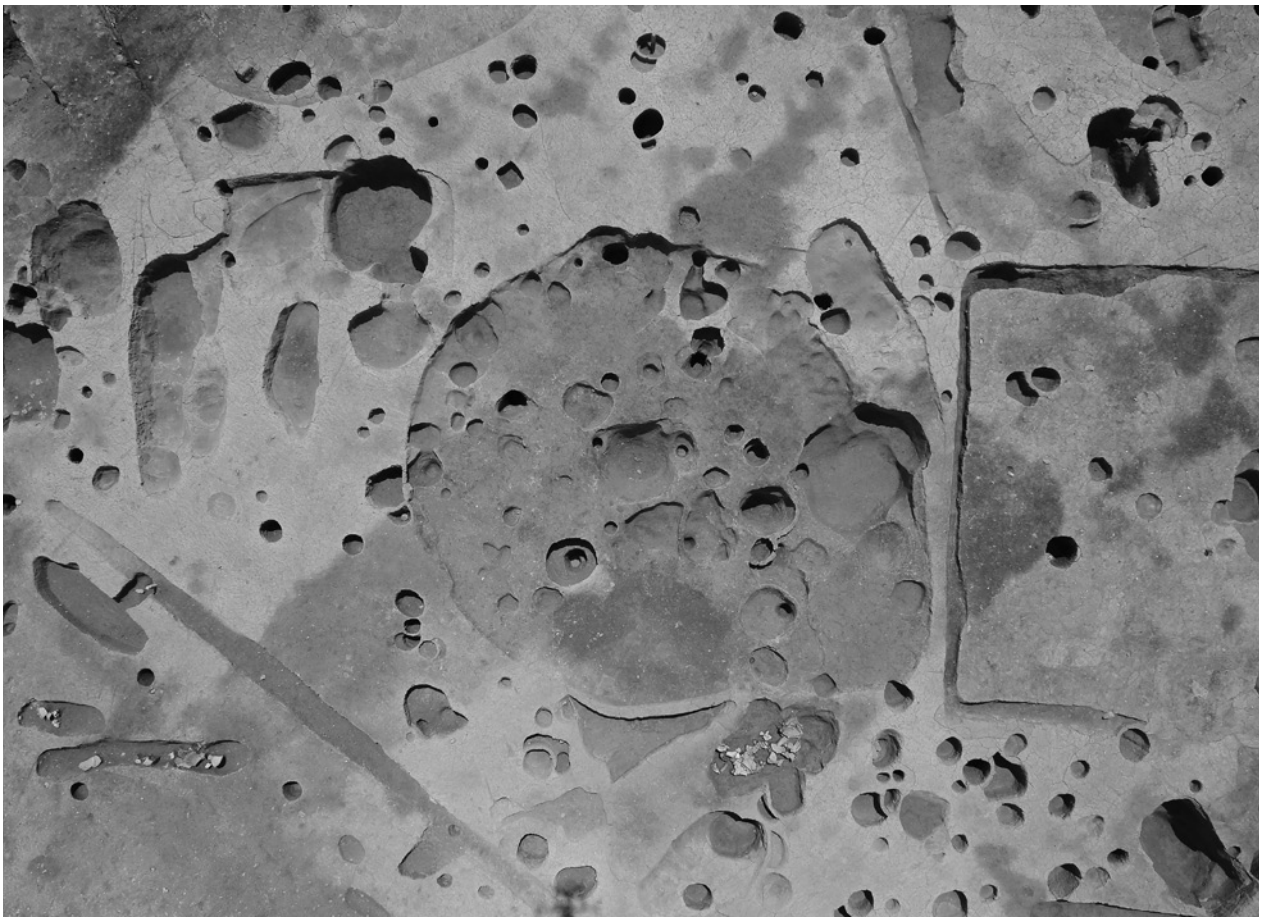
調査区北西側調査中（北東から）

調査区北西側（北から）

調査区南西側（北から）

SC4354（北西から）

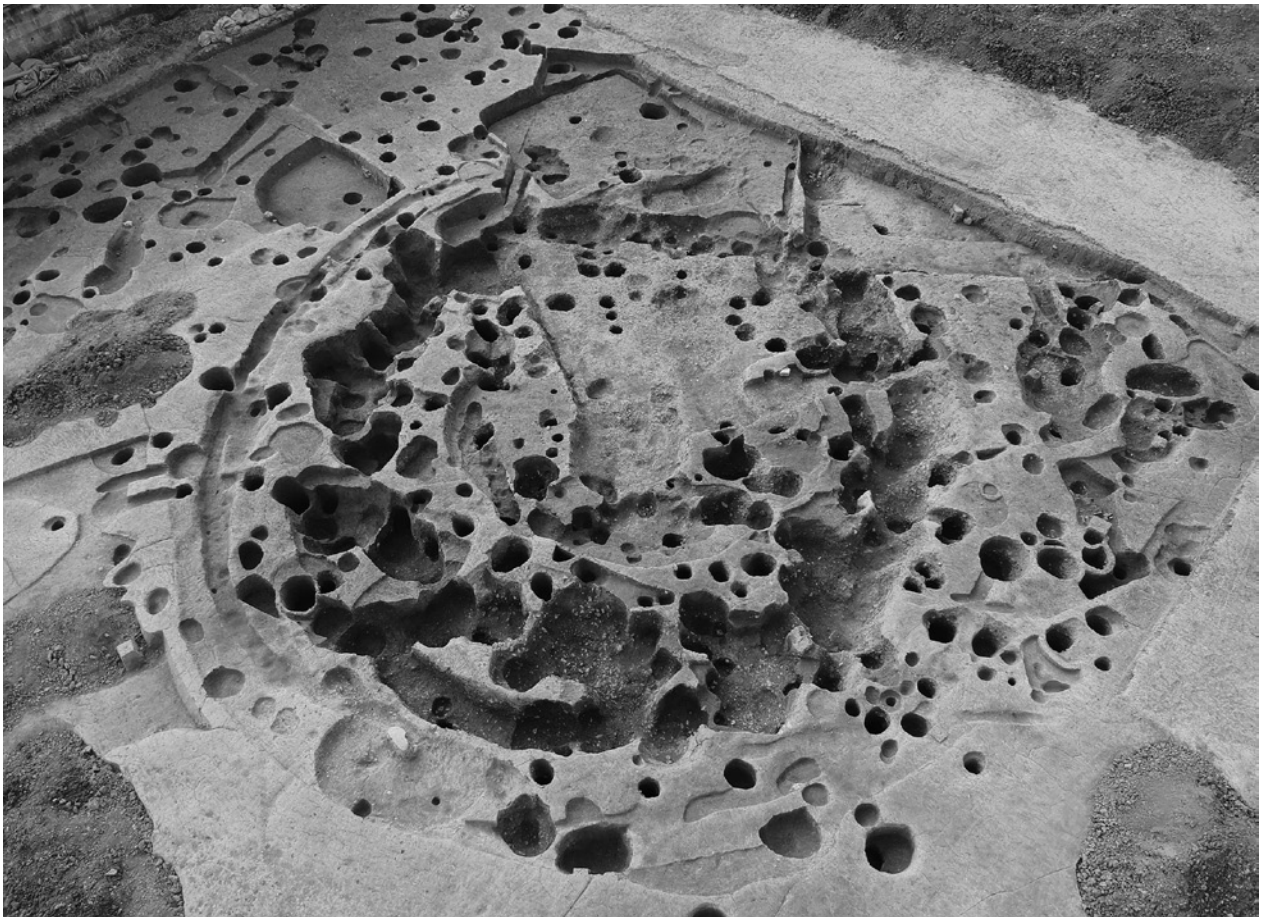
SC6276 完堀（南東から）



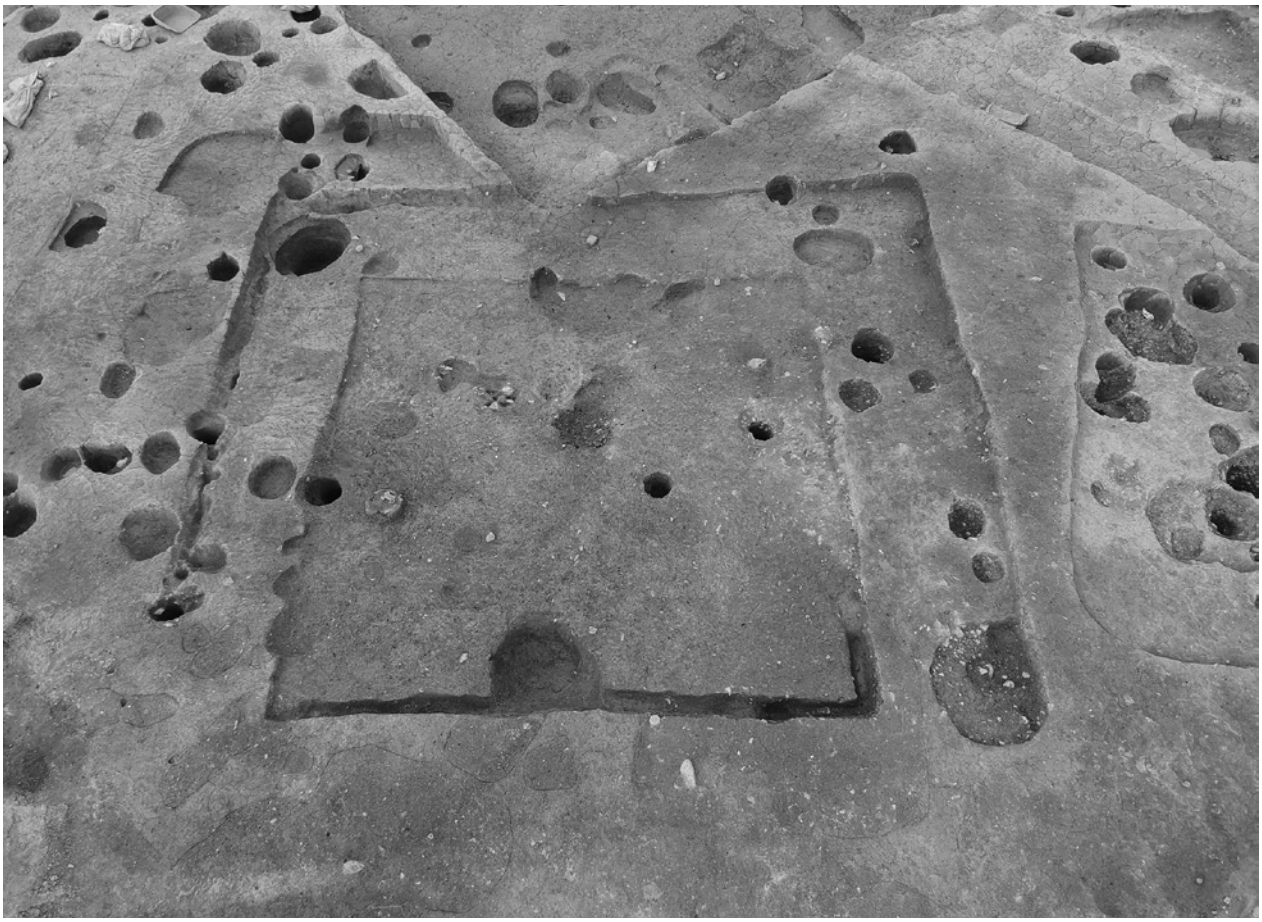
SC6328（北から）

SC7000（北東から）

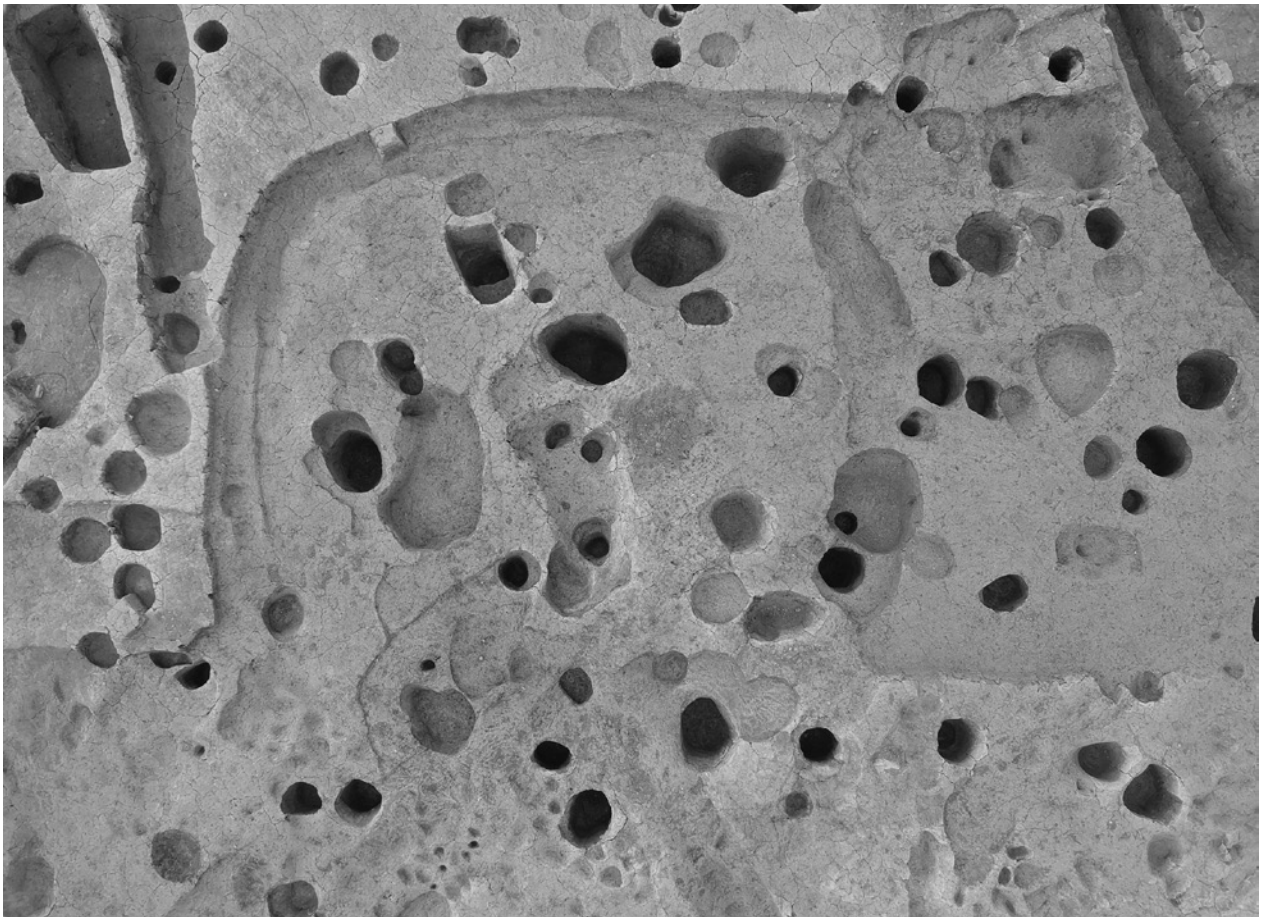
SC7260（北西から）



SC7260 掘方（北東から）



SC918（南東から）



SC3200（北東から）

SC4354（南東から）

SC6327、6328（東から）

SC4354 内 SP4361（北から）

SC056 作業（東から）

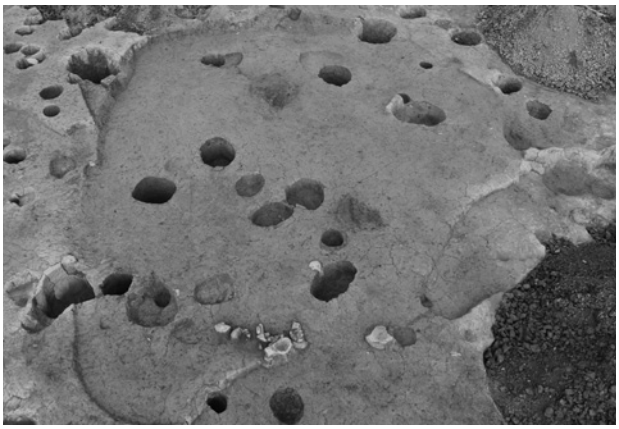
SC6327（東から）

SC056 焼土・石包丁（西から）

SC6327（東から）

SC083（北から）

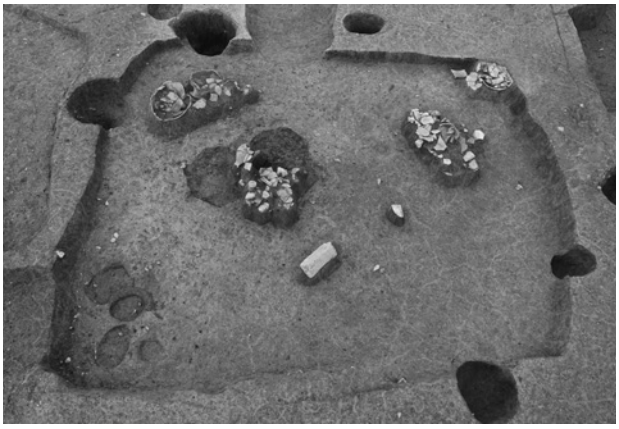
SC083・084（東から）



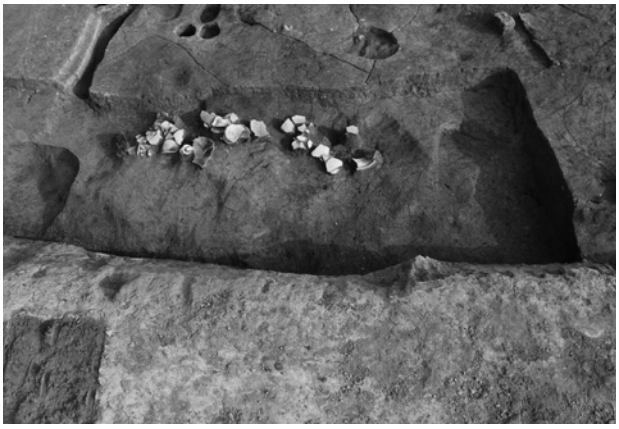
SC3163（南西から）

SC2152（南西から）

SC3470（北西から）



SC2400（西から）



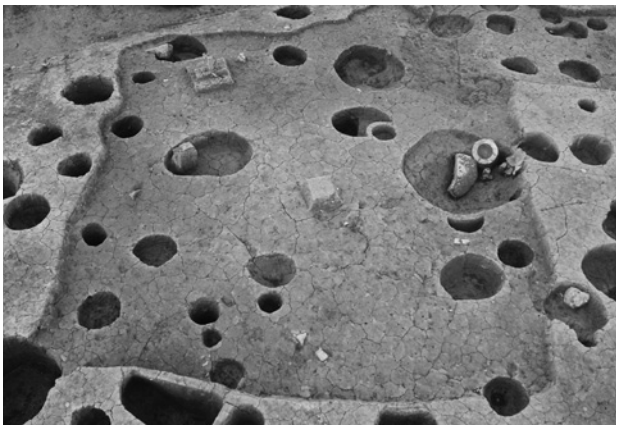
SC3760（西から）

SC3162 完掘（北東から）

SC4144（南から）

SC4730（南西から）

SC5580（南西から）


SC5363（北西から）

SC5843（北西から）

SC5363 内 SK5590（北から）

SC5843 炉（北から）

SC5500（北西から）

SC5924（南から）

SC6020（南から）

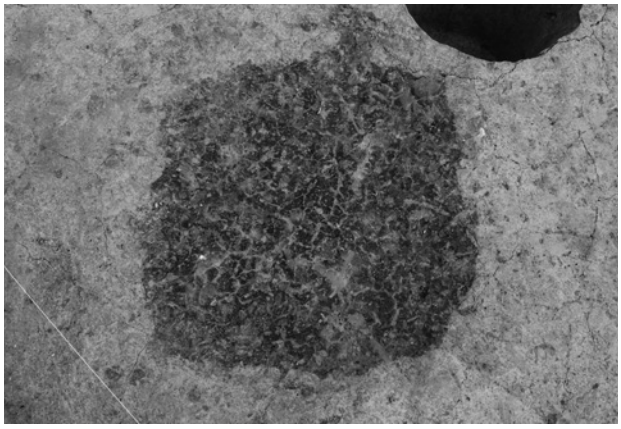
SC6328（南東から）

SC6274（東から）

SC6528（東から）

SC6276 完堀（南西から）

SC6930（北西から）



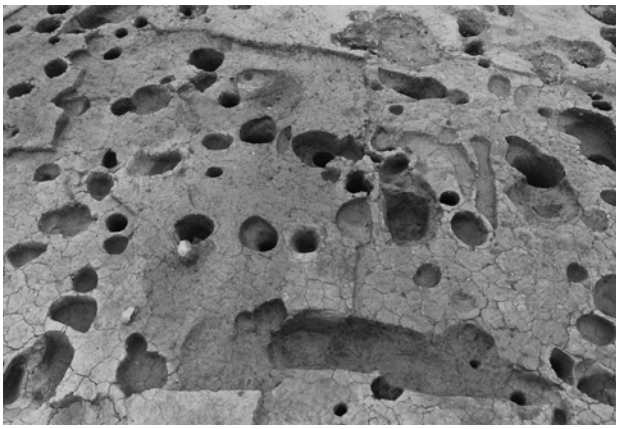
SC6276 内 炉 SX6423（南東から）

SC6276 内 炉 SX6423 土層（南東から）

SC6954（南西から）

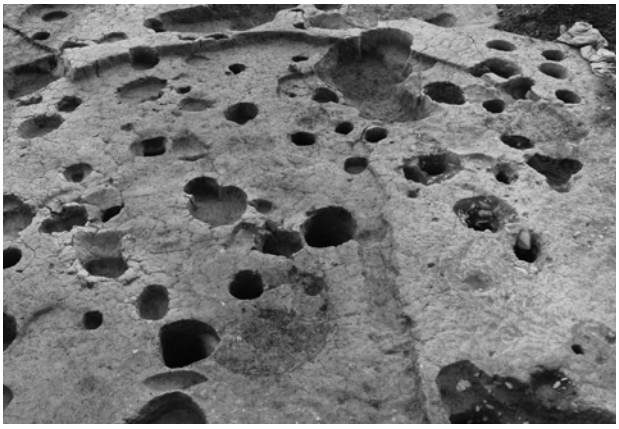
SC7046 内 SX7060 土層（南西から）焼骨出土

SC7000（北東から）



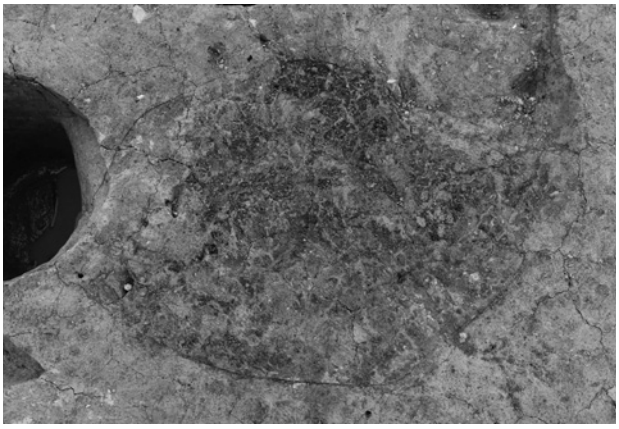
SC7047（北東から）

SC7000（南東から）

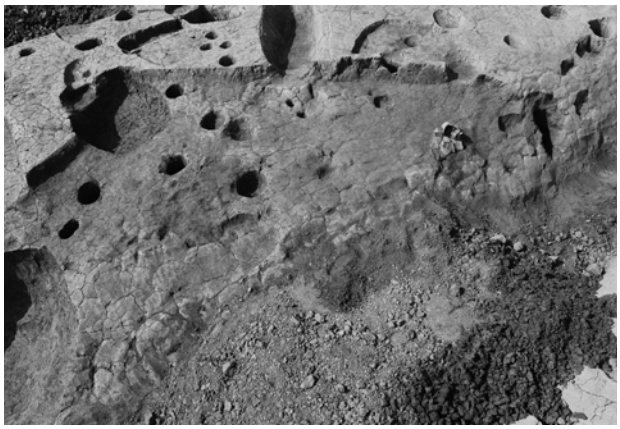


SC7048（北西から）

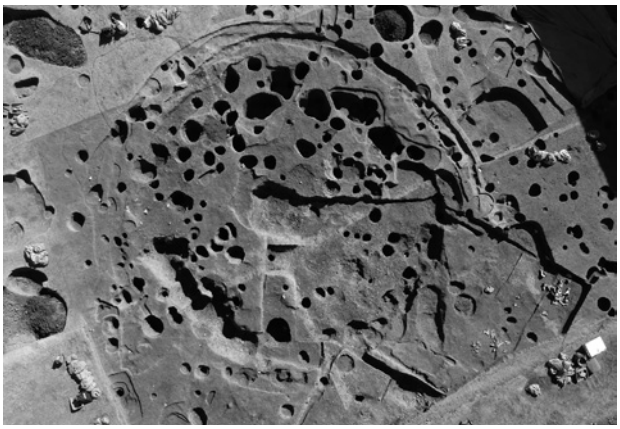
SC7046（北東から）



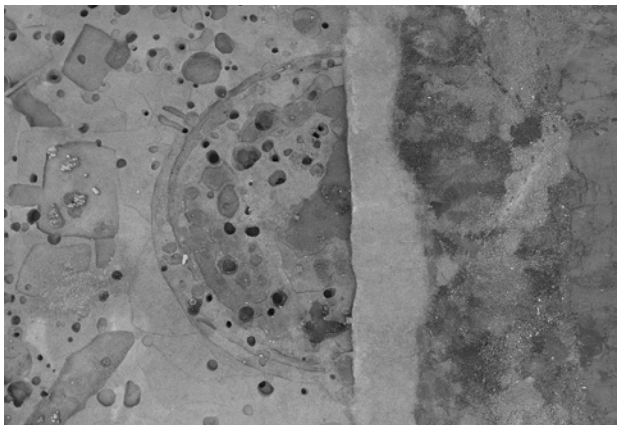
SC7048 内 SX7112（北西から）



SC7050（南東から）



SC7260 床面（北西から）



SC7260 東半（北東から）

SC7260 掘方（北西から）

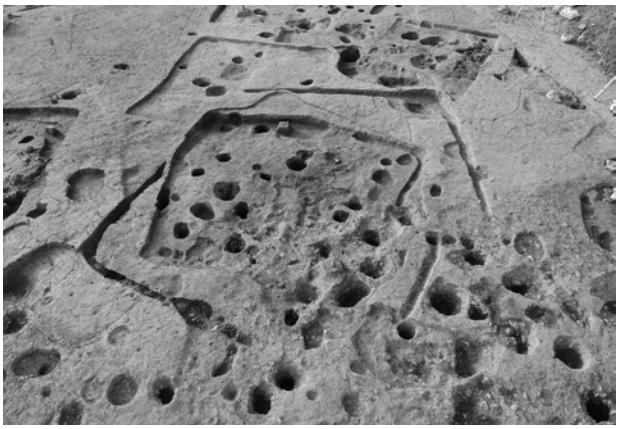
SC7260（北東から）

SC7260 北側（西から）

SC7260 作業（北から）

SC7260 掘方（北東から）

SC918（南西から）


SC1120・1040（南東から）

SC953（北東から）

SC1800（東から）

SC954（南東から）

SC1800 内炉（東から）

SC954 カマド周辺（南西から）

SC2403（北東から）

SC3140 完掘（北東から）

SC4142（南西から）

SC3363（北東から）

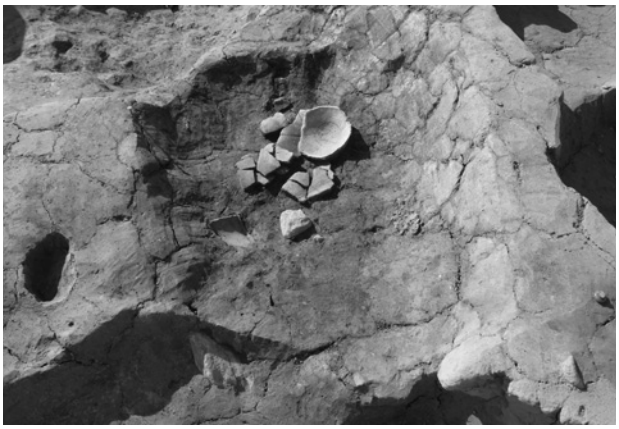
SC4142 内 炉 SX4246 炉（東から）

SC3770（南西から）

SC6010（南西から）

SC4142（南西から）

SC6380（西から）

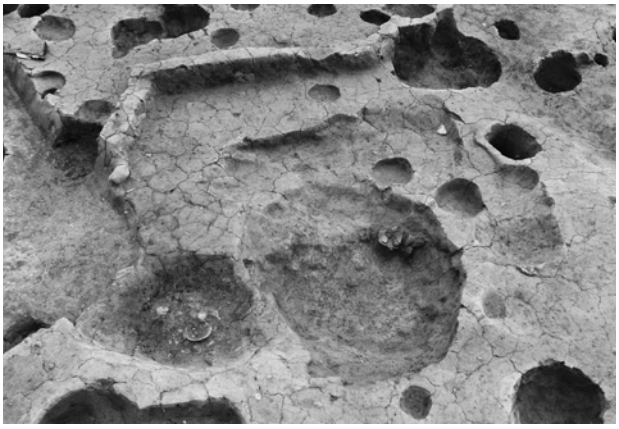


SK721（東から）

SK1597（南から）

SK1536（北から）

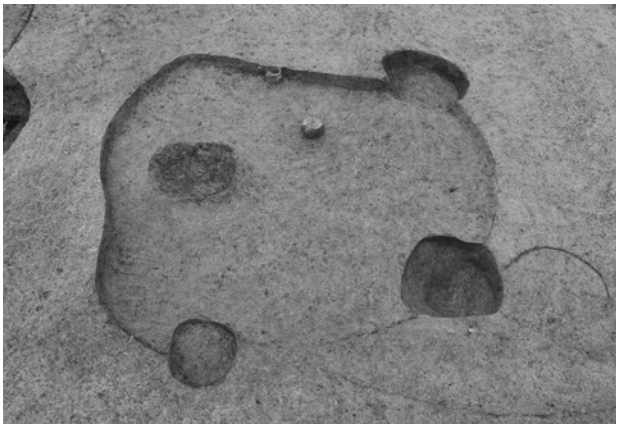
SK1870（南西から）



SK1536・1398（北西から）

SK2314 R2（南西から）

SK1564（南西から）

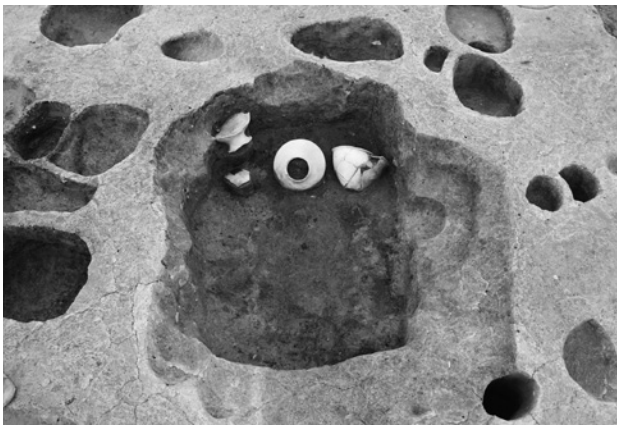


SK2399 完掘（南から）

SK2575（西から）

SK3740（南から）

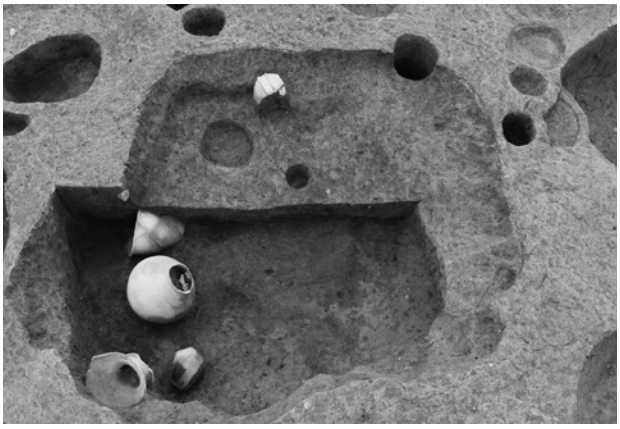
SK2605（北から）


SK4133（北西から）

SK3148（南東から）

SK4133 土層西側（北東から）

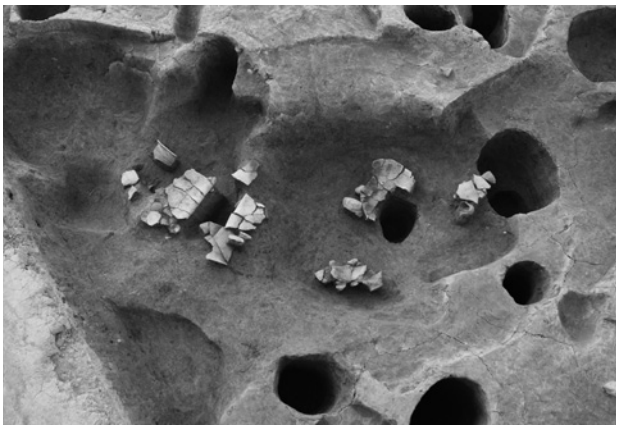
SK3204（南西から）


SK4166・4133（北東から）

SK4981（南東から）

SK5922（北東から）

SK4981 遺物（南から）


SK6082（南東から）

SK5901（南東から）

SK6442（東から）

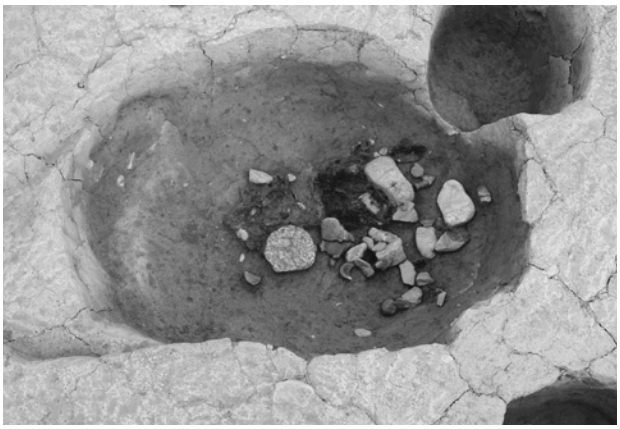
SK5901 作業（北西から）

SK6706（西から）

SK6715（西から）

SK6897（北東から）

SK6715 遺物（北から）

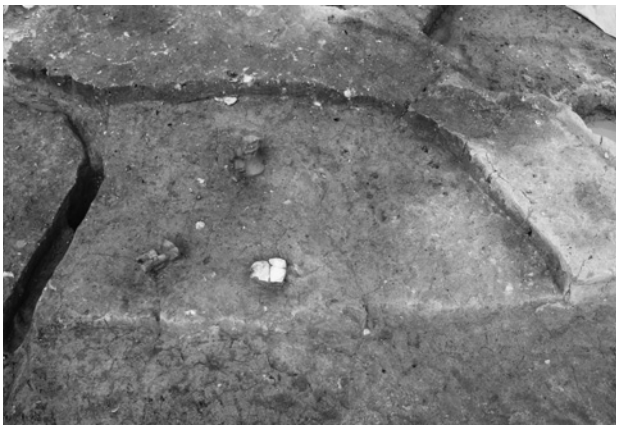

SK078（北西から）

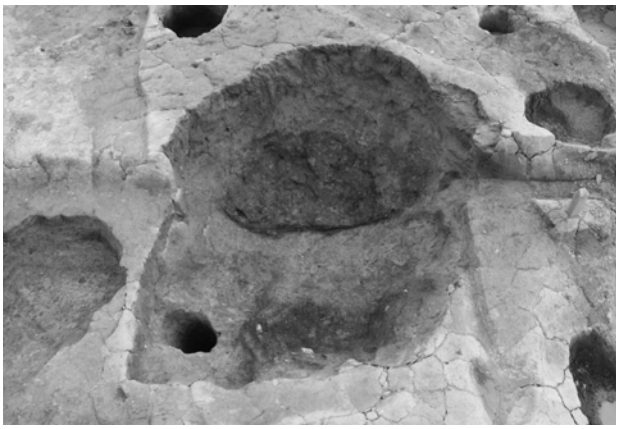
SK6759（南から）

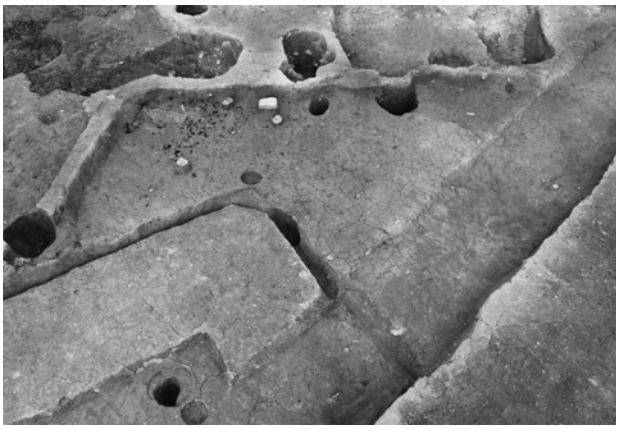
SK186（西から）

SK6897（南東から）

SK186 遺物（西から）


SK191（南から）


SK1400（西から）


SK249（南西から）

SK1547（北から）

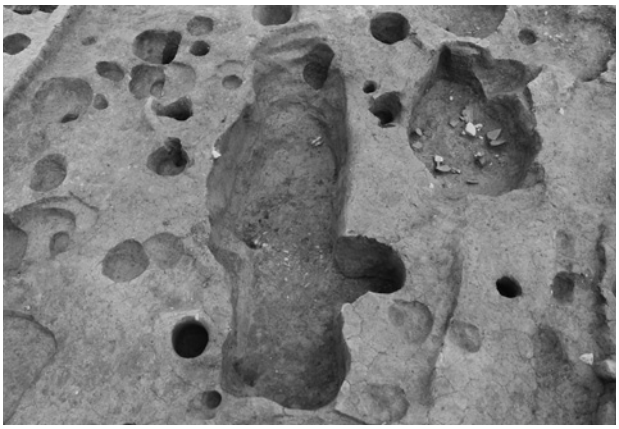
SK261（東から）

SK2866（北東から）

SK856（東から）

SK1574（西から）

SK1811（南西から）



SK2035・2036（北東から）

SK1811 6・8・10（南西から）

SK2036（北西から）

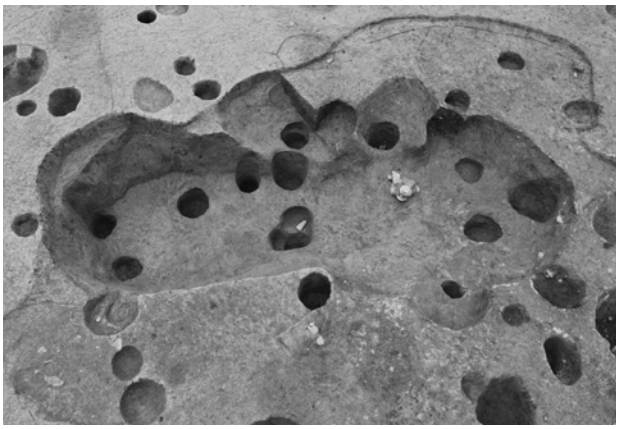
SK2010（南西から）

SK2051（南東から）

SK2021（西から）

SK2051 焼土（南東）

SK2147（北西から）



SK2291（北東から）

SK2148（東から）

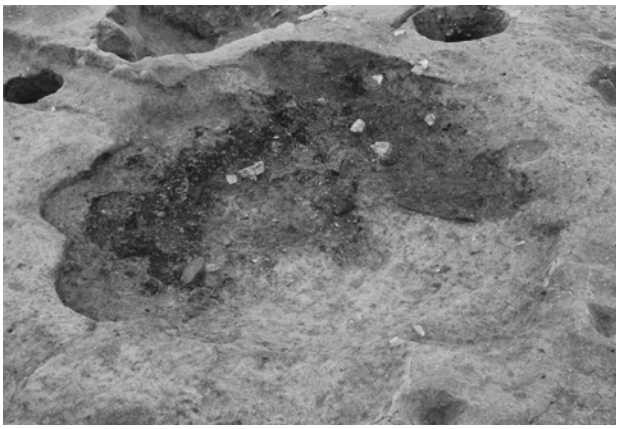
SK2292（南東から）

SK2148（東から）

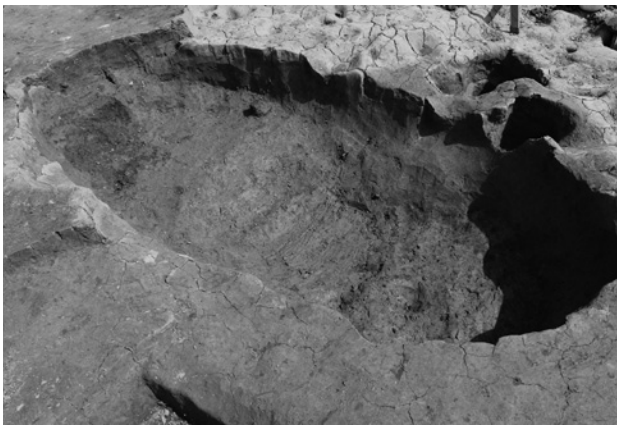
SK2318（南西から）

SK2183（北西から）

SK2394 焼土面（西から）

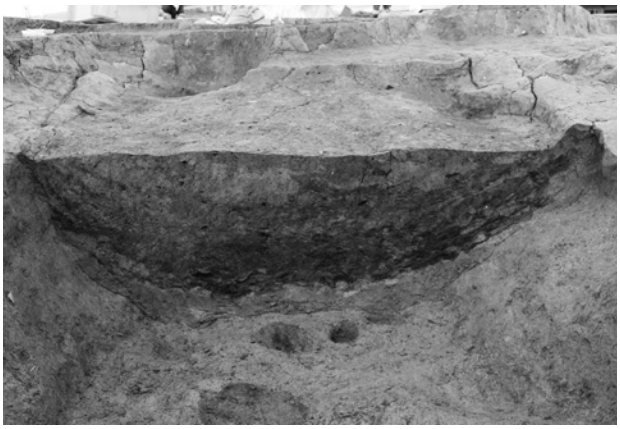


SK2571（東から）



SK3437（西から）

SK2606（南から）



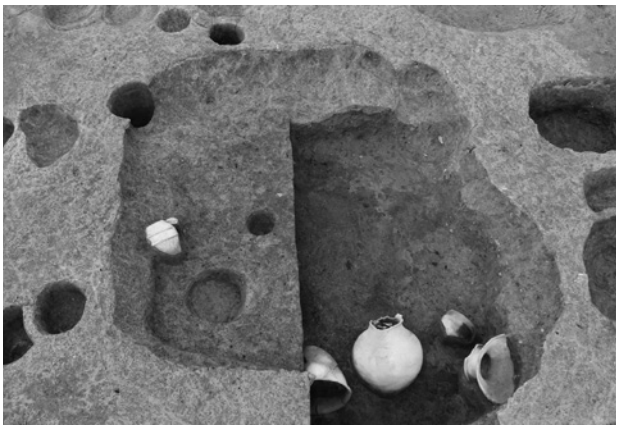
SK3437 土層（南西から）

SK2777（北から）

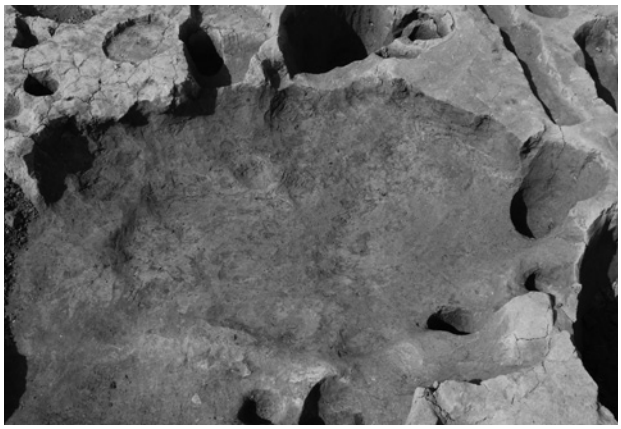
SK3687（北西から）

SK2877・2183 下（東から）

SK3687（西から）


SK4166（南東から）

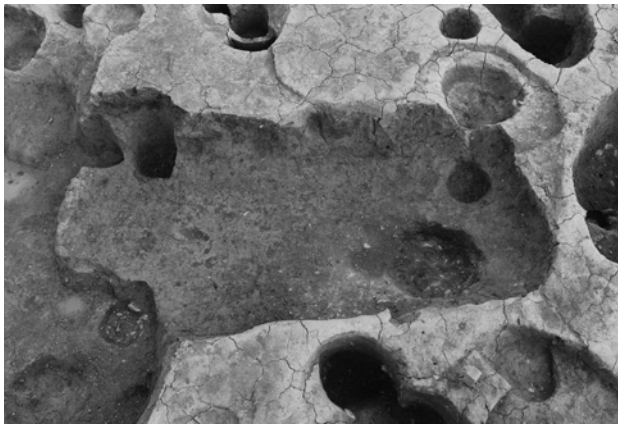
SK4623 土層（東から）


SK4400（南東から）

SK4952（西から）

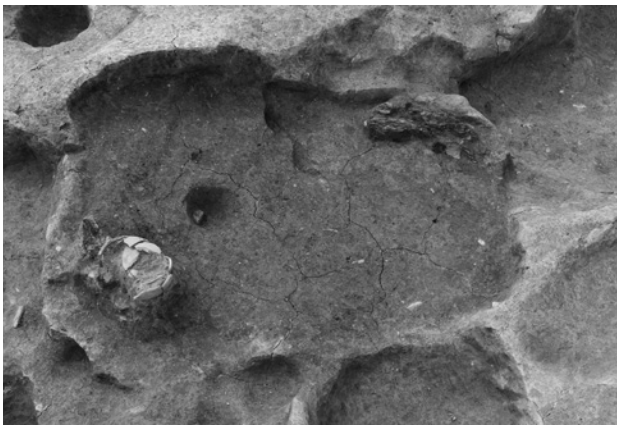
SK4461（北東から）

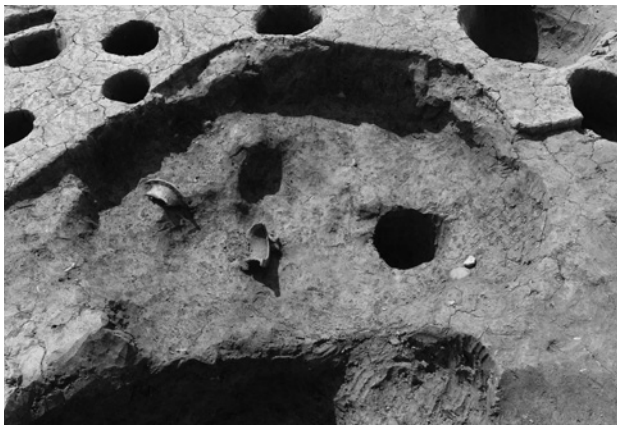
SK4975・4991（東から）


SK4461（北西から）

SK4991 遺物（北から）

SK5686（南東から）


SK5686（北西から）


SK5513（北から）

SK5900（東から）

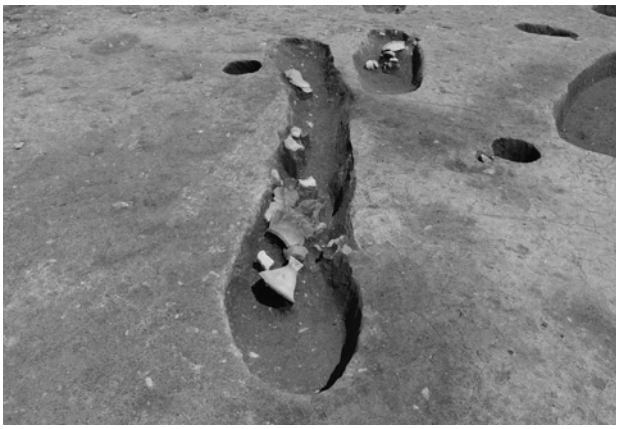
SK5677（南から）

SK5900 土層（北東から）

SK5684（南東から）

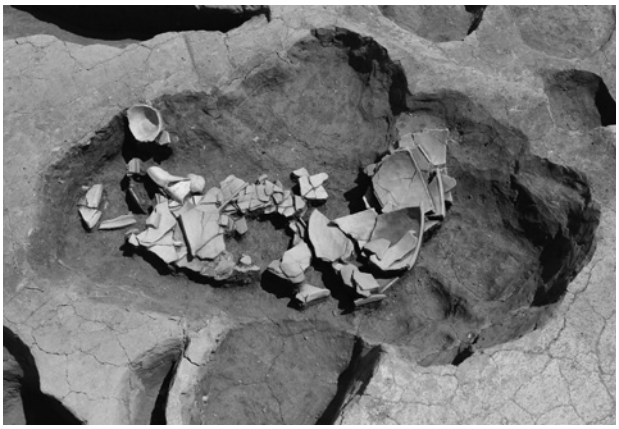
SK6066・3437（北西から）

SK6197（西から）



SK6605（北西から）

SK6197 遺物出土状況（南から）



SK6660（北西から）

SK6282（北から）

SK6660（北東から）

SK6330（北東から）

SK7023（東から）

SK7162（南東から）

SD3480（東から）

SK7233（北東から）

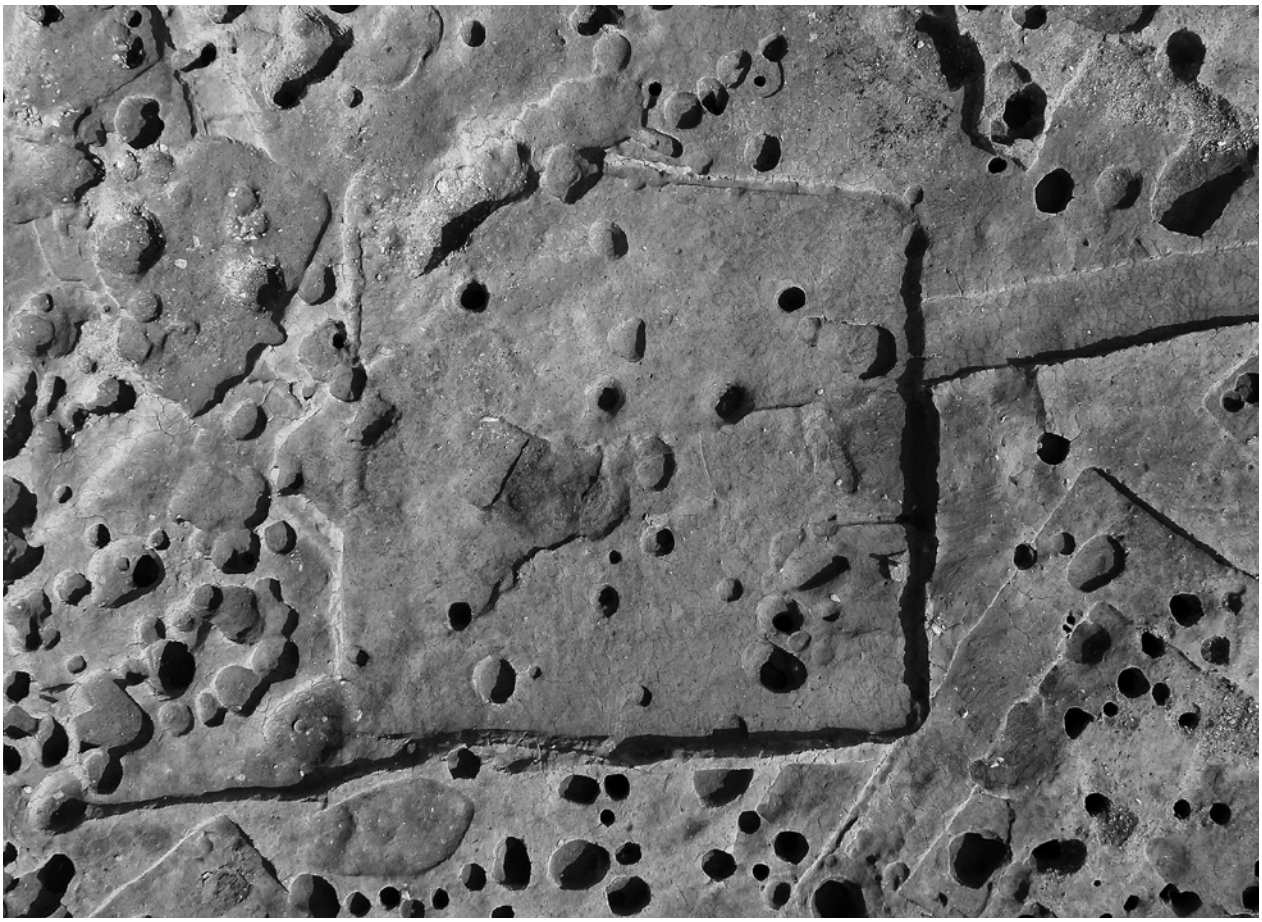
SX2880（西から）

SD1046（北西から）

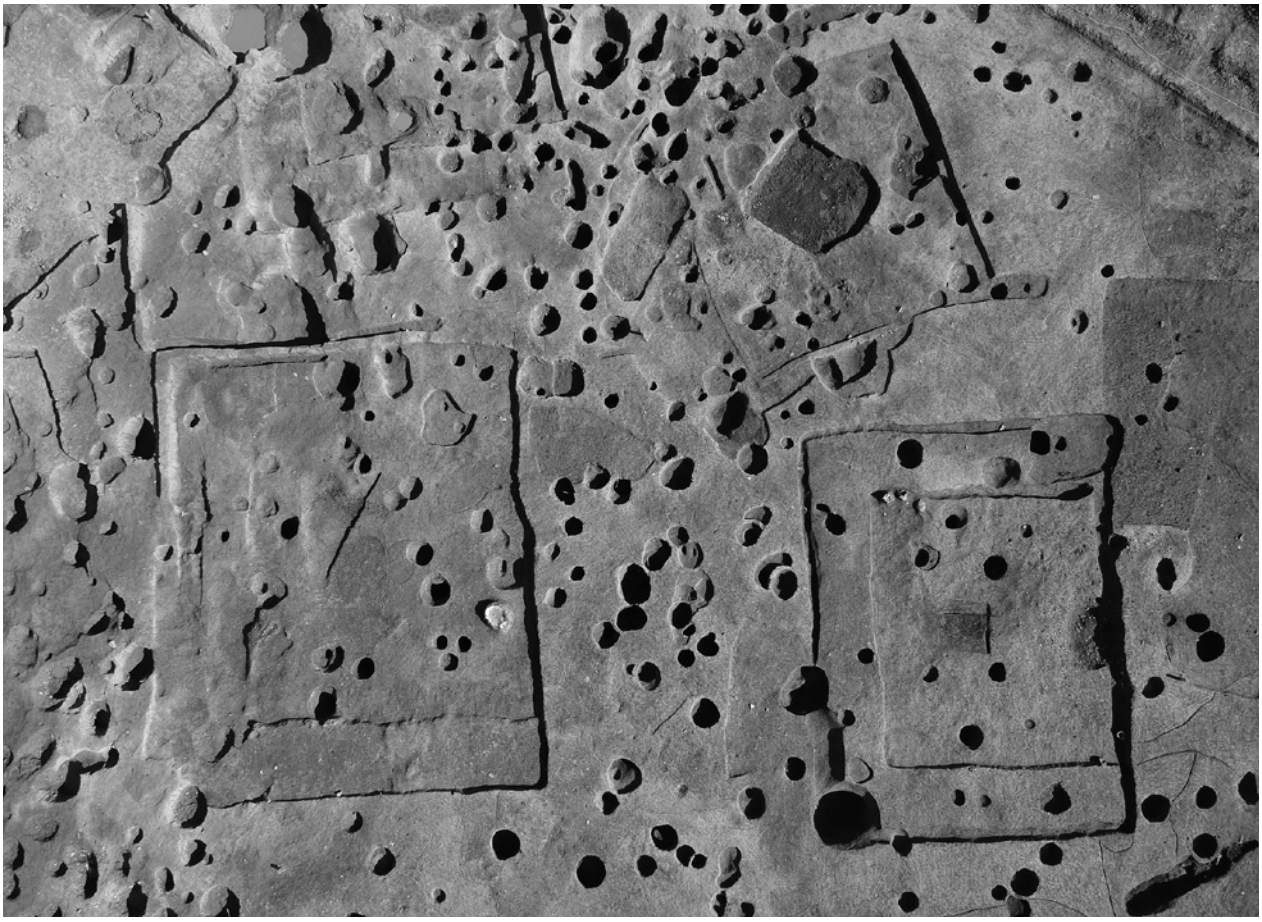
SX2880（北東から）

SD2293（北東から）

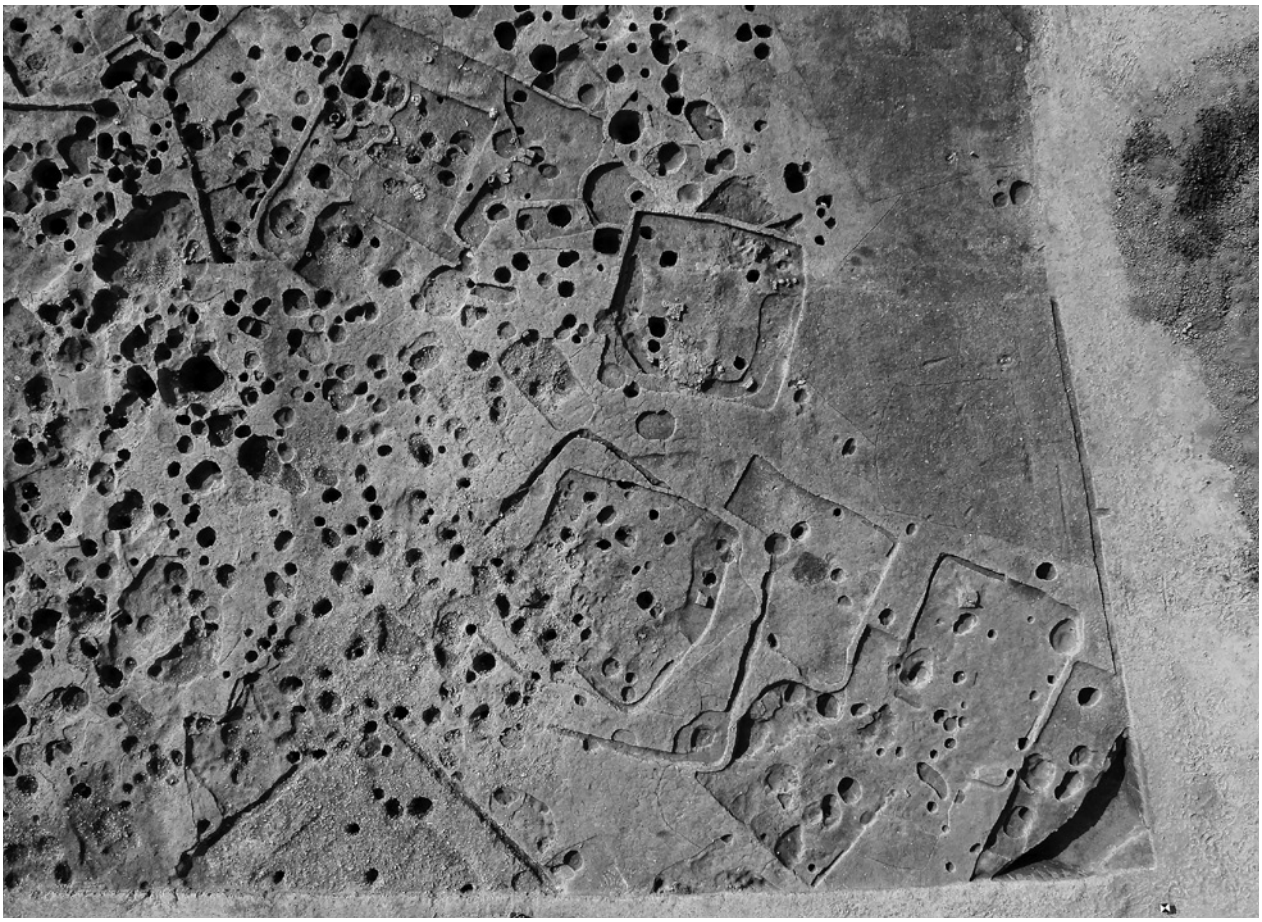
SD2105（南西から）



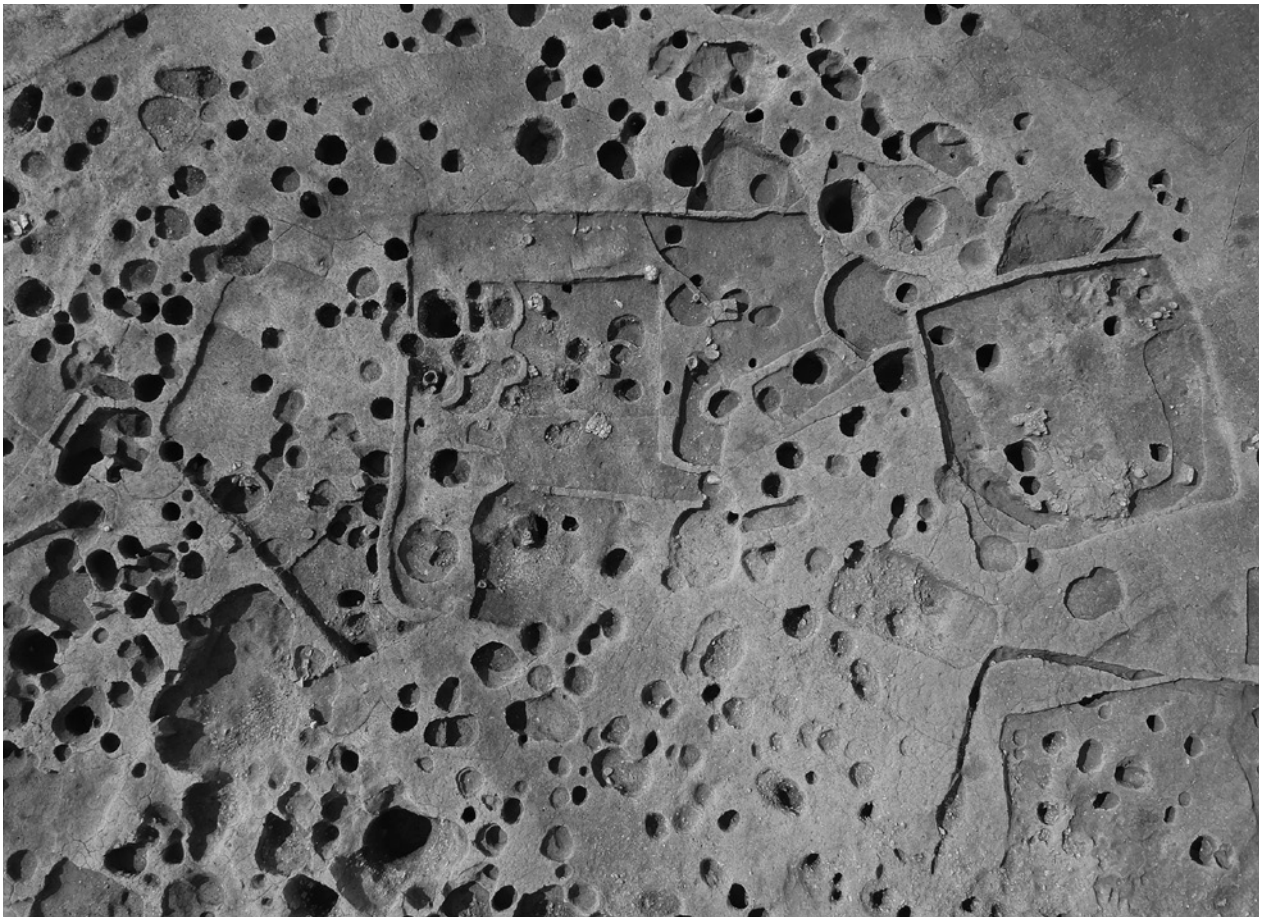
SC322 を中心に（南西から）



SC1173・1600・1800（西から）



SC1120・1280 を中心に（北から）



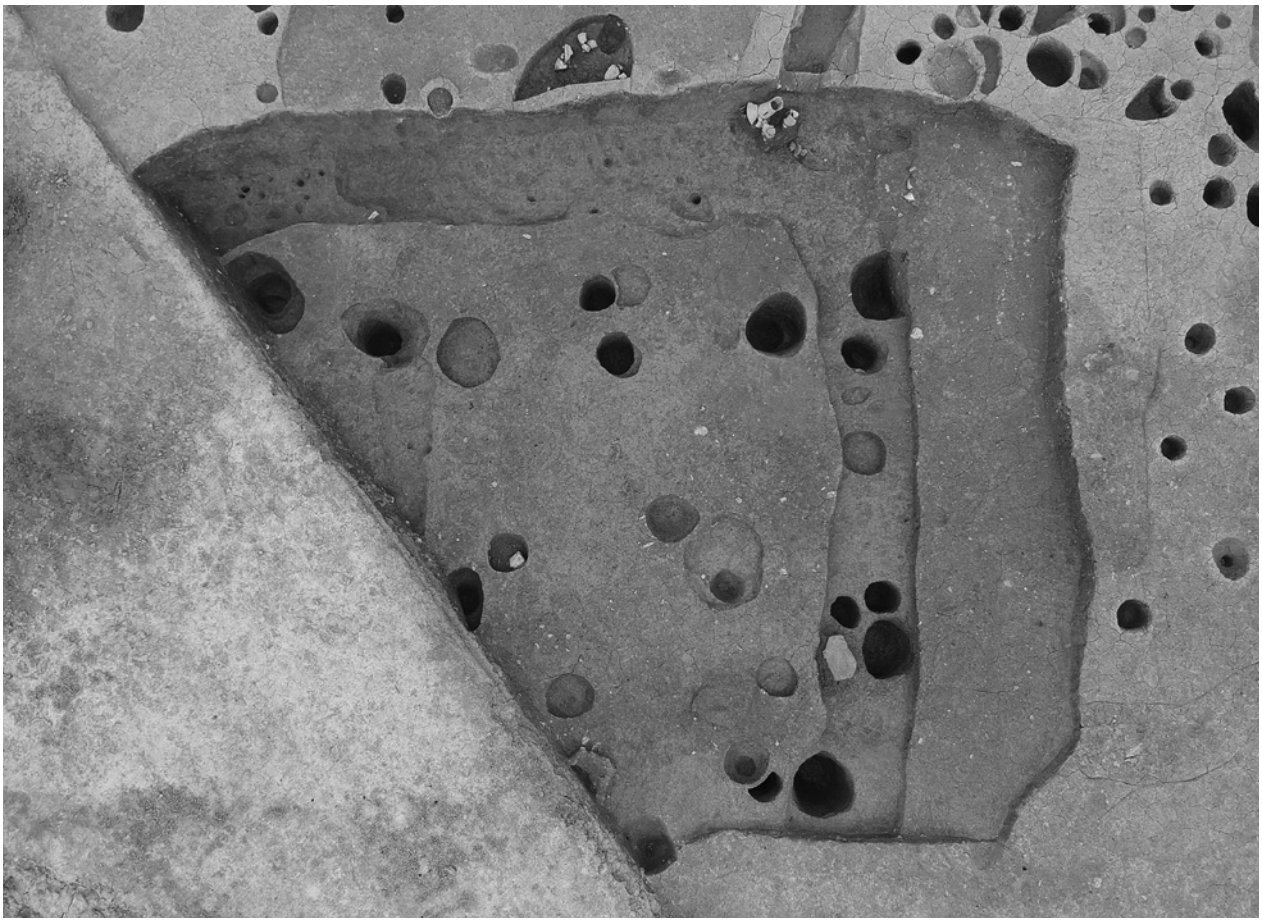
SC1280 周辺（北東から）

SC402（南東から）

SC2007（南から）

SC3200・3150・1460（南東から）

SC3300（南から）



SC5362（北西から）

SC6331（南東から）

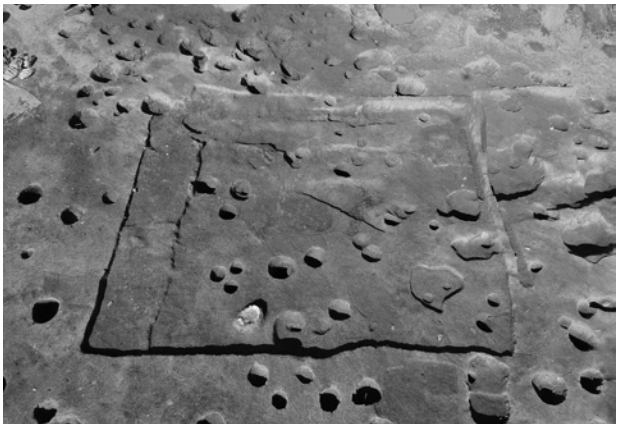
SC322（東から）

SC940（南東から）

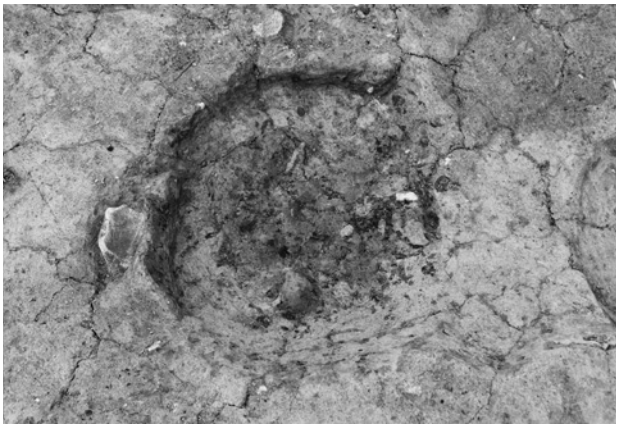
SC352（北東から）

SC960（北東から）

SC850（南西から）



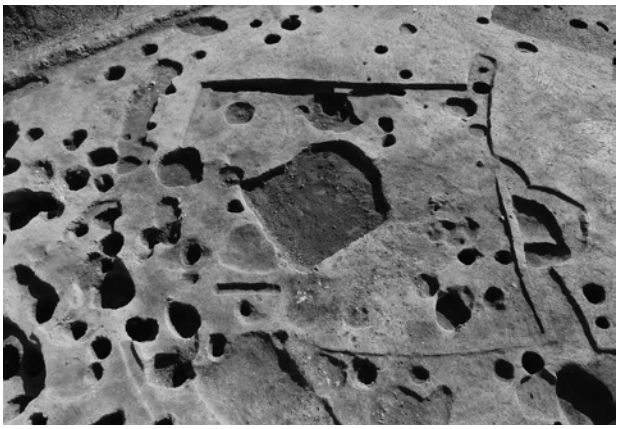
SC1173（南から）



SC850 炉 1061（西から）

SC1173 内 SK7258（南西から）

SC1280（北西から）



SC1660・1851（南東から）

SC1340 拡張部（東から）

SC1990（北東から）

SC1373 拡張区（南から）

SC2007（南から）

SC1375 拡張区（南から）

SC2007（南東から）

SC2012（北東から）

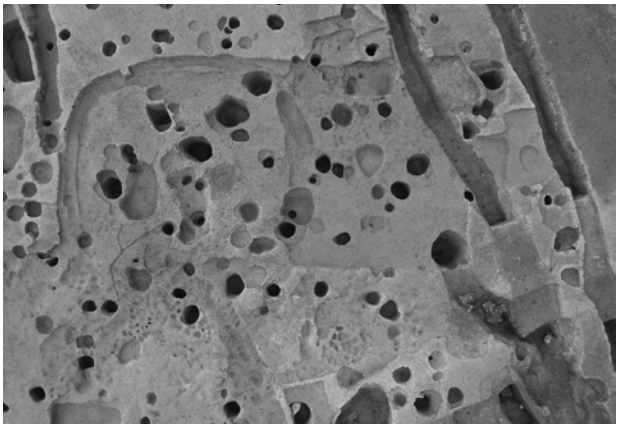
SC3300 出土土器 15（北西から）

SC2300（北東から）右は SK2571

SC3300（北東から）

SC3190（北から）

SC3300 内 SK3313（南東から）



SC3200・3150（北東から）

SC3301（北西から）

SC3301 遺物（南東から）

SC4143（南から）

SC3301 西側炭化物（東から）

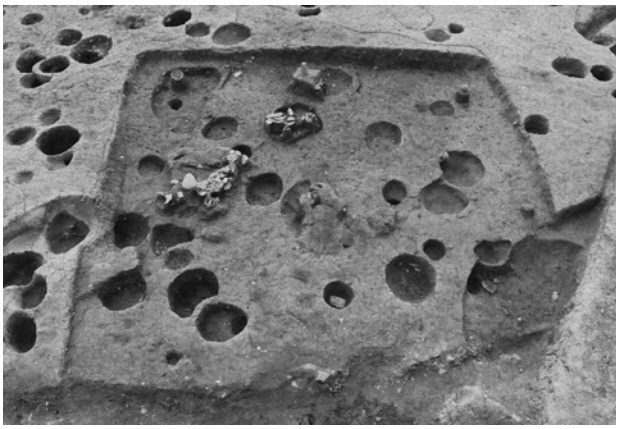
SC4145（北西から）

SC4141（南から）

SC4750（北東から）

SC4141（南から）

SC5364（北西から）



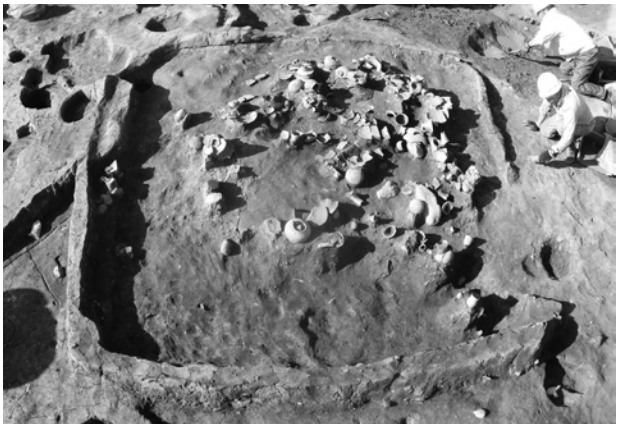
SC5364（北西から）

SC321（南東から）

SC5364（南西から）

SC321 炉 309（東から）

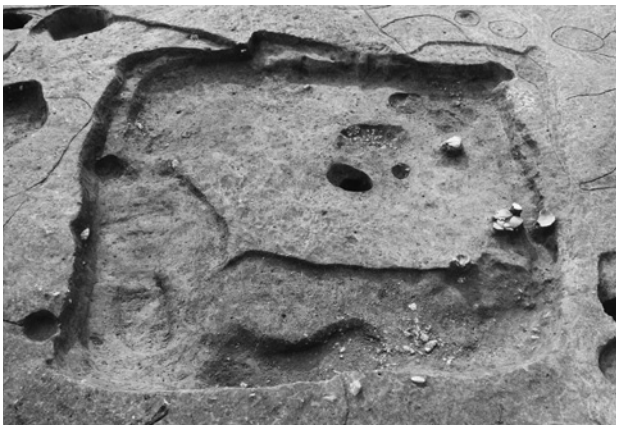
SC5364 土器群（南西から）



SC402 作業（南から）

SC148（南西から）

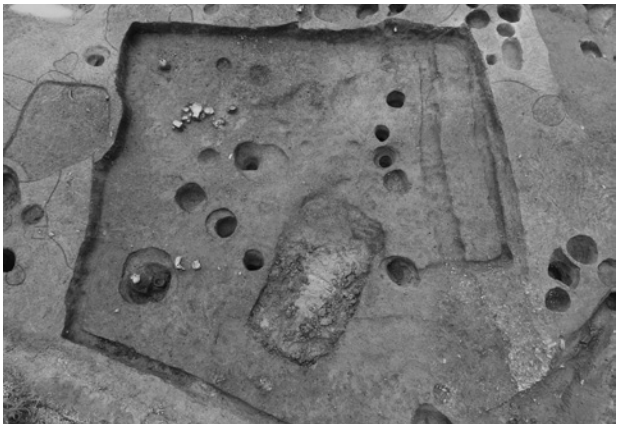
SC402・322 北半（北西から）


SC2008 完掘（北東から）

SC3820 カマド土器 3（南から）

SC2013（西から）

SC3820（南から）


SC2013（南から）

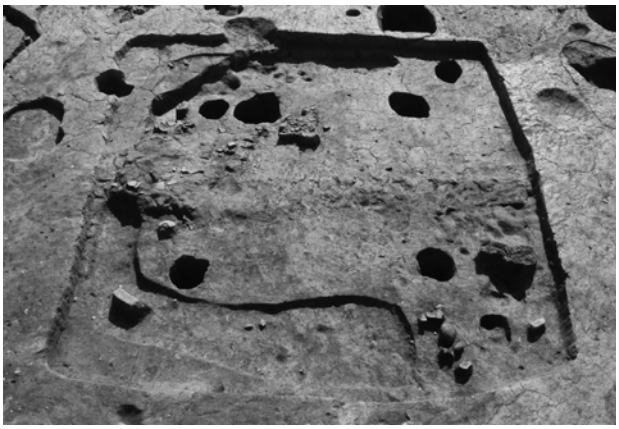
SC3820 炉（北から）

SC2013 内 SK2294（北東から）

SC4140（北西から）

SC970 完掘（南西から）

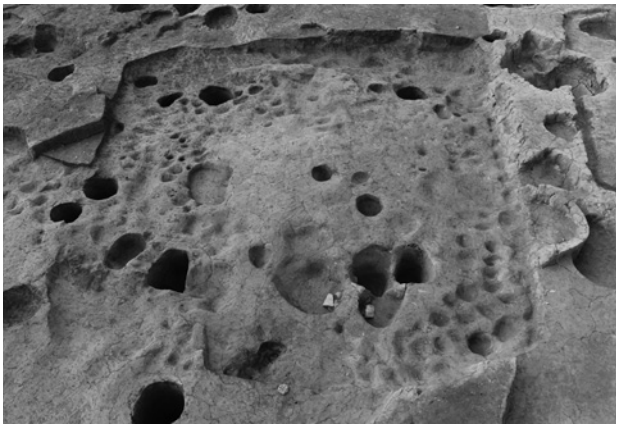
SC1460 カマド土層（東から）


SC970 貼床上面（北西から）

SC1670（西から）

SC1120 を中心に（南東から）

SC1920（北から）


SC1460 完掘（南東から）

SC3150（北西から）

SC3180（北東から）

SC5362 作業中（西から）

SC3180 カマド土層（南東から）

SC5362 出土遺物（北から）

SC3660（北から）

SC5362 台石（北から）

SC5362 堀方（北東から）

SC6200（北西から）

SC6230 貼床（南東から）

SC6331 カマド（南東から）

SC6300 完掘（西から）

SC6840（北東から）

SC6331（南から）

SK197（北から）

SC6331（南東から）

SK351（南西から）

SK5912（北西から）

調査区北西端落ち（東から）

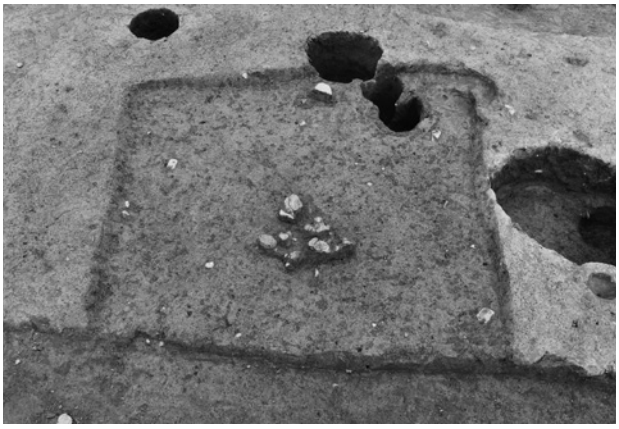
SD3050（北東から）

調査区北西端落ち（北東から）

SD3120 作業（北から）

包含層 2621（北から）

SD3700（北から）



包含層 7179（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまたへきばる 11
書名	蒲田部木原 11
副書名	蒲田部木原遺跡第13次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1498集
編著者名	池田祐司（編）・神　啓崇（編）・下山正一・新美倫子・小林克也
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2024年3月22日

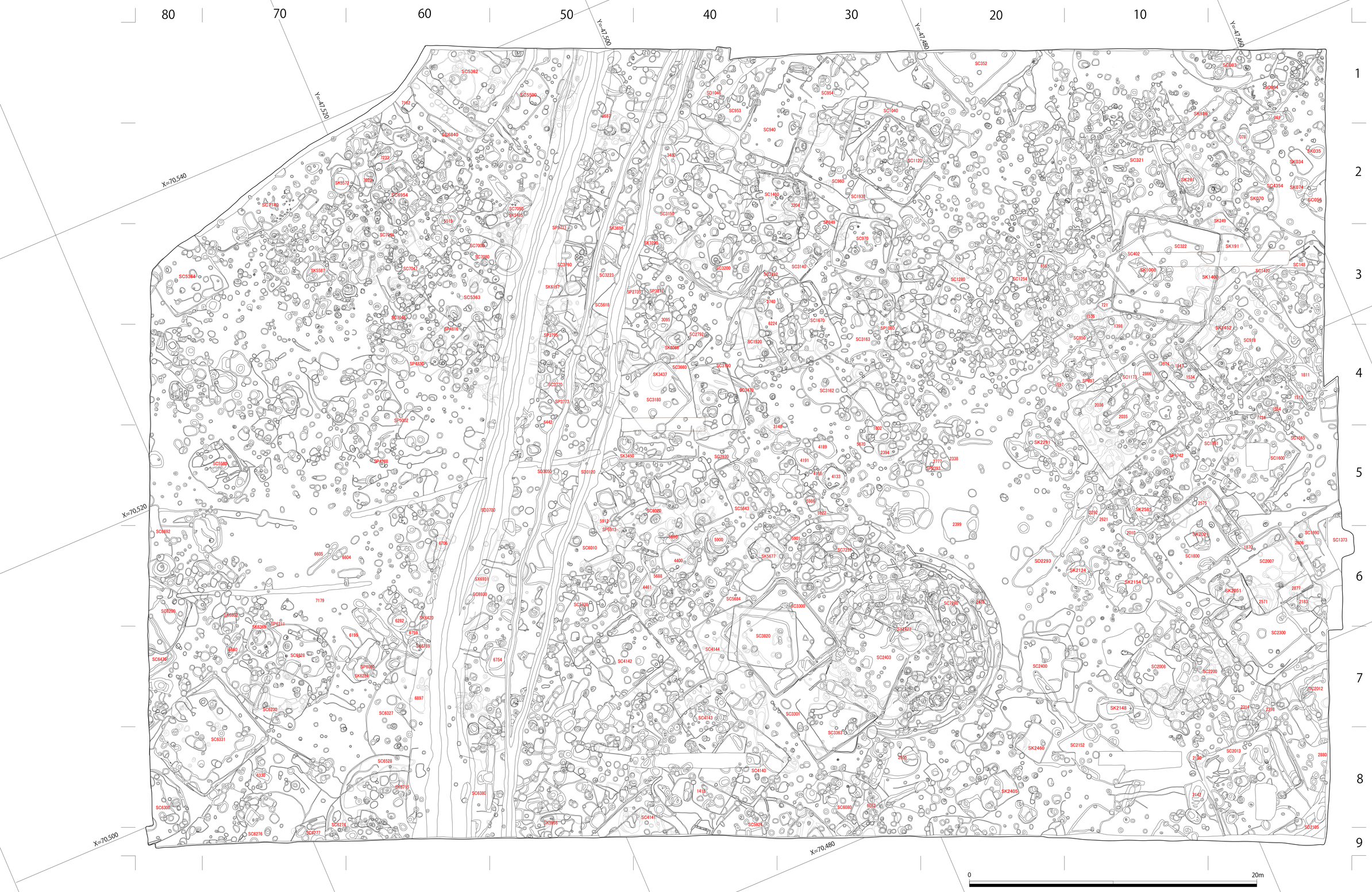
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かまたへきばるいせき 蒲田部木原遺跡	ひがしくかまたさんちょうめ 東区蒲田三丁目742、743、744-1、746、747、748-1、749、745-1、3033、2027	40131	3	33°38′5.72″	130°29′17″	20180801 ～ 20190430	4423㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲田部木原遺跡 第13次	集落	弥生・古墳時代	竪穴建物・土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、動物遺体	弥生前期末～中期前半の土坑、弥生後期～古墳前期・古墳後期の竪穴建物を密に検出
要約	蒲田部木原遺跡は、若杉山から西に延びる台地の先端および、前面の沖積地に所在する。検出遺構は弥生前期の土坑、弥生中期～古墳後期の竪穴建物・土坑・柱穴多数、古墳後期の溝で、総数7260基を数える。遺構に伴わない縄文後・晩期の土器も出ており、それ以前から生活の痕跡がうかがえる。弥生前期末から中期初頭の土坑は、炭・焼土を含む埋土のものが多い。弥生中期では径12.5mの大形円形竪穴建物を確認した。古墳後期の複数の竪穴建物からは滑石製臼玉・未成品・素材が出ている。遺物は各時期土器のほか、石器（石斧・工具類・石剣・石鏃・石包丁）、投弾、玉類、鉄斧、動物遺体など、コンテナケース520箱出土した。				

蒲田部木原11

－蒲田部木原遺跡第13次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1498集
2024（令和6）年3月22日発行

発行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷　エース印刷株式会社
〒810-0052 福岡県福岡市中央区大濠1丁目6番9号



付図　蒲田部木原遺跡第 13 次調査遺構実測図（S=1/100）

『蒲田部木原 11』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1398 集